

新土別な物語



土別市郷土研究会

軍馬用地の物語

山田 伍市

一 林班沢の土饅頭

もう、みんな忘れよったが、あの夜のことだけは忘れようもない。笹が身の丈もあってそれあ、いまして思えばぞっとする山じやった。

あの頃は食わにやあならんで、目の色も気違いじみよった。娘の千代は十一、今生きよったらお前さんぐらいかのう、なんぼか学校へ行きたかったんじやろ。星がかりかりに凍れる夜でう。千代が腹痛い言うんで、わしや馬の道具かけ、ろくに通らん雪道を千代を抱いて街を目指した。千代死ぬな、千代死ぬな。馬追った。馬も辛こうたんじやろ、原野の灯がちらちら見えだしたころ、千代の体が冷たくなりよって、わしや泣いた、おんおん泣いた。

死んだ千代が寒くないように、炭焼き窯の側さ穴掘って埋めたわい。その春にわしやあの沢を出て樺太へ渡った。千代をあの沢に残したまんまになあ。



lto

熊神社の由来

十風山は、熊の冬籠もりで有名な山だったが、山にはどこかに、笹も小柴も生えない所があるもので、そこは北向き斜面のけもの道、炭焼き親子はこの道を通って炭焼き窯へ登って行った。

ある春のことだった。息子の子梅吉はのんびり朝寝して、親父さんからおいてけぼりを食い、鋸を入れた背負子を担いで、うらうら炭焼き窯へ登って行った。沢を跨ぐ所で親父さんに追いついたなと、ひょいと見たら、なんと腹をへらした大熊だ。

熊は、うおっーと一声凄んで立ち上がり、梅吉めがけて襲いかかってきた。梅吉、逃げた逃げた死にもの狂いで逃げた。熊の鼻息が肩にふーと吹っかけられたとたんに、どぼっと風倒木の根っここの穴に落っこちた。熊はびっくりらこいて、突然消えた梅吉の上を飛び越えすつとんで行った。

その話を聞いた村人たちは、此処は神域あらたかな所だ。神のお告げだと、さっそく熊の神様を祀って毎年お祭りを続けた。それからこのかた、熊に襲われる者がいなかった。



新士別よもやま話



士別市郷土研究会

表紙のことば

塚 本 熊 雄

新士別よもやま話の表紙をたのまれ、断ればよいものを承諾してしまった。

あれこれ考えてみるが、正月気分で空想だけで消え、形として纏まらず二週間が過ぎた。本の表紙だから、その内容から客観的に主題をつかんだ方がよいのか、それとも街の発展に直接貢献した事実がいくつあれば、そのものを表現した方が現実的でよいのかもしれない。

さてどんな事があるのか見当がつかぬ。参考にと昭和五十二年、隆士会（会長佐藤熊三郎氏）出版の「博覧会思い出の記」を読んでみると、昭和二十三年七月士別町開町五十周年を記念して開催された産業振興博覧会で士別開びやく以来の人出で軽便鉄道も一役との記事が目にとまった。

その軽便鉄道とは木材搬出が目的で、大正九年士別、奥士別（現朝日町）間を一生懸命走っていた。間もなくバス、トラックに道を譲って消えた鉄道の事であり、馬を動力とする軌道で馬鉄と愛称され、原木を運ぶトロツコのうしろに客車を連結して乗客用車も運行され、地方産業開発に大きく貢献した私有鉄道で道北における路面軌道の最初のものであった。

この記事を読み表紙の主題は馬鉄にきめ、士別博物館にある馬鉄をスケッチし下絵の準備をする。さてどんな版画ができるか、ちよつぱり不安もある。

発刊に際して

士別市郷土研究会長 荒 木 正 一



最近の郷土士別市は、商工業や農業の変革の他に、文化、体育などの面でも新しい施設が設置され、多くの市民が積極的に参加していることは喜ばしい限りですが、一面、今日までの士別市発展の過程では、行政や市民がそれぞれに関わった歩みの中で、今日にして思えば考えられないような困難な状況や、大きな課題解決に奔走しながら正史に表れない足跡がありました。郷土研究会では、平成二年の定期総会でその事実を調査し、収録発刊を計画したのです。

このたびの「新士別よもやま話」は、士別市発展の礎となった一町三村合併の話題を中心に据えて、昭和二十年から昭和三十五年ころまでを目処に戦後の復興期を、市民サイドの目で捉え収録することに務めました。すでに過去に発刊した図書や各地域の郷土史、自分史や回顧録などとの内容の重複を避け「新士別よもやま話」として、事実に関わった方々の座談会と当時の地元新聞記事の紹介、多くの方々のご寄稿を頂き発刊の運びとなりました。

ここに郷土の歴史の一頁が、単行本に完成し世に発刊出来た喜びと、ご協力頂いた方々に深く感謝を申し上げる次第です。終わりに「新士別よもやま話」が、多くの市民と地方の歴史に関心のある方々にご愛読を頂くことをお願いして、発刊の言葉といたします。

目次

発刊に際して

士別市郷土研究会々長 荒木 正一

発刊に寄せて

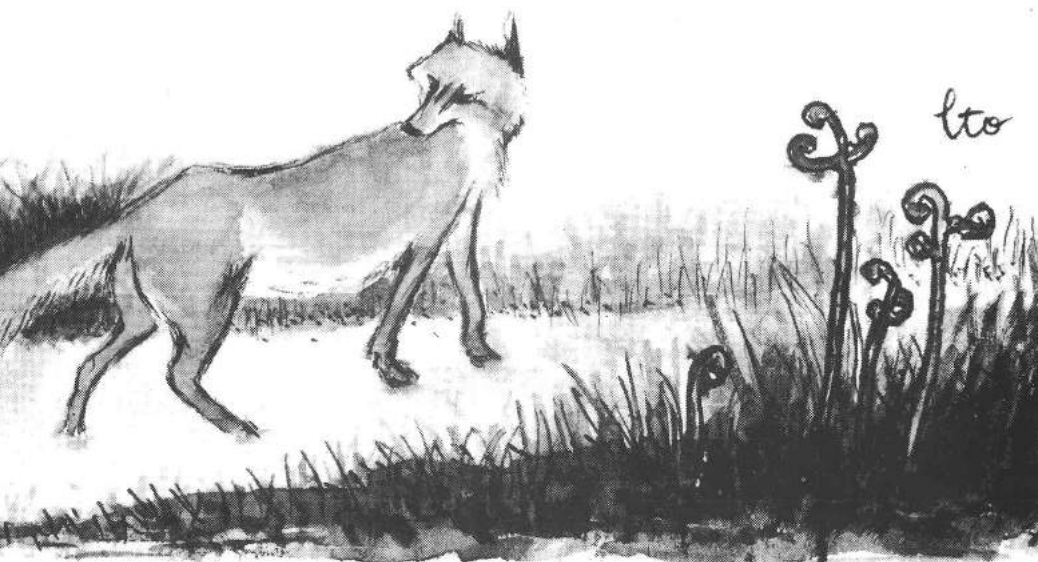
士別市 長 樫木 実

『新士別よもやま話』刊行に寄せて 士別市教育委員会教育長 田 苺子

進

戦後の苦難を越えて

修練道場と終戦日の松谷工場	2
終戦の玉音放送を聞かなかった士別町長と警察署長	4
引揚げ者寮回顧	7
農民福音学校	9
士別屯田九十九会	15
温根別職員組合の発足	16
戦後の風雲児 荒生産業	17
戦後のガソリン販売店	18
天士マーケット	19
新制中学校校舎建設のころ	20
新日本思想研究会	21
片山前総理が士別に来た	26
士別生産農業協同組合	30
大相撲巡業顛末記	40
ドブロク・三題	44
天塩川の吊り橋事故	48
野に紫の花美しく	49
選挙余話	50



劍渕川改修と秋山道議	53
郵便配達物語	55
劍渕川の大吊り橋	59
低くなった万歳峠	60
煙草コレクション	61
澱粉操業六十周年	62
北町にあった山神講	68
電話番号の語呂合わせ	69
バス乗務員第一号	70
日向の天塩川改修工事	73
除虫菊	75
異色の住人大島金作	76
上士別のライオン	82
ラス張り名人	84
士別母子寮物語	85
市有林誤盗伐事件	88
市民会館綴帳寄付の思い出	92
木霊塔の由来	93
「どん」の顛末	94
騎手が作った究極ラーメン	97
内大部ダム決壊と災害復旧	100
私の結婚式	103
アスパラガス	105
鑄物工場	108
農業の危機に対処	109



初のドックレース.....

剣淵への定期バス.....

森永乳業と提携.....

原の坂の地蔵.....

町立病院が全焼.....

馬の力で澱粉工場を動かす.....

踏査探検隊熊に襲われる.....

士別市誕生の夜明け

対談 合併当時のことなど（前市長國井英吉氏と品沢竹司氏

回顧 町村合併のころ（元温根別村長七条成良氏）.....

座談会 合併の思い出（合併時の町村議員）.....

合併時の在職職員座談会.....

政府米訴訟.....

市街地区画整備.....

吸収合併か対等合併か.....

町村合併当時の校舎.....

士別市誕生余話.....

上士別に密書を届ける.....

天皇ご来道で投票日変更.....

腹は満吉、金と中屋で支払いもじもじ.....

新聞でみる世相の断面

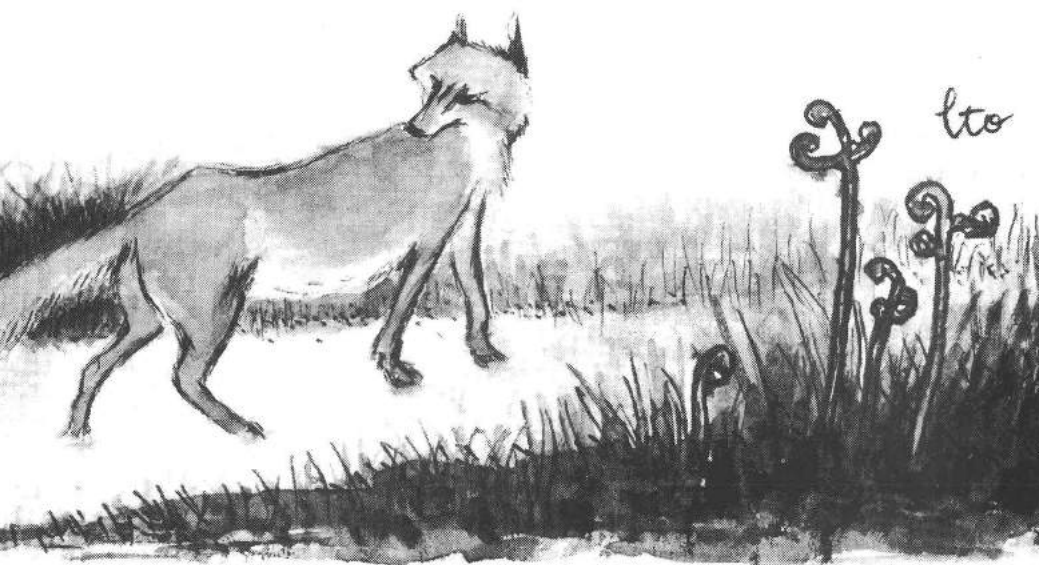
道北新聞.....

道北日報.....

193 160

157 157 156 155 154 152 151 151 146 139 134 122

119 117 115 114 112 111 110



忘れていた足跡

大東亜輕音楽団	202
市内の標高	206
水道水の味	207
市内の地質と岩石	208
町時代の防火用水路	209
旧町時代の用排水路	210
造林渡舟場のあつた頃	212
市街は荷役馬の賑わい	213
新タヨロマ川放水溝の掘削	215
昭和初期の冷害視察と大臣の視察	217
仏さまの道案内	218
自転車練習とタコ労働者の逃亡	219
戦時中の牛乳検査	220
屯田兵の土地売渡証書	221
木炭火力発電所	223
士別スキー倶楽部	226
道路は“箱舟の道”	228
執筆者一覧表	232
編集後記	233
表紙の言葉	232
表紙紙見開き	233
裏表紙紙見開き	233
軍馬用地の物語	233
文／山田伍市	233
絵／伊藤善彦	233
近藤重蔵	233
天塩川川筋図	233



発刊によせて

士別市長 檜

木

実



士別市郷土研究会の皆様方により、昭和五十四年に引き続いて「新士別よもやま話」が発刊されますことは誠に喜ばしく、これが市民文化の向上、あるいはまちづくりにおける市民意識の高揚の面においても有意義なものであり、関係各位のご尽力に対し心から敬意を表する次第であります。

これまで、郷土研究会におかれましては、この「士別よもやま話」をはじめとして「碧流」「戦後開拓史」など本市の歴史に関する数多くの文献を発刊されており、広く市民の皆様をはじめ多くの方々に好評を得てきたところであります。特に、隠されたエピソードを綴った「よもやま話」は貴重な資料として続編の発刊が期待されてきたところであります。

今、本市は、開基百年を迎えようとしておりますが、過疎化の進行あるいは農業を取り巻く環境の厳しさ等々、多くの課題を抱えております。

私は、この書が多くの市民の方々に読まれることにより、郷土に対する関心と理解がさらに深められ、明日のまちづくりの礎となることを期待してやみません。

終わりに、この「新士別よもやま話」の発刊にあたり、ご尽力いただきました士別市郷土研究会の皆様並びに関係各位に対し心から感謝を申し上げ、発刊にあたりましてのご挨拶といたします。

『新士別よもやま話』刊行に寄せて

士別市教育委員会教育長

田 苺 子

進



『新士別よもやま話』の発行を心からお喜び申し上げます。

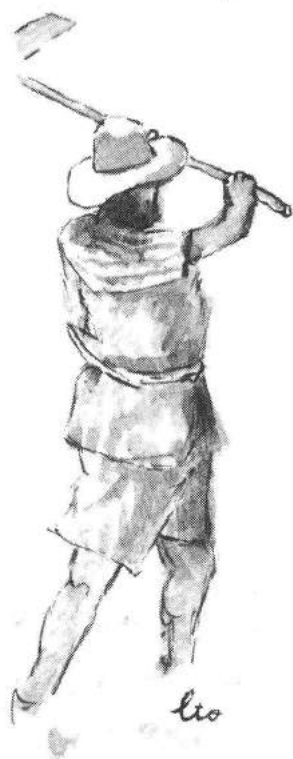
士別市郷土研究会の皆様には、昭和三十二年に発足以来、郷土史の調査、研究に広範な活動が続けられ、その成果を『士別よもやま話』として昭和四十四年にまとめられ、以来、第三集までの発行をみているところであります。

時代の進展とともに、風化しつつ忘れ去られようとする市民の歴史を掘り起こし、誰にでも親しまれ判りやすい文体で綴ったこの本は、発刊以来大変な評判を得、郷土の歩みを知る貴重な資料として広く市民に愛読され、さらに続刊を期待されておりました。

今回は士別市誕生時代の前後に焦点をあて、北海道の北の生活文化振興事業としての採択も受け、装いも新たに『新士別よもやま話』として発刊されますことは、誠に時宜を得たものであり、喜びにたえない次第であります。

この本が再び、市民の多くの方々に手にされ、郷土に対する理解と、明日の郷土建設の糧となることを心から期待し、さらに、関係各位のご尽力に深い敬意を表しましてお祝いのことばいたします。

戦後の苦難を越えて



修練道場と終戦日の松谷工場

修練道場

私は、徴兵検査で肺に曇りがあって兵役は免れたが、当時は、一人でも多く丈夫な兵隊が欲しい時代で、なんとか私たちのような弱い者を健康にして、戦場に送り込もうと国は考えていた。その兵役予備軍の養成所が修練道場のような場所だった。

現在の不動院の所に道場と寄宿舎があつて、栄養失調などで兵役を除外された若者が四十名ばかり収容されていた。所長は旭川師団から派遣された少尉で、教官の一人に下士別の屯所さんもいた。

朝六時に起床して、不動院滝前の広場で乾布マサツをしたり、南士別小学校まで駆け足をさせられたが、皆が半病人ばかりで完走できる者はいなかった。月に一度、停車場通りにあつた町立病院に、健康診断に行くのだが、「いい若い者が半病人のぞまこいて」と、言われているようで、知っている人に出会うまいかと、士別駅の前を通るのが嫌だったものだ。

食物が少なく味噌汁一杯と、おいしい物でカレーとオシニコ、煮付けぐらいで、腹がへつてどうしようもなかった。公用の腕章をかけ、当番で士別の街へ買い出しに行くのだが、帰りに食堂でうどんを食べたことがばれて、ひどい体罰を受けた仲間もいたほどだった。炊事は年寄り夫婦の請負だったが、炊事当番でオシニコや、焦げ飯を盗み食いするのが一番楽しみだった。

終戦日の松谷工場

その日、私は教官室に呼ばれた。何か悪いことでもばれたのかと、恐る恐る教官室に行ってみると「今日午後からお前は家に帰ってよい。明日から馬を持つて松谷工場で働くように」と、言う命令だった。

当時松谷工場では、戦場へ送るカボチャや人參の乾燥野菜と、軍需品のデキストリンを製造していた。工員は、男が二十名程と、川西や下士別周辺の村や街から徴用になった娘さんが大勢いた。運搬機具が馬車以外に無い時代で、私は毎日のように馬を追って、炊事担当の娘さんに乗せて街へ買い出しに出掛けたり、工場のちよつとした運搬の係だった。

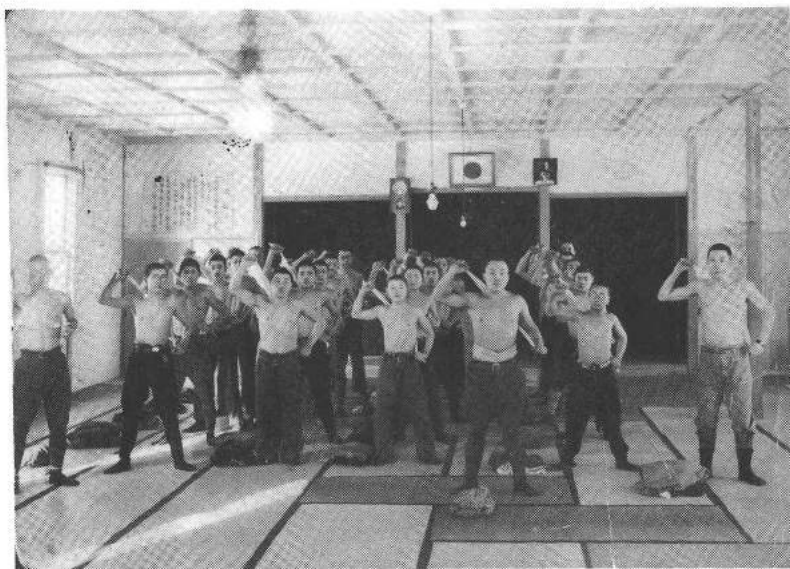
昭和二十年八月十五日に、それまで大声を出さないと話が聞こえないほど騒音がうるさかった工場内が、

一瞬に静まって「工員は全員事務所前に集合しろ」と言ってきた。

事務所前の一段高い所に藤本工場長が立ち「たった今、日本は戦争に負けた。勝つと思って皆さんには大変協力をして頂いたが残念だ。」と、泣きながら話を続け「稚内にソ連兵が上陸したと情報が入った。ソ連兵は一番先に食料を調達するために、士別では松谷工場が狙われる筈だ。皆さんもこれからは食料が不足するだろうから、私の独断で工場内の澱粉を工員の皆さんに開放するから食べてくれ、特に若い女性は、派手を服装をしないで、世の中が平靜になるまで外出を慎むように」と、訓示して工場内の馬車を動員し、工員の家に一戸一戸澱粉を配って歩いた。私は馬を追うだけだが、工員が馬車が潰れるほど澱粉を積むものだから、今までの楽しめた分をいっぺんに仇を取られる思いで、澱粉運びをしたものだった。

翌日工場へ行つて見ると、見知らぬ自動車が横付けしてあった。聞くと名寄町役場のトラックで、昨日、工員に澱粉を配ったことを早々に嗅ぎつけ「士別にばかり澱粉を配るとは怪しからぬ。名寄にもよこせ」と、掛け合いに来たのだ。申し訳に昨日配った所から少しづつ返品して貰いかっこうをつけたが、どさくさとい

いながらも、藤本工場長の取った終戦処理は立派なものだったと感じている。
(佐藤 吉春)



修練道場で乾布マサツ 昭和20年

終戦の玉音放送を聞かなかった 士別町長と警察署長

私はきよ弱体質で小学校（終了時は国民学校）も十分通い得なかった。だから特修科を終えて、翌年の正月まで家事手伝い、といえど女なら聞こえるが、つまり家でブラブラしていたのだ。太平洋戦争の真つ只中であったから、一人前の男子であれば、当然軍隊志願をしている年頃なのである。そこで徴用令による動員で、横須賀海軍工廠へ連れて行かれ、忽ち胸を患って帰えされた。町医者に通ってカルシウムの注射をするのが日課で、他は家で下手な絵を描くか、父が昔読んだ哲学書を読み漁る生活が続いた。

その頃父の友人で鎌倉さんという人が、毎日のようにわが家に顔を見せられた。わが家の斜め向いに公会堂があって、そこに森林組合の事務所があり、鎌倉さんは嘱託技師として通っていた。その行き帰り、お茶を飲みに立ち寄られるのだ。父と仲のよかったこともあるが『この家の水がいいから、お茶が旨い』とい

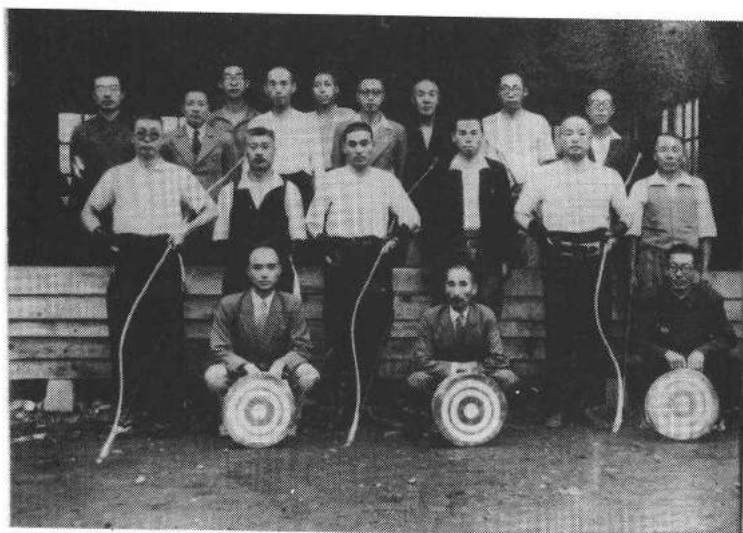
うのが本音のようであった。染物屋のため、毎日大量の水をポンプで汲み上げて使うから、最初は金気に悩まされたが、長い年月の間に良い井戸が出来上ったものと見え、町では屈指の水（今は下水道工事で水位が下がり、濁水して水道に変更）といえた。

その鎌倉さんが、私を心配して『いい若者が日陰の萌やしのように、家の中にくすぶってばかりいては、健康になれないぞ。外に出て弓でも引いて見ろ』といわれた。父はすかさず『どうかよろしく頼む』ということから、女学生が引くような、今にすればヘナヘナの弓、ならびに道具一式を、鎌倉さんに揃えて貰った。一週間程鎌倉さんの庭で、巻藁による基本を教えられて後に、道場に連れて行かれた。弱い弓だから体に無理がかからない。他に仕事がないから毎日通えるし、それなりに上達もするわけだ。

当時の士別弓道会は、会長が町長の鈴木顯藏氏、鎌倉さんが幹事長、その他には佐々木良五郎町役場助役（後の二代目士別市長）、中屋金次郎同収入役（後の戦後初代民選町長）、竹井警察署長、武田同次席等々、町で長と肩書のある者はほとんど会員で、盛況を極めていた。

私が弓を始めて一年後、昭和二十年七月十六日、士

別神社祭典奉納弓道大会が、当時士別小学校グラウンドの片隅で開催された。前日は本大祭で、私達はこの



会道弓の士別当日戦終

年の壮丁（実際は徴兵検査が一年繰上げて行われた）に当って居り、御神輿渡御奉仕のため神社に集まった。だが、警戒警報が一日中解除にならず、遂に神輿は十九山を降りることが出来なかった。翌日の大会は、途中で空襲警報が出て、剣淵境の山を低空で士別へ向って来る敵機を発見、私達は大会を中断して近くの樹下に避難した。結局鳶が鴉の見間違いで、笑うことも出来ない緊迫した気持ちの中で競技が続けられた。

後日判った事だが、この時、比布駅に敵の艦載機が現われ、機関車一輛が襲われて、蜂の巣状に機銃を浴びせられた日であった。私はどうしたわけか、成績が振わず、最終競技の金的はあきらめて甲矢（はやゝ二本持つ矢の初めに射る矢）を放った。ところが見事的中、その後三十五年間未だ金的を射たためしがない。翌月の十四日、鎌倉さんから『明日は天皇陛下の玉音放送があり、いよいよ本土決戦を覚悟せよ、ということだから、道場に集まって大会を開く。ついては、トルーマン、チャーチル、スターリン、蒋介石の似顔を描いて来い。それを的にしてやる』と指示を受けた。早速厚紙に似顔絵を描いたが、ルーズベルトに代ったトルーマンの顔が判らず、全くの出たら目で我慢して貰った。当日はほとんどの会員が集まった。眺（まな

じり)を決して弦音を響かせていると、若いお巡りさんが来て、竹井警察署長に耳打ちをした。署長は『今、署に連絡があり、日本が降伏したらしい。治安に当らねばならないから』とサーベルを吊つて帰つてしまった。会長の鈴木町長も『一応私も責任があるから(どういう責任があつたのか未だに分らない)戻らねば』と役場に戻られた。残された者は途方に暮れ茫然自失の態でいると、鎌倉さんが、『ここまで来て、止めたところで、やつちまつたことはやつたんだ。構うもんか、最後までやろう』この一言にみんなは変に乾涸びた呻き声のように、喉の奥から『ウオー』と声を發した。それから驟雨のようにみんなの矢が四ツの似顔に注がれた。中断する前とはガラリ變つて、命中率が高まつたのだ。何にとも向けどころのない、怒りとも絶望とも、哀しみとも、いま的確に表現出来ない、やり切れない気持ち、四ツの顔に集中していたからだろう。終ると鎌倉さんは『後の似顔絵を、道場の砂場で焼いてしまえ』といわれ、私は矢を受けて穴だらけになつた似顔絵を火刑に処した。その上、灰の跡形もなくなるよう丹念に踏みくだいた。

竹槍を武器として、本土決戦に備えた日本だ。弓矢は少なくとも飛び道具だから、敵軍が上陸して来たら

大変なことになるだろう。折つて燃やすべきか、隠すべきか、などと思案しながら家路をとぼとぼ帰つて来た。その後、弓の処分に決断がつきかねていると、弓は従来通り続けてかまわない、と通達があつた。しかし、その後において、私の留守中に田舎から遊びに来た従兄が、鴨居から弓を外して、弦を逆に張つて引いてしまった。だから、私の記念すべき弓は、無惨にも折られてしまったのだ。古い日本が亡びてしまったように。

※以上は、一九八一年七月発行の「士別のふだんぎ第八号」に市民参加として、まだ会員にならなかつた私の文を載せていただいたものである。

ちなみに当時の会員を名簿から拾つて記載する。

会長鈴木顕蔵、幹事長鎌倉庄一、竹井己之助、大野繁一、大槻吉太郎、児島群一郎、清光勝雄、工藤熊男、原口寿之、石垣末松、河合銀次、藤田泰善、佐藤太幹、今井清太郎、武田保、熊谷万太、服部光水、上北喜作、中嶋晋、高橋一郎、上西林之丞、長縄清、野村文吾、中屋金次郎、谷一、
へ士別のふだんぎ8・市民参加号Ⅱ私と弓より

(伊藤 善彦)

引揚者寮回顧

戦後、早くも四十五年が過ぎて、戦中や終戦直後の状況をつぶさに知っている人は、すでに亡くなったり老齢となっており、忘却されようとしている。当時、まだ幼かった子供達も今は五十歳を越え、若かりし人々は還暦を過ぎてゐる。

その頃の士別は、もちろん町の時代であり、街並みも大通りだけが商店の立ち並ぶ賑わいを見せていたが、一步横道にそれると家も疎らで、かなり遠方まで見通すことができた。民家の造りもほとんどが板張りの外壁であり、今日の耐寒住宅とは比較にならない粗末なものであった。また、家庭の燃料には石炭や薪が使われ、土管の煙筒からは黒い煙がもうもうと立ち昇っていたものである。灯油を燃やすなどとは思ひもよらぬことであった。

街中の道路は、砂利道で道幅も狭く、馬車と自転車が行き交うだけで、車の往来などは珍しかった。だから「交通事故」などという言葉も聞くことがなかった。

一方、食糧が極度に不足で、自給自足のできた農家は別として、一般の人たちの生活は、食べ物を確保することがたいへん困難な状況であった。米の入手が難しく、どここの家でも空き地を耕しては、馬鈴薯や南瓜、唐黍^{とうきび}などを作って、米に代わる主食として自給を図っていたものである。

そんな生活難の中で、昭和二十二年の春に樺太や満洲などから多くの引揚者たちが士別にも入って来た。衣・食・住の全てに困窮しているところへ加えて、これらの人々を受け入れることなどは、至難の状況であったことは想像に難くない。したがって引揚者は、なんとなく邪魔者扱いにされ、大げさな言い方をすれば、乞食か無法者の侵入のような偏見で見られ、随分肩身の狭い思いをさせられたものである。

親戚縁者を頼って、日本各地に引揚者が続々と入って来たが、中には縁故のない人たちもかなり多かった。政府は、これを救援するため「引揚者の援護措置」として、各都道府県に無縁故引揚者のために、緊急の収容住宅の建設を割り当てて、その対応に当たった。

士別にも、現在の「大通西十一丁目と十二丁目の一部」と「西一条十一丁目」にまたがって、無縁故引揚者住宅が四十戸ほど応急に建てられた。その構造は、

狭いバラックの粗末なものであったが、引揚者たちにとっては「住む家が与えられただけでも幸せだ」と、つくづく感じたものである。わずか八坪（一間に台所と便所）の家に、十人もの家族が住まなければならぬ状況で、悲劇的なことが起こったりもした。

住宅地の南側に、チューブス川に注ぐ灌漑溝があり、大雨の度に溢れ出て、床下に浸水することがしばしばあった。そのために、床を高くした造りであったが、強風が吹くと、床下から吹き上げる寒風は、ゴザをも持ち上げるほどで、肌身に応えた。しかも、隣りとの仕切りは板一枚のため、子供の泣き声や物音がストリートに聞こえ、壁の節穴からは隣りの家の部屋が覗ける所もあった。

強烈な印象として残っているのは、たしか昭和二十九年の秋だったと思うが、いわゆる「洞爺丸台風」と名づけられた台風の時、六戸長屋の屋根が一瞬にして、全部剥ぎ飛ばされた時の恐怖である。

燃料を買う金もなく、駅の西側一帯にあった木工場の丸太貯木場へ出掛け、丸太の皮を剥ぎ取って来ては、それを乾燥して薪の代わりに焚いていたことを覚えている。食べ物も極端に不足していて、芋や南瓜が主食で、米などは減多に口にできない状態であった。「澁

住宅姿図（2戸分）



構造：木造桎屋根・外壁板張り
高床式—1棟6戸長屋

平面図：（1戸分）



面積…8坪（26.4㎡）

粉だんご」などは、実に美味しいご馳走だった。

それでも、家族全員が一丸となって必死に働き、生きる喜びを分かち合った。しかし過労がたたたり、結核を患ったり肺炎をこじらせて生命を断つ人も出た。悲惨だったのは、父母が同じ日に、中学生の子を残して相次いで亡くなったことがあった。「こんな不幸が世の中にあつていいのか」と胸の締めつけられる思いと同時に、いらだたしささえ感じたものである。

あれから四十五年が過ぎて、当時の引揚者たちも立派に自立し、成功をおさめた人も数多い。土別市における錚々たる人材として活躍している人もいて、まことに喜ばしい限りであり、あの引揚者の暗さと卑屈さは遠い昔のこととして忘れ去られている。

当時の建物は、老朽化して、そのほとんどが建て替えられ、住む人も変わって昔の面影を偲ぶすがもないが、幾人かはあのままの場所を離れずに、住みついているという。「住めば都」というが、第二の故郷となった土別を離れがたい思いで暮らしているのである。時は移り、人が変わり、あの辛かった生活の記憶も徐々に薄れて、忘却の彼方に消え去る前に、歴史の一角マとしていささかの回顧録をしたためてみた。

(田中 鏡)

農民福音学校

日本基督教団土別教会（現在は、日本基督教団土別教会）の長老富室辰正氏が、昭和二十一年秋に札幌北一条教会で開催された、日本基督教団北海教区教師及び信徒の修養会に出席した。土別教会に戻って北海教区が「農民福音学校」を計画したので、土別教会で最初の実施を引き受けることにした旨を私たちに報告された。

太平洋戦争が敗戦で終結した当時、わが国の食糧は底をつき、一千万人の餓死者が出るであろう、と予測された。従って、祖国日本の復興はまず食糧の自給が最大の目標であった。敗戦によって、台湾、樺太、千島を失ない、満蒙からの開拓団員を含めて、陸続と同胞が残された四ツの島に引き揚げてきた。益々食糧増産体制の確立を大車輪で遂行しなければならぬ状況下におかれていた。

日本基督教団北海教区は、日本の農業が目先の利潤追求に捕われることなく、国民の生命を守る食糧供給

の光栄ある職業として、神を愛し、人を愛し、土を愛する、三愛精神に裏打ちされた、キリスト精神によつてのみ達成される、との確信のもとに農民福音学校が構想されたのである。

わけても、この計画を中心になつて提案されたのは、札幌北一条教会長老の西村久蔵氏である。西村久蔵氏については、旭川在住の作家三浦綾子さんが、後に『愛の鬼才―西村久蔵の歩んだ道』（小説新潮一九八二年六月号―一九八三年九月号連載。一九八三年十月二十日単行本として新潮社から発行）を書いてゐる。できるならば一読されるとよい。昭和二十四年三月十日発行の、士別農民福音学校校友会機関誌『ひこばえ』創刊号に、富室辰正氏は「福音学校を省みて」と題して、次のように書いてゐる。

「私は昨春秋、北一条教会に於いて開かれた、日本基督教団北海教区、教師及び信徒の修養会に出席し、其の折西村久蔵氏より農民福音学校開設の計画を聞かされたが、待望してゐたこととて飛びつく思いで申し込んで来た。今年の一月中に開設して貰うつもりであつたが、種々の事情で三月五日からという決定の通知を受け、早速伊藤善彦兄と共に実行組合長会議や、各部落の青年団長を訪問し生徒の推せん方を依頼したり、

青年学校の開かれたところを訪ね廻ったり、福音学校の趣意内容の説明に飛び廻つたのだが、時期が丁度薪山の頃で農家が多忙をきわめた時で、農村青年の入学が少数であつたのが非常に遺憾に思われる。

こんな立派な学校に二十人位の生徒では、全く惜しいことだ、とみんなが残念がつて居られた。しかし乍ら、五日間の福音学校が終始感激を以つて送られ、殊に土曜日の座談会（最終の晩）には、生徒一人一人が感激溢るる感想を述べられたが、終世忘れられぬ思い出となるであらう。或一人は「僕の町の教会では、なぜこんないい催しを開かなかつたのだろう」と嘆息した程であつた。伊藤菊治兄家が仕事を捨てて盡力し、又、和田・山本・安野・桜井・戸田の諸姉が、朝暗い中から夜おそく迄協力下さつたことは涙の出る程うれしかった。福音学校の諸先生方には、誰れにも差別なくどんな質問にも答えて下さる親切さには全く感激に堪えない。

今更キリスト者にして、始めて民主主義が完成されるのだ、としみじみ考えさせられた。」

第一回士別農民福音学校は、昭和二十二年三月五日（火）から九日（土）までの五日間と決まつた。教室は、士別教会の会堂が当てられることになつたが、講師と生徒

は、枕を並べて夜も語り合うことが福音学校の重点になつてゐる、というのだ。士別教会堂には、大勢の宿泊者を収容する部屋が無い。はたと困惑した私は、公会堂の裏側に繋がっている元婦人会館を、炊事場をも含めてそっくり使用させてくれるように願ひ出た。かつて戦前、町の婦人会が自前で会館を建てたものを、戦後町に寄付したのである。その頃は公民館の付属施設であつた。公民館としては、公共の施設を一宗教団体の行事に提供することは、憲法に抵触するのではないか、と尻ごみをされた。私は、農民福音学校とは、キリスト教の宣伝活動ではなく、飽までも国や自治体の責任で行うべきことを、公的機関がやらないから、北海教区が奉仕の精神で、道内最高權威の講師を揃えて、農村復興のため農業技術の向上に資することであるから、憲法上の問題は出てこないのではないかと、との説得に應じてくれたのである。

受講生徒は、宿泊のための寝具と僅かな米を持参するだけで、受講料など一切徴収は行わない。講師の寝具は、行事の趣旨を理解された、整骨院の鈴木幹雄氏、清光組の清光勝雄氏のご両家から借りることができ、会場その他、受け入れ体制は整つた。が、肝心の生徒は、富室辰正氏の手記に残されたように、農家の若者

が薪山や、造材山で働くために出払う時期と重なつてしまい、思うように応募者が得られなかつた。

私の弟俊彦が、名寄農業学校農業科在学中であつたが、学校で福音学校の計画を校長に提示して、希望する生徒に授業を休んで参加させて欲しい、と願ひ出たのである。校長は、講師陣と講義内容を理解して、学校から教官を一名引率者につけて、五名の生徒を選抜し、授業を休んで参加することに許可を与えてくれたのである。

学科及び担当講師は次の通りである。

- | | | | |
|----------|--------|-------|-------|
| ○農業経営 | 北大教授 | 渡辺 | 侃農学博士 |
| ○今後の農業 | 北大教授 | 手島寅雄 | 農学博士 |
| ○農村医学 | 北大医学部 | 有馬 | 純教 授 |
| ○科学的物の見方 | 北大理学部 | 溝口 | 教 授 |
| ○農業経営指針 | 前北農会長 | 安孫子孝次 | 先生 |
| ○農業氣象 | 北星高女教頭 | 時任正夫 | 農学士 |
| ○思想経済問題 | 前札幌教諭 | 西村久藏 | 先生 |
| ○舍監 | 前利別農会 | 村瀬 | 実指導部長 |

五日間、学校を休んで五人の生徒と共に参加された、名寄農業学校の徳橋先生から、後日福音学校についての感想を手紙に託して送つてこられた。

「生命の眞の姿、生きるべき目標、人生のあり方、こ

れらの大問題、そして興国の道、私の一生にとって大きい指針を得ました。今後其精神生活の充実につとめ度いと思います。

名寄町緑丘農業学校教官 徳橋勝美

右の文面でも分るように、五日間、農業に関する専門的知識を得られた事よりも、参加者すべてが、夜の



福音学校機関紙

座談会、枕を並べての語り合いの中で、講師の人間性から受ける感動の方が遙かに大きかったといえる。

第二回は、翌年昭和二十三年一月二十五日から二十九日までの五日間実施された。教室、宿泊については前年の第一回同様に準備された。極寒肌をつんざく寒波の中で開催され、教室の暖房が十分でないから、講師も生徒も防寒用のオーバーを着たまの講義であった。しかし第二年度は、昨年実施された福音学校の評価が広く伝わって、予定人員を上回ったのである。学科と担当講師は次の通りである。

○農村問題 中央農村教化研究所

本田 清一主事補

○思想と農村問題

北大農学部教授松田 武雄農博

○畜産管理

北海道庁技官 向井羊吉農学士

○政治と宗教

前札商教諭 西村 久藏先生

○害虫とその駆除法

琴似農業試験場 遠藤 技官

○稲の一生

農試上川支場 星野 達三技師

○農業協同組合論

北海道庁嘱託 小川 直先生

○校長兼舎監

土別教会 山田 三郎牧師

第二回農民福音学校には、上土別村字奥士別（現朝日町）から二名の参加者があり、その中には現在朝日町役場助役の庄司忠氏も含まれている。名農生は三名

が参加した。現在南土別町で酪農家で成功している尾形義一、小泉富雄両氏等も名簿に名を連ねている。

第三回農民福音学校は、引き続き昭和二十四年二月十二日から十六日までの五日間であった。学科及び担当講師は次の通りである。

○米国に於ける農村生活

中央農村教化研究所

所長 A・R・ストーン 農博

○平和論

江別太キリスト村建設委員

○農村経済

前札幌商業教諭 西村久蔵先生
北大農学部教授 松田武雄農博

○稲作栽培

農試上川支場 星野達三 技師

○世界の動き

名寄天塩教会 相良愛光 牧師

○農村栄養

農試食糧研究所 川端純一技師

○農村科学

前北農技師 八畝 清明先生

○近代酪農事情

和寒村長 南雲源一郎 氏

○校長兼舎監

士別教会 谷 義信牧 師

参加者の中には、今は故人となられた剣淵町議会議長を務められた佐藤圭介氏、士別市議會議員となつて活躍された多寄の二瓶正麿氏、士別市農業委員を務められた中士別の長澤源一氏等の顔が記念写真におさまっている。名寄農業学校は、名寄農業高等学校となり、

四人の生徒が受講している。

私の関係する福音学校の実施は、以上の三回で終る。この後、私達一家と八畝清明氏ご夫妻、仲英治氏の三家族が、士別教会谷牧師と袂を分かつことになったからである。

三回目の講師に迎えられた、A・R・ストーン博士はカナダから派遣されてきている宣教師であるが、士別に外国人の来訪は珍しいことであるので、公民館主催の幼児絵画教室（松永昇氏指導）をはじめ、小・中・高校など、一日に五カ所も講演をお願いした。福音学校夜の座談会で、ストーン博士に「お疲れのところを、一日に五回も講演をお願いして申しわけありません」と、案内して歩いた私が感謝をこめて挨拶をすると、「どうか誤解しないで下さい」とすかさず流暢な日本語でジョークが返ってきた。忽ち、みんなを爆笑の渦に巻き込む陽気な人柄であった。

ストーン博士は、私に、この福音学校を更に五年程継続して開催するように、そしてこの地を中心とした農村青年の意識改革が進むならば、士別に福音学校の施設を建てよう、そのために千ドル程の資金援助をする、と約束をされたのである。しかし私達が離脱した後に、士別教会は、日本基督教団を離れて、旧会派の

日本基督教に復帰したため、隣り町の教団所属教会である名寄天塩教会傘下に「道北クリスチャンセンター」として建設され、毎年「三愛塾」が開かれている。

なおストーン博士は、その後昭和二十九年九月二十六日夜半から二十七日にかけて本道を襲った十五号台風が、青函連絡船、洞爺丸の海難事故を起こし、この事故で遭難されたのである。当時の新聞記事によると、船内で博士に渡された救命胴衣を、近くにいた学生に譲って「君は若いのだから、生き残って日本のために尽すように」と激励したことが、その後助かった学生によって明らかとなり、それを知った別の遭難した学生の母親が、自分の息子に博士の救命具が与えられているれば、と嘆きの談話が報じられてあったのを記憶している。

松永昇さんの幼児絵画教室で、幼い子供達に博士は、「私の名前はストーン、石です。私のお母さんが意志の固い人にならなさい、と名前前に石とつけてくれました」と話された、あのすてきなジョークは、その時の幼児達に果たして理解されたかどうか。外国人としては小柄な博士の陽気な話しぶり、しかしストーンの名の如く意志の固いその面影を、福音学校を回顧する度に思い起こすのである。

(伊藤 善彦)



第3回福音学校の記念撮影

士別屯田九十九会

中屋金次郎さんが、第十代町長に就任したのは昭和二十二年、開町五十年の前年だった。

戦後の混乱も平静を取戻し、町民の間にも新聞の発行、短歌や俳句、絵画の著士会が発足して文化活動が芽生えはじめ、産業も木材、鉄工、食品の工場が復興し、農村も食料増産の励みに立ち直りを見せていた。

開町五十年を翌年に控え「兵村として何か記念になることを」と声があり、当時の青年団幹部だった久光鷹士、木村政勝、清光正雄、渡辺喜美寿、佐藤熊三郎の各氏が集まり、古老と相談し九十九山に因んで「士別屯田九十九会」を結成し、この会が主体になり開基五十周年記念事業の実施を目指して、屯田に関わる人達の入会を得て発足した。

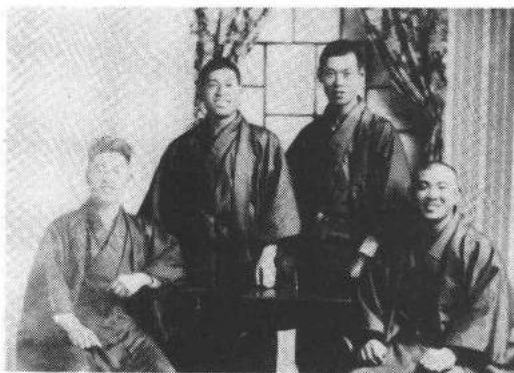
その後、精力的に会合を持ち、記念式典の実施計画や博覧会開催へと運動を進め町に申し入れをしたが、「財政の面からとんでもない」と相手にされなかった。「それでは我々の手で」と、街の有志に相談したところ

賛成を得て、二十三年開催に向けて寄付集め、展示物の収集に会員一丸となって取り組んだのだった。

その努力が報われ、資金的にも開催の目処がたち、町からも予算が付いて、昭和二十三年七月、賑々しく開基五十周年記念を催すことができた。

その後九十九会は、兵村開拓記念碑の管理、開拓記念祭りの実施、屯田時代の官給物保存、兵屋移転などに尽力しているが、現在の会員は十三名で、屯田の火を消さないように努めている。

(木村 重也)



久光鷹士氏等屯田二世の方々

温根別職員組合の発足

温根別村役場に、労働組合が結成されたのは昭和二十二年の秋で、この地方では早いほうだった。

当時、一カ月の給料で米半俵も買えなかった。闇米は高価で手に入らず、ともかく食っていける給料を頼って、職員組合を結成し、何とか給料を上げて欲しいと言う、極めて単純なものであった。

発起人は、西森国男、根岸昇と私で、趣旨は前述の状況で、誰も反対者はいなかったが、言い出した責任で私達三人が中心になった。西森が委員長で私が副兼事務局長、根岸が幹事に選ばれ、早速、給料値上げ運動を展開して、まず、各町村の給与の調査から始めた。

その時の村長は、戦後始めての民選村長で七条成良氏、助役は塩崎春吉氏で、ずいぶん無茶な要求を突きつけ困らせたものだ。要求の文面は戦後にわかに盛り上がった労働運動の影響を受けて、熾烈、過激なもので、村長に幾度か注意され、今にして思えば汗顔の至りである。

その内容を紹介すると「村長等三役の給料値上げ要求」労働組合が村長の値上げ要求をだすのは、考えられないことだが、戦前の村長は名誉職的な考えがあり、まだ尾を引いていた。（戦前の官選村長は道から給与を貰っていた）が、民選最初の村長であり、議会も、村長の給与を決めたことがなく、両者共に、給与を値上げすることに、潔しとはしないでいた。しかし村長職は激務で出張も多く家族を犠牲にしていた。

一方我々職員にしてみれば、村長が犠牲的精神で村政を執行するのはよいが、三役の給与以上に要求する訳にもいかず、そこで考えた末の提案だったが、議会でも取り上げられて一応の成果があった。

更に出張米の要求を提出した。戦後の食料難は今も語り継がれているが、薯やカボチャ、だんご、ついに澱粉粕で飢えをしのいだ。そんな時代に職員は、会議だ、打合せだ、陳情だと出張の機会が多く、旭川へ出かけ旅館に泊まると、一食につき米二合を出さないと食わせてくれない。二泊すると八合の米が必要で、月に二、三回の出張が普通だったから、家族は代用食で我慢をしていたが、育ち盛りの子供達がいる家庭が大変だった。出張の度に米を持ち出す、そのため家族が米を食えないと言う苦情が出てきた。そこで、出張米

を何とかしてくれと要求したら、議員の方々が米を用意してくれた。一人当たりにすれば、僅かだったが嬉しかったものだ。

(三宅 裕良)

戦後の風雲児荒生産業

昭和二十一年十月、東四条八丁目に、荒生産業の事務所と工場建設の槌音が高く響いた。

戦時中、荒生善市氏と弟の荒生優光氏は、合同食糧化工場に勤めていたが、戦後、独立して大通り一丁目安川商店の裏や、東一条八丁目の善市氏自宅裏の小さな工場で、昼夜兼行で水飴を製造して資金をつくり、飛躍の時を窺っていた。

原料である澱粉はそのころ統制品であり、自由に入手出来るものではなかったが、各地から上手に集め、製品の水飴は、造るはしから飛ぶように売れて、代わりに工場に必要な機械類や資材、資金が集まり事業は爆発的に進展していた。

昭和二十二年には、政府委託の製粉工場も稼働し始め、道内各地から送られてくる小麦の製品や、緊急輸

入の米国産小麦は、昼夜二交代で製粉作業を行っていた。

その頃、三井不動産会長、江戸英雄氏と娘さんが工場を視察に来て、翌二十三年には、東京本社三井ビルの一角に荒生産業株式会社の看板を揚げたのである。

荒生産業が会社として士別にアピール出来たのは、昭和二十三年七月の士別開町五十周年記念の、産業博覧会に参加し、会社模型や製品見本、製造工程図、喫茶店、水飴、飴菓子販売で多くの町民に喜ばれたが、すでに、会社の急激な膨張のゆがみが経営に深く浸透していたのであった。

結局、澱粉の製造、水飴の乾燥粉末の施設設備、川西に在った澱粉工場の電化、社長宅新築、東山葡萄園の造成、七十名に及ぶ従業員の給与などの膨大な費用や、澱粉統制が廃止され、砂糖輸入が促進されるなど、ついに昭和二十四年会社更生法によって閉鎖をしまった。

最大債権者であった三井不動産の江戸英雄会長は、「北海道の熊に舐められてたまるか」と、工場を再利用するために、アスパラ工場にする計画を立て、その後幾多の屈折はあったが、現在のデージー食品工場となったのである。

戦後経済の混乱の中で短期間であったが、士別産業界の風雲児として活躍した荒生善市氏と優光氏の功績を讃えたいものである。

(福万 清一)

戦後のガソリン販売店

「これから車の時代になる」と言う義兄の言葉に、復員して間もない夫は、自立しようとガソリン販売を始めたのが昭和二十九年だった。当時は、原動機付き自転車が行き始め、バカバカと騒音を発して走っていた。

夫はわが家売り、駅前にか付きの土地を買い、ガソリン販売の小さい店を開き、市内に只一軒あったAガソリン販売店に、同業者として挨拶に行ったところが、夜になってAさんが血相変えて「お前の商売を叩きつぶしてやる」と怒鳴りこんで来た。その剣幕たるやすさまじいものであった。

夫は「これは時代の要求で、わが家一軒を潰したところで、これからは、どんどん出きますよ」と返事をしていった。

当時のガソリンスタンドはチャチで、タンクは、手回し式の二百ℓドラム缶が三本入るもので、従業員を一人を雇い借金もせずに営業ができたものだ。その後、丸通の運転手が冬に開店待ちをして、炭火で暖を取り寝込んでしまい、足の骨が見えるほどの火傷を負ったと言う噂があった。この事故があったところから、ガソリンスタンドが乱立して販売合戦が始まった。

わが家の屋号は『双葉商会』とした。(正岡 フミ)



双葉ガソリン販売所

天士マーケット

戦後の士別は、復員兵や引揚げ者で人口が増え、開放感があふれ活気があった。

そのころ、西二条通り六丁目から七丁目にかけて、青空マーケットが開かれ、古着屋、ラーメン屋、饅頭



天士マーケットの某飲食店
(町立病院跡に移設後)

屋、魚、野菜、雑貨屋などが雑然と店を構え、始終人の出入りで賑やかだった。

引揚げ者の私は、独り千円しか与えられず、ふところは淋しかったが、いつの間にかマーケットに足が向いた。そこでラーメン屋の三野さんの奥さんと知り合い、三和のおばあちゃんの元気な声に励まされ、岩井の奥さんの洋品店にも出かけた。奥さんは「ご主人が満州から帰るまで頑張るんだ」と働いていた。

近くに国勢座、長盛座があつて「愛染かつら」「月よりの使者」「王将」などが掛かり、いつも満員で、舞台の上まで観客で満員だった。当時の劇場には座布団持参で見にいったものだ。

マーケットでは「異国の丘」のメロディが流れ、物資の無い時代ではあったが、何処から仕入れてくるのか、金さえあれば何でも買えたものだった。私は見るだけで結構に楽しく面白かった。そのざわめきの中で、自分の生活探しにうろうろしていた。

誰もが自分の手で、これからの暮らしを、世の中を良くするんだと、生活は貧しかったが希望に燃える時代であった。三和のおばあちゃん、やがて大通りに立派な店を構えた。三野さんも停車場通りに店を開き、五十番の屋号で繁盛した。

(正岡 フミ)

新制中学校校舍建設のころ

戦後、教育基本法が公布になったのは、昭和二十二年三月で学校教育法が制定され、四月一日から小学校は六カ年に、中学校は三カ年の義務教育九カ年制になった。

新制中学はさしあたり、最寄りの小学校を借り、五月六月開校の運びとなったが、戦後の混乱に加えて農村は、連続の冷害に見舞われ、町村の財政は容易なものではなかった。新制中学の校舍建設は、こうした状況の中で進められたのである。

学校建設は、国の補助起債が認められていたが、町村の負担も大きく、当時の理事者は、乏しい財政の中であらゆる努力を払い、新制中学校の校舍建設に取組み、完成まで数年を要したのであった。

財源が無いので、各銀行や農協に目標額を定めて、貯蓄をするという名目で、関係校下の父兄に応分の貯蓄をお願いし、その見返りに資金を借りたのであるが、目標額に達せず、毎日のように懇願に出かけたものだ。

十二月、年末を数日後に控え、足を棒にしながら歩き回ったが成果が上がらなかった。農家はすでに餅つきの中で、夜の八時も過ぎて腹はぺこぺこ、体はへとへとになり雪の降る夜道を「お願いします。頼みます」の一点ばりで歩いたが「それどころではない」とすげなく断わる家「子供の教育のためなら」と、苦しい生活の中から貯蓄を約束し「頑張ってください」とほかほかの餅をご馳走して励ましてくれた方には、おいしい餅も胸がいっぱいで喉がとおらず、涙が出るほど嬉しかったものだ。

この様な過程をたどりながら、ようやく建設資金の目処もつき、さて建設となったが今度は資材が不足して、吹雪の中で工事中止という最悪の事態になり、気をもんだものだった。釘が不足で充分に板を打ちつけることが出来ず、西士別中学校では、検定の当日に玄関の天井が落ちて大騒ぎとなった。

校舍建設は苦難の連続で、理事者は夜も眠れない日が続いたろう。突貫工事の連続でベニヤ張りの校舎が多く、合併後は、その校舎補修に莫大な補修費がかかったものだ。

(安田 勝義)

新日本思想研究会

かつて大日本帝国の男子たる者は、満二十歳をもって徴兵検査を受けることが義務づけられていた。太平洋戦争敗色歴然たる末期症状から、兵力増強のため、昭和二十年には一年繰り上げて満十九歳で徴兵検査が実施された。大正十五年に出生した者が、その対象となつたのである。しかも最後の徴兵検査となつたのであるから、この年に徴兵検査で合格した大正十五年生まれの男子は、名誉ある最後の帝国軍人となつたわけである。

大正十五年生まれの、佐藤勝美君もその一人で、敗戦後軍隊の解体によつて士別に復員して来た。しかし祖国日本の前途がどうなるのか、目前が真つ暗に思えた。じつとして居られぬ気持ちから、同級生を訪ねて相談するが互に確信を得るに至らなかった。そこで、士別小学校時代の担任教師で、生徒間に信頼厚く敬慕されていた清水博先生を同級生数名で訪ねた。

清水博先生は「自分自身が、これまで正しいと信じ

て、君達に教えて来たことが、根底から覆り、これから何をどう教えて行くべきかすら分らないのだから、一緒に君達と考えるようではないか」と語られるのであった。忽ち数名の同級生が集まり、清水先生宅通いが始まつた。佐藤勝美君が最初に訪ねた、同級生伊藤善彦の父菊治が「新日本思想研究会」というのをやつたらしい、というアドバイスを受けていた。清水先生もそれに賛意を表明し、そのための準備会が行われた。後に、新日本思想研究会が機関誌『世紀』を発行するのであるが、第一号の会報に企画部所屬の佐藤勝美君は、次の様に書いている。

▽新日本思想研究会、発会前の準備会は、昭和二十一年三月下旬、小生の動議に依つて現主幹（清水博先生）宅に於て開かれた。敗戦後祖国が如何に苦難に満ちた道を歩んでいるかは多言を要さないが、小生復員後前途に対する不安と昏迷の中に、青年層の無気力な状態を見て、痛切に悲哀を感じ何んとか打開策を講じて前途に希望を見出し、祖国再建の為に正しく歩まねばならない、と斯く想を二三の同志と共に現主幹に相談した処、賛同と助力を得て本会の結成を目的とした準備会を結成し、暫定措置を講じて、発会迄逐次九回の準備会

を開催し、併行して思想研究を始めたものである。

概略、以上のような経過の後に新日本思想研究会は発足した。発会当日、書記の任に就いた高島実氏は、『世紀』第一号の会報に次のように記録している。

▽終始九回の準備会の間に会員も充実し、会の組織方針、会則の企画審議も完了し、顧問、其の他の熱心な指導支援者を得、昭和二十一年八月十日全面的に準備会を解散し、終戦第一年の記念すべき八月十四日、当町基督教会堂を借りて発会式を行った。開会は午後七時三十分、会則の発表、宣言、主幹の挨拶等があつて、来賓仲英治、富室辰正、森越天真、北村順次郎諸氏より祝辞を頂く。閉会は九時三十分で引続き会員の自己紹介を行い、暫時懇談に入る。散会は午後十一時で会者約五十名であつた。

新日本思想研究会発会式の、式次第は次の通り記録されている。

- 一、開会の辞 水村 一郎
- 一、準備会経過報告 佐藤 勝美
- 一、会則発表 高島 実
- 一、綱領唱和 発声 水村 一郎
- 一、宣言及び挨拶 清水 博

一、スピーチ 高島 実

一、スピーチ 伊藤 善彦

一、祝辞 仲 英治

一、祝辞 富室 辰正

一、祝辞 森越 天真

一、祝辞 北村順次郎

一、開会の辞 水村 一郎

発会に当つて、新日本思想研究会は、町民一般に呼びかけるポスターを僅か数ヶ所に貼つたのみで、準備会員二十名弱に新人三十余名が参加された。当日発表された綱領、宣言は、会の顧問となつた伊藤菊治の素案によるもので、次の様に発表された。

綱 領

一、本会は人格的自己完成を目的とし、然して社会道徳の向上を図らん事を期す。

一、本会は左翼右翼の何れにも偏せず、総てを包容して真理を探求し、以つて天地の正道を歩まんことを期す。

宣 言

我等会員は現今の低俗なる亜流に抗して、嚴肅なる人生觀の上に立脚し、善良なる日本人たるの自觉に生き、世の誤れる自由主義、悪平等、極端なる個

人主義、詭弁にして便乗的な民主主義者を対象とせる啓蒙運動を起して新日本建設に裨益す。亦人類社会の眞の文化的向上に寄与し以って生き甲斐ある人生を送らん事を期す。

会発足後、昭和二十一年八月二十九日、男子会員十三名、女子会員四名による会運営の協議会を経て、同月三十一日第一回の研究会「文化」をテーマとして、活動を開始した。爾来毎月二回の研究例会が続けられて、研究テーマも「宗教」「神」「新憲法」「唯物論と唯心論」「インフレーション」等、最も関心度の高い問題を対象とした。毎月の研究会開催中に、会員の研究発表も時に折り込まれた。

最初の会の事業として、昭和二十二年二月二十二日午後七時より、警防会館二階を会場に、研究発表会を開催したのである。芳名録に記載された参加者は六十九名に及び、次のプログラムによって発表が行われたのである。

新日本思想研究会研究発表

司会

- 一、祖国再建と農業の諸問題
- 一、主権について
- 一、差別より平等へ

秋田谷充雄
伊藤 俊彦
佐藤 勝美
川崎 三男

一、基本的人権に就いて 十河 健
一、デンマルクの酪農立国としての前提条件

一、科学の民衆化 富室 道夫
一、現代思想問題 神尾 誠

一、歴史哲学とデモクラシー 高島 実

一、社会認識方法の哲学的考察 伊藤 善彦
一、西田哲学による闘争の批判 清水 博

一、伊藤 菊治

会の事業第二弾として、機関誌『世紀』第一号を昭和二十二年三月に発行した。十河健氏を編集人に、B5判四十四頁、執筆者は主幹を含めて十二名である。

第一号の巻頭言に次の文を掲げている。

今日を築くもの

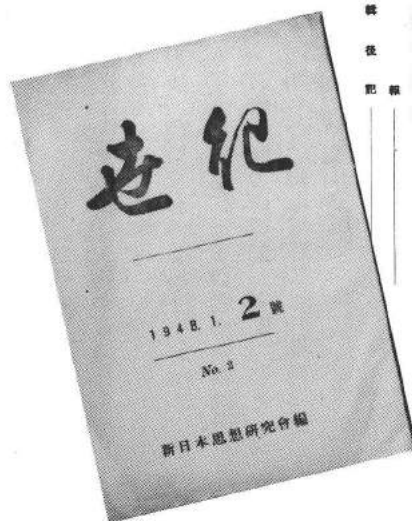
今日、吾々が尊敬する哲人、学者、理論家の大部分は過去の人だ。過去の、ある歴史のある個所に在って、その時代を、真剣に精密に観察し、その時代の或る現象をとどこおりなく説明し得る原理、原則を発見し、それを体系的に纏める事に成功した、恩人に外ならない。

現代という歴史の一断面に、在るもの、その現代の社会を觀、そして思索するもの、現代と取組んで生き抜くもの、それは吾々以外には、いないのだ。

今世に流布する種々の理論や、イデオロギーの大部分は、過去に於て造られたものだ。それはたしか

『世紀』 第二號目次

多岐英の考略	清水博(一)
早しむ可き進退に就いて	神足(四)
人生觀に就いて	杉山南園生七(四)
放浪精神に依る農業革新	伊藤俊彦(一〇)
主權と環境に關する哲學	伊藤善英(一四)
凱旋門	レベア(一〇)
人魚(詩)	高岩正吉(一一)
投稿について	伊藤善英(一二)
雲雀と百姓	伊藤善英(一三)
自我施設談義	伊藤善英(一四)
第二回	世志比古(一七)
論壇	大西比古(一七)
論壇(二)	伊藤善英(一八)
新日本思想研究會一週年を記して	伊藤善英(一九)



新日本思想研究会機関誌

に、吾々にとつて貴重な参考資料となり、又、良い所は此れを摂取しなければならないものであるが、そのすべてが現在の日本に、あてはまる教科書ではない。

現在の吾々に与えられるべき真実のものは、誠実な日々の実行と、その実行を導くところの実践理論になければならない。実践理論は実践意慾の直接の所産であり、而して実践意慾は、この苦惱に充ちた社会生活からのみ、具体性をもつて生まれて来る。

『世紀』第一号は、町の書店や駅の売店でも販売依頼をしたのである。当麻村の大内守氏という人から、先頃士別駅の売店で『世紀』を購読され、感銘を受けたとの読後感に次号の予約金を添えた手紙をいただいた。第二号は昭和二十三年一月に発行された。

会の事業第三弾として、昭和二十二年六月九日から、知識慾に燃える一般町民に應えるべく、毎週、月・火・木・金の四日間、週間延十時間で一カ月間、夏季文化学園と銘打った夜学を実施した。科目は、英語、科学、文学、哲学、社会思想、政治、経済等である。

更に事業第四弾として、会創立一周年記念事業と銘打って、昭和二十二年八月十七日(日曜日)正午から、町役場、北海道新聞士別支局、士別民報社の後援と、

町内有志の賛助支援を受けて「道北弁論大会」を開催した。新聞の宣伝も行き届いて出場申し込みは三十三名に達した。だが当日出場したのは二十一名であった。

会場の消防会館（前年までの警防会館）二階が溢れるばかりの聴衆の中で、十名の入賞者を選ぶべく審査が行われた。弁論終了後、旭川市から出場した、当時二十三歳の板東徹氏（後に旭川市議会副議長の後旭川市長に就任）の行った弁論「愛こそ尊し」がずば抜けて優秀なために、急きよ特賞を設けることにした。十一名の入賞者は次の通りである。

特賞「愛こそ尊し」

旭川 坂東 徹

一位「農村建設に捧げる若き力」

和寒 逸見彦四郎

二位「建設の一路」

東鷹栖 浜田 弘

三位「農村青年の使命」

風連 尾矢 武男

四位「青年の希望」

旭川 関根 房子

五位「農村青年よ祖国日本の礎となろう」

智恵文 遠藤 常夫

六位「理想主義の使徒」

士別 森越富士夫

七位「教員となりて」

風連 福玉 太志

八位「憧憬の純情に燃えて」

風連 浅野 茂治

九位「自然と人間」

士別 宗石 道夫

十位「農村青年教育」

名寄 石崎 忠夫

旭川市からは、坂東氏と十九歳の紅一点関根さんが出場し、二人共上位入賞された。後に士別市が会場を引き受けて開催した、全道市議会議長会総会に旭川市議会副議長で出席された坂東氏に、接待で駆り出されていた私が、新日本思想研究会主催で行われた道北弁論大会で特賞になったことを話すと、記憶に残っていることが分った。この弁論大会に、入賞は逸したが、滝ノ上、上士別（当時は独立した村）、剣渚、鷹栖などから参加出場者があつた。

新日本思想研究会は、その後「世界国家の思想」についてをテーマとして研究が続けられたのを最後として、昭和二十一年の創立以来二年有半を経て、解散の行事もせぬまま、自然消滅したのである。原因は中心となつて熱心に会の運営に當つた会員が、仕事や勤めの関係で町を離れて行ったことによる。

期間としては、長いといえなかったが、十代の旧制中学生から、生涯に中学校を三校も創立した功績により天皇の拝謁を受けたこともある八十歳を超えた元中学校長まで、一堂に会して語り合つたという事実は、敗戦直後の祖国復興のため、如何に多くの国民が心に駆られるものを持つて燃えていたか、ということの一つの証左ではないかと思う。

（伊藤 善彦）

片山哲前総理が士別に来た

太平洋戦争後、日本の内閣総理大臣は、成立順位で記載するならば次の如くである。

▼東久邇宮稔彦王（在位昭20・8・17～昭20・10・9）▼幣原喜重郎（昭20・10・9～昭21・5・22）▼吉田茂（昭21・5・22～昭22・5・24）▼片山哲（昭22・5・24～昭23・3・10）▼芦田均（昭23・3・10～昭23・10・15）▼第二次吉田茂（昭23・10・15～昭24・2・16）▼第三次吉田茂（昭24・2・16～昭27・10・30）▼第四次吉田茂（昭27・10・30～昭28・5・21）▼第五次吉田茂（昭28・5・21～昭29・12・10）▼鳩山一郎（昭29・12・10～昭30・3・19）▼第二次鳩山一郎（昭30・3・19～昭30・11・22）▼第三次鳩山一郎（昭30・11・22～昭31・12・20）▼石橋湛山（昭31・12・23～昭32・2・23）▼岸信介（昭32・2・25～昭33・6・10）▼第二次岸信介（昭33・6・12～昭35・7・15）▼池田勇人（昭35・7・19～昭35・11・24）▼第二次池田勇人（昭35・12・8～昭38・12・

4）▼第三次池田勇人（昭38・12・9～昭39・11・9）▼佐藤栄作（昭39・11・9～昭42・2・15）▼第二次佐藤栄作（昭42・2・17～昭45・1・14）▼第三次佐藤栄作（昭45・1・14～昭47・7・7）▼田中角栄（昭47・7・7～昭47・12・22）▼第二次田中角栄（昭47・12・22～昭49・12・9）▼三木武夫（昭49・12・9～昭51・12・24）▼福田赳夫（昭51・12・24～昭53・12・6）▼大平正芳（昭53・12・7～昭54・10・30）▼第二次大平正芳（昭54・11・9～昭55・6・12）▼鈴木善幸（昭55・7・17～昭57・11・26）▼中曾根康弘（昭57・11・27～昭58・12・26）▼第二次中曾根康弘（昭58・12・27～昭61・7・22）▼第三次中曾根康弘（昭61・7・22～昭62・11・6）▼竹下登（昭62・11・6～昭63・6・2）▼宇野宗佑（平元・6・3～平元・8・9）▼海部俊樹（平元・8・10～平2・2・27）▼第二次海部俊樹（平2・2・28～平3・11・5）▼宮沢喜一（平3・11・5～）

戦後内閣総理大臣に就任した人数は、従って現職の宮沢喜一氏まで含めると二十名に達する、戦後四十六年間を通じて二十名の総理大臣中、現職若しくは前、元の経験者のいずれかで、士別市（町時代を含めて）に足を踏み入れた人物といえ、戦後四代目の前総理

日本社会党委員長片山哲氏唯一人に過ぎない。であるとするならば、士別市の歴史に止めて置く価値のある事柄であると思うのである。しかも、そのことが実現するについては、当時日本社会党士別支部の森実易逸支部長一人の功績によるものであることも銘記して置かなければならない。そのためには、若干日本社会党士別支部の草創期に触れる必要がある。

戦後逸早く、今は亡き木下弘司氏（釣具・種苗店主）が、伊藤菊治（染物屋）を訪ねて「日本社会党士別支部の結成をしたいので、協力して欲しい」と要請を受けた。筆者の父、伊藤菊治は友人の鎌倉庄一氏と相談をし、とりあえず目的を支部結成としながら、民主主義研究会を発足して幾度かの会合を重ねた。更に劇場の国勢座で民主主義研究会の演説会を催し、来賓に北教組委員長の横路節雄氏が招かれた。横路氏はその後日教組副委員長を経て衆議院議員へと政界に進出するのであるが、国勢座での演説会終了後横路氏は森実易逸宅に泊って士別支部結成の打ち合わせを行った。

かくして昭和二十年十二月、鎌倉庄一支部長、豊村亮一、森実易逸副支部長、木下弘司書記長、長縄武青年部長等の執行体制のもとに、日本社会党士別支部の旗上げが行われた。『士別市史』第三章政党（四三三



まるみ旅館前で休息中の前総理を囲む

頁)には簡単に記述されているが、支部結成当時の黨員に労働組合員からの入党は一人も居らず、市史には漏れているが歯科医の工藤熊男氏も入党されている。

支部結成後、本格的な組織選挙は、昭和二十二年四月執行の知事を頂点に参院、衆院、道議と文字通り統一選挙で、士別支部の統一選挙事務所を、現在の大通東八丁目角に設けて対応した。道知事は、田中敏文と有馬英二の決戦投票で社党公認の田中知事が実現、参院では木下源吾が任期三年議員に当選、衆院では北海道日日新聞論説委員の和田敏明が当選した。ところが、衆院選挙中に鎌倉支部長の消息が不明になり、事務所の中が大騒ぎとなった。八方手を盡した結果、美深町から自由党公認で衆議院議員候補に出馬している、高橋日出男候補の応援のため、利尻、礼文の離島に渡っていることが判明した。直ちに支部執行委員会が開かれて、鎌倉支部長の除名処分が決定、森実易逸副支部長の昇格が決められた。

高橋日出男と鎌倉支部長は旧知の友人関係に在り、応援を頼まれて無下に断り切れなくなり、離島であれば目立つまい、という仕儀となったわけである。伊藤菊治は、この後いよいよ森実候補の大事な道議選挙を控えて古来から“河中馬を交うるなかれ”といわれて

居り、特殊事情を汲んで除名は思い止まるように提言したが、若い執行委員は耳を貸さなかったのである。

後に自由党士別支部が結成されて、鎌倉庄一氏が初代の支部長に就任するのであるが、いかにも戦後わが国の混乱期を象徴しているような出来事だ。

この統一選挙で、衆議院は社会党一四三議席、自由党一三一議席、民主党一二一議席といった当選結果で社会党が比較第一党を占めるに到った。結果五月二十四日社会党片山哲を首班とする、社・民・国協三党連立の内閣が誕生した。

一方連勝を続けて来た、社党士別支部統一選挙事務所は最後を飾る道議選挙に取り組んだのである。上川管内定数七名に対し一六名が立候補した。森実新支部長は社党公認として管内善戦したが、知名度が今一つ及ばぬところに、当時農民人口が圧倒的であったから隣り上士別村から日本農民党公認で立候補している乾雄次郎候補に、士別町内の得票でも負ける結果となった。

開票当日は、森実候補自宅二階の大広間が解放されて、運動員が詰めかけ、ラジオが告げる開票速報に耳を集中した。終盤に近くなつて得票の伸びが心配されている時、NHK旭川放送局から電話で“森実当確”

が伝えられた。怒号のようにバンザイの声が爆発し、一斉に支持者が森実候補を取り囲むや胴上げがはじまった。座敷が抜け落ちんばかりの熱狂の最中に、再びNHKからの電話で「先程の報道は集計の誤まりで、森実候補は残念ながら次点の次ぎで落選しました。申しわけありません」と訂正された。歓声がぴたりと止み、一瞬の後に啜泣きがあちこちから上つて広がるのであった。その間泰然と座して動じる色も見せなかった森実候補は「落選して胴上げされたのは俺くらいなものだろう」と独り笑うのであった。

わが国初の社会党首班内閣は、予算委員会において予算案が否決され、脆くも昭和二十三年三月十日総辞職し、世に政権の盪廻しといわれた民主党芦田均が首班となつて三党連立の内閣を受け継いだのである。しかも芦田内閣は、僅か七ヵ月で昭電疑獄事件が引き金となつて瓦解してしまうのである。

その間に、この年八月十日横浜港から氷川丸で、片山社会党委員長が北海道遊説のため来道、十二日午前六時函館に入港した。日程は十三日札幌、十四日小樽、十五日岩見沢、旭川、十六日富良野、帯広、十七日釧路といった具合で、二十二日函館から退道される予定が立てられた。元々士別町入りの予定は計画に含まれ

ていなかったのである。森実支部長は猛烈に道連や旭川支部と強談判に及び、強引に士別へ連れて来るための時間を割かせることに成功した。

演説会場は国勢座、休憩所をまるみ旅館に設け、中屋町長、幸田町議会議長から、片山委員長に陳情も出されることになった。

八月十五日午前中の演説会において片山委員長は、九月中旬から開かれる臨時国会で、解散になれば社・民・国協三党連立で次期政権も担当することになるだろうが、これを選挙管理内閣として、再び解散、選挙を行つて、その時は社会党単独政権を樹立したい、と意欲を示された。演説が終ると、聴衆の中から、杖を突いた一人の老農夫が花道から片山委員長に近づき、今朝産みたての鶏卵を是非委員長に食べてもらいたいとて、藁苞に下げて軍馬用地から出て来た、と委員長に手渡す感動的な場面があつて満場が沸いたものであるが、残念なことに筆者はその人の名を記憶していない。

まるみ旅館で僅かな時間の休憩中に、ビールの栓が抜かれて委員長を困んで乾杯をした。クリスチャンの委員長は空のコップを上げただけであつた。町からの陳情も終り、委員長一行が旭川へ出発直前、記念の写

真撮影を行った。随行の中には、和田敏明衆議院議員、髭の源重こと鈴木源重道議會議員等とともに、社会党道連職員で後に女性道議會議員として活躍する渡辺和歌子女史の若き眼鏡の顔も後方から覗いている。

委員長を乗せた自動車の発車に当って、車窓間近でキリスト教会の青年数人が送別の讃美歌、また会う日までを合唱して見送ったのであるが、木下弘司書記長は旭川まで随行し、戻ってから委員長が全国を遊説して歩いて讃美歌で送られたのははじめてのこと、とにかく感銘して居られた旨の報告を聞かされた。

その後、市となった今日に及んでなお、片山委員長以後、総理大臣若しくは総理大臣経験の政治家が、本市の土を踏まれたことはない。

※この記事を書くに当って、正確な月日確かめる上から、故人となられた森実易逸氏に日記などの記録を調べて下さるよう令息丘氏に依頼したが、明らかとならず、本市の佐々木隆博道議會議員を煩わして、北海道庁総務部が北海道新聞のマイクロフィルムから関連記事をコピーして提供されたものに依拠したもので、ご協力に深く感謝するものである。

(伊藤 善彦)

士別生産農業協同組合

畜産農協の設立と解散

自作農創設特別措置法と農地調整法（後日農地法に改正された）が公布されたのが、昭和二十一年十月二十一日であった。

長い間、小作農として苦しんだ状態から解放され、さらに戦時中は、日常生活のすみずみまで統制の枠に縛られた国家総動員法が、昭和二十年十二月二十日で廃止され、国民はひとしく重圧から解放されてほつとしたのであった。農村は経済的に苦しかったが、ようやく軍務から解放された人々も故郷へ帰り、村は活き活きとした空気に満ちていた。

士別町には戦時中、農業会と呼ぶ団体があり、戦時体制の協力機関としての任務を果たしてきたが、昭和二十二年十一月九日公布の、農業協同組合法の施行に伴って解散し慌ただしい雰囲気になってきた。それは新しい農協の設立に当たって、中士別が士別地区から分離独立を図ったからだ。

中士別は稲作中心の水田地帯で、生産力の低い畑作地帯の多い士別地区と、この際に分離したいと言うのが、中士別地区農家の本音だった。そのために、農民組織として戦後いち早く誕生した農民同盟の内部で激しい論議が起こったのであった。「折角一緒に今日までやって来て、いまさら分離弱体化することはどうか」という意見もあった。

当時、強力な指導者の北村順次郎氏（北海道小作農農地委員）等も分離賛成の一人であった。これは、協同組合法が最も民主的な法律として、組合員が十五名以上参加すれば設立可能であったから、なおさら分離独立派の意気が挙がったのだろう。しかし、中士別農協設立の陰には、農民同盟が一本の柱になり、後日に共済組合も一本化することで、両者の妥協が成ったのであろう。

こうした中で畜産農協設立の機運が次第に高まってきた。当時は馬が農業の主力であり、一戸の農家で最低一頭の農耕馬が必要であり、反別によつては複数の農耕馬を所有していた。一方酪農を指向する農家が次第に増える傾向にあり、豚、鶏、綿羊の飼育も盛んであった。士別農協専務の奈良源一郎氏（武徳町）が中心になり昭和二十三年五月十日、正式に士別畜産農業

協同組合が認可され発足した。

※定款第一条 この組合は、畜産農民が協同して畜産生産力の増進と、組合員の経済的、社会的地位の向上を図り、ひいては国民経済に寄与することを目的とする。

※第二条 この組合は組合員のため左の事業を行う。など十八条までに及び、第九条は、家畜に関する衛生、護蹄及び防疫に関する施設となっており、当時は桜丘の馬検場や種畜の管理装蹄所（東一の三）を中心に事務を行っていた。

当時の農家飼育家畜数は、馬一、三九五頭、牛一六三頭、豚六五頭、綿羊一、一八五頭、鶏三、一八七羽となっていた。

畜産農協の所在地は士別市東一条三丁目、家屋木造、葺葺屋根平屋建て三六坪、宅地二三坪、以上、上川馬匹組合士別支部所有の施設を利用して、家畜診療と装蹄などの事業を行っていた。

昭和二十四年度事業実施状況は次の通りであった。

1 家畜去勢

馬二六頭、豚五十頭、綿羊六一頭

2 防疫検診

馬延べ三、五〇七頭（流行性脳炎）二、四五六頭（

馬伝染性貧血症）牛一一頭（結核検診）犬六八頭

（狂犬病）鶏二一九羽（ヒナ白痢）道外移出家畜検

診五四〇頭

3 優良種馬購入

イ雄綿羊一頭、ロ雄種豚一頭、ハ雌綿羊二一頭、

ニ協同種付け所の施設、

4 流通事業

イ家畜市場の開催 馬二回、綿羊一回、

ロ牛馬購入斡旋 馬一六頭、牛一八頭

家畜診療所実績延べ

牛八五頭、馬二、八九五頭、綿羊一七〇頭、豚五十頭、

6 人工受精実績

牛八六頭、綿羊二二頭、

7 指導事業

家畜衛生講習会実施二回、酪農懇談会の実施二回

家畜共進会の開催、馬匹競技会の開催、

* 以上は士別畜産農業協同組合解散事務引継ぎ書類綴りから転載（解散総会昭和二十五年四月三十日）

士別畜産農業協同組合は、士別生産農業協同組合の設立に伴い、これらの業務を引き継ぎ発展的解散をしたものだが、当時の主な役職員は次の通りであった。

役員

奈良源一郎、上出喜作、木島金之助、田島徳弥、藤原

喜右エ門、佐藤四郎、森岡孝雄、沼田金左エ門、曾我

部数枝、佐々木三良、小山為藏、荒家吉郎、杉下政義、

柳又四郎、安達運藏、折目悟、清野弼、藤田七二郎、

職員（嘱託）

田蒨子政太郎、阿部忠治、太田茂治、斉藤舞子、

技師

西武雄、安藤義雄、岡武雄、技手 川口一盛、

解散時財産目録

一、土地一六四坪（家畜診療所）二、建物診療所三七、

五坪、住宅三七坪、三、家畜人工受精所六〇、五坪、

四、簡易馬繋留場四五坪、五、採血所一、五坪

備品 員数ストーブ外八二点、疑似台外九二点

主な財産の処分方法

一、人工受精所 生産農協に譲渡

二、家畜診療所 共済組合に譲渡

畜産農協は、戦後新たな時代の要請に應えて、町内の有畜農家振興策を、専門的な立場から実行を試みたものであり、畜産士別として上川管内でも特異な先進的組織として、高く評価されるべきものであった。

生産農業協同組合の設立及び、昭和二十二年十二月



戦後初のブルドーザーによる起耕 日甜園場にて

農業振興保証法の公布に伴って、士別農業共済組合の設立で、家畜人工受精事業は生産農協に、家畜診療事業は共済組合に引継ぐことで任務を果たした。

その後の状況と農業会館の建設

家畜人工受精事業が、生産農協に移されたのは従来診療事業と異なり、戦後急速に発展しつつあった新しい試みで、研究開発すべき余地を多く抱え、設立間もない共済組合としては、問題が大き過ぎたからだ。これら一連の構想は、当時士別町役場の産業課長に就任した、田苅子政太郎氏の係わるころが大きい。

田苅子氏が産業政策を通じ、農業会から農協に衣替えした団体が、未だ経営基盤が確立しないままに、食料の強制出荷の対応や、組合員の経営資金の調達（後の農業手形）、農畜産物の販売、肥料生産資材等の購買の確保に追われ、戦時中略奪農業を余儀なくされ、地力が極度に低下した農地の生産力回復や、土地改良事業の推進、品種の改良など本来の使命である生産指導事業が、充分行い難い事情を憂慮して畜産農協の設立、さらに踏込んで生産事業推進団体として、生産農協の設立になったものである。

従って畜産農協の嘱託参事、生産農協の専務（役場

退職後）さらに二代目組合長として、その経営に腐心したことが、田荊子氏の将来と生き方を左右し、昭和二十六年戦後二回目の選挙で町議會議員に初当選したのである。

なおそれより先に、農政推進の拠点として農業会館の建設がある。会館は町の財政援助と関係農業者や役職員の寄付で建設した。現在新築された農業会館までつねに農政推進の役割を果たしてきた。戦後士別の農政を語る上で、欠くことの出来ない存在であった。また多くの人材が育ち活躍した。

士別生産農協の設立

生産指導事業を行うための単独組織として設立されたもので、すでに奈良源一郎氏組合長の畜産農協が具体的活動に入っていた。田荊子氏は町の産業課長として畜産担当の部下、阿部忠治氏と共に畜産農協の嘱託職員で、運営強化に積極的に支援していたが、昭和二十六年に退職と同時に生産農協の専務に就任した。

当時、道が強力に推進しつつあった土地改良事業を、士別町から嘱託事業として受け、計画から直接事業実施の組織として、必須事業として重視し研究開発に専念することになった。

農協は、生産指導事業が農協運営上の基本事業であったが、諸般の事情からこの事業を生産農協が行うことを積極的に賛成支持した。本来生産指導事業は法の趣旨でも、組合員の賦課金で運営されるものであるから特別異議がなかった。

昭和二十五年、士別小学校において、発起人代表北村順次郎氏の招集で設立総会が開催され、士別生産農業協同組合が議決、創立した。（当時の記録）

出席総数六七一一名（本人五二四名、代理一六七名）

議長 北村順次郎氏

第一号議案 総会議事細則について

第二号議案 定款の承認について

第三号議案 事業計画の承認について

第四号議案 理事及び監事の選挙について

第五号議案 経費の賦課及び徴収について

事業計画中収入課目賦課金九万二千二百八十一円

四月、十月分割徴収

第六号議案 借入金の最高限度決定について

第七号議案 利用料及び手数料について

一、心土耕 反当 七〇〇円

二、客土 反当 三〇〇円

三、酸性矯正 反当 一五〇円



拠点となった農業會館



- 四、農道改良 米当 一〇円
 五、耕地整理 反当 一〇〇円
 六、暗渠排水 反当 五〇円
 七、牛受精料 一頭 一、五〇〇円
 八、緬羊受精料 一頭 五〇〇円
 第八号議案 農協連合会加入について
 第九号議案 役員報酬について
 本年の役員報酬を金二十万円の範囲内とし、内容は現理事長に一任されたい
 第十号議案 創立費の負担について
 創立経費を金五万円の範囲内として本年度分を償却することとしたい。
 第十一号議案 畜産農業協同組合の施設の取得について
 士別畜産農協所有の人工受精所建物一切を金十二万で取得したい
 右總會の顛末事実と相違ないことを証明する
 昭和二十五年四月二十五日

議長 北村順次郎 印
 議事録署名委員

杉本 文蔵 印
 山城作次郎 印

士別生産農業協同組合選挙録膳本

一、投票日時 理事、監事の場合午後二時、組合長の

場合午後五時

一、投票場 士別小学校に於いて

選挙に係した職員

1 選挙管理者 畑中定藏

2 選挙立会人 中西秀利 平野厚美 高瀬定吉

及川長蔵

一、選挙すべき役員の定数

1 理事 二十一名 2 監事 三名 3 組合長 一名

一、選挙権を有する者の数 一、〇五七名

一、理事投票総数 五一二票

イ有効投票数 四七九票 ロ無効投票数 二九票

一、監事投票数 四七九票

イ有効投票数 四七九票

一、組合長投票総数イ有効投票数 三五〇票

ロ無効投票数 一票

一、理事、監事、組合長当選者、及び次点得票数氏名

1 理事 資格正組合員

笠井庄太郎 一五九 上出 喜作 一五六

奈良源一郎 一五五 溝渕 栄 一五四

木島金之助 一五五

北村順次郎 一三四

高石 重雄 一二三

曾我部数枝 一一六

林 伊之助 一一一

前川惣次郎 一一一

山城作次郎 九五

藤原喜右エ門 七〇

森岡 孝雄 一一八

2 監事 資格組合員

佐々木三好 一二九

井出 輝雄 一一九

3 組合長 資格正組合員

笠井庄太郎 二六八

三浦 国蔵 一四四

後藤 茂 一二三

尾形 好光 一一九

渡辺 博 一一三

梅木 彦助 一一一

清野 清 一〇五

佐藤 保 九〇

奥山孝太郎 次点

北村順次郎次点三三

斉藤 富次 一一一

小山 為蔵次点九八



蹄鉄の作業風景

右の通り選挙の顛末につき記録する

以上の通り役員の選挙及び議案審議が終了して、昭和二十五年五月九日に、上川支庁若林次郎より設立認可書交付、同年五月十五日登記完了となった。

〔職員一覽表〕

主に畜産では、東山競馬場跡の馬検場を家畜人工受精所に活用し、戦後新たに技術開発の進んだ精液の採取をおこない、乳牛の人工受精と豚、綿羊にも実施した。

家畜の人工受精

それ以前は、発情期の乳牛を早期に見つけて、牡牛を係留している金井牧場まで引き種付けすることは、酪農家には困難なことであった。そのため受胎適期を逃がして受胎を不可能にし、経済的にも損失が多かった。人工受精の日本的大家であった森貫一氏を採用したことで一層活気がつき、士別地方酪農に及ぼした功績は大きい。

当初は冷凍設備や器具がない時代で、精液の保存に腐心して魔法瓶に入れ、堀井戸に吊るして冷却するなどの工夫がなされた。当時は人工受精の歩留りが酪農家の間で問題になり、やはり従来通りの直接交尾がよ

いと苦情が多く、町議会の産業常任委員会で、先進地の上富良野町に視察学習を実施したものだ。

当時の上富良野町は、畜産の総合的な先進地で、士別に勤務していた西技師が、赴任して指導に当たっていた。人工受精は技術者の技能と、飼育農家の個体管理の両面から努力しなければ、良い成績を上げる事が不可能で、当時、議員としての私も、酪農振興の難しさを痛感した。

土地改良事業と町予算

生産農協の最大の課題は土地改良であった。初期の役員機構にも見られる通り、全町の農家を代表する組織として発足し期待が大きかった。

しかし、農業政策予算の不足や、トラクターなどの大型機械の導入が困難で、米軍の使用済みで廃品同様の戦車を改造した物しか入手出来ず、作業効率が悪く故障続出の状態であった。

とくに暗渠排水畑作農家の希望が多く、経済的に比較的導入可能な水田地帯は笛吹けど踊らず、畑作農家は制度資金導入が困難であり、思うように成果が挙げられず、組合運営資金調達にも役員の苦勞するところとなった。

従つて、町の毎年度予算編制の内容が、直接団体経営に重大な関係を持つことになり、しかし町財政は戦後の悪性インフレと、教育制度六三制移行に伴う小中学校の校舎増改築で、町予算の中心は教育、土木に多く盛られ、産業経済費の中の土地改良委託費は、常に苦しい内容にならざるを得なかった。

昭和二十八年当初予算の中で、団体関係農業予算の総額が百万円を切ることになり、生産農協首脳が窮余の策として考えたのが、予算の編み替え動議であった。当時の士別町議会の議員は三十名、その内農村出身議員が十五名で、議長は市街地出身の西村議員であるから、農村議員が全員賛成すれば事は成るのであったが、しかし、理事者の提出した議案を、審議に入る前に編み替え要求すること自体、異常なことであり中士別地区の農村議員四名の賛同を得ることが困難な事情にあった。特に宮武徳平議員は、年長でもあり頑固者で鳴る前副議長であった。

十五名の賛成を取付けるにはどうしても宮武議員の了解が必要であつた。農協首脳は一番若年議員の筆者に、その説得を引受けてくれと言うのだ。宮武議員には個人的に可愛がられていたが、議会招集当日、要請書を持つて宮武議員に会い事情を説明した。内容は、前

年の予算額に復元することであつたが、開口一番「誰に頼まれた。田茹子か、それなら不承知だ」筆者はすかさず「頼まれたのではない。農業予算が前年度より少ないことは、農村議員として納得できない。どうしても増額修正が必要で、中士別出身議員の協力がなければ通らない。指導者である貴殿の署名が最初に必要であります」と頭を下げると「よし判った。君が言うのであれば同意しよう」かくして、予算編み替え要求書を、十五名の署名で西村議長に提出した。おそらく、町政施行以来の出来事であつたに違いない。一日議会が空転してその間、理事者と折衝した結果、六月補正で考慮する事で了承して、要請書を取り下げた。

このころから生産農協の問題で、士別、中士別両農協間のあつれきが具体的になつてきた。土地改良事業は必要不可欠な問題ではあるが、事業主体が農業団体の方がよいのか、業者請負がよいのか、制度資金導入希望者は一般農協、改良事業推進が生産農協、そこに個別具体的な問題が生じる。

心土耕にしても、暗渠排水にしても、とくに基盤整備事業はなおさら一二年では効果が上がらないなど、町予算との問題も生じ、運営上の人件費、機械修理費などの増騰にいいよ困難が加わつてきた。

生産農協解散の時期迫る

昭和二十八年度は一応予算問題は解決したが、将来生産事業は農協に一元すべき時期であるという考えが、生産農協の役員、農民同盟の幹部の間で真剣に論議され、溝渕栄委員長を中心に農協との話し合いが進められていた。しかし、農協は生産事業そのものは、本来農協の行うべきものであるが、生産農協をそのまま引き継ぐことに難色を示した。士別農協三浦満吉組合長から突然に、士別町が引き継ぐことを陳情され、組織は内部的に紛糾した。連日の激論の末にこの際、生産農協は解散することにする。機械類は士別町が引取り、使用可能なものは農事組合などに貸与する。もちろん中古機械はスクラップ同然であった。職員は必要な人員のみ町職員に採用した。もとより町議の中には強行な反対もあった。しかし、問題を放置することで将来更に禍根を残すことになるとの意見が大勢を占め、士別町は前記の通り処理することにし、歴史的使命を果たして解散した。

終りに

運営上困難を増した背景に、第一には、生産農協を

拠点とした革新的農民意識の高揚は、総合農協運営上に支障がある。第二には、農家の経済の悪化はそのまま農協経営にも反映、全道的に再建整備農協が続出し、生産農協の事業を強行拡張することが、総合農協の対農家対策が困難になる。第三には、対人関係が複雑に交差した結果とも言えるが、戦争中に略奪農業を強いられた農家の地力は、極度に低下して食料増産と農家経済の向上のために、土地改良が不可欠のものとし、さらに、有畜農家経営安定のために対応する諸設備と指導に着目して実行した士別畜産農協を引き継ぎ、土地改良まで包含して実行した功績は高く評価すべきだろう。また一方で、困難な組織の収束に積極的に協力した理事者も褒められてしかるべきだろう。

残念ながら、全道的に予算の裏付けを以て取上げられ、実施されるようになったのは、昭和三十一年、北海道を襲った大凶作によって、北海道農業会議が知事から諮問された『北海道農業の恒久対策』の答申に、大きく取り上げられるまで待たなければならなかった。酪農畜産は各々の農協で大きな荷物として敬遠され、日の目を見たのは昭和四十年代になって、国の法制が整備されるまで、苦しい経営が続き、夜明けとなるのにはまだ相当の期間を要していた。

(品沢 竹司)

大相撲巡業顛末記

戦後の人心が、ようやく落ちつき始めた昭和二十七年、戦争で奪い取られて忘れていたもの、忘れかけたものを取り戻そうと、映画や演劇などのささやかな催し物に、大勢の人々が押しかけていた。

そんなある日、路上で「おい、ちよつと来てくれ」越智さんの玄関で、西森正一さんに呼び止められた。西森さんは、若いころから草相撲でならし、この方面で名の知れた方で、私も子供のころからよく相撲見に出掛けたが、そのころは、お祭りや地神祭などの余興に草相撲が組み込まれていた。

西森さんの相撲は、派手で取り口が面白く「マサイツアン」の愛称で子供にも人気があった。その後、ぶつりと姿を消し、滝の上の親戚の所にいるらしいと風の便りがあった。後の話だが、そこで芝居の一座を組み、相撲と巡業を兼ねて道内を歩き、しこ名を若干鳥と称し、話術も上手で彼の側ではいつも笑いが絶えなかった。

私は近づきながら「なにさあ、何か用かい」と聞いた。玄関に突つ立っていた西森さんは奥へ目をやり、「まあいい、ちよつと上がれ」そこに越智格次さんがにこにこして座っていた。「お前も聞いているだろうが」それは、三日後に迫った大相撲の会計経理をやつてくれと言うことだった。

その当時の地方巡業は、部屋毎に行われていた。温根別に来たのは、大横綱、双葉山の時津風部屋一行で前人氣も上々だった。西森さんが中心で越智、谷口米平、古川さんらが世話役で受入れ準備に当たっていた。門外漢の私は好奇の目で土俵づくりを眺めていた。

指揮を取っていたのは西森さんで先発の世話人と設計内容を詳しく打合せていたが、いざ造ってみると細かい面で気苦労が絶えなかった様子だ。一番苦労したのは俵造りで、作り方、並べかた、作った俵の数が土俵の円型とびつたり合わなければならず、さすが素人相撲の名手も神経を使っていた。土俵造りは、小学校の校庭に土を運び、一行が到着する十日前から行っていたが、雨に降られて難渋していた。

私は、意外なことを頼まれ困惑してしまった。それまでどんな経過で経費の捻出を考え、収支計画はどうなっているのかさえ不明瞭で、どこから手をつけてよ



当時の巡業に来たお相撲さん（伊藤勝治氏撮影）

いやら、無碍に断るのも失礼だし、ともかく親父に相談してみるとその場を逃れた。ところが親父は、いとも簡単に「それぐらいの手伝いはしてやれ」と言う。

仕方なく経過を聞いて受払い帳をつくり、金の流れを整理したが、すでに赤字が目に見えているのだ。契約金は当時の金で十万円であった。何処で誰が持ち込んだ話か知る由もないが、「巡業の日程に一日穴があいて安くするから」と言う話を、西森さんが相撲仲間から持ち込まれたのだろう。その赤字は後日清算するから、次の興行準備のために使う二万円を、一時立替えて欲しいという先発世話人の依頼で渡したが、それは西森さんが立替えた。

興行経費は、入場料を無料にすることで各部落にお願いし、割当寄附金の形で貰い、その金は越智、古川さんの所に部落会の寄附名簿を添えて届けられることになっていたが、ほとんど集まらず、私は督促を兼ねて谷口、古川宅へ集金に行った。

前日に、時津風部屋三十余名の一行が温根別入りをした。宿泊は家族数が少なく、部屋数の多い家に依頼してあった。時津風は谷口さん、鏡里は中山さん、若葉山は杉永さん、豊山は阿部さん、不動岩は真鍋さん、潮錦は西森さん、吉田山は亀岡さんと役場の和室も借

りて分宿した。

勸進元の西森さんが潮錦を泊めたのは、戦地で部隊対抗の相撲大会に、部隊随一豪快な取り口と面白さに惚れ込んだ部隊長が「西森がいるから、優勝は我が部隊のものだと決め込んで臨んだが、いざ取り口も進み大関同志の対決になって出てきたのが潮錦だった。まさかプロの相撲取りが出場するとは夢想だにせず、一か八かでケタグリを掛けたが、フーと言っただけだった。その後親交をかわし、温根別に來たので旧懐の念止み難く、一夜団欒の杯を交わしたのだらう。残念だったのは、超大型力士の大内山が怪我で参加しなかつた。

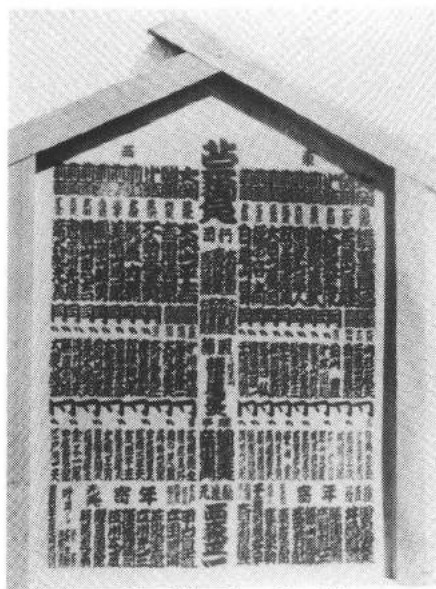


表 付 番 撲 相

たことだ。

一行の來村と同時に、世話人が契約金を受取に來た。十萬円の金は集まっていなかったが、約束だから工面して渡したが、前渡し金の話を持ち出すと「あれは次の巡業支度に一時流用したもので、この金は一応部屋に収めて、明日相撲が終わって清算するから、私を信頼して欲しい」と言うので、越智、谷口さんの立会いで渡した。その時はいまだ未収の部落があつたので、心配をしなかったが、ふと不吉なものが腦裏をよぎった。

いよいよ当日がやって來た。昨日までの雨も上がり、青空も見えはじめ上々の興行日和だった。出店も二、三軒立って、賑やかに雰囲気盛り上げた。小学校の教室を支度部屋にし、職員室は役員の溜まり場になった。

先ず、稽古相撲から披露され、若い衆が禪一つで小走りに土俵に上がる。2人、3人と先を争うようにぶつかり合う。太い者、細い者入り混じりで叱咤と怒号が交差する。体がぶつかり合うごとに重い地響きがある。やがて上位陣が顔を出すようになると、若い力士が我先に先輩力士の胸を借りる。小柄な若葉山がアンコ型の力士を土俵に這わせる。長身の不動岩が若い

力士を股の下にいれて笑わせる。鏡里が幕内力士相手に汗を流し、若葉山とぶつかり稽古をする。その炸裂した気合は、迫力満点で観衆を魅了した。

稽古も終わり本番になったとき、大蛇潟、吉田山、潮錦、緋絨などの幕内力士が幼児を抱いて現れた。どれも裸で、泣きだす子もいてお相撲さんを手こずらせ、土俵を一回りして引き上げた。子供を力士が抱いて土俵入りすると丈夫に育つ、と親たちが頼んだ様子だった。取組は番付けの下から順次登って、鏡里で千秋楽となった。

その間、名物のショッキリの披露、名横綱双葉山がまわしをつけて、前から後ろから飛びかかる小学生を相手に相撲を取った。子供の引っかけ傷に唾をつけ「こりやあ痛い」と観衆を笑わせ、相撲甚句で締めくくった。サービスも良く、観衆は充分大相撲を堪能した一日であった。

力士の帰り支度は迅速で、あつという間に次の巡業地へ移動して行った。私は相撲は見たし、集金に終われる多忙を極めているところに、祝儀職員と名乗る男が「入場祝いのご事で聞きたいので、会計責任者は何処にいるか」と言ってきた。一瞬戸惑ったが、赤字の上塗りはいたくない、咄嗟にとぼけて、「多分支度

部屋にでもいるのでは」と小学校を指して「会計のことは分からないので、その人にきいてごらん」と逃げ口上を並べ、小学校に向かう後ろ姿を見届けて私も雲隠れした。

一方、前渡し金を渡した一行の世話人も、ついに姿を見せなかった。当時としては大変な痛手だった。一生懸命に協力してくれた方々に礼金も出せず、割り勘の焼酎で世話人の解散をした。当時の温根別の人口は、四、五〇〇人、小学児童数が三七一名（現在三八名）だった。

（三宅 裕良）



ドブロク・三題

敗戦による太平洋戦争終結後、戦勝国であるアメリカの占領下に在りながら、非合理的な権力の抑圧から解放された国民のよろこびは、当時ラジオで全国に振り撒かれた、並木路子の明るい歌謡「リングの唄」が代表しているように思う。

その頃を振り返ると、本土決戦が叫ばれながら、実態は国民すべて飢餓との闘いであった。それが敗戦というショックはあつても、平和が来たということがどれほど大きな歓喜をもたらしたのか。そのことをもう一つの「ドブロク」でみるができると思う。

戦後間もなく、秋田の農村青年の詩をあつめたアンソロジー『農民詩集』の中に次の詩がある。

ドブロク

奥山 潤

大人ミルクとも呼び

加助ワツカともいうし

スミマセンなどともいう

このほか二、三十のあだ名が
民俗学者武藤鉄城のボロ帳面にずらり書き連らねて
ある

この白く物悲げに錆びた汁
ドブ・ドブロク

近頃青いガラスビンに詰められた
水っぱい税金だらけのやつなど及びもない
実がこもったトロリとしたこいつ
教育長の炉端でも

学校の小使の押入れにでも

没落地主の空っぽ蔵にも

小石混りの三角畑の

桐の根元の肥溜のかたわらにも
どこにだってこれはある

ないところはない

……（六行省略）……

これさえ飲んでれば心配はない
死ぬとき苦しまず高血圧でコロリといける
保有米をなんぼ使って

飯米不足するほど造っても

これさえ飲んでれば腹へらない
娘売ってこれ飲めば悲しみ忘れ

田が青枯れてもこれあれば気にかからない
税務署が来たって駐在が来たって
こいつを出してうんと飲ませる

詩人も時にドブロクを飲む

大きいイヌなど飼っている

どこかのくされかけた大薬屋根の

松の間の炉端で

目やにをためたホラ吹き百姓が

オイ カカア シボレと命令すれば

これはちよると音たてて

きたない桶の底によどみ

やがて立派な黒うるしの膳にのつて

おれの前に鎮座する

……（十二行省略）……

苦がくてすっぱくてかびくさい

酔えば悲しみの腹の底にたまる

こいつかみしめて

おれは飲む

加助ワツカ

大人ミルク

スミマセン

当時、食糧不足は極限に達していた筈だが、敗戦後の日本列島はドブロクの匂いで満たされていたのである。

第一話

敗戦時、私の父（伊藤菊治）は、南士別の渥美さんから七反程の畑地を小作していた。育ちざかりの男児三人を飢から守ることと、クリスチャンであった父が食糧の闇買いに精神的抵抗があったと思われる。小作関係は、農地解放が実施される直前に地主に返還して解消した。

地主の近所に、農業を営む父の友人がいた。この人は通称「飲んべえ○○」と愛称で呼ばれる、有名な酒好きであった。酒では人後に落ちない父であったものだから、自然親しくなったものと思う。或る日、私と父が畑で昼の弁当にしようとしていると、○○さんが寄ってきて、家に招じられ、味噌汁や茄子の煮物などを供され、父にはドブロクが振舞われた。その時の話である。

…先頃税務署の手入れがあつて、つぎ次ぎと隣家へ

伝令が報らせに走る。それきた、ということでも○○さんは、大きなカメを抱えて豚小屋の片隅の積み上げてある寝藁の中に覆い隠した。手入れ旋風もおさまり、大事なカメを元に戻そうと小屋に入ると、囲いから飛び出した豚が、藁を掻き分けてカメを倒し、中身をすっかり飲んでしまったとみえる。小屋中ドロクの匂いが充満し、くだんの豚は全身真っ赤で横になり、大軒で寝ている始末……。しかも、ふらちなこの豚は、丸二日に及んで眠りこけていた、という次第なのだ。

第二話

士別で、戦後初の大相撲巡業が催された時のことである。わが家としては珍しく、父が見物に行くことになった。母が弁当の用意をしたが、父にとつてこれ無くして何んの大相撲ぞや、というものがある。言わずと知れた酒である。といっても、この時代おいそれと簡単に酒が手に入るものではない。そこでドロクの出番という仕儀と相成る。

父はこの日のために吟味して醸したドロクを、入念にザルで漉した。乳白色の液体を、そのまま衆人環視の中で飲む勇氣に欠けていたとみえて、一見ブドウ酒と見せかけることを考えた。染物屋が本業の父であ

るから、液体を染めることなどわけがない。擬装ブドウ酒を瓶に詰めて、父は勇躍相撲見物に出かけた。帰宅してからのは話は、父らしくない威勢の悪いものだった。

：ぎつしり詰めかけた見物客の熱気に、好天候の気温が重なり、瓶の中のドロクが浮かれはじめた。そもそも、瓶におさめられたドロクは、加熱して発酵を止めるべきであった。生きている酵母菌は、適温におだてられて活発に発酵活動を続け、やがて限界点に達した。

ブシユツと怪音を発するや、鯨の潮吹きさながら、紫紅色の液体を噴出した。慌てた父は、瓶の口を手で蓋しようとしたが、その時遅くかの時早く、悪いことに隣席の麗装した婦人の着物を直撃してしまった。平あやまりにあやまった父は、汚したお召物はシミ抜きが本職だから、是非持参下さるようにな、とお願ひしてきた……。それからの相撲番組など見て居れるものではないから、倉皇として引き揚げてきた。というのであった。しかし被害を受けた麗装の婦人は、何時までたっても遂にわが家を訪れることはなかった。

第三話

敗戦後の士別に、今は亡き松永昇、木下弘司（斐水）の両氏に、多寄の安達兼雄（確）氏の三人が中心になって『蒼土会美術家協会』が結成された。

昭和二十一年、第一回の会員展が開催され、私も参加した。私に油絵をすすめ、絵の具をはじめ用具一式を分けてくれたのが安達氏である。

安達兼雄氏は、東京で創元会に属し、画業に専念していたが、戦争が激化して多寄の実家に帰っていた。

実家は多寄駅前国道沿いの角で、金物商と鍛冶屋を営んでいた。彼は長男であり、元来彼が絵かきとなることに父親は賛成していなかった。家に戻った彼を鍛冶場に連れ出し、向う槌を打たせた。絵筆しか持たない彼に、鍛冶屋のハンマーが無理と分ると、畑の耕作を強いるのだった。複雑な家庭事情で落ち込んでいる彼を、見かねた木下弘司氏が、自宅の向い側の清光勝雄氏宅二階に間借りさせた。後に新制士別中学校美術教諭に推挙するまで、ここをアトリエとして絵を描きながら、彼のアイデアによる手造り木製玩具の制作を続けた。

その頃私は、彼のもとへ絵を習いに通った。彼が家

族との問題で悩みを述懐されると、年少の私としては慰める術がなかった。或る日、父が何時になく最上の出来栄えと自慢しているドブロクを、隙をみてこっそり飯盒に汲み取った。私は酒を口にしないが、せめて彼に飲んで憂さ晴らしをしてもらいたいと思ったからである。

今思っても、黄金色のトロリとした上澄みを汲み上げて、同量の水を割り込んだ。その結果、父はしきりに「なぜか、気が抜けた」と首を傾げるのだった。父は八年前に天国に召されたが、遂に秘蔵のドブロクの気が抜けた原因を識らずに終わった。（伊藤 善彦）



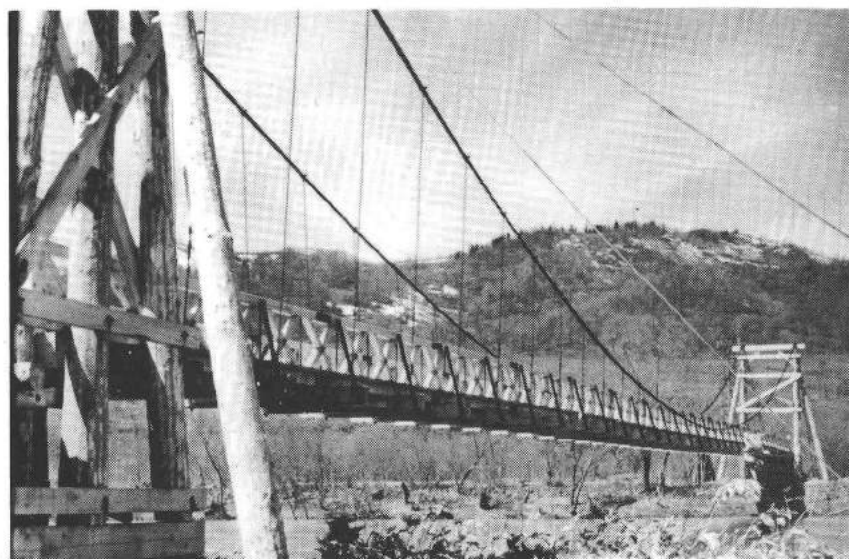
天塩川の吊り橋事故

池田内閣が成立して、所得倍増政策がはじまった昭和三十五年の事である。世はまさに建築ブームと電気製品で活気に満ちた時代でもあった。

木材景気はこの多奇にも及び、炭鉱汽船株式会社が日向の奥地で造材山を始めた。農家の男達が雇われ冬山造材に稼ぎに出掛けたものである。

この年の冬山造材も終わろうとしていた三月十一日金曜日のことだ。宮腰武夫さんが、朝まだ暗いうちに馬をひいて丸太運搬に出掛けたが、その日にかぎって武夫さんは「今日は兄貴（山本正清さん）が怪我をした日だな、兄貴が死んだ山だからな」と呟くようにして出掛けて行った。妻の愛子さんも「今日で仕事が終わるんだから気をつけてね。私も歯を抜ける夢をみたんだからくれぐれも気をつけて」と繰り返し言いながら祈る気持ちで見送ったと言う。

午後二時ころであつたらうか、有線放送で「三十五線の川原さんの家に、着替えを持って来るように」連



日向の吊り橋 昭和30年代

絡があつた。愛子さんが駆けつけてみると、武夫さんが寒さでふるえていたという。

ことの顛末は、十数頭の馬が丸太貯木場から空バチを引いて山から下つて来た。ちょうど武夫さんが吊り橋の途中にさしかかったとき、吊り金が外れて荷物の上に乗っていた武夫さんが馬もろとも川の中に落ちたのだ。雪融けが始まって水かさが増えはじめ一、五メートルほどの水深であつた。吊り橋は下を覗くと目まいするほど高かつたが、幸い下流の方の吊り金が切れたので意外にすんなり落下した様子だつた。

武夫さんが水から顔を出して、「おれの上に馬が下りてくるころだ」と、ひよいと前を見ると、馬が舵棒にはさまれ顔と前足を出してもがいているので、とつさに舵棒の縄を解いて馬の口を取つて岸まで連れて来たのだ。岸にいた人々も手の施しようがなくあれよあれよと見ているうちの出来事だつた。

翌日十二日は一夜の暖気で雪融け水が増水し、奇跡に人馬ともに無事であつたのは「今は亡き兄貴の守護によるものだ」と、当時の様子を武夫さんが語っていた。

(宮腰武夫さんの日記)

野に紫の亜麻の花美しく

士別の農業史に、亜麻の話は余り出てこないが、明治四十年に亜麻会社が士別に設立され、昭和二十五年ころまで続いた。

亜麻はどんな土地にも適し、早春に畑を耕してばら蒔きにした。亜麻は色物と呼ばれ、雨に当たつて黒くなると格段の安値になつた。

収穫期は、花が咲き終わつて茎が一メートル以上に伸び、茎も種も黄色味をおびると、鎌で刈るのではなく、手で抜き取つて畑に広げて乾かし、長雨の恐れがある時は、二十束位を穂先を上にして立てかけ、上に覆いた。八分方乾くと台木を敷いて横積みにして覆いをかけ、充分に乾いてから一束づつ手に持つて台に叩きつけて種を茎から落とした。

種は良質の食用油になり、茎も値の良いころは長短をより分け出荷した。等級も一〜三等、等外とあつて中々厳しいものだ。

(尾形 七郎)

選挙余話

(一) テフテフ

一九五一（昭和二十六）年四月二十三日執行された、士別町長、同町議選挙は、敗戦後の地方制度改革による第二回目の統一地方選挙である。この選挙の開票日（投票の翌日）私は父（伊藤菊治）が町議候補として立候補して居り、開票立会人として旧公会堂の開票所で開票に立会った。

町長選挙は、戦後初の民選町長となった現職中屋金次郎氏と、敗戦時、町助役のためG項戦争犯罪人として四年間の公職追放から解かれた、佐々木良五郎氏の一騎討ちとなった。若い時代から町役場の同僚で、かつて竹馬の友としてきた両氏が、町を二分しての激闘を演じた、その審判の下る日である。

佐々木派の立会人は、同県人の鎌倉庄一氏であった。鎌倉氏は、四年前初の民選町長選挙に、やはり同県人で戦中、士別警察署長を務めた遠藤武雄氏を担ぎ、中屋金次郎氏と逐鹿を争い、中屋氏五、一三五票、遠藤

氏一、六八五票の大差で惨敗を喫している。私と並んで立会人席に着いた鎌倉氏は『俺がついた選挙は負けばかりいるから、今度も駄目でないかな』と肩を落して、ぼつりというのであった。鎌倉氏は、若い頃柔道をやり、その頃は弓道で鍛えている堂々たる体軀に豪快な風格の人であった。だが現職の中屋氏を相手の激戦を振り返って、何時になく弱気になっていた。

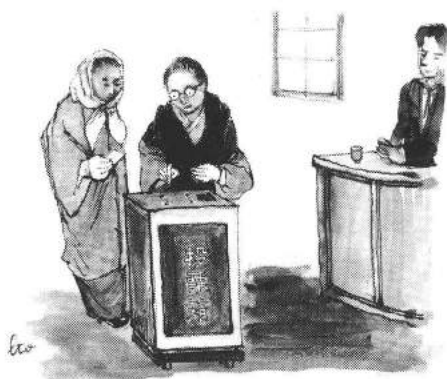
町議は定数三十名であるから、票の振り分けに時間がかかる。一方、町長は一つのポストに二名の候補であるから、積み上げられた仕分け票の嵩で差がつけば、一眼で勝敗が分るのである。鎌倉氏の前に三浦留一氏が近寄ってきて『あなたの方が勝ちました』と告げた。三浦氏は役場の総務課長である。鎌倉氏は『そうか……』と吐息のようというところ『差は……』と身を乗り出した。三浦氏は『集計はこれからですが、千票近い差が出たようです』と聞かされると、鎌倉氏の大きな目に涙が滲んできた。

確定票の検印が済み、残った疑問票の吟味が行われた。そこで中屋派の立会人から、二枚の疑問票が示されて、これは有効票ではないかと主張された。

最初は「テフテフ」と片仮名書きされた票で、中屋氏は現職であるから、氏名を書かず職名の町長だけで

有効ではないか、というのである。テフテフは即ち旧仮名遣いで蝶々のことだから、読みからいえば町長に通じるだろう、という理由が述べられた。

もう一票の方は「Φ↑」と判じ物の記号ともとれるものが書かれていた。有効の理由は、中という文字を丸みをもって書けばΦになるだろう。↑は矢印ではな



昔の選挙風景

いか、そうすれば明らかに中屋になるだろう。投票者の意が十分汲み取れるのではないか、というのであった。

既に確定票で佐々木が中屋を一、一〇〇票余も上回っている以上、二票や三票を争う意味がない、と大きな気持ちになっていた佐々木派の立会人は、即有効に同意したのだった。

佐々木良五郎氏五、五二票、中屋金次郎氏四、三五四票が最終得票となつて、戦後二代目町長に佐々木良五郎氏が選ばれた。しかし、中屋氏の得票の中に「テフテフ」と「Φ↑」の二票が生かされるという、粹な判定を下した立会人の存在を、私の記憶にのみ止めて置くには惜しい気がするのである。

(二) 因縁話

町長選挙は早ばやと勝敗が決まったが、定数三十名の町議について、確定票が決まるまでには時間がかかる。特に父（伊藤菊治）の票が伸びないから、不吉な想念が胸をよぎりはじめて落ち着けない。

やつと集計が終った。最下位三十番目が同点者二名になった。中村辰蔵、加納正治の二氏である。公職選挙法に従えば同点者を抽選によって当選人を決めるこ

とになっている。開票所に抽選機が持ち込まれた。あらかじめ両者に当てた駒が定められ、関係者固唾を呑んで見守る中で、勝利の駒は加納正治氏と出た。かくして町議三十名の当選人が確定し、父も辛うじて当選を果たすことができた。

ところが、後日中村辰蔵氏の訪問を受けた、私が過日の開票立会人であったことから、町議の疑問票について、私の意見を求められたのである。それは、無効とされた疑問票の中に「ナカムラマサジ」という一票があり、そのことの確認であった。中村氏のいい分は、枉職人であった自分は、通称「中村枉屋」と呼ばれてきた。仮名でやっと「ナカムラマサジ」と書いた人であるから、最後の「ヤ」を「ジ」と書き間違えたもので、自分の有効票である、というのであった。

立会人としては、疑問票を改めるに当って、投票者の意志を可能な限り汲み取ることに努力をする。「ナカムラマサジ」という一票のあったことは確かで、その時の協議は、姓の「ナカムラ」は中村辰蔵という候補者が居り、名前の「マサジ」は加納正治という候補者の名前と一致する。従って両者の候補者の姓を取るか名前を取るか、ということであった。結論として、有効の判定は不可能として無効の処理がなされたので

ある。以上の私の説明で納得できなかった中村氏は、町の選挙管理委員会に異議の申し立てを行った。再審後の町選挙管理委員会は、異議を脚下した。中村氏は更に道選挙管理委員会に提訴した。梱包封印された投票が士別選管から、道選管に送られた。道選管の審査結果も、士別選管の判定を覆すことができなかった。

しかし、翌一九五二（昭和二十七年）年五月十四日付で中村辰蔵氏は、士別町議会議員として繰り上げ補充当選を果たされたのである。最下位同点による抽選によって次点とされた場合、任期中何時でも欠員がでれば繰り上げ補充当選人となる権利が保有されるのだ。

偶さか、日甜管理職から選出されていた町議、岩谷恵氏が転出のため議員辞職に伴うもので、中村辰蔵氏が議席十二番を継ぐことになった。一年前、無念の涙を呑んだ中村氏の胸のうちは晴れ渡り、勇躍して議場にのぞんだものと思われる。

だが、それのみで終らなかつた。不思議な運命というか、因縁を感じさせる展開といわなければならないことが起こるのである。中村氏に抽選で勝利した加納議員は、その後癌によって任期を全うせずに死去したのである。中村氏は、何れにしても抽選では敗れたが、やがてその相手が亡くなって繰り上げ補充当選す

る運命に在ったことは間違いがなかった。

このようなケースは、日本広しといえども、稀有なできごとといえるのではなからうか。

※この記事を書くに当って、正確を期す上から、市の選挙管理委員会に、加納、中村両氏の得票数、ならびに「ナカムラマサジ」という仮名書きが、片仮名であるか平仮名なのか、更に名前の末尾がジであったかズであったかを知るために、調査を依頼したのである。しかるに、合併市となる以前の資料は保存されていないため、調査は不可能であった。

次いで、市立図書館、市立博物館に、当時の記事が記載された新聞の保存を確かめたが、何れも保存されていないとの回答であった。

道北日報社に、道北日報の前身である、当時の「道北新聞」の保存も確かめたが、発見に至らなかった。そのような仕儀であるから、得票数は不明のままであり、平仮名か片仮名かの疑問も、私の記憶に従って片仮名としたことを付記する。

(伊藤 善彦)

剣淵川改修と秋山道議



秋山道議 秋山道議会議員

昭和二八年七月三〇日から降り出した雨は、篠つくように降り出し、八月一日には、剣淵川のデルタ地帯にあるわが家の床上に浸水し始めた。

九六時間も浸水して、水が引きはじめた畑を見廻つて見ると、小高い所の外は泥にまみれ、馬鈴薯は腐敗悪臭を放つて、ビートも収穫間近い麦も全滅状態だった。翌二九年は台風被害にこそ遭つたが、被害はなかったものの、更に翌三〇年には、二八年を凌ぐ大水害に襲われた。七月一日から降り始めた雨は四日間降り続き、床上浸水に備えて家財道具を二階に上げた。水はどんどん増水し、ついに家族を高台にある弟の家に避難させた。

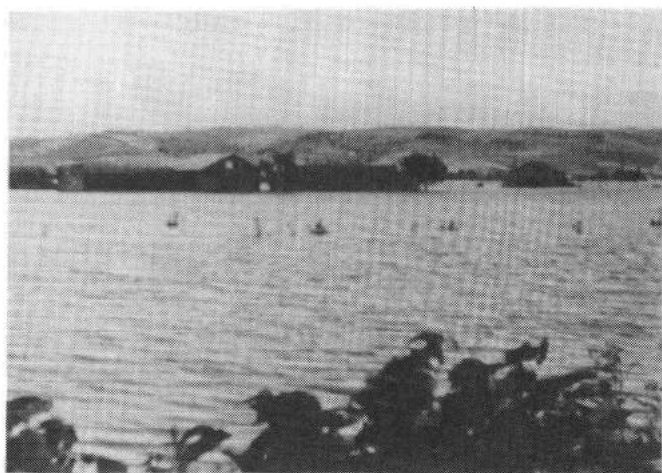
消防署は避難しろと広報車で呼びかける、家畜を連

れだそうと緬羊小屋に行ってみると、残念にも緬羊は水死していた。馬は利口で、決して深みにはまらず難なく連れ出すことができた。ようやく五日目に引きはじめた水も、わが家に戻って見ると、家財道具や畳が泥に吞まれて、使い物にならず畳は全部堆肥に積んだ。

来る年も、来る年も水害に襲われ、幾度かこの地での農業を断念しようとおもったが、意を決してこの地で生きるには、河川改修の外にないと部落内の有志に相談したが「そんな夢みたいな運動をしても、駄目だ」と相手にしてくれない。私は諦め切れず、道議会議員である秋山さんをお宅に訪ね「部落の人々に河川改修の運動を相談したが、相手にしてくれないので、私一人でお願ひに来た」と話したところ、秋山先生の顔色が変わった。「誰一人連れてくるな、君も河川愛護組合長なら、わたしと二人で結構だ。必ず剣淵川改修を試みせるぞ、さあ握手だ」と、私の手をしっかりと握りしめてくれた。

その、止むにやまれぬ秋山先生の正義感と決断力に、私はただ感激して涙をぼろぼろ流した。

その数ヵ月後、剣淵川の河川改修の予算付けには、強力な市の運動が必要だ。即刻、河川愛護組合から市の企画部長七条成良さんをお願いして、道庁に陳情書



剣淵川の氾濫 昭和31年

を提出するようにとの手紙が届いた。私は早速秋山先生の手紙を携えて市役所に出かけ、七条さんに事の次第を話してお願いした。七条さんも真剣に取り組んでくれた。

昭和三十六年、幸いにも秋山先生が道の建設常任委員長に就任した。その後、七条さんの陳情が実を結び、名越橋を中心に二、六〇〇万円の予算が付いたと、私宅に電報が届いた。私は夢かと思ひ何度も読み返して、電報を神棚に供えた。

調査によると、昭和二八年に完成した名越橋は、百七〇畧の永久橋で、これが剣淵川の増水時の水捌けをわるくしていることが分かり、昭和三八年に秋山先生の働きで、更に七〇畧延長になった。堤防工事も順調に進み、以前の停滞水による被害がなく、この工事以来、急に南士別の水捌けが良くなった。

今、剣淵川河川愛護組合長としての夢が実現したのは、一見、頑固そうに見えて温情の深い秋山先生の、責任感と決断実行力のお陰であった。秋山先生は、鋭意故郷づくりに奔走され、幾多の業績を人知れず残された士別にはまたと得難い方であつた。

(尾形 七郎)

郵便配達物語り

郵便局今昔

士別郵便局が、三等郵便局として開局したのは、明治三十七年七月十一日で、場所は士別村市街地四十一番地(大通り西八丁目)であつた。

当時県庁所在地の局は、通信省直属の役所として官吏を派遣していたが、その他は請負制で、三等郵便局長は明治二十一年の通信省法令により、時価二百円以上の資産を有する者しか採用せず、庄屋か会社重役の兼職が多かつた。

この請負制度は渡切費というもので、支給された経費額で職員の給与を支払い、その他の費用一切を賄つて残つたものが局長の収益であつた。当然、渡切費の九十%が労賃であつたから、局長は集配人を私物化し、極度な低賃金で使っていたようだ。

大正九年七月、局長が山畑弁次郎氏に代わり、郵便局の所在地も西二条八丁目に移転し、昭和十六年官制改正で三等郵便局は特定郵便局になり、士別郵便局も



昭和30年代の士別郵便局



座談会に出席の方々

特定局から普通郵便局になるために、期成会（深沢喜由会長）を結成して、昇格運動に力を入れたと伝えている。

昭和二十四年六月、行政改革で郵政省と電々公社に分割、昭和四十五年には日曜配達を廃止し、昭和五十四年に庁舎新築、昭和六十二年に中士別局を合併し今日に至っている。

郵便物の運搬も、昭和五十九年までは鉄道郵便車に局員が乗車して、各駅ごとに郵便物の受け渡しをしていたが、自動車の普及に伴い逓送会社が請負、航空便も使用するようになった。（高田 範氏談）

昭和初期の集配人

昭和六年、山畑局長に採用されて集配人になったが、私の配達区域は、神社通りから以北の兵村地区を廻り、零線（現九十九で、東洋製線工場・戦争中の疎開で釘と鉄線を製造する工場があった）を経て東山を配達し川西全域であった。

当時、新聞販売店は市街だけを配達して、郡部の新聞配達は、特定郵便物として郵便局が取り扱っていたので、一人では背負いきれず轎を引いて歩いたものだ。朝七時に出発して帰りは夕方の六時が普通だった。

郵便受箱が無く戸の隙間から差し入れる。書留や小包があると遠くの畑まで届けに行くといった状態で、一番困るのは、犬の放し飼いだつた。

熊の出没が多く、学田峠は細い馬車道で鬱蒼と大木が繁つていた。ある日、温根別へ行く人が熊に喰い殺された事件があり、射殺したこの人喰熊を警察署の前で見たことがあつた。

こんな状態だから、熊対策に笛やラッパが支給され、煙の出る物を何時も携帯していた（二瓶 正司氏談）

そのころの集配人

私は、昭和十一年七月に士別郵便局に入つたが、その年に二・二六事件があり、翌十二年に支那事変が勃発した。同時に軍隊に招集になる人々が多くなり、集配人も不足して、年々配達区域が広がっていった。

この頃の集配人は、日曜も祭日も無く年中無休で、わが家では、家内が畑仕事など一切を切り盛りをしてゐたが、特に冬は辛かつた。スキーとカンジキで足を棒にして歩き、雪の上に腰を下ろして昼飯を食べ、腰を上げる時は全身が凍つていたものだ。

赤塗りの自転車が二台配車になつたのは、随分と後のことで速達便などに使われ、一般集配人が使用出来

るようになったのはその後のことだつた。

（清水 永助氏談）

河川の氾濫ごとに道路づくり

南士別から西士別に通じる道路は、春になるとイパノマップ川が増水、秋には長雨でまた増水で氾濫を起こし、その都度、集配の後に局員が総出で崖を削り、明日のために道づくりをしたのは、二度や三度ではなかつた。

また年末になると、年賀状の繁忙期に入り局の中は、お歳暮の小包や年賀状の山になつてゐた。

私たちは、集配から帰ると十二月三十一日まで投函されたもので、元旦に配るので大晦日の夜は、十時ころまでの仕分け作業が続き、翌日は、肩に食い込むほどの郵便物を背負つて、とぼとぼ徒歩で深い雪をこぎ分けて配達に出掛けたものだ。（安達 利次氏談）

遭難騒ぎ

除雪が全くなかつた時代の農村の配達は、筆舌に言い表わせないものがあつた。

その日の西士別の配達には小包も多く、開拓地の一番奥の家に電報があつた。学田が過ぎるころから一層吹

雪が激しくなり、西士別小学校で様子を聞くと、学校は休校して奥地の様子が分からない。電報を届けなければならぬ一心で、スキーも膝までぬかる雪の中を、根性も尽き果てようやくの思いで任務を遂行した。

また、ある年の暮れの三十一日は、一寸先も見えない猛吹雪で時折、突風が吹きつけて体ごと吹き飛ばされそうになりながら、夜遅く局に帰ると局内は、上司から同僚まで私の遭難救助に出掛ける準備をしているところだった。(小西 久夫氏談)

私の回想

私が集配人になったのは昭和二十二年で、手の怪我で通院しているときに、郵便局の前を通りがかりに、集配人募集の広告を見て応募したもので、四十三才になつていた。

配達区域は広く、街の中を四区、農村郡部を八区に分け、街の中は一日に二回、郡部は一回の配達だったが、集配人の誰かが休むと、一人で二区受け持つことがしばしばで、また、郵便列車の発着時間に合わせて局舎と土別駅の間を一日数十回も往復する日があった。

一番辛い配達区域は、農家が散在している川西であった。私は声が大きいので、書留の捺印を貰おうと大

声をだしたら「せっかく今、子供を寝かせたのに起きてしまった」と、奥さんにこつてり叱られたことがあった。(上川 実氏談)

結びに

私の義父、野川民蔵は昭和九年から三十年間集配人をやっていた。義父が勤めていた当時は、郵便物の集配は至上命令で、軍隊のようだったと伝えている。

現在の公務員とは、別世界であつた時代の集配人の苦勞を少しでも後世に伝え得たらと思ひ集配業務に関つた方々にお集りをいただき座談会を催し執筆した次第です。

(槇 徳治郎)



剣淵川の大吊り橋

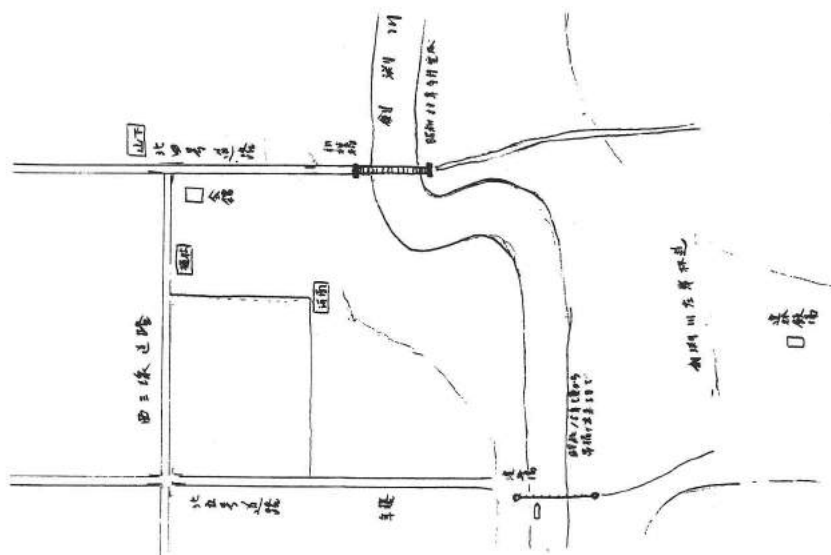
昭和三十年ころ、現在の祖神の松が全道一の神木だと、一躍有名になり士別市と名寄林務署が協力してこの木にメ縄を張り「祖神の松」と命名した。

おりしも時の名寄林務署長佐藤健二氏は、北町の至近距離から剣淵川に吊り橋を架けることを計画し、土別の野口組に請け負わせた。四本のワイヤーを張り、踏み板を敷き、手摺も取り付け祖神橋を完成させた。

しかし、橋の工事過程には色々なことがあった。ワイヤーが緩んで作業員が川に転落したり、橋板が流されて必死で川から拾い集めたり、思い出が尽きない。

この橋の完成で、林務署関係の人達が祖神の松を拝みに来たり、造林や薪山に大いに役立ったが、時代の趨勢で薪が石油に代わり、橋の利用も激減して管理もおろそかになり、何時しか痕跡もないほどに取り払われてしまった。

(大崎 定義)



吊り橋と氷橋との位置

低くなつた万歳峠

万歳峠を越えると川西町だ。大正六年、南公有地を經由して士別市街に通じる道路として開設された。川西街道の難所がこの峠だった。

胸を突く険しい傾斜の長い道路が延々と続いて、馬車や荷を運ぶ人々の往来に大きく負担をかけていた。峠を下りると、鬱蒼とヤチダモが生え茂って、道路の側に湧き水の絶えない小沢があり、道行く人を慰め、馬はこの水を飲んで息を吹き返した。

戦時中は、川西から出征する兵士を部落の人達は、この峠まで送り、万歳の声に武運を祈りながら、別れを惜しむのが慣例になって、何時のころからか、この峠を万歳峠と呼ぶようになった。

万歳峠は、昭和七年と三十一年に、冷害農家の救済事業として、峠の掘り下げ工事が行われた。ツルハシ、クワ、モッコなどの作業で、昭和三十一年には馬も出役したが、頂上から二割低くなっただけだ。

昭和四十五年、ようやく農免道路になりブルドーザ

ーなどの近代工事を施工し、見上げる峠も十数割掘り下げられ、舗装工事も完成したが、昔の苦勞が今更のようになんて蘇ってくる。

(遠藤 繁)



昭和2年 川西小学校附近の緬羊と菊田佐市校長

煙草コレクション

私が、大正十年ころから七十年にわたって収集した世界中のタバコは約二百種、全部が中身入りで、そのパッケージのデザインの美しさに魅せられて集め出したのが動機だった。

吸うのが性に合わなくて、収集したタバコの中身は一切手を付けずに、買ったときのきれいな包装のまま保管してある。戦前は全国各地の記念行事や、世界的な記念があるときに、年に五、六回ぐらい発売されたが、終戦後は、観光土産に発売されるものが多く、観光用の物の収集は止めて、もっぱら記念行事の物だけを集めた。

郷土色豊かなデザインを見ていると飽きないもので、パッケージの大きさや色彩にお国柄が見えて面白い。

戦後の「コチヨー」「エアーシップ」「ラッキーストライク」天皇陛下から頂いたお紋章入のタバコ、昔懐かしい軍隊の現役当時の「ほまれ」愛煙家なら一本でも試煙したくもなりそうだが、私は若いころからタ

バコは性に合わず、長年保存しておく、温度の関係で味は落ちても、眺めている分には味が落ちない。明治の末期から大正年間に発売された「ナイル」「アルマ」「大和」など、昭和天皇の即位記念に発売された「グロリー」「昭和」と、最近では東京オリンピック記念の十数種類、また士別開基記念タバコなど、縦五十、横一丁の陳列ケース二十数個に余って、残念ながら、段ボールに詰める仕儀となった。

(溝田 卯市)



溝田さんとコレクションの煙草

澱粉創業六十周年

明治三十六年 藤島慶五郎、蘭留より移転し日甜工

場付近の観月橋のあたりに未粉澱粉製

造工場を建設

大正八年 澱粉製造高は全道の四割を占め、つ

いに小樽相場を支配する。

士別市の古い資料の所々に、このような記録が残っている。しかし創始者である藤島慶五郎さんは、栄えゆく業界の姿をながめながら、明治四十四年六月八日四十四才の若さで逝去された。

「創業の年から数えると今年は六十周年に当たると、玉運寺の境内に創始者藤島さんの彰功碑が建っているが、市役所の中で誰もこのことを知っている者は居ない。何とか藤島慶五郎さんの遺徳を偲んで盛大に記念式典を挙行したい。これに要する費用は一切市役所に迷惑をかけないから、佐々木市長に会わせてくれや」と当時士別澱粉協会の会長をしていた武徳の三浦国蔵さんが市役所に来られ、農政課長と商工課長ちよつと

来いやゝで、切り出したのが、この話であつた。昭和三十八年の四月、秋山孝太郎氏の没後、第二回目の市単独道議選挙の噂が街を二分していたころである。

費用総額は五十万円として、全額を寄付に求め、士別地方の八農協をはじめ関係機関・団体及び市内商工関係から篤志を仰ぐ。この寄付については農協、ホクレンなどは三浦協会長と川口農政課長が当たり、市内商工関係その他は川口農政、早川商工の両課長が当たる。また事務的なことは早川商工課長と黒田農務係長が担当し、事業としては、澱粉創業以来の功労者・関係者とその遺族をくまなく調査し招待して、物故者の合同法要をねんごろに営み、且つ、功労者の表彰・感謝状の贈呈を行い、大正五年に建立されたままになっている創始者藤島慶五郎さんの彰功碑（現在も玉運寺境内にある）の手入れをして、周囲に玉垣をめぐらす、という大規模がものであつたが、勿論、佐々木市長に異論はなく、異論どころか、やがて結成される記念事業協賛会の会長を、自ら引き受けるという熱の入れようであつた。

間もなく、各関係者の参集を求めて協議し説明をしたところ、全員異議なくこれを挙行することとなり、



士別地方澱粉創業60周年記念式藤島慶五郎彰功碑前

次のとおり役・職員を決定し、この事業は、融雪と同時にスタートした。

士別地方澱粉創業六十周年記念事業協賛会

会長 士別市長 佐々木良五郎

副会長 澱粉協会长 三浦 国蔵 (士別)

農協組会長 福岡 三郎 (温根別)

商工会頭 森実 易逸 (士別)

澱粉業 渡部 恒夫 (士別)

澱粉協会长 保喜千代松 (剣淵)

伊藤 義継 (和寒)

林 庄次郎 (朝日)

農委会長 金井満寿雄 (士別)

農協組会長 下道 長松 (士別)

岡 笹一 (上士別)

長谷川久作 (剣淵)

驚見松右エ門 (和寒)

六田 正清 (朝日)

渡辺 博 (中士別)

古市 季雄 (多寄)

市議會議員 溝渕 栄 (士別)

澱粉業 南田 元三 (剣淵)

檜木 実 (多寄)

外役員 三十三名

来賓 北海道知事 町村金五他五名

〃 澱粉業 小林 秀雄 (士別)

〃 〃 美田 実郎 (上士別)

〃 〃 大岡新太郎 (朝日)

〃 〃 坂野 大宗 (士別)

事務局長 玉運寺住職 坂野 大宗 (士別)

〃 次長 士別市助役 笹尾 清

〃 〃 〃 農政課長 川口外三郎

〃 〃 〃 商工課長 早川 富来

〃 〃 〃 士別農協参事 鈴木 茂夫

〃 〃 〃 商工会議所専務 増川 政美

〃 〃 〃 士別市農務係長 黒田 勝

『三浦さんの馬力には頭の下がる思いで各地を訪問し依頼した。士別地方八農協で二十万円、士別澱粉協会で十万円と大口が決まり、旭川でも合同酒精始め各商社、札幌ではホクレンに河口会長を訪ね五万円を、坂ビスケットも心よく応ぜられ、小樽では一商社が社長不在で話がつかなかったが、然し風連農協、名寄市それぞれ応分の寄付があり、総額六十万円を超えることとなった。お金も充分あることになり、工事も順調に出来、昭和三十八年七月八日士別市大通九丁目玉運寺



創業60周年の記念撮影

境内の故藤島慶五郎氏の顕彰碑の前に、盛大な記念式が挙行された。』（川口外三郎著「回顧・みどりの細道」より）

この日の招待者は七十二名、合計二百名、他に奉仕僧侶九名、市役所職員十一名、総計二百二十名と記録されている。

玉運寺の境内、彰功碑は美しく浄められ、石材店主河野重幸氏の施工による新装玉垣の周囲に式幕をめぐらし、大小の生花、花輪がおびただしく供えられた中で、生憎曇り空であったが、雨は落ちず玉運寺住職坂野大宗師をはじめ九人の僧侶の奉仕を受けて、総礼の後、三浦国藏氏の開式の辞で追悼式が始まる。

◎追悼式々順

- 一、着席
- 二、総礼
- 三、開式の辞 三浦国藏
- 四、読経
- 五、祭詞 土別市長 佐々木良五郎
- 六、表白文 坂野大宗
- 七、追弔電報 衆議員議員 芳賀 貢
- 八、読経（読経中焼香）
- 九、会長挨拶 土別市長 佐々木良五郎

十、遺族代表謝辞 故藤島慶五郎二女 横井モト

十一、閉式の辞

十二、記念撮影

司会 土別農協参事 鈴木茂夫

○協賛会長・土別市長の祭詞

慰霊の詞

若葉萌えみどりのそよかぜ吹く今日八日、土別地方澱粉製造の生みの親である故藤島慶五郎さんの御命日でありますので、ここに藤島さんの功績を讃える彰功碑の前に道内の各地より澱粉事業に関係ある多数の皆さんと共に、故藤島慶五郎さんを中心とし藤島さんの遺志を継ぎ澱粉事業発展に努力された故菅原太吉氏、故渡部諒一氏、故鈴木顕藏氏、故三浦満吉氏、故鍵谷熊五郎氏、故太田鉄太郎氏、故犬伏文太郎氏、故浜下市郎氏、故秋山孝太郎氏、故汐川勸祐氏、ほか永年に亘り澱粉事業に御尽力物故されました各位の霊をお迎えして追悼式を執行するに当たり御遺族の方々並びに関係者一同と共に今あらためて各位の功績を讃えその御遺業を回顧するものであります。

故藤島慶五郎さんは明治三十六年土別市観月橋のほとりにこの地方に初めて澱粉工場を建設、土別澱粉の

基礎を確立されました。あなたの計画は土別地方で他に先駆けて樹てられたものであり、あなたの工場をモデルとして続々工場が建設され、明治四十四年藤島さんが思い半ばで御逝去された時には百二十有余の工場となりました。

この年藤島さんの遺志を継いで故菅原太吉氏が中心となられ現在の和寒以北名寄市に至る間の皆さんが天塩澱粉同業組合を組織、澱粉事業の進展を計られました。その後昭和八年北海道澱粉工業組合が創立され故渡部諒一さんが初代組合長として、又これに続きまして故鈴木顕蔵さん、故浜下市郎さん、故太田鉄太郎さん、故秋山孝太郎さんの各位がこの組織の中で御尽力を頂き、故犬伏文太郎さん、故三浦満吉さん、故鍵谷熊五郎さん、故汐川勸祐さん、その他の物故された皆さんが未粉澱粉の製造に、或いは製粉工場の経営を通じて品質の向上に務め販売金融面の円滑を図り地方発展に努力を続けられました。これにより澱粉土別の名は全国にうたわれ産業都市土別の基盤が確立されたのであります。

あなた方が熊笹をかきわけての開拓のさ中に建設された澱粉工場が六十年の星霜を経た今日時代の進展とともに企業も逐次合理化され近代工場へと発展し製品

の優秀なること今尚全国にその名を知られております。今や地方の発展は近代建築の立ち並ぶ躍進土別市となり隣接各市町村と共に前途洋々たるものがあります。今茲に故人となりました皆さんの偉大なる徳をしのび感激を新にし私達一致協力郷土発展に努力を捧げ皆さんの遺業を後世に伝えたいと存じます。

本日茲に意義ある澱粉創業六十周年記念の式典を挙げるに当たり、皆さんの追悼法要を営み在天の霊に慰霊の詞を捧げるものであります。願わくは彷彿として来たりこの誠を御受け下さい。

昭和三十八年七月八日

土別地方澱粉創業六十周年記念事業協賛会長

土別市長 佐々木良五郎

読経の中、莊重に焼香が行われ、遺族代表として故藤島慶五郎さんの二女で剣淵町に住む横井モトさんが謝辞を述べ、記念撮影をして追悼式を終わり、式場を土別農協階上ホールに移して、記念祝賀会の運びとなる。

◎記念祝賀会式順

- 一、開式の辞 森実易逸
- 二、経過報告 三浦国蔵
- 三、式辞 土別市長 佐々木良五郎

四、功労者表彰

五、感謝状贈呈

六、来賓祝辞

議長 久光鷹士

農委会長 金井満寿雄

林元代議士秘書 山口氏

七、祝電披露

士別市助役 笹尾 清

八、答辞

坂 一長

九、閉式の辞

士別市助役 笹尾 清

司会 士別市農政課長 川口外三郎

このあと、来賓祝辞、祝電披露があり、坂一長氏の答辞があつて記念式典を終わり、祝賀会には市内の割烹、料理店より綺麗どころが多数サービスに出張して、士別農協階上ホールはそれぞれの回顧談や懐旧の笑顔が溢れて、時ならぬ花満開のひとつときであつた。

この盛会を予想したかのごとく、『士別地方澱粉創業六十周年記念誌』の末尾には次のメッセージが印刷されている。

御札の言葉

本事業を挙行するにあたり、この趣旨を深く御理解され多額の御寄付を頂きました各位並びに本誌発刊について貴重なる写真を提供された渡部恒夫氏及び各関係機関よりの資料の提出に対し、更に事業を発

起し日夜奔走努力今日の盛会を見るに至るまでの、士別澱粉協会会長三浦国藏氏の御尽力に深く敬意を表します。

この式典を通じ故人となられた先輩諸氏もさぞ喜びの事と存じます。

今後共に士別地方の澱粉事業が農業近代化の前進とともに伸展される事を祈念し御札の言葉といたします。

昭和三十八年七月八日

士別地方澱粉創業六十周年記念事業協賛会



未粉を積んだトロツコの上で

〔追記〕この日の式典の模様を八ミリ映写機（白黒）で撮影し記録として保存してありますが、何せ三十年近くも経っているのと撮影時のピンボケで、所々に映像不鮮明な箇所があります。それでも当時の進行がよくわかり、もう故人になられた佐々木市長さんや坂野大宗玉運寺先代さんを始め、久光鷹士、森実易逸、江端強、興水七郎、鯖戸平治、木島金之助、梅田金盛、竹内末次郎の皆さんや、発起人の三浦国藏さん、ライオンのあだ名の岡笹一さん、先日五年祭を祀られた笹尾清さん、今年お亡くなりになった川口外三郎さんや、今もなお元氣な福岡三郎さん、佐藤矩さん、松岡義雄さん、その他この日ご出席になった大勢のみなさんが、いずれも三十年前のお顔で写っています。貴重なフィルムですので、映像衰退や風化したりしては：と思ひ、これをVHSビデオに再録して郷土研究会に寄贈しました。機会がありましたら、どうぞご覧になって下さい。

（早川 富来）

北町にあった山神講

生前、造材や狩猟で山に親しんだ山下福二郎氏夫人トメさん宅の神棚に、小牛田山神社の古めかしい箱札が祀られている。小牛田山神社は木花開耶媛神を祀り、宮城県小牛田町に鎮座、安産の神として知られる。

九十九山山頂の山神碑のルーツでもあり、特に東北地方の女性は、集落毎に山神講をつくって掛軸を拝み、農休をかねた慰安の一日をすごす（北海道教育大村田文江助手）という。現に、小牛田山神社は、山の神万頭等の店が立ち、貸切バスの代参で賑わっている。

北町の山神講は大正元年頃始まり、草分けの河南政次郎さん宅を常宿として行われていたらしい。その後戸数増により、上組・中組・下組の三組持回り当番で催されるようになった。毎年三月十二日、女性の大事、安産を祈り、お互い情報交換し、励まし合う場として、地域内殆どの婦人が加わっていた。

未だ婦人部もない時代、山神講は歌って、踊って、宝引（ヒモクジ）などもあり、女性にとって年に一度



小牛田山神50年祭。昭和36年3月12日北町山神講最後の集い。

(加藤清次郎・ユキ夫妻が山下家に寄贈した記念写真)

待ち遠しい楽しみの日だった(志田正光さん夫妻ほか北町の人の話)。だが農業者が減り、少子化が進んで、高度経済成長政策のはじまった昭和三十六年、五十年祭を区切りに、講としての活動は幕を閉じた。

(佐藤 公聴)

電話番号の語呂合わせ

土別の電話が、自動電話に変更になったのが昭和三十四年六月一日だ。それまで一桁、二桁、三桁の番号が、当日の午前0時、一斉に四桁の番号になって自動化された。

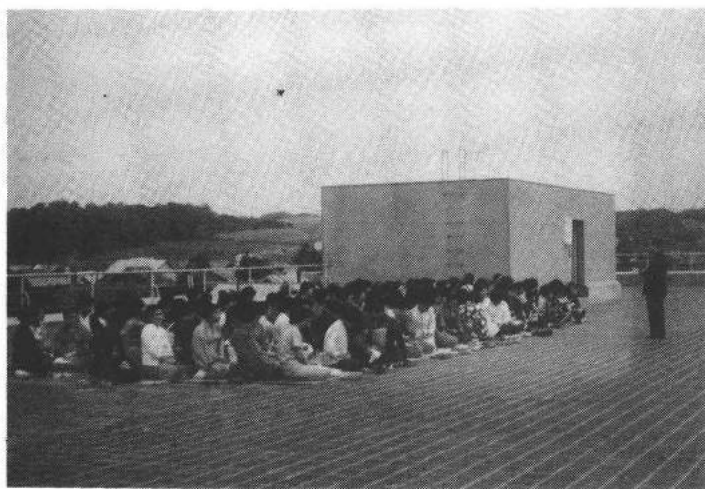
電話番号もすんなり変更になればよいが、そうは問屋が下ろさない。数字の一字に縁起を担ぎ、四二(死に)四九(始終苦)二九(二重苦)のような数字を忌み嫌い、切替え直前まで応対窓口でねばられ、このため窓口にあったS氏は、何とかよい方法はないかと語呂合わせをして、納得して貰おうと頭を悩ませた。

例えば、「九」の数字の大嫌いな飲食店の経営者に、二三九二番の九が気に食わんと粘られたが、どんな理由があろうと、番号変更に応じてはならないとの基本方針だから、ここで頭に浮かんできたのが二三九二だから「兄さん食いに来い」と語呂合わせをし、「これなら飲食店にピッタリではないか」と応答した。店主は「こんな旨い読み方もあるのか」と、納得顔で帰っていつ

た。

また、下二桁が四二（死に）も職種によって喜ばれた。運送業、倉庫業では「始終荷がくる」と珍重されたものだ。

（佐藤 四郎）



市内初の三階建庁舎屋上を参観した中央婦人会 昭和34年

バス女性乗務員第一号

毎年春秋と岩尾内湖に出かけて行く。又夏休みなど、孫が来ると連れて行く事もある。その時々々の季節には、あの雄大な湖の景色はみごとである。特に秋はカエデが色ずくと、あざやかで美しい。その度に三十八年前の風景が甦って来るのである。

それは、私が昭和二十六年春、土別軌道株式会社に入社した年であり、その年の夏、バスが初めて土別から登和里、岩尾内、似峽と開通した年でもある。バスの台数も少なく、初めは中古の小型ボンネットバス一台、中型二台、と三台からのスタートであった。当時は乗務員他全員男性で、女性というのは私一人であった。それだけに勤務はかなり厳しく、辛い事が多かったが、男性に迷惑にならない様にと心がけてやったものだった。

前の年の昭和二十五年までは、乗合バスはまだまだなく、小型貨物列車といって、通称軽便鉄道というのが木材の運搬を似峽までしていただけてあった。土別、奥士

別間、今の朝日町までは軽便でも人の乗れる小型の客車が通っていた。甲高い汽笛を鳴らして山間部をカタン、コットンと走っていた。あの穏やかな時代が、今は懐かしく思う時がある。

その様な時代で、乗合といえば似峽の街までは馬そり位よりなかった。荷物の運搬としても、馬車は大変活用されて、病人が出たりした時など大活躍したのも馬であった。どれ程馬は、人間の生活に役だってくれた事か数知れないのである。

年々機械化が進み、昭和三十年代の後半には馬の居る所がめずらしくなってしまった。それと同時に、一代を築いた蹄鉄屋さんも時代の波には勝つ事ができなかった。車社会に年々変って、今では専門の蹄鉄屋さんが馬のひずめに鉄を打っている姿は見る事がなくなってしまった。

そんな事で、昭和二十六年に似峽の街までバスが開通した事による、町民にとつての喜びはひとしおであった。一日午前、午後と二回の往復ではあったが、バスを待っていてくれる人達の、あのほっとした嬉しそうな顔は、今も忘れない。

今でも岩尾内湖に行く度ごとに思う事は、色とりどりの立派な橋や風景は、人々の心をひきつけるもので

あるが、この湖を工事した大勢の働いた人達の苦勞は、限らないものがあつただろう。だが、私は湖畔の前に立つた時、向い側を通っていた山際の道路をバスが走っていた当時がありありと想い浮かぶのである。

バスが着くと、あんなに喜んでくれた人々の顔々が……。あの人もこの人も今いづこなのか……。その人達がこの町に入って何十年もの歳月を、どれ程の苦勞を通して築き上げたものか。沢山の哀愁を持ち乍ら去らなければならなかった人達。その町が湖畔に沈んでしまったのである。湖の水位が下がって所々に地肌が見える時、今でも水田の跡がくつきりと浮き出ている。

あの土地で生れ育ったものにとつては見たくもない光景ではないだろうか……。私など地元で育った人間でなくとも、仕事からその村の多くの人達とのふれ合いが身近かに感じてか、行く度ごとに感傷にふけるのである。

当時、朝日村字似峽には木工場を経営していた、林庄次郎さんが村会議員をしていた。その庭先をバスの停留所として提供して頂いていた。奥さんも色白のきれいな方で、私達乗務員にお茶や菓子など、行く度ごとに接待してくれて、ほっと一息がつけて疲れをいやして帰って来たものだった。

大奥さん（おばあちゃん）も居られ優しく迎えてくれて、お茶が切れそうになると、布川商店から買ってきてと頼まれたものだった。お陰であの時のおいしいお茶の味が、今でもこだわりとなって残ってしまった。林さんの向かいが、朝日村の村長の織戸家である。

雑貨店の店主でもあった。あの交通便のない所から村長さんが出ていたのだが、いかに人望の厚い人だったか伺われる。その織戸村長さんは小柄ではあるが、温厚な反面大変な仕事にかけてはエネルギーシユな人物でもあった。それに誰にでも頭が低く、私達のような小娘にでもいつも変らず、御苦労さん、お願いしますよ——と言って笑顔でバスに乗ってくれたものである。寒い時にも暑い時でも、ねぎらいの言葉を忘れる事がなかった。

ある時、村長さんが出張した時の帰りに、いつも有りがとう……と言って渡してくれたのは、赤い革の手袋のおみやげであった。当時は、革の物はまだ大変高級品であっただけに、思いもかけない贈り物に嬉しくて言葉にならなかった。その赤い手袋は暖かい村長さんの心のぬくもりとなって伝わり、三十九年もの歳月が過ぎた今も心から離れない。実る程頭べを垂れる稲穂かな、という句があるように、朝日村は豊かに実っ

たのだと思う。あの時の織戸村長さんの意志が、後々までも町の人々の脳裏に残っている様な気がするのがある。

朝日村が朝日町になった現在も豊かな町として栄えている。あの時の村長さんの様に、いつまでも心暖かい町であってほしいと思う。そして又、あの遠いありし日の似峽の街を、たまあには想い浮かべてほしいものである。

（旧姓小寺、友成 恵美子）

△士別のふだんぎ19号Ⅱ想い出は岩尾内湖に沈むⅡ
より▽



友成さんと運転手

日向の天塩川改修工事

開拓が始まって以来この地帯は、雪解け水と夏の大雨水害に悩まされ通しで、いつも水害が脳裏から離れることがなかった。

名寄の治水事務所や開発建設部の出張所に、故人の本間一郎さんと部落の顔役、柿崎孝助さんを頼んで、護岸工事と河川の切替え工事の陳情にお百度参りをした。が、何度か空戻りをしたり、門前払い同様の応対を受けた。さすが引き返す日が多かった。

私の地先は、鍋つるの様に湾曲になっていて、春の雪解け水は、長い冬の間、凍るたびに厚さを増し、畳二十畳や三十畳ほどの氷塊が流れ、当時、薪出しにいたる所に架けた氷橋も川一杯に流れて来て、護岸の三脚をさらい、岸にぶつかる音が何とも言いようのない鈍い地響きを鳴らして流れていた。

大水の後には必ず護岸が壊れ岸がえぐられ、肥沃な田んぼの土が濁流に吞まれてしまうのを身を削られる思いで見えていたものだ。

特に昭和二十八年七月三十一日は、夜半から降り出した大雨で上士別内大部のダムが決壊し、この地帯も急に水かさが増し五十年振りの大水害になり、三号道路から西の地域は、三十七、八線の高台地を除いては、ほとんど水没してしまった程で、唯一小学校に設置された有線放送が連絡網で、校長さんが校下一円に刻々と水害状況を放送してくれたものだ。

やがて行政もこの地域の状況を察してか、昭和三十年の夏ころから災害の護岸と、待望の切替え工事が同時に開発建設部の直営工事で始まった。

工事は、機関車が四、五台入って、二、三〇台のトロツコを交代で牽き、ドラグレンが大きなバケットで掘削仕上げをしながら、トロツコに積み機関車が堤防を盛りながら土取り場を往復していた。この外に大型のブルトーザが、黒煙を吐きながら常時十五、六台が稼働し、西の山から重機の唸り音がこだましていた。

しかし、この年の七月三日から降りだした雨が、刻々と増水して堤防に溢れ、翌四日には昭和二十八年並の大水害になり、工事に従事していた人夫や職員が新しい堤防の上で逃げ場を失い孤立してしまったが、この人達を助けるために日向出身の佐藤貞士さんが、身の危険をもちえりみずに荒れ狂う濁流に小舟を操り、



昭和28年 天塩川切替工事測量時に撮影

全員を救出したのだった。名寄の自衛隊もボートを持参して大勢の隊員が駆けつけ、災害救助に頑張ってくれた。

佐藤貞士さんは後日、道警から人命救助で感謝状を受けたが、出水の度に部落や親戚の人々が駆けつけてくれたことが忘れられない。

冬の工事は、馬搬が主体で多寄だけでは足りず、下士別や下多寄の農家の人達が馬橋で応援に来ていた。新川を掘り下げながら、その土を馬橋で牽き堤防を段々に高く盛りながら、土を下ろすときは、堤防の傾斜に柳のスリ木を敷いて、馬橋ままひっくり返しては、土取り場へ積みに行くことの繰り返しで、馬の多いときは、二箇所土場で七〇頭がひしめき合っていた。馬追いの回数を競いあつては、朝の四時には馬の鈴の音が聞こえ、自分も遅れてはならないと家内に弁当を作らせ、馬は土を積んでいる間に馬草を食わせ、人は馬が土を運んでいる橋の上で昼飯を食べながら頑張ったが、寒中でも新川から上がる水蒸気と、馬と人の汗で現場は霞がかかったようだった。

また、開発建設部直営であつて、重機や機関車の運転手や職員はほとんどが独身で、休日や雨降りには部落の娘さんのいる農家を狙って、田の草取りや稲刈り

からハサ掛け手伝いに来て、まんまと娘さんを手なずけて結婚した若者も何人かいた。

かくして、工業も順調に進み曲がりくねった川も一直線になり、昭和三十三年三月十七日に、この地域の人々が待ち望んだ通水式が行われたのだ。この日は、旭川開発建設部長や工事施工者の新谷組社長、地元では士別市長や土地改良区理事長の中西秀利さんなどが参列して行われた。

回顧録

引きつつ当時の恐ろしさ、恩恵受けし 今の生活を物足りて心の足りぬ今の世に 人の情けの蘇りくる
天塩川改修なりて山裾に 黄金波うつ沃野広がる

(宮腰 武夫)

除虫菊

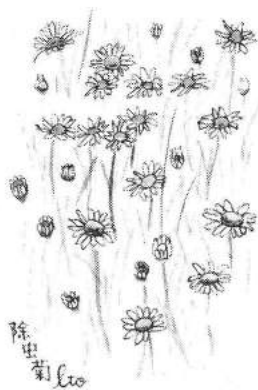
除虫菊は、水はけの悪い所には不適で、水はけの良い山岳地に多く栽培した。

苗畑に種を蒔き、苗がある程度大きくなつてから、畝間六十センチ、株間三十六センチ程度に苗を植えた。収穫は

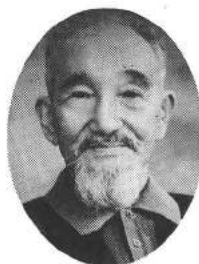
七月十日ころから始まり、士別祭りの十五・十六日ごろが最盛期で、和寒以北の山々は、真夏に雪が降ったように真っ白に花が咲いたものだ。収穫期になると雨が一番恐ろしかった。

収穫の方法はハサ木を立て、縄を張り、花の中に入れて下から順次上に積み重ねて、一番上に覆いをした。その他、三角ハサを立て同じ理屈で花干しをした。雨に当たると品質が悪くなり価格が落ちた。充分に乾いてから花をセンバですき、ゴミや茎を取って袋詰めにした。品物の等級があつたのか記憶にないが、雨に当たるとすぐ黒くなつて価格が落ちたもので、当時は除虫菊成り金と、大袈裟な話もあつたが、本当に儲けたの仲買人で、農家は何時も汗を流すだけだった。その除虫菊も昭和二十五年・六年ころに姿を消してしまつた。

(尾形 七郎)



異色の住人 大島金作



大島少年時代

大島さんが鞆を持ち、汗を拭きながら農業改良普及所へ入ってきた。かなり興奮して「いま、木村市長が

深々と頭を下げて謝ったから許してきた。そもそも講（頼母子講、十人ぐらい）は、病氣や災難で借金し、年を越せない仲間を救済する庶民の智慧で、役所ぐるみでネズミ講とは許せない」と、市長に進言したときはすでに市役所内のネズミ講は潰れていた。

以来「君は物わかりがいい」とかで、しばしば市長室に立ち寄るようになった。大島さんは、日経新聞講読者で経済の見通しや、農工業への意見、特に十年先予測は抜群で啓発されることが多く、道北日報社の故北村社長もときおり大島公園（アシアンの里）へ立ち

寄って帰ったものだ。

両親は越中富山の出身で、大島さんは明治三十八年中土別に生まれた。父親が木村重成に私淑していたので、わが子に重作と名付け（しげさく）と呼んだ。小学校入学式のと き担任の教師が「大島金作（きんさく）と呼んだが返事をしない。先生が咎めると「僕は重作（シゲサク）です」と答えた。戸籍係が重を金に書き違えて記入したのだ。戸籍の訂正は裁判所に書類を提出する必要がある、父親はその手数を考え、校長が「金作でもよいではないか」と、入学式以来金作になった。大島さんの青年期は、二宮尊徳型の道を歩み、或る時期は、金色夜叉の間貫一型の利息計算に走った。

小学校の恩師吉本先生は「大島少年は、三年生ころから鞆を持つて学校へ来たことがない。教科書、ノートは机に入れて手ぶらで帰る。朝は弁当だけを持つて登校する。宿題は授業時間中にやってしまう合理主義なところがあつた」と語っている。

小学校を卒業すると父親は「中学で終わるなら商業学校へ行け、簿記とソロバンが出来れば潰しが効く」と言うので当人もそのつもりでいると、小樽商業の受験が締切りになり、残るは庁立根室商業だけになった。当時、根室まで直通の鉄道はなく、厚岸から船便か陸

路は馬車か徒歩であった。商業三年のときチブスを患い避病院生活を三ヶ月過ごし、留年の心配もあり休学届けを出して帰省したが、世間体が悪く悩んだ。

樺太へ海外雄飛

そのころ、樺太国境警備隊の軍属募集に応じ、アレキサンドル町に赴任した。軍属とはいえ給仕の仕事で毎日、外国電報の活字を拾う作業であった。大島さんには世界の様子が手に取るようにわかり、以来、世界的視野で物事を捉える力がついた。

アレキサンドル町にはギリヤーク人が多く、馴鹿に車を曳かせて往来する街で、日本の軍人だけが威張っていた。大島さんは二十一才で退職し、叔父を頼って知取町で牛飼いをしようと考え、親戚のキミ子さんと結婚した。牧場農地二十畝、牛七頭、綿羊十頭、鶏二百羽、馬二頭を飼育し、奥地に入っては現金収入が難しいからと、王子製紙工場の隣地に住み、王子の杜宅の人達を相手に牛乳と卵を売った。

敗戦になって領土返還の報が伝わると、牛も鶏も食料に売り、麦やトウモロコシを石臼で挽き食料に困らなかった。順次引き揚げが発表され、混乱や暴動防止にソ連の隊長は米、酒、タバコの配給を地域毎に、工

事出役の引き替えに行った。その配給係を引受て伝票を発行し、道路補修や下水道工事等に出役した人々に酒、タバコ等の配給をしていたので十円札が沢山集まった。引き揚げが決まると、牧場用地に愛着があるので用地図を作成してソ連の隊長の証明サインを貰う用意周到さであった。

錫と通貨と経済と

昭和二十二年、大島さん夫妻は北海道に引き揚げて、郷土の中士別に落ちついた。引き揚げ事務所で戸籍簿を確認して一人当たり千円的生活費が支給され「所謂千円乞食」と言われた。樺太で迎えた養子は仕事の無い士別より、復興途上の東京上野に生活圏を持った。

大島さんは士別の澱粉飴を札幌に運び、帰りに砲金を買って鋳物工場へ売って儲けた。金属市場では錫が儲かると分かり、三菱金属や田中金属から錫を買い込んだ。用途はハンダとメッキで最高十ト保有したものだ。

米国のドルが世界の基軸通貨になり、GHQから貿易の許可が出て、一ドル三百六十円の固定レートが十八年続き、輸出品の評価がよくなるにつれ一ドル三百八円の円高になった。輸入する原材料が安くなるにつれ円高と言う経済用語の質問を度々受けたという。

大島さんは、日本の対米輸出黒字八十億ドルのころ、「五十億ドル位は、紙幣でなく金貨で受取なさい」と時の福田大蔵大臣に手紙を出した。当時は金一オンス三十五ドルで、米国がいつまでも一千億ドルの金貨を持てる訳でない。「各国が、金貨を受け取っているではないか」と言う大島さんの警告にたいして「文面はよく分かったが、金貨を日銀が管理すると、莫大な管理費がかかる。米国に預けておけば、日本の二倍の利息がつくから得策である」という返事を受けた。間もなく一オンス四十二ドルに価格を引き上げ金貨引渡を米国が停止した。基軸通貨国の金貨保証は、単なるペーパーマネーになってしまったのだ。

戦後貿易は、ドル建てとポンド建てであったが、英国のダラダラストライキで製品の納期や品質で信用を失い、ポンド建て貿易は撤退した。ソ連のルーブルはコメコン経済圏を支配していたが、いつ高額紙幣の使用禁止令を出すか分からないから、貿易国は、小麦の輸出に金の延棒を要求するか、木材や石炭とのバーター取引になる。大島さんは米国の空ドルには度々腹を立て、日本の労働運動を支持していたが、ストライキには機嫌が悪かった。日本は原料輸入加工輸出国で、品質が落ちたり生産がストップすると、日本円はチリ

紙より値打ちがなくなると言うのだ。

アシアン街道建設

市制施行間もなく、四町村の合併を祝して、何か記念になることをやりたい一念で、中士別四線から九十九橋まで、軽便鉄道の路肩沿いの漸やく通れる馬車道と段差になっているのに目をつけ、道路改修を思い立った。大島さんは妙に靈感の働く人で、道路工事の労



アシアンの里と大島金作さん

貨を紙幣で支払わず、金と銀で支払うことにし、旭川の金正堂に金板を一づつカットしてもらった。当時は金一、千三百円で労賃に出役した労務者に渡したところ「真鍮でないか」と疑われ、商工会頭の幸田庄作さんに金百を委託して、中立銀行大島票を発行した。実際に商工会頭から受け取った人は二、三人で、結局は幸田さんから面倒だと返されてしまった。

工事が完了してみると、金も銀メタルも受け取って貰えず、未払いの部分が出来た。当時の三浦市長の命を受けて市の土木係が「市が発注した工事でないから、即時工事を中止して下さい」と言いに来た。明けて昭和三十年は雨の多い年で、ついに国道四十号線の土別橋と中土別の中央橋のたもとが決壊して、特に朝日や上土別から土別に向かう交通が一ヶ月の交通止めになった。そのとき整備されたアシアン街道が効果を發揮してトラックや自動車に多くの便宜を与えたのだった。

この様を見た市議会もほっておけず、謝礼金の拠出金を議決して大島さんに未払い分を聞いて支払い、あとの残金を大島さんに渡して謝意を表したのであった。土建業者の間で「暇なときに仕事を探しておけば、後で議会が金を支払ってくれる」と語り草になったが、道路改修工事完成祝賀会も、民間の軌道会社がバスを

出し、中土別会館で盛大に行われた。

市議會議員に立候補

昭和四十一年、市議會議員に立候補した。理由は、変動相場制に腹を立て、金本位制の解説をしたい主旨であった。責任者は鉦山師の梨沢久さんで、票読みの結果は三十五票獲得出来る予想であったが、開票してみると三十四票だった。大島さんは没収された供託金は「国庫に入ったのだから、総理の給料の一部に成るだろう」と淡々としていた。

銀貨を造る

大島さんは、金貨が銀貨を保有することが得策だと考え、純銀十のメダル五百個を打ち抜き造り、同好の人々に五百円で分け、二年後に八百円で買い戻した。貴金屬所有の価値を普及するためだ。そのころ大島さんが「贋造銀貨を売っている」と警察へ密告した者がいた。警察が贋造銀貨を調べてみると、純銀で重さも十あるし、相場も五百円で贋造には当たらない。警察も、大島さんと呼ばび出して大演説をうたれるより、「善行も損をしないようにやれ」と中土別の駐在さんから「紙幣なら焼けたら無くなるが、銀貨なら残るか

ら良いことをしてくれた」と褒められたのだ。その後も五百個の銀貨コインを造ったが、親戚に配り感ずるところがあつて中止してしまつた。

このころから大島さんは、山羊髭をたくわえ市街に出ることが多くなつた。名寄に出掛け、拓銀からカナダ金貨を十枚位買つてきて、一個一個ビニールでシールしたカナダ金貨を見せ、カナダは有数の産金国で、金相場基軸国になつてゐる。日本で発行している記念金貨は十万円、金分は三万円値しかなく、政府は七万円儲けようとしたが売れ残り、潰したところに国際的な贋造金貨が流入した。大島さんは「あれは政府の失策だ」と笑つた。

中立軍大歓迎の横断幕

昭和二十九年、保安隊の大演習が士別地方で行われたとき、伊藤染物店に「中立軍大歓迎」の横断幕を注文して、駅前通りと中士別四線に掲げて当時の町民を驚かせた。その幕はアシ안의里に保管されている。

樺太引き揚げの時に持参した、多額の旧円紙幣を束にして税務課に持ち込み「日本は天皇制が護持されている。旧円を持って来たから、いくら払つたらよいのか？」には、税務の出納係も困つたらしい。何か演出の

目的であつたか高笑いをしていた。

自然主義に徹する

大島さんは、引揚者住宅と同じ二間の住宅を建てたが電灯を布設するのに、道路横断をする長尺の電柱が必要になつた。普通の十倍負担がかかる工事に抵抗して電灯も電話もひかず、世間と断絶した明治時代の生活を二十年間、思索と晴耕雨読の生活を過ごした。晩年に農協住宅を譲り受け、愛妻のために電灯と動力ポンプの生活に切り替えた。

樺太の生活が中断した引揚げ後は、すべてを手作業によるアシ안의里（自然園）造りにある様子だ。昭和二十五年ころ、天塩川工事のため開発局が民有地の買収をした。多くの人は高額で売つたが、貨幣価値が極度に低落する時代であつた。大島さんは、峠下の大曲で、石ばかりの広い河川敷地との交換を申しで、約五畧の土地と交換した。やがて道路工事や建築ブームで砂利が飛ぶように売れた。玉石や砂利を逐次売つた凹地は池にしてボートを浮かべ、剣淵沼からヒシの実を移植したが殖えなかつた。

モンタナ松は、水郷公園に売つて税金を払つた。這い松はよく観察すると、根元で屈曲して這う性質があ

るので、突っ張り杭を当てて立ち上がらせるとその儘成長することを発見した。現在は高さ三層に及ぶ這い松林になっている。珍しいので植木屋仲間に好評で数百本を分譲した。オンコの幹をカットして直立した萌芽を二十センチぐらいで斜めに切り、発根剤に浸して挿し木すると、実生の六年生苗を一年で育成できるので、植木屋から好評を受けた。

「林学を勉強したのか」と尋ねると「昔、秋田の殿様が吉野杉の苗を求めると「苗は売らず材を売る」と言われヒビ割れ防止のために皮付きの材木を買い、節目から出た萌芽を一本一本大切に挿し木して殖やし、今日の秋田杉が出来たのにヒントを得た」と答えた。コツコツと自然休養地を造成し、ほぼ完成したところで学校の物置一棟を払い下げ、休息研修室を建てた。当時は、練習場が無く困っているつくも太鼓の練習に貸していた様子だ。

大島翁に神の光栄あれ

「アシアンの里」四畝余の面積の入口に門柱を立て、松の植林が茂り、池に尺余の鯉が水紋を描いて跳ね、北方の自然ならではの葦鴨が水辺にたわむれる様を、爽快な気分で見めるようになったのは、大島さん八十

二歳のころからだろう。

小高い築山に仙台石の記念碑が建っている。表裏に何も刻んでいない。後世に記名を託したらしい。

石に腰を下ろして瞑想する大島さんが曰く「瀬戸大橋も完成した。米ソは日本を入れて、ペーリング海峡六十二^キ、間宮海峡二十五^キを何故埋め立てしないのか、日本にやってくれと言ったら、日本の土建業者はやれるだろう。さすれば北海道にも椿の花が咲き、燃料が節減できるだろう。文化は北太平洋からとなる。ソ連の極地からマンモスの牙が続々と出土する。考えてみればどうなるか分かんのか!」と、後は沈黙する。また静かに「小盗は誅せられ、大盗は王となる…歴史だよ」と大島さんの独白は尽きない。

(八敏 清明)



大島コイン

上士別のライオン

農業振興で叙勲を受け、上士別のライオンと呼ばれた岡笹一氏が、百二歳の天寿を全うした。

岡さんは、明治二十二年二月に奈良県吉野郡天川村に生まれ、少年のころから農業に励む傍ら、吉野川の木材流送人夫をしていた。その頃、川に流された子供を助け、人命救助で警察署長から表彰を受けたのが、人のために尽くす最初だったと伝えている。

大正二年、兄敬路、弟松蔵と共に、上士別村に吉野団体の一員として川南七区十七線十号に入植した。岡氏は体格もよく力が強く、農業経営の傍ら昭和四年に上士別村の村会議員に立候補し、山形団体を代表する五十嵐清之助氏と、吉野団体代表とで部落を二分し、互いに県人会に働きかけ、激戦の末に両者が当選した。両雄は互いに努力をして五十嵐、岡氏の名声が高まり三期連続当選を果たした。岡さんは、静かに話す五十嵐さんとは対象的で、強く意見を述べ自分の意見を徹底的に通す性格を、上士別の人々はライオンと呼んでいた。

いた。

岡さんの豊富な話題の中で、私の記憶の幾つかを紹介すると、先ずは昭和十八年の村長選挙である。多年の悲願を達して村長になった中田熊雄氏の改選を八月に控えた七月、中田氏と岡さんは同県人の好みで、岡さんは自他ともに総参謀を自認していた。そのころ村の有志、赤川、卯城、小西、乾氏らが、村長の若返りを計り村政を活性化しようと、新人候補に当時の上川支庁拓殖課長の安井博恵氏に白羽の矢を立て、交渉を重ねたが決まらず、三十歳の若さで在郷軍人分会長の坂一長氏を立候補させることにした。岡さんは「それは良いことだ」と賛成して、前記の議員諸氏と計り影の人になり他議員を説得して選挙に臨んだ。（当時、上士別は一級村で、村長選出は村会議員の選挙で決まることになっていた。）

岡さんが坂派に寝返りうったことに気付かない中田村長は、勝算われに有りと、選挙十日前に予選をしてみようと、二十四議席のうち二十一議員が出席して投票を行った。ところが開票の結果は十一対十で坂氏の勝利となり、中田派はあと三名の議員獲得に必死に努力したが、本投票でも坂氏が十三票で日本一若い村長が実現したのであった。



百歳の岡笹一さん

これは岡さんの郷土愛の決断と、議員説得の大きな力によるものであった。

その岡さんも、戦後昭和二十二年の統一選挙には、同郷の南田彦治氏を後継者に起用して「わしはもう公職はやめたよ、これからはお寺や神社の世話をするから」と、司法保護司の他の公職から一切身を引いたのであったが、戦後の農家経済の不安定と農業協同組合長選挙のもつれに加えて、農協経営が悪化して多額の赤字が累積し、選任された組合長が二年足らずの間に三人も交代する状態になった。

ついに岡さんに組合長就任の声が高まり、昭和二十

八年、上士別農業組合四代目組合長に就任した。岡さんは総会を開いて農協再建計画案を示し、組合員一致団結して正常運営を誓い合ったのだ。

これがきっかけで農業委員、土地改良区理事などを兼務し、在籍五期十五年間組合長を務め、五十嵐耕造氏に組合長の座を渡したが、全期間、無給無報酬で職務を全うしたことも、この地方で類をみないのだ。

昭和四十二年、政府は岡さんの産業諸般の功労に、勲六等単光旭日章を授与された。これが士別市の生存者叙勲の第一号である。続いて士別市産業功労賞を受け、八十歳を過ぎで若い奥さんと再婚し、その後も健在で平成二年、百二歳の長寿を全うされたが、葬儀は岡さんの遺言をまもり、祭壇も無く西光寺の本堂の阿弥陀仏の前に、遺骨をぼつんと置かれ、供花も二つ三つという質素なものであった。広い本堂いっぱい参列者の間に、死してなおも清貧な岡さんの姿に、感動のすすり泣きが聞かれたのだった。(川口 外三郎)



ラス張り名人

岩戸景気といわれた昭和三十四年ころから建築ブームが続き、戦前戦後の木造住宅は、不燃性のモルタル外壁の住宅に建替えられていった。モルタル壁に色とりどりの防水塗装を吹き付けたカラフルな家を建てることは、当時の庶民の夢でもあった。

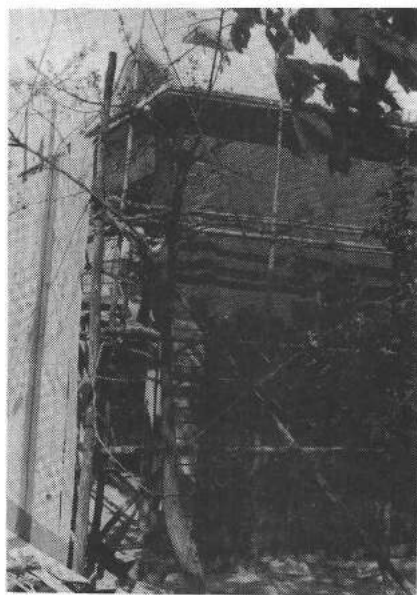
建築様式の変化は、左官屋さん、塗装屋さんの大繁昌をもたらした。板張りの上に、黒い建築紙を張り、更にラスという細い針金で出来た網を張って、壁の下地を作るのが、ラス張りの仕事である。ラスの張り方の上手下手はそのまま壁の出来不出来につながるのので専門のラス師が左官から分業していった。

昭和三十年代から四十年代の中葉にかけて、ラス張り名人といわれたのが石田儀一さんや上北幸春さんである。石田さんは消防署を退職後ラス師に転進、やがて上北幸春さんの器用さを見込んで技術を伝受、コンビを組んだ。こうした専門のラス職人は数少なかったもので、二人は土別は勿論、北は宗谷方面、南は旭川・

深川・滝川あたりまで、それこそ朝早くから夜遅くまで大忙しだったという。

二人ともすでに故人となり、今や建材仕上げの防寒断熱構造の家が、主流となりつつある。だが、当時はモルタル住宅は花形で、しかもラス師は極めて地味な縁の下力持ち、大事な仕事であった。北ぐにの住文化の面で、忘れてはならない、消えた職業の一つといえよう。

(佐藤 公聰)



外壁下地のラス張り工事

士別母子寮物語

私が士別母子寮に、小学三年生と一年生の息子連れて寮母に赴任したのは、昭和二十九年十二月でした。小学校の教員に復職することを薦められましたが、夫を亡くして間がなく、健康にも自信がもてず幼い子供と少しでも一緒に暮らそうと考え、請われるままに士別に來たのです。

士別母子寮は、東三条十丁目にコの字型の平屋が建っていました。建物中央に西向きの玄関があって、玄関を入ると正面が物置になっていました。はじめて母子寮を訪れる人がよく間違つて、物置きのドアをノックしていました。玄関の右横は私の住む寮母室で、その隣が静養室になっていて十二畳の部屋は、寮内の集会や役所の説明会場に当てられ、正月になると皆でご馳走をつくつて楽しく宴会を催したものです。

その静養室からカギの手に曲がつて、四畳半の部屋が十一室あり、一番端が共同トイレになっていて男用一ヶ所、普通が三ヶ所と物置があつて、外に通じる非

常口がありました。中庭が共同の物干し場でしたから、洗濯物を抱えて此処から出入りしたものです。

入寮者は、役所の福祉課で査定していましたが、三人家族以下の家庭は四畳半一室、四人以上の家庭は六畳間一室で、それぞれに押入れがありました。部屋の仕切りは簡単なテックス張りで、隣の話し声が筒抜けに聞こえたものです。

玄関のすぐ左側に事務室があり、ここで私は寮の管理仕事をしていました。その隣室が医務室になっていましたが、冬になるとストーブを焚いて、温かくしていたから、子供たちは親が仕事から帰るまで、この部屋で遊んでいました。その隣が共同炊事場で、手押しのポンプが一台あつてカナケ水がひどく、砂濾しをして使っていました。長い流し台はカギの手になっていて、一方を炊事に使い、片側を顔洗いや洗濯に分けて使用していました。炊事の洗い物は流しを利用していましたが、煮焚きは石炭ストーブを使っていたから、大方の家庭は水をバケツに汲んで部屋へ運び、部屋で料理をしていました。

その炊事場からカギの手に曲り、六畳の部屋が九室あつて、この一番端も右側と同じようにトイレと物置と非常口でしたが、母子六人の家族もいて、狭い部



士別母子寮全景

屋はストーブと炊事道具で、布団の敷く場所もなく、どの家庭も押入れの中に寝るのが当り前で、テックス壁すれすれにストーブを置き、よく火事を出さないのが不思議なぐらいでした。

一番可哀相なのは育ち盛りの子供たちでしたが、子供は、自分たちの境遇をよく承知していて、机かわりにテーブルでこつこつ勉強し、大学に進学するまでに頑張った子もいました。それは十年の在職中には、無邪気な子供の悪戯で、目も当てられないような後始末をしたことが何度もありましたが、母子寮は、母子家庭の集団とあって男の好奇の対象でもあり、身を固くして家庭を守る母親の健気な姿を多く見てきました。

その後、母子寮の老朽化とともに入寮を制限して、母子住宅に移り、昭和四十一年母子寮を解体しその跡地に、あけぼの児童館を建設したのです。私はそれと同時にあけぼの児童館の児童厚生員になりました。

大変に失礼とは思いますが、思いに残る或る家庭を紹介させて頂きます。

昭和三十九年ころ、小学一年生の男の子と、左腕の無い四才のAちゃんと呼ぶ女の子を連れたYさん家族が入所して来ました。身障者の世帯は初めてでしたが、

Aちゃんはしつかり者で、片腕で器用に身の回りをしていました。親に原因を聞くと、乳児のころ冬に寒いからと姑が、Aちゃんをストーブの側に寝せておいたところ、加熱して着物に火がつき大火傷したのですが、姑が或る宗教に凝っていたものですから、病院に連れて行かず、祈禱で直すとお経を唱えているうちに、腕が腐ってしまい切断したのでした。

親は、体の不自由な子ほど可愛いと言いますが、Yさんは放任主義で、何時も子供を叱っていました。兄は学校を嫌って登校を拒み、私も毎日説得するのに苦労したものです。Aちゃんは親の愛情に飢えて、何かと世話をする私に寄り添い、離れようとしませんでした。

或る日、Aちゃんが腹痛を起こしてYさんが病院に連れて行ったのですが、大したことがないと服薬を吞ませ、安静にして置けば治ると言って、仕事に出掛けた行きましたが、廊下にはトイレからYさんの部屋まで血便が落ちていたのです。これは大変とYさんの帰りを待つて話すと「血便が出るのは快方に向っている証拠だ」と、病院の先生が話していたと言うのです。私はすぐに病院に電話をしました。病院では呆れて「そんな嘘をつく馬鹿な親を、早く病院によこしなさい。」



七夕祭りと母子寮の子供達 昭和35年ころ

それは疫痢の前兆だ」と、私が叱られているみたいでした。

その後、快方に向いましたが嘘を平気でつくし、縦で身持ちが悪く寮則を守れず、他の家庭に悪い影響を与えるので、役所と相談して退寮して貰いました。

Yさんは間もなくAちゃんを捨て、何処かへ行ってしまったと聞きましたが、Aちゃんは、風の便りで美唄の重度身障者訓練所に入所しているとのことでした。

或る夏の日（昭和五十一年）に、テレビを見ていると、十四年前のAちゃんが、身障者競技全国大会に出場し、晴れて金メダルの栄冠に輝き、堂垣内知事との対談が放映されているではありませんか、私は喰い入るように画面を見ながら「Aちゃんよく頑張ったね、苦労もしたでしょうに、立派になって」と、思いを熱くしたものです。『親は無くとも子は有つ』と言いますが、まさしく自分が置かれている境遇を実感し、自分に負けまいとする人間の良識と、施設の職員の熱心な訓練の成果であったと、感激したと思います。

（後藤 百合子）

市有林誤盗伐事件

市有林は町村合併時で、二次林を主体に六六二畝所有していたが、市の財政確立を目的に増強することとなり、昭和二十九年の林野整備法、三十二年の新市町村建設促進法で、上士別一地区、温根別三地区併せて八六三・三²/₃、立木を含めて九、四五〇万円で国有林の払下げを受けて、総面積一、五二九・三²/₃になった。昭和三十二年に市は、市有林経営五ヶ年計画にもとずき、植伐計画実行に着手した。

上士別、温根別の二十九年の風害による枯損、風倒木の処理に上士別の二業者、二団体、と温根別の一業者に売却して伐木搬出が行われた。

この売り払い立木は約六・二四〇立方メートルだが、上士別だけで約六〇〇立方メートルの盗伐があるのではないかと三十三年新春ころから風評が流れ始めた。これが問題になり三月の定例議会で、一部議員から緊急質問が出され、佐々木市長は「融雪を待つて充分調査の上、善処したい」と答弁した。

市は林業行政推進のために、議会から林務課設置を強く要望されて、その年の四月一日から発足をした。

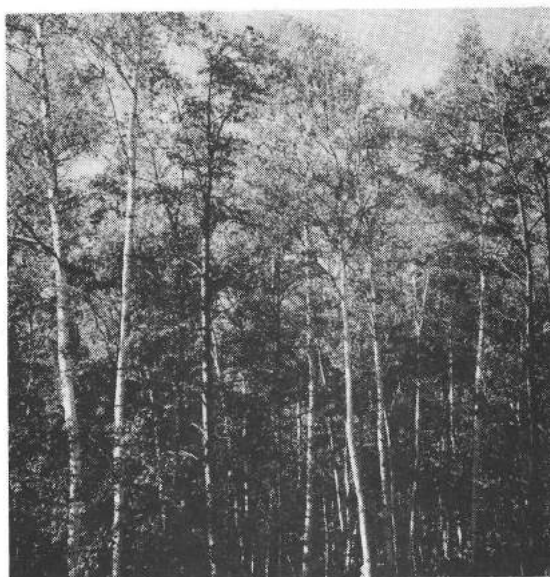
この課は、課長以下二係五名の職員と、市有林監視人（非常勤）九名で、思いもよらず誤盗伐調査が仕事始めになった。四月十日には温根別にも盗伐があると話がでて、調査中の四月二十三日に別件で臨時議会が開会され、再度緊急質問があり「五月二日から伐根調査を実施し、結果に対して強く処理をし万全を期す」と答弁した。

五月二日、林務課全員は士別営林署員の指導を受け、林業指導所、各森林組合職員の協力を受けて七日間、市有林近くの農家に宿泊し、慎重に伐根調査をした。

初日から報道関係の記者に付きまとわれ、調査結果が毎日写真入りで全道に報道された。

その結果、温根別地区も併せて不法伐採が、約一・四〇〇立方メートルに達し、五月十五日に財産管理委員会に状況を報告して、その処理を求めたところ「市長は、不法伐採盗難届けを警察署に提出すべし」との答申であつた。

五月二十日に第三回臨時議会を開催、市有林不法伐採内容を報告して、警察署に伐採盗難届け提出の旨を説明し、その対策を求めたところ、これ程の大事件は



士別の市有林

特別委員会を設置し、地方自治法百条の権限のある委員十名を選び、事に当たることになった。市議会の百条委員会はこれが初めてである。

この委員会は議場を会場に、五月二十三日の第一日から六月五日まで三回に亘り、関係者の出頭を求めて、委員長の問題に応じた関係者の答弁内容を録音し、速記録を取る厳しさで、裁判所の法廷のようであつた。六月十三日の最終委員会で調査を終了して、意見書を

本議案に提出した。

意見書

今回の市有林伐採事件は誠に遺憾であり、その原因は、

- 1 市有林に対する愛護精神の欠如
 - 2 市長の部下に対する指導監督の不充分と、職員の責任感の欠如
 - 3 市有林巡視人と、伐採監督員に対する職務権限の不徹底
 - 4 関係事務の不統一などで、今後の処置として、契約外の伐木代金の回収を確実に収納し、市に実害のないこと
 - 5 責任の所在を明らかにして早期に終結すること
- 関係職員には信賞必罰で臨むべきであること
- 第二回定例議会は、三十三年六月十九日に開会し、特別委員長の報告を承認した。
- この間に市監査委員も、特別監査を実施して結果を議会に報告した。
- 市理事者は、行政処分の実施に当たり、市長の減俸を申し出、条例を改正し助役以下関係部課長及び係長の減俸または、降職などの処分が六月二十二日に発令された。

士別警察署長は、市長の告発に基づき、刑事課長を班長に察偵長以下十一名の警察官で、不法伐採実地検証に臨み、他に関係者三十名前後の立会を求め、六月末から九月末まで百日に及ぶ検証が続いた。繁った熊笹や野草をこぎ分け、雨の日も風の日も休むことなく被害木を探し求め、切り株の前に杣夫を立たせて写真を写し、六千本の被害木の調査は困難の連続だった。

この結果、上士別の一名が指名手配中に行方不明になり、温根別地区では四名が逮捕され、公判請求判決は有罪懲役刑の言渡しを受けたが、刑は執行猶予となった。

不法伐採の被害を受けた市は、関係者から立木代金の納入を求め、一名の他は早期に全額納入したが、一名からは現地確認訴訟が提起され、市は大塚弁護人を代理として損害賠償請求を起こし、本人の青田差し押さえ等を執行して、市に実害を与えなかった。

この事件は、立木買受け者、造材監督員の中に現職議員が五名もいて、事件調査途中に、二名の議員の辞職などもあり、政治的にも経済的にも、刑事事件として士別市の大事件であった。その年に行われた議会議員選挙で木工場関係者の五名不出馬などが各新聞紙上に報道され話題の多い年であった。(川口 外三郎)

税務課員大弱り

恐しいこのハネ返り

現	伐	盗
ボ	ル	地

はそんな生易しいものではない。上土別の金税が発表されたらこんどは一面所載のとおり温根別でまた新事

盗伐々々
と少し食
傷気味、
拾がつかない混乱状態であ
る。
市議が先頭になつて盗伐す
るようでは金くお手上げと
さじを投げたくなつてしま
うではないか。本社は近く
温根別の実態をお知らせし
たいと思つてゐる。
なおこんどの盗伐事件の頻

実が発表され、これも市会
議員がたとへなんであらう
と張本人のかたち、実際取
拾がつかない混乱状態であ
る。
市議が先頭になつて盗伐す
るようでは金くお手上げと
さじを投げたくなつてしま
うではないか。本社は近く
温根別の実態をお知らせし
たいと思つてゐる。
なおこんどの盗伐事件の頻

發で、一番の被害者は市の
徴税職員、滞納整理になど
出向うものなら「僅かの税
金より盗伐をふせげ、その
方が金になる」と烈しく悪
口雑言をかけられまつたく
処置なしだつたとこぼして
いたが、さもありなん。自
治体運営に強く影響するこ
と火を見るより明かだ。心
してほしいもの。

◆写真説明◆

下、相山分中間土場に別口
で積まれたセン、檜の生立
木、いづれも径一米以上の
もの、乗つてゐる人と比べ

てほしい。こんなのがバク
バク伐られたのだ。
上は檜の大木、中は赤松、
これが三本で七十五石のか
たわれ、

なおセンの火をつけた根株
の写真はついに入手が間に
合はなかつた。

道北日報

昭和三十三年六月六日



市民会館綴帳寄付の思い出

道内で土別のような小都市に、まだ建設が少なかつた市民会館が竣工したのは、昭和三十八年であつた。

当時、土別に過ぎた施設と他町村から羨望されたが、その落成式の準備について課長会議が開かれ、会館の備品その他の調度品の購入経費が、一千万程度不足であり、全額市内外の篤志寄付で充当したいと説明があり、その時点で日甜土別工場、土別信用金庫からそれぞれ百万円と、歌手の畠山みどりさんからも十萬円の寄付を受け、落成式でわたしの歌をと申し出があつた。

しかし、まだ半額にも達しないで、特に農政商工課で二百萬円を集めると特命を受けた。当時の農政担当の私と、早川商工課長と綿密な作戦を練り、寄付募集を開始した。昭和三十八年度は農業構造改善事業の着手年で、大型農機具購入の大量買入れの年でもあり、早速、市内農機具店のヤンマー、久保田などの小売店に伺つたところ、大型寄付は我々の手に負えないので、旭川営業所か札幌支社でないと、話が通じないとの返

事であつた。

そこで、早川さんと旭川の久保田農機営業所を訪ねた。柴田所長は「あなた達の話は分かりますが、市民会館の綴帳は田舎芝居の引き幕のように、寄付者の名前を何人も並べて書くものではないし、話合いがついても両サイドに二社位で、普通は一社で寄付するものだ」と話すのだ。わたくしは厚かましく「久保田一社でお願い出来ませんか」と伺つたところ、出来ない相談ではない。何故と言えば、土別市の久保田農機店が、昭和三十七年度全国最優秀を挙げたお陰で「私柴田が新潟支社長に栄転することになった」と喜んでいるところで「本社でも土別はよく分かつている」との話だ。

このことは、あなた方が札幌支社や、大阪本社に頼んでも出来ないことではないが、土別市長さんが、直接本社の社長にお会いしてお願いした方がよろしいのではないか、岩見沢市の幌向に久保田農機試験場があるが、この土地五畝を安く世話して頂いたお礼に、岩見沢市民会館の五百萬円する綴帳を、久保田一社で寄付したのです。と親切に指導してくれて「札幌支社ではこの話はしないで下さい」と言うことだった。

その後札幌に出かけ、各支社を訪ねたが支社長の寄付の権限は二萬円で、支社長は親切に上手に訪問者を

帰すのが仕事のようなだった。北海自動車工業から二十万円、旭川のコハタ農業から三万円の寄付があった。

さっそく佐々木市長は、久光議長と久保田大阪本社に社長を訪ねお願いしたところ、温かい握手と共に五百万円の緞帳を寄付してくださったのだ。

いま、士別屯田兵上陸の図の右下に、久保田鉄工株式会社の文字が光っている。二人の課長時代の懐かしい思い出である。

(川口 外三郎)



市民会館のどん帳の向って右半面

木霊塔の由来

広通り一丁目に、大きな自然石の碑がある。この木霊塔は、自然の森林を売り、その恩恵で今日の活力ある士別市になった自然林への報恩の碑である。

昭和三十六年、昭和天皇、皇后両陛下が北海道植樹祭にご来道し、支笏湖の辺り十畝に、エゾ赤松のお手植えが計画されるのを機会に、士別市林務課と森林愛護組合が、本霊塔期成会を結成し、佐々木良五郎市長を会長に、士別営林署、名寄林務署の協力を得て、協議の末に自然石にしようと決まり、梅田金盛さんが上士別南沢の国有林内で約十五メートルの石を発見し、営林署から払下げを受けて、昭和三十五年十二月に降雪を待ち、高島建設が道路の木橋補強などをし、ブルトーザー二台で七日間掛かりで搬出したものだった。

道内では上川町に次ぐ碑で、題字は時の内閣総理大臣に揮毫して頂こうと、林業に深く理解のある松浦周太郎代議士と佐々木市長と上京してお願いしたが、池田総理は「私の字は、国民に見て貰えるものを書きた



広通りの木霊塔

「どん」の顛末

「どん」といっても親分のことではない。正しくは穀物膨張機という。米やトウキビなどを鉄の釜で加熱して膨張させる、あの「どん」のことである。私の父は、昔、「どん屋」だった。

戦後の物資不足の時代、とくに甘いものがなかった頃、「どん」は簡便な菓子ので用品として普及した。

それも原料が農家ならどこにでもある穀物（米、トウキビ、大豆など）だから、ずいぶん流行った。父はもともと小樽の下駄職人だったが、靴の全盛になって下駄屋があがったりになると兄が中士別四線東三号で農業を始めたのをしおに、昭和二十四年、家族そろって引っ越してきたのである。しかし父は農作業を手伝わず、この「どん」加工の機械をリヤカーに積み、士別市内や近郊を巡回して生業にした。それは父のからだが弱る昭和三十七年頃まで続けられた。

私と同年代の人たちに聞くと、当時、どん屋が町へやってくることを楽しみにしていて、釜を開く時のド

くない」と、担当大臣を呼び周東英雄農林大臣に揮毫させたもので、当時、裏面碑文は教育長の木村清風氏の書で、昭和三十六年木霊塔建設期成会建之と刻んだのである。碑の建設費は総額六十万円で、全額市民有志の方々の寄付であり、建設は士別市土建業界の責任施工で、石工は先代河野石材店主、工事担当社は佐藤賢也氏で当時は大型クレーン車も無く、苦労を重ねて建立したものだ。

以来、五月には関係者が集い、山林で働く人々の無事故安全、山火事等の無災害祈願を三十年欠かすことなく行っている。

（川口 外三郎）

カーンという炸裂音が聞こえると、急いで家から原料を持って行ったものだという。どん屋がきたことを町内に触れ回すことは要らなかった。花火のような「どん」の音がその役割を果たしたからだ。

かつて幼いお客さんだった人たちはいう。自分の原料が釜に入れられ、できあがるのを待つ間、期待で胸がわくわくしたものだ、と。膨張率が最も高いのはトウキビだが、一升のトウキビが一斗ほどにも増えるのだから、子供にとっては手品のように思えたかもしれない。食べ物があることが何よりも安心な時代である。

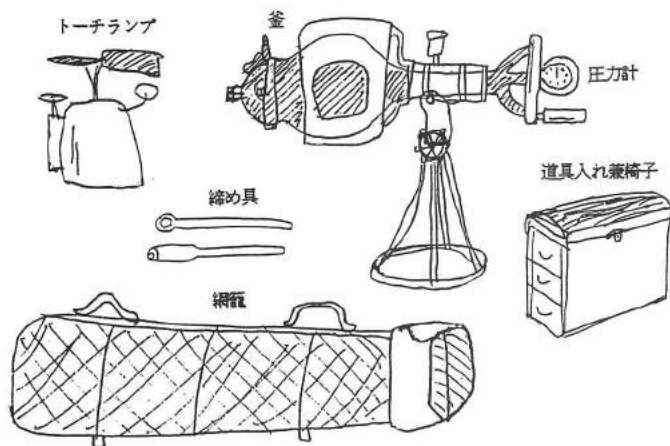
この膨張率を決めるものは一にも二にも乾燥の度合いだった。父は原料の一、二粒を噛んでみて、それを測った。適度な乾燥だと炸裂音は耳をつんざくほどに高鳴り、網籠の中はふくれあがった「どん」で満杯になる。逆に乾燥が悪いとパチュツと冴えない音がして、原料とさほど代わりばえもしないものが散らばるだけだ。

不思議なことに澱粉も「どん」になった。これは最も乾燥度のむずかしいもので、乾きすぎてもだめ、湿っていてももちろんだめという曲者だった。父はそれを手で握ってみて、固まり具合、崩れ具合でその微妙

な差を測った。いい状態なら発砲スチロールのようなふわふわの塊に変身する。それを千切って舌に乗せるととろけるような味がした。

「どん」の甘味はサツカリンで味つけされた。砂糖だと加熱でべたついてしまうからだ。サツカリンの試

「どん」の機械



駿管のような容器、そのゴム蓋の裏の小さな窪みに一杯、それが原料一升分の適量だった。当時の子供たちはこの人工の貧しい甘味が満足していたのである。とてつもなく美味しいというものではないが、食べ始めたらやめられなくなる、それが「どん」の味だった。

父は職人だけあってなかなか器用で、鉄工の方もこなし「どん」の機械をさまざまに工夫改良した。初めは燃料に木炭やコークスを用い、ベルトで扇風機を回して火をおこしていたのを、小型で火力の強いカーバイトをたくトーチランプに換えた。また巡回用に軽量化もはかった。すべて鉄製の機械だから総重量は数十キに及ぶ。最も重い台の部分を細い鉄棒の枠に変えた。ちやうど女性のはくスカートのような円錐形で、軽くてしかも安定があった。

道具箱も椅子と兼用にしてむだを省いた。上蓋にズック張りの座布団を取りつけ、引き出しには釜の締め具やハンマー、スパナ、油差しなどを入れていた。リヤカーの床板には機械の配置を示す図が描いてあって、ところどころに釘や金具を打ちつけ、そのとおりに載せれば、やや後荷のちやうど引き具合のいいバランスになっていた。

子供たちに人気があったのに、私はこの職業が嫌い

だった。というより恥じていた。煤だらけの鉄釜を扱うからか傍若無人な音をたてるからか、職業に貴賤はないというが、「どん屋」と呼ばれるたびにおぞましい気持ちになった。

中学生の頃、兄は病死し姉たちは嫁ぎ、老いた両親と末っ子の私が残っていた。学校の休みには、父はきつと私に命じてこの機械を積んだりリヤカーを引かせた。幌に赤ペンキで「どん」と大きく書いてあるリヤカーである。繁華街を通るとき、他人の眼を意識して顔から火が出るように感じた。どん屋は後を継ぐほどの職業ではない、先が見えている。やがて夜間高校へ通い、昼間はいろいろなアルバイトを遍歴したが、私はまったく「どん」の技術を習得しようとはしなかったし、父も教えようとはしなかった。リヤカーを引くことでしか生業に参加しなかったのである。

巡回地域は士別市内から朝日町、剣渕町、風連町までに及んだ。貧困を絵に描いたような暮らしのなか、老いた父はこの薄汚れた機械で日銭を稼ぎ出し、私たち家族の糊口をしのいだのだった。しかし父が死ぬと、不肖の息子はこの遺産を古物商に鉄屑として売ってしまった。今、記憶の底から当時を思いおこすのみである。

(佐野 良二)

騎手が作った究極ラーメン

ラードをふんだんに使い、こつてりとした醤油味の豚骨スープのこの地方独特ラーメンは、北国の風土、厳しい気候に適応し見事に花咲いた庶民の味である。

味噌味主体の札幌ラーメンと異なり、醤油味の豚骨スープには、鰻屋のタレのようにその店、その店の長年の伝統と修行の中から生まれた店主のこだわる独特の味があり、それぞれ根強いファンを持っている。

北海道でも一・二をあらそう厳しい凍れの町、土別のラーメンは特に定評があり、その名を高めたのは『五十番』であった。

市民ばかりでなく出張や各種大会などで訪れる多くの人に愛され、味が全道、全国に広まり、わざわざ遠方から食べに来る人も多く、たまに帰省した人も駅をおりたらず『五十番』で久々の故郷の味にひたり、帰日も食べ納めをしてから車中の人となったものである。

この『五十番』の味の創始者であり経営者は三野経

義さん。三野さんは、もともと板前でも、調理師でもなく他人の店で修行したわけでもない。なんと前身は競馬の騎手。親は樺太で競争馬の飼育と調教をしており三野さんもその影響で十六の歳に騎手になった。

当時、樺太では競馬が非常に盛んで町ごとお祭りや縁日に役場が主催し開催された。景気も良く有力者から多額の賞金も出され、他にこれといった娯楽もないところから年に一度の競馬は最大の楽しみで、騎手は憧れの的でありスターでもあった。

しかし、この優雅な生活も敗戦で終りを告げ、農場とも愛馬とも別れ、全てを投げうち身一つで引き揚げて来る。

その後、本道に舞台を移し、道内各地を転戦するがお酒をまったく嗜まない三野さん、楽しみはその土地、その土地のラーメンを食べ歩くことであり、その味の秘訣を探ることであった。気に入った味に出会えれば何回も通い、さり気なくコツを聞き出す。同業者風であれば、絶対に明かさない秘密も相手が競馬の騎手とあればというっかり漏らしてしまう。

この三野さんの道楽が過ぎ、本職となったのは昭和二十六年のこと。西二条通り国勢座の向かい側の路上にずらりと並んだ天士マーケットの一角でおやき屋をし



ラーメンづくりに励む三野さん

ていた奥さんの店を改造しラーメン屋を開店した。戦前も支那そば、中華そばとしてメニューの一つに加えていた店もあったが本格的なラーメン屋としては旭川の蜂屋から職人を招き長沢保夫さんが大通りに開いた『蜂屋』（後に中山さんに委譲）と相前後しての開店であった。

その後の土別のラーメンの双壁をなすこの二店の誕

生であったが三野さんの店は粗削りカラマツの柱に屋根、板壁だけの間口も奥行きも一間半の小さな店、七八人も座れば満員になる程度のものであった。

しかし、玉とよぶ関節の豚骨を使い、煮干しから玉葱まで一つ一つ吟味し納得した材料だけを使用し八時間から十時間もかけ煮出したスープ、全道を探しあてしかも厳しい注文をつけ作らせる独特の麺、麺の湯で上がりとスープの出来るタイミングが合わなければ惜し気もなく捨ててしまうという頑固一徹の作り方、一回洗った丼を再び熱湯をくぐらせ乾いた布巾で拭いて熱いうちに使うというこだわり、これが三野さんにしかな出せない独特の味を生み出し、評判が評判を呼びたちまち大繁盛となった。

店に座りきれない客は路上に並び、土別小学校、日甜など大きな職場から二十、三十丁という注文も来て、なんと一日三百杯も売る毎日であった。大学卒の初任給が五〇〇〇円程度のころ、一杯六十円のラーメンは決して安い食べ物ではなかった。

この店の裏が、丁度、北斎館（旅館）の台所であった。まだ電話は、かぎられた家にしかついていなかった当時、出前の注文は北斎館が受け、台所の窓を開け伝えてくれた。この電話番号が五十番。

いつしか三野ラーメン店も『五十番』と呼ばれるようになり、昭和二十九年、町立病院の跡地に店を新築移転したとき、いやな顔一つみせず出前の取り次ぎをしてくれた北斎館への感謝の気持ちも込め正式に『五十番』として看板をあげた。

店の移転とともにますます評判を高め、雑誌、本などでも度々全国に紹介された。昭和六〇年、市からのたつての要請で秋田県雄和町のサイクリングターミナルで出張販売を行ったときなど開店と同時に二、三百人の行列が出来たためあわてて整理券を発行、三時間待ってやっと一杯のラーメンにありつけるという有様であった。一週間の期間中に秋田県各地から空前の客を集め、最後に町長から異例の感謝状が贈られた。

市民に愛され、誇りでもあったこの『五十番』も平成元年十一月三十一日、三野さんの健康を理由に閉店した。閉店の模様はテレビ、ラジオ、新聞でも報道され、その味をおしむ声が全道、全国から届き、特に最後の一週間は雑踏の中での営業であったが、多くの再開の期待を断ち切るように営業備品一切を処分し、あっさり廃業してしまった。

頑固一徹、徹底したこだわりの中から生まれ、他の真似の出来ない独特の味は、後継者を作ること無く『

五十番』の閉店とともに消え、幻のラーメンとなってしまった。
(朝日 保)



在りし日の五十番食堂

内大部ダム決壊と災害復旧

ダム決壊と被害状況

昭和二十八年七月三十一日、夜半から降り出した雨は、翌八月一日になつても止むことなく降り続き、開発建設部上士別治水事業所の記録は、一〇三ミに達していた。

開村以来の大豪雨は、特に内大部の山間部に集中し、沢の中に流木が引つ掛かり岩石が崩壊して堰をつくり、小さなダムに至る所に出来て、それが一挙に押し流されて増水、ダムになだれ込んだ。

このダムは大正十二年、下士別土工組合が土堰堤を築造したもので、堤長三百^ミ、堤高十五^ミ貯水量約二百万^トで、上流から流入した大洪水でたちまち貯水池はあふれ出し、土堰堤を溢れ流れる結果となり、右岸山際から六十五^ミが一瞬にして決壊し、満水量の二倍以上と推定される四五〇万^トの泥水が流木、薪木、風倒木などと共に、下流に突進したのであった。

水深五^ミの濁流は、下流地帯の水田、家屋をなぎ倒

し、本流天塩川へ驚進したのは八月一日午前十一時であつた。

付近の住民に貯水池管理人が、いち早く避難するように伝えたので、山や道道朝日方面に走つて難を免れたが、佐々木喜一さん一家は逃げ遅れて屋根上に這い上がったが、そのまま押し流され喜一さんは十八線の中州の柳の枝に掴まりつてるところを川南の消防団員に助けられ、長男は、屋根に乗つて渦巻きの中を回つてるところを付近の住民に助けられたが、奥さんは行方不明になり一週間後に、十四線の安達孫市さんの畑の土砂の中で発見された。

濁流の去つた跡は家屋流失跡地、田畑の表土流失や埋没、土砂礫の堆積、木材の破片など近年に類を見ない惨状そのものであつた。調査の結果、田畑の流失埋没面積が約七十^{ヘクタール}、建物流失十七戸四十二棟、道路の破損決壊道道二^{キロ}、村道三^{キロ}、橋梁三橋、送電線二^{キロ}、公社電話線千六百^ミ、軌道路線枕木千六百^ミが跡型も無くなつていた。その他、村内にも相当な被害もあつたが、被災農家はその日から農機具、家畜に加えて家財道具が流失して、鍋一つ着物一枚もなく気の毒だったが、十二区の婦人会が総出で流れた着物を集めて洗濯して届けたり、家具など見舞いの品を集めて届けて



ダムの決壊現場

いた。

災害対策本部と復旧事業

上士別村では、即時災害対策の臨時議会を開催して災害対策本部を設置し、被災者救済と災害復旧対策を急ぎ、対策本部長を中田村長に議員はそれぞれの係を担当して職員を配置した。

- 一 流失住宅、作業所の復旧工事
 - 二 常用家庭器具、衣料品、食料の確保
 - 三 農機具その他資材の調達
 - 四 賃金収入の対策事業
 - 五 昭和二十八年度の共済金即時支払い
 - 六 耕地災害復旧事業の実施
 - 七 一般道路橋梁の架設と復旧工事
 - 八 被災者に対する見舞金品の募集
- 等を実施することになったが、被災者は災害救助法の発動で、村役場と二十線の実心寺に収容し、婦人会の奉仕で焚出して一時をしのいだ。

士別朝日線の道路復旧工事は、清水橋と内大部橋とも自衛隊の出動を要請して架設工事を確保し、電灯、電話は北電、公社が臨時施設をして間に合わせ、とくに電話線はハサ木丸太を利用して三日後に開通した。

住宅も非常災害用住宅金融公庫に申請し、特例として二戸の配分を受けたが、残りの人々は自力建設となり、流失した電柱や古材を天塩川岸の各所に積み上げて関係者が回収したが、製材賃は延納、大工仕事は村内の人々が無償奉仕で仮設住宅を建てた。

また、被害惨状は毎日のように新聞紙上に報道され、各地から見舞いの金品が届けられ、土別土地改良区から五十万円の見舞金は被災者に喜ばれた。

農業共済金の即時払いも決まり、臨時失業対策事業に道路敷設用砂利の取り込みが始まり、迅速に関係官庁の認可が下りて、土木現業所の本格的な護岸、橋梁、道路路盤工事が開始された。

難事業であった耕地災害復旧

農地をダム決壊以前の田畑に復元することだが、道内で例のない災害で、上川支庁や土地改良区の技師も経験のない復旧工事だが、上士別村産業課は、支庁耕地課、農協、森林組合などの指導援助を受け、現況調査、測量、設計にかかり、先ず農道を定め田区を確定し、排除土石量、搬入土量計算するのだが、計算機の無かった当時は多くの労力を要し、短時間に仕上げなければならず、出来上がった設計図表によれば総事業

費一、七〇〇万円で農林省桂田査定官の査定を受け工事着工の見通しがついたのである。

復旧工事は特に、被害の多い土石礫の排除、基盤流失や水溜まりのある所は、ブルドーザーで整地して馬搬客土を行い業者の請負とし、馬搬客土整地、畦畔築設のみの地区を上士別村の直営工事とした。当時はブルドーザー所有業者が少なく、指名入札で永山町のメ下土建に七百万円で落札契約をした。

A地区は、降雪前に整地が必要で十一月一日に着工、馬搬客土は上士別の大江建設、下請け実施、村直営馬搬は農事組合長会議を開き、班編制をして村民挙げて協力し、降雪が早かったので十二月一日から馬搬客土が始まった。毎日、農耕馬三百頭が積み込み人夫を含めて四百名を越す人々が、朝四時から我先に現場に集まり、陽が暮れるまで働く姿は壮観でさえあった。この土積は築堤の一部と檜原地先、宍戸の山の土取り場から、六万一千立方メートルが運ばれた。

この作業最盛期の十二月八日、作業中に山崩れの土砂の下敷きになって、谷幸之助氏が即死、三名が怪我をしたことは残念であった。この事故にこの地方では初めて労災保険が適用されて、千六〇日分が一時金として支給された。

その後、一部工事に設計変更があり、総額千八百二十五万円の認定を受け、特別災害立法の適用を受けて九〇%の補助率で昭和二十八年九百万円、残りは二十九年に受領した。当時の人夫賃は三千円、馬持ち人夫賃は一万八十円であった。更に二十九年も工事を継続して雪融けを待って農道、用排水路を施設して農作業に間にあわせることが出来た。

一切の工事が竣工したのは、昭和二十九年六月二十五日で、内大部ダム決壊跡地で時の北海道開発政務次官玉置信一代議士の臨席を得て、各関係機関共催で行い、久しぶりに被災者の笑顔が戻ってきた。

(川口 外三郎)

*内大部ダム復旧工事には、町村合併の後遺症から内部告発があつて、会計検査員が翠月旅館に陣取り、伝票一枚にいたるまで確認されたが、幸いに上士別村が廃村したために追求の手が中断され、詫状で事なきを得たと伝えている。



私の結婚式

私が十九歳(昭和二十五年)の夏に、無理に進められて見合いをしました。

農家育ちの私は、仲人に「遠いところご苦労様でした」と、挨拶しましたが、当の相手には気恥ずかしく、うつむいたままで顔を見ることも出来ませんでした。結婚する意思も無く、仲人に義理を立てた見合いでしたが、数ヵ月後に「結納と結婚の日取りを決めた」と叔母に告げられてびっくりしました。

夜も眠られずに、この縁談を断わるように頼みましたが、叔母は「結納は倍返しだ」と脅かすのです。その数ヵ月後に、近所の人を招いて結婚披露宴をしましたが、前日から家の中は大騒ぎです。障子をはずして座敷を広げたり、料理をつくつたりお膳の準備をしました。私は決心がつかずに逃げだす機会を狙っていました。

当日は、箱馬櫓に乗せられ遠い市街まで、仲人の奥さんに付き添われ髪結いに出掛けました。どうした訳

か着付けの最中に生理が始まったのです。振り袖の花嫁衣装に身を包みながら悲しくなるのです。そのころは留袖が普通でした。

支度が整うころ結婚相手が見えて、近くの写真館で記念撮影をすることになりましたが、角隠しが邪魔して相手の顔が見えません。写真を撮り終えると一旦家に帰り、昼食を済ませてお婿さんを迎えに出掛けるのです。

お嫁さんは仲人夫婦を入れて奇数の人数で行くのが習慣でした。先方に着くと、大勢の人たちがお膳を並べて、賑やかに立ち振る舞いの用意をしていました。座敷の中央に座らされた私は、祝宴の終わるのをいまいまかと待ちました。足は痺れ頭は重く垂れてくるのです。

立ち振る舞いが終わると、お婿さんの荷物を馬櫓に積み、私は箱馬櫓の中ですが、暖を取るのに湯タンポをいれ、赤い角巻に包まれて、雪道が悪くひっくり返りそうな不安でいっぱいでした。

家に着くと、お嫁さんを見ようと近所の人が大勢集まっていました。仲人の奥さんに手を取られお婿さんの後から家に入りましたが、何故か悲しくて涙を流す私に、奥さんは「十年辛抱しなさい」と慰めながら涙

を拭いてくれました。

三三九度の杯を交わし、挨拶、祝杯、と宴はたけなわになるのですが、私はお客様一人一人に酒を酌してご挨拶をし、それが終わると割烹着に着替えて新郎も新婦も疲れるばかりでした。結婚の記念写真は写真屋の失敗で、真っ黒でしたが離婚もせずに、いつしか夫婦とは思えないものと思っています。（高橋 みち子）



馬櫓に乗った花嫁さん（北海道新聞社提供）

アスパラガス

アスパラガスの缶詰工場として馴染みの深い、デイジー食品工業(株)土別工場は、市内の数少ない有望食品加工製造工場として、農業振興及び女性の雇用確保の上から大きく役割を担ってきた。たおやかな女性の指を連想させるホワイトアスパラや、近年益々盛んになってきた「ふるさと宅配便」のグリーンアスパラ等、寒冷地作物として安定している。

アスパラガスの缶詰生産が開始されたのは、土別市誕生の昭和二十九年からである。翌三十年は、安定した作付面積から早くも本格的缶詰生産が軌道に乗ることとなった。

終戦直後の昭和二十一年当時の、農地解放後の自作農維持安定につき各農業指導機関や行政が、その方策を模索していたが、何よりも地元農作物の加工事業の振興を図るべきとの構想が打ち出されると共に、道北の寒冷地帯に適合した農作物の安定生産による農家経済の振興が重視された。それとともに、敗戦の結果各

種国策による軍事関連工場の閉鎖が相次ぎ、各地に存在する遊休工場の活用、再開が求められていた。

折から、土別地方で生産される馬鈴薯澱粉を原料として水飴を製造していた「荒生産業」が昭和三年東京転出により工場が閉鎖された。この工場跡の再開発について地元が検討した結果、所有権者の三井不動産とアスパラガス促進期成会ならびに関係者による協議がなされた。三井不動産は、地元の熱意に応えて製飴工場跡を、アスパラガス加工工場として再スタートさせることに決したのである。

一方、自作農安定策について、具体的手法について当時の農地委員会笠井庄太郎会長を中心に農地委員会及び農業団体関係者による協議が進められた。土別地方で生産可能にして耐寒性に強い特用作物としてアスパラガスに着目され、その栽培と加工事業の導入に焦点が絞られた。更に具体化のために、昭和二十四年土別町農地委員会が主体となって、町及び関係者等による視察調査を行うことになり、後志、胆振方面のアスパラガス先進生産地、戦前からの加工生産工場のカレードル興農(喜茂別)等現地訪問を実施した。翌二十五年には国内におけるアスパラガス栽培及び加工の創始者として著名な下田喜久三農学博士(岩内在住)

を招いて現地調査を願った結果、士別地方はアスパラガスの栽培には土壌ならびに気象条件など最適地であるとの折紙がつけられた。これらの情報は、地元農民から期待されることとなった。時を移さず、士別を中心とする近郊九ヶ町村の役場と農協及び関係者によって「宗谷沿線アスパラガス事業促進期成会」が結



当時のアスパラ工場

成されたのである。結成後直ちに、期成会が主軸となって生産企業の誘致、耕作者の普及啓蒙に積極的活動が展開された。昭和二十六年に入り、早速佐藤矩農地委員にアスパラガスの種子購入を委ね、喜茂別のクレードル興農及び同地アスパラガス耕作組合と交渉を重ね、難行の末ようやく翌二十七年春に至り、待望の種子、四ヘクタール分四石を確保することができた。種子確保により耕作者の希望を募ったところ、農協や行政からの強いPRが行き渡り、士別町で三町歩、その他の町村で一町歩、計四町歩余の希望となり、種子に不足を来たす程となった。士別町として、初めての試みに確かな手応えを得て、理事者は議会答弁でも胸を張った。

片や、会社設立に当っては、旧飴工場の所有者である、三井不動産がアスパラガス缶詰工場として活用することで計画を進めており、昭和二十六年八月には会社設立の気運が高まり、翌二十七年五月、三井不動産、第一物産、大洋漁業及び士別の各農協からなる出資金二百万円によって「北日本農産工業株式会社」を創立した。取締役社長には三井不動産の江戸英雄が就任、地元からは笠井庄太郎農委会長、山田和一郎士別農協代表等が役員に名を連ねた。本社事務所は東京三井不

動産内に、士別工場事務所は、士別農業会館内に設置して事業がスタートした。事業内容は、アスパラガス及び食品加工原料の集荷、製造、販売、原料確保のための奨励、普及活動などであり社員、臨時を含めて五名のスタッフによって操業開始に向けて、士別工場のスタートが切られた。地元士別町はもとより、関係町村は寒冷地農業の安定確立への期待と、工業生産の前途に対する希望が大いなる勇気を与えた感があつた。

敗戦後、工場閉鎖が相次ぎ経済界の沈滞空気を払拭するに足る企業誘致といえる。道内唯一のクレードル興農喜茂別工場に次ぐ、二番目のアスパラ缶詰製造工場が士別で実現するとあつて、市街商店街をはじめ、全町民挙げて大歓迎を受けた。殊に水田面積の少ない剣淵町は、広大な泥炭原野の土地改良、基盤整備を行ない、耕地の拡大に結びつけてアスパラガス耕作への夢は大きくふくらんでいた。

しかし、工場建設に当って予定地の地質調査を実施した結果、地下水が工業用水として不適であることが判明した。町をはじめ関係者は急拠新たに工場立地箇所を選定せざるを得なくなった。再検討するうちに、旧アサノセメント工場跡が候補地として浮上し、これに白羽の矢を立てて用地確保に奔走した。軍需産業と

して工場疎開の観点から国策によって設置された工場であつたが、閉鎖後の所有権者が転々として、戦後工場再開に向けて町を挙げて運動を展開したが成功に至らずにいた。セメント工場再開発断念後、新たに木材防腐工場建設に傾き土地所有権も最終的には木材防腐工場関係に移つていた。一部社員住宅は、住宅組合の管理下にあるなど複雑で、町や議会などが苦勞の末に工場用地と一部社員住宅の買収に成功、操業開始に向けて本格的な整備が開始され、昭和二十九年に試験操業、翌三十年から本格操業に漕ぎつけることができた。

初年度の生産量は僅かに五十六箱、生産者は三十戸で、作付面積三町歩であつたが、この年、既に「アスパラ士別」の銘柄でヨーロッパに輸出している。

アスパラ缶詰工場操業開始にともない、それまで事業創設のために協力を行つてきた「宗谷沿線アスパラガス事業促進期成会」が、昭和二十九年六月七日町公民館で、事業報告及び昭和二十六年から、二十八年までの収支決算報告、負担金未納分の処理、会社出資の未納分の処理、会社側よりの陳情内容、工場財産に係わる固定資産税の減免等について報告が行われた後、当日を以って促進期成会の解散を議決し、直ちに解散式が行われた。

(数中 寿治)

鑄物工場

敗戦によって国民生活は衣食住の耐乏が強いられた昭和二十年代、日常生活の衣食はほとんどが配給制度となった。主食の米をはじめ食糧・衣料品・生活関連物資は、すべて国の方針によって地方の行政機関を通じて各町内会や隣保班に配られ、抽選などによって各家庭に当たった。なかには品数が少なく外れる人もいたが、主食の米やタバコは量が少なかったものの全戸に配分された。

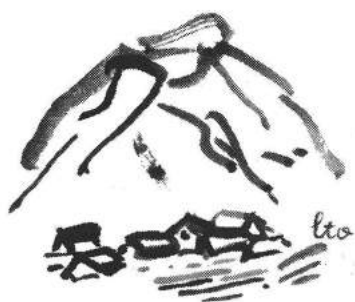
こうした物資不足のなかで昭和二十年の終戦の年、当時としては土別近郊でも珍しい「鑄物ストープ」の製造があった。工場は市内西四条十丁目の故北村順次郎氏宅のある場所で、外地からの引揚者など約四十人ほどが働いていた。会社名は「北海道鑄造鉄工場」で故赤岡豊さんが社長、下野政勝さんが専務に、このほか故森実易逸さんが監査役、また故丸山一郎さん、故武田仁四郎さん、故道端広治さんらが株主として名を連ねていた。また現北振運輸会社の会長池尻文雄さ

んが事務員として勤めていた。同鑄物工場は札幌に同系列の工場があり、ここの疎開工場で最北の工場（当時は永山にも工場があった）として上川支庁からの要請で地元資本により設立されたもので、また釧路川の砂が鑄型を作るのに最適であったことも工場立地に適していたという。工場は終戦の二十年に設立され、翌二十一年から操業開始となり、直径九寸、一尺、一尺二寸の三種類を製造した。原料の銑鉄は室蘭の鉄工所から毎日平均約二トンほどが貨車で土別駅に送られて、日通が馬搬で工場へ運んだ。外地や本州からの引揚者が多かった従業員だが、なかには軍隊で威厳を誇っていた軍人も上下の差はなく軍隊での階級は何んの役にも立たず、全員同じように汗を流しストープ生産に力を入れていた。

完成した商品は上川支庁や役場の指示によって各町村に指定した金物店を通じ、各町内会での抽選などによって配給された。この鑄物ストープは石炭、マキなど何でも燃やすことができ便利で、当時は石炭が思うように手に入らず、マキ、雑把類などが投込み式で燃やすことができ重宝がられたという。またストープは厚味があり、一旦暖たまるとなかなか冷えないので、その余熱は大いに燃焼不足をカバーしたという。同工

場では本来のストーブ製造のほか、他のストーブ用（ノコクスストーブや石炭専用ストーブ）のロストルや農機具や各種機械類の歯車や、ベルトをかけるブリーなど部品類も製造、連日フル操業を続けていたが、世の中が安定のきざしが見え始めた二十五年、多くの生活物資が統制解除となり、配給制度を頼りにしていた同工場は閉鎖することになった。またこの頃になると本州製の薄手で生産された高級品？が出回り、士別産の鋳物ストーブも終止符が打たれた。

（池尻文雄氏談 藪中寿治）



農業の危機に対処

士別農業防衛同盟を結成

水害・冷害が続く政治的悪条件における農業危機に対処し、打ち続く農家経済の立直しを図ろうと士別市に「農業防衛同盟」が組織され政治活動を中心に運動が展開された。

これは二十八年の大雨による内大部貯水池決壊、二十九年の冷害と干害等の連続被害による農業経営の難局を合法的に廃除し、農民生活を積極的に防衛しようとするもので、七月二十三日公民館（旧公会堂）で大会を開催し役員選出、組織目的などについて決めた。

大会で委員長に品沢竹司氏、副委員長には金井直氏、書記長に志田正光氏、常任執行委員に平野厚美氏外九名が選任された。この同盟組織は士別市内に居住する農業者およびこの目的に賛成する一般市民をもって構成員とするもので、その目的行動は次の通り。

一、目的貫徹のための運動とそれに付随する社会的・政治的活動

二、労農及中小企業との提携による健全なる農村“士別市”の建設

三、低位生産、単作地帯の農業経営維持のための諸施策実現の要望

四、税負担供出割当等の公正均衡化その他の諸活動
五、農村民主化のため教育文化活動、戦争反対のための平和運動の推進

六、その他農民運動の一環としての諸活動等

なお同大会の終了後、初の士別市長選には立候補が予定されている前町長の佐々木良五郎氏を推薦することを決めた。

(藪中 寿治)



初のドックレース

近郊村など四〇頭が出場

士別地方で初めての“ドックレース”が二十九年三月十四日に士別小学校前庭（現大通り北一丁目付近、旧士別小学校）で士別町内をはじめ近郊村などから約四十頭の名犬が出場、重量ごとの各レースに人犬一体となつて熱い闘いが展開された。同ドックレースは士別畜犬協会と道北新聞社が主催、道北新聞社が創刊五周年を記念しての行事で、士別地方でこれまで例のない行事だけに畜犬家をはじめ地域住民から大いに人気を呼んだ。

レースは仔犬の部（六ヶ月未満）四百メートル、八百メートル、重量三十貫、同五十貫、耐久レース、お好みレース、三頭リレーの八種目、出場種目は自由（但し三回まで）出場犬は犬体によってハンデを付ける。入賞犬には三位まで賞状と賞品（市内商社提供）がある。レース当日はこのシーズン最悪の天候となり、猛吹雪の中で開催されたが、町はじまつて以来の大競走

とあつて多勢集まつた歓衆も「ポチ頑張れ」「クロ負けるな」とレース場は喧々ごうごうとにぎやかに行われ、なかには主人の知らぬ間に家路へ、また血を流してケンカする犬、走路をはずれて暴走する犬など楽しい冬の日だったようだ。

（藪中 寿治）

剣淵へ定期バス

士別から上士別を経由し剣淵を結ぶ定期バスが、二十七年六月二十一日から運行開始となった。バスは一日三往復、士別軌道が地域の要望に応えたもので、まだマイカーが普及されていなかった時代だけに大いに利用された。

士別地域の背面地帯として緑の樹海をなす森林資源、肥沃広大な農耕地を擁している上士別、剣淵の両村の発展は時代の進展と共に伸ばされた開拓への触手によって真に目覚ましいものがあり、村民の協力融和によって理想的農村を現出し、農業に林業に生産は年と共に増産の一路をたどり、一方、教育文化施設の面も

整備されて村民生活の福祉も増進されつつあるが、両村間を結ぶ交通連絡の便を欠き、かねてからバスの運行が両村から熱望されていた。

バス運行は士別発、上士別を経由し川南十六線九号から和寒村と上士別村との境界「上士別峠」を越え和寒村東和を経て桜岡貯水池から剣淵村に入り国道に出て剣淵橋を通過し駅前へ。同ルートを一、二、三往復するが、士別の始発は午前五時三十分、剣淵には午前八時三十分と約三時間。このあと士別発午前十時五十分と午後三時十分の三便。剣淵からの始発は午前八時四十分、このあと十二時四十分と午前六時二十分で最終便の士別着は午後八時。

同沿線には南沢地区開拓や和寒村東陵地区開拓地があり、両地区とも経済圏は剣淵村と上士別村であり、日常品の買出しや所用にと利用されていた。この定期路線バスもマイカーの増加によって次第に乗客も減少し、昭和四〇年代には運行が停止された。

また同時期に旭川一名寄間の定期バスを運行している道北バスが士別に営業所を開設し、士別軌道の上士別經由剣淵行き開設に呼応して、現旧国道（當時は国道）を路線に一日一往復のバスを運行を六月二十一日から開始した。

（藪中 寿治）

森永乳業と提携

中士別酪農組合が働きかけ

戦後復興の農業経営に、酪農が大巾に取り入れられ、米どころの水田農家も軒並みに乳牛飼育が経営に取り入れられ、稲作と酪農の兼業農家が増加した。士別市が誕生した昭和二十九年前後には、牛の飼育農家はピークを迎え、牛を飼っていない農家がないほどにまで普及した。多頭飼育ではなく各農家は一―二頭、多くて五―六頭を飼い、栄養源としてその生乳、加工品の還元バター、堆肥生産など有益な農業経営の典型とされてきた。

こんな中で士別地方は北海道バター会社が集乳所を設け生乳を集荷していたが、特に中士別地区は牛の飼育頭数も多く、良質な原料乳の生産も当然多くなっていた。こうした状況から同地区の生産者は単に生乳を販売するだけにあき足らず、自分たちの手でバターやチーズ、練乳などを加工生産し販売すれば農家の所得も増加し、新たなオリジナル製品も生産販売できるしと、

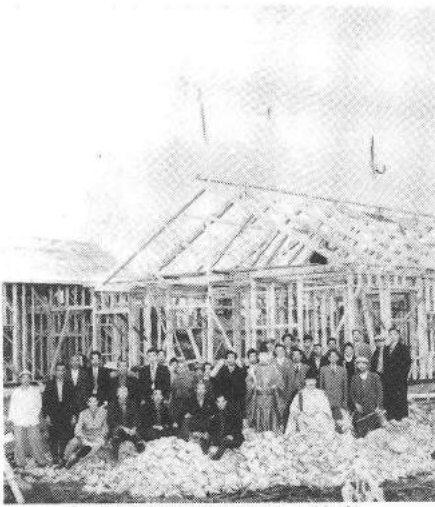
酪農家の夢を実現させようと中士別地区の乳牛飼育農家が昭和二十一年に、中士別酪農協同組合を設立、地元の中士別七線に工場を建設し、バターの生産販売を開始した。いま風の「一村一品」手づくり商品だった。

だが生産者の生乳生産意欲が次第に高まり集乳量が増加、中士別のこぢんまりとした工場では手狭になり二十七年十月、士別市内の西三条六丁目（現みしま西店）に用地を求め工場を新設、組合の組織も改正し「道北酪農協同組合」に初代代表・高田一郎氏として、資本金百六十五万円に増資し再スタートした。工場が新設拡大されたため、これまでのバター製造に加えて練乳製品も生産開始、生乳の集荷も中士別地区だけでは足りず全町から集める様になるが、すでに北海道バターが集乳所をもって集荷しており、容易に生産者を転換させることはできず縄張り争い、生乳の争奪合戦が各地で見られた。この集荷合戦は士別だけではなく、後日は釧路、和寒、朝日、名寄、智恵文へと広がって行った。こうした中で乳価の引上げ問題が生産者にとつて最大の関心事となっていたが、乳製品の市場不況となり同組合の経営は悪化の一途をたどり、大巾な赤字累積となった。

このため組合で協議を重ねた結果、国内大手の乳業

会社である森永乳業に経済援助を求めることになった。すでに工場建設、バター、練乳の納入などで森永乳業の援助、業務提携があることから、全面的な経営委員は各種条件などを含めスムーズに進められ、その第一段階として森永側との話し合いで同組合が援助を受け入れることになり、同社は一部出資し昭和三十年三月一日資本金を三百万円で道北乳業株式会社を設立し、再スタートを切り森永乳業から代表支配人が出向、同社を管理することになった。

この間士別市議会では森永乳業との提携について種々検討協議が行われ、また企業誘致として働きかけ



道北酪農協同組合の上棟式

を行っていた。こうしたことから同会社では、必ずしも経営内容が好転せず、生産者側代表が経営を全面的に森永乳業に委譲することが得策として、この旨を三浦満吉市長に説明し協力を要請、市も森永乳業に委譲することが最善の策として市議会に諮り代表者を森永乳業に派遣し、また森永側からも重役らが来市し具体的な話し合いが進められた結果、道北地域に同社の拠点工場として操業することとし、急速に実現する運びとなり、昭和三十二年二月末をもって道北乳業の事業を廃し、三月一日から新たに森永乳業士別工場として操業開始となった。士別市をはじめ近郊市町村で北海道クロバー乳業（現雪印乳業）との集乳合戦が展開された。

その後集乳合戦がエキサイト、雪印乳業のおひざもとの（浜頓別に工場）中頓別、枝幸、歌登などで牛乳の争奪戦が演じられ、森永乳業は中頓別に工場を建設、士別工場の副事業所として操業を開始、同事業所から士別工場に生乳を転送したこともあるが、時代の推移か、士別工場は四十七年に閉鎖された。また、雪印乳業士別工場は森永工場より早く四十三年に閉鎖され、生乳は名寄や興部の雪印工場に運ばれ処理された。

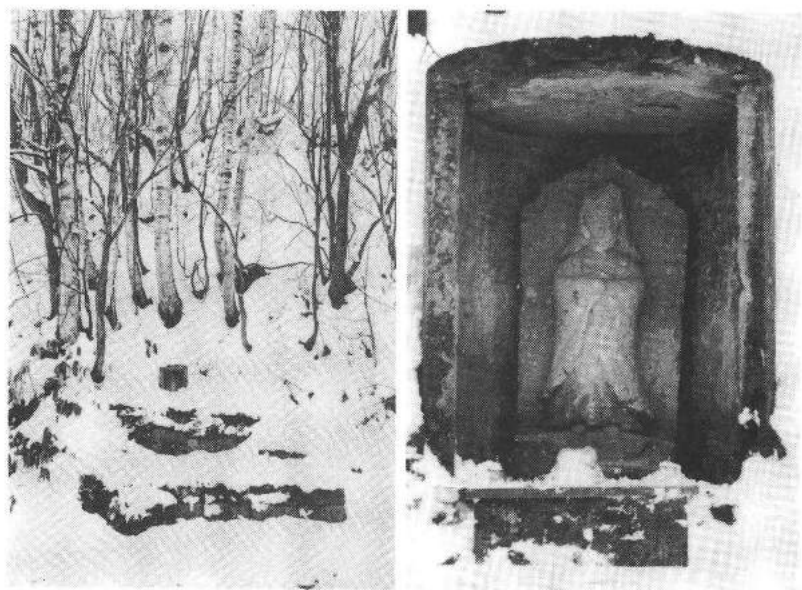
（藪中 寿治）

原の坂の地蔵

士別市街地から中士別、上士別方面に行く道々に、士別と滝の上線の東山峠付近（昔は原の坂と云っていた）を中士別側へ下る途中の右側山沿いに、古くから「地蔵」が祀られており、今も夏には献花や線香、お参りが絶えることなく続けられている。だがこの「地蔵尊」誰が何時頃、何の目的で設置したのか市内の古老に聞いても知る人がいない。この地蔵は昭和三十年代に現在の道々になる前は、道路がもつと山際にあり、地蔵のそばを通っていた。その頃は地蔵の台座付近から地下水が湧出、前部にあったコンクリート製の受桶に清水がいつも溢れるように出ていた。

当時はまだ馬搬が多く、この峠の登り下りには馬の小休止にこの湧水を飲ませ、また馬主も喉を潤おし、最後のがんばりに、また中士別、上士別方面へと張り切ってスタートを行なった。だが地蔵の由来は今もって知る人がいない。

この地蔵設置についての一説では、現中士別橋（中



原の坂の地蔵さま

央橋）付近で橋ができるまで“渡船”をやっていた原忠吉氏が、中士別方面からの馬搬が苦勞して急坂を登って行くのを見て、その休憩所にと設置したのではないか、またこの坂で何らかの事故があり、その靈を慰さめるためと交通の安全を願つてではないかと言う。

この坂道を近年まで“原の坂”という名で親しまれてきた。原渡船場は天塩川の中士別四線に明治三十四年開設された。士別と上士別間の交通要所として人馬の交通量が多く、当初は船のみで渡していたが、間もなく板橋を架けて通行料を取るようになった。川は雨などで増水することも度々で、その都度板橋と橋桁を取りはずして陸上げして安全を図り、その間船で渡していたが、大正三年に木橋が完成し廃止となった。こうした原忠吉氏の事業に関連し、交通の安全を願つての地藏設置だったかも知れない。余談だが、この原の坂に戦後の二十四～五年から三十年代の中頃まで“峠の茶屋”があった。パンや駄菓子、ラムネ、アイスクリームなど売られており、ここを通る馬追いさんや、自転車での人たちが行き、帰りに寄つては一息入れていた。

（藪中 寿治）

町立病院が全焼

入院患者は無事に避難

旭川以北で唯一の総合病院として近郊からの患者も多く療養していた町立病院（笠松繁雄院長）が二十八年七月二十一日未明、同院の炊事場付近から出火、木造トタンぶき二階建て一、〇八〇坪（約三、二七二平方メートル）を全焼、さらに隣接の住宅二〇坪が類焼し、午前五時半頃に全面鎮火した。この火事で入院患者九十九名は無事に避難し、死傷者は出なかった。

損害は約一億四千万円となった。出火の原因は、消防の調査で炊事場近くの貯炭庫に入れてあった石炭が自然発火したものとみられている。さすがに道北唯一とその偉容を誇った建物も一瞬にして灰じんと化した。この日、満天下を覆う火が折りからの風で、大きな火の粉が停車場通りをおそい、類焼をのがれようと付近一帯の商店街らいち早く避難を開始、火事を知つてかけつけた町民らによって家財道具の持ち出しが行われ、停車場通りは大混乱、就寝間もない時間とあつ

て寝巻姿のまま身の回り品などをはじめ手当り次第に外へ運び出された。

折も折、前日士別で三年振りに羽黒山、吉葉山一行一五〇人による大相撲が九十九グラントで開催され、数軒の旅館をはじめ民家に宿泊中であり、火事発生と同時に荷物の運び出しに協力、人並み以上の力をもつて近くの丸武公園等に次々と搬出され、大きな効果をあげた。幸にも消防の手際よさから類焼は隣接の一軒だけで事なきを得たが、この時の力士たちによる協力は町民から深く感謝されていた。

この時、病院の患者は付近の民家など随所に収容され全員無事だったが、町では即刻旧公会堂（現商工会館の場所）と旧荒生産業の工場（東四条八丁目）を病棟に改造し患者を収容、旧公会堂での診療が開始された。また建築途上にあつた看護婦養成所を旧市立病院（東六条八丁目）に移し各科診療室に充てた。

火災直後に緊急町議会（二十五日）が開かれ、先に道への災害報告と今後の病院復旧対策について道との協議結果から、道、国などの起債、補助などの財政措置による復旧計画が樹てられ、二十八年度から二カ年計画で東六条七丁目に敷地を確保（旧市立病院跡、現中半産業）約一億四千五百万円を投じ旭川以北最大の

偉容を誇る総合病院を建設し、地域医療の拠点施設としてその威力を発揮した。

だが、ツキがない時には不幸が重なるもので、新病院完成間もない三十年一月二十九日、第一病棟から出火、同病棟と診療棟、管理棟の内部を焼失した。この時も幸いに患者の事故はなく、全員無事だった。早急に復旧工事が行われ、その後患者増に伴い増改築が行われた。

（数中 寿治）

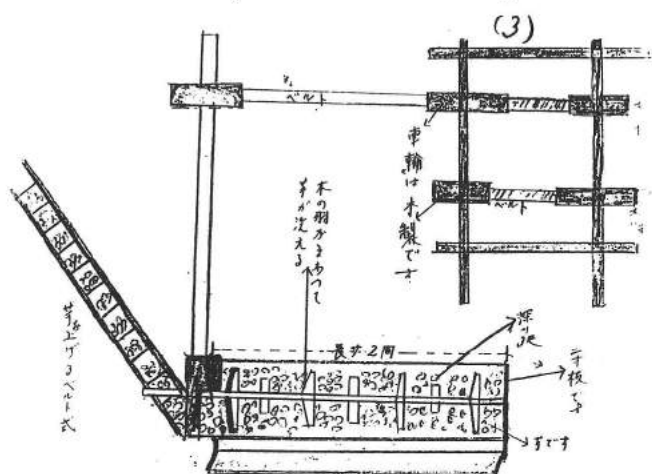
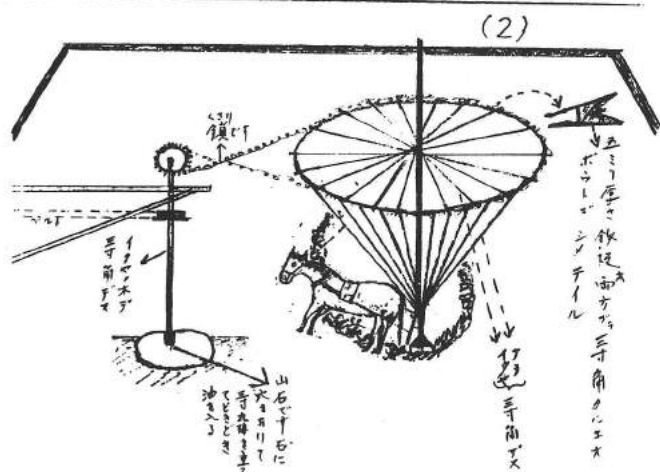
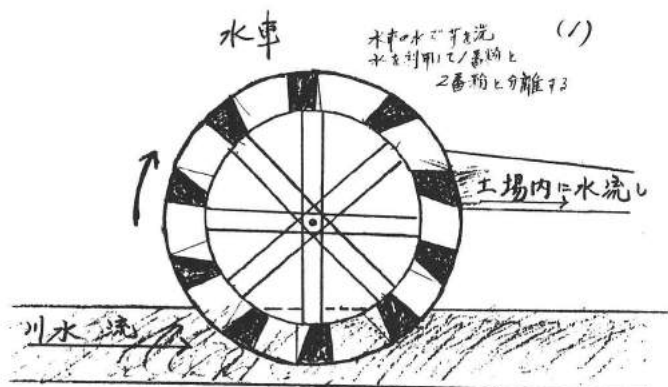


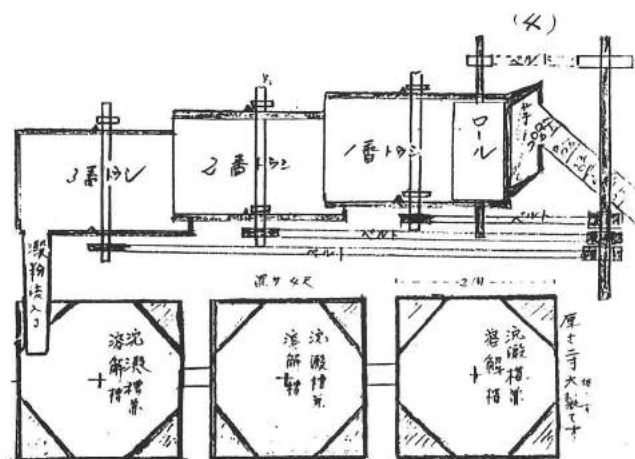
町立病院

馬の力で澱粉工場を動かす

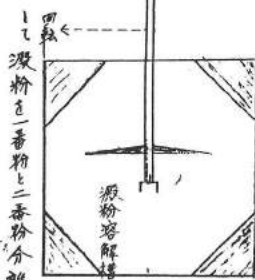
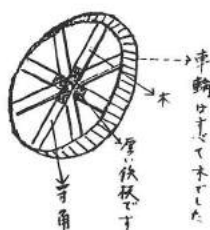
私の祖父敬作は、明治三十三年に新潟県から下土別に移住し、最盛期には五十五畝の馬鈴薯畑を耕作していた。

最初は、自給自足の澱粉工場だった。この図は正
時代の私が子供のころ、うろ覚えに記憶している澱粉





工場を凶解したもののだが、よく馬の後の水を追いかけて叱られたものだ。そのころは下士別の谷地の水もきれいで、水はほとんど自然水を使用していた様子だ。私が母に手を引かれて士別祭りによく来たが、どこまでも薯の花が咲き続いて、それは見事なものだった。



収穫期になると、畑には五俵箱が備えてあって、それにやまに薯が入ると次に移し、馬追いはその五俵山を数え、薯カッチャと呼ぶ熊手のようなもので、金網の箕に入れ、馬車箱に十五俵から二十俵ぐらいを積んで工場に運んでいた。雨の日などは薯を入れた箕を抱え、馬車箱に差し上げる両腕から水が脇の下に流れ込み、馬も人も泥水ですぶ濡れの有り様だった。力仕事だからご飯も驚くほど食べたものだ。

工場を動かすのは馬で、常時三頭の馬を飼育していたが、工場が動くようになると、近所の農家の応援を頼んでいたようだ。のんびりした時代で、夜になると工場の仕事は休んでいた。職工さんは、ニシン場が暇な時期なので、留萌や小平の浜から来ていたが女の人達は乾燥場でよく働いていた。濃粉の出始めのころは、立派な木箱に詰めて出荷していたが、量産するようになった大正二三年ころから布袋入れになったと聞いている。その後、大正九年ころから濃粉が

大暴落して水田の時代に入り、大正十二年には下士別にも土工組合が出来て、動力も水車に替わり、やがて焼き玉エンジンになったが、エンジンがぐれて父親が苦勞しているのを覚えている。

昭和十八年、私は軍隊に応召して、終戦後は川西で農業をしていたが、昭和二十四年請われて下士別の共同澱粉工場を引受けたが、昭和二十九年の洞爺丸台風で工場の屋根の桁が丸裸にはがされ、佐藤与吉さんから桁を五百束譲ってもらい応急処置をしたが、大変な被害だった。

昭和二十八年、薯運搬の馬も少なくなり、トラックを二台購入して薯運搬したが、士別にも軌道会社の他には、街に四台ぐらいいしか自動車のない時代だった。

昭和三十八年まで操業したが、すでに合理化工場の時代が到来していたので、現在の自動車整備工場に転業した。

(小林 秀雄)

踏査探検隊 熊に襲わる

昭和二十五年、二級国道指定に刺激されて、当時の町理事者・町会議員が一隊となって、士別から苫前まで、歩いて二・三九号線を踏査探検した。今も鑿鏤（かくしゃく）としてゐる「隆士会」の面々である。

第一日はゆっくりと霧立峠を越えたあたりで野宿、次の日は少し速度を上げないと予定の時間までに着かないぞと、急ピッチになる。総務常任委員長の通称『熊さん』こと佐藤熊三郎さんは、大柄ではないが脚力は抜群、一行をどんどん抜いて先頭に立つ。ところがどうしたのかどう道を間違えたのか、一行がなんば急いでも探しても佐藤さんが見つからない。心配していると、誰かが先に行く佐藤さんを見つけ「熊が居た」と後方に叫んだ。すると二番目が「熊が出た」と伝達した。今と違い当時は原始密林の深山である。一同の慌てかた、心細さは如何ばかりだったか。後で大笑いしたというが、氣骨逞しい時代の逸話。(早川 富来)

士別市誕生の夜明け

市制祝賀
假装行列



対談 合併当時のことなど

前士別市長

國井 英吉

元士別市議會議員

品沢 竹司

郷土研究会々長

荒木 正一

町村合併の背景



品沢 この度、士別市郷土研究会が市制施行を柱に、終戦ごろから昭和三十五年ぐらいまでをめぐりに「新士別よもやま話」を編むことになりました。前市長の國井さんには上川支庁時代に、直接士別市の町村合併を担当されたわけで、当時の思い出ばなしを伺わせてください。

ご存知のように、町村合併の法律は昭和二十八年五月、第十六国会の参議院の議員立法として提出され、衆議院で一部訂正して成立した。この法律の趣旨は、戦後新しい町村の制度改正になりましたが、当時全国の町村は小さな規模で財政基盤も弱く、新しい体制を実行するには適切でなく、町村合併をして規模を大き

くする方針でした。

当地でも士別町、上士別、多寄、温根別の三村と合併して士別市を設立しました。先般も、合併で苦勞された議員や職員の方々にお集まり頂いて座談会を持ちましたが、上川支庁の行政の立場で、ご指導された肩の凝らない裏話を聞かせてください。

当時士別でも合併促進協議会を、議会とそれぞれの団体の代表の方で構成し、分担をして上士別、多寄、温根別と合併を促進しました。そこで一番困ったことは、温根別が財政的に問題があるとして、上士別と多寄は温根別を抜きに合併を議決してしまった。温根別はそれより先においていかれては困ると、四ヶ町村合併を議決したのです。中心の士別は非常に困って、その対策に翻弄されたのが実態でした。



國井 私がちょうど、宗谷支庁から九月末に上川支庁に来ましたが、最初の仕事が管内の町村合併をどのように進めるかでした。

まあ周囲の状況から話しますと先ず旭川をどうするか、管内の合併計画を立てました。旭川はとりあえず神居と神楽を合併させよう。士

別の合併は当時二案がありまして、一つは剣淵と温根別、もう一つの案が朝日、上士別、多寄、士別でした。そのころ風連が力がありましたから、名寄と智恵文、美深の三町村合併、中川と音威子府は離れていて合併の意味はないと除外したわけです。富良野線は、富良野と山部、東山を合併して市制を施行しようとの計画案でした。

ところが剣淵も弱い所だが、地縁が近いといっても温根別との合併では意味がない。朝日はどうか、上士別から分村して町も新しいし、西部の街のように木材景気でどんどん伸び盛りにあった。充分独立してやっていけるだろう。温根別は士別に、美深を除外し智恵文は名寄にとしたわけですが、その中で一番苦労したのが士別でした。

合併説得に乗りだす

先の話になりますが、愛村同志会とか青年同志会があつちこつちに出て来て、上士別は強行でした。多寄の古市村長は病氣入院中で、助役の岡田さんでは話がまとまらない。私は三十数回士別に説明説得に來ました。合併反対派の人達は駅前の両国屋に結集して氣勢を挙げている。士別の意思は固かったが、上士別は反

対の機運が強く、三輪さんと言う人がおりましたね。

それに岡崎医院のお医者さんはまだ三十代の血氣盛りで、そのお母さんが傑物でした。ね「夜討ち朝駆け」といいますが、早朝に出掛け、岡崎医院の二階の高い天井の広間で、合併の説明をするのですが両論でまともならない。先ず、岡崎医院のお母さんを説得したが頑として譲らない。だんだん話をしていくうちに温根別を除いたら合併してもよいと雰囲気が変わってきたのです。その事情を踏まえて温根別に三回通いました。

最初ね、私と一宮総務課長と温根別に行きました。温根別は「何も好んで合併することはない」と言う構えでした。

品沢 みんなに嫌われているもんだから

國井 会場が小学校の教室で、福岡さんをはじめ入り切れないぐらいに大勢集まっていました。合併対策協議会も出ていましたし、あのころびつくりしたのは、あの小さい村でマイクロホンを持っているのです。それが発言者の前に備えてつてあるのです。説明に立った一宮課長（後年黒松内村長）は、記録をとられると思つて頭にあることが口ででないんです。

ちよろちよろしちゃつてね。私は七条さんに「こういうマイクなどがあると、充分話を尽くせないから取

り払って下さい」と言つて、撤去させてから説明をするといった状態でした。温根別は青年同志会の人達が理解を深め、村全体で合併しようとなりました。ところが上士別と多寄は依然として三ヶ町村を主張するわけです。

当初、合併の議決は一町三村が同時に議決することのなつていたのですが、七条さんは周りの空気が穏やかでないものだから、一日早く（三月二十九日）に温根別は四ヶ町村の議決をしてしまつたのです。その翌日に上士別と多寄が、一町二村の議決をしたものから大騒ぎになりまして、翌日、七条さんをはじめ村会議員や青年同志会の人達ら上川支庁に押しかけて来たのです。支庁の部屋では対応しきれずに、隣接の農協の広間で支庁長（木村元市長）が対応に出ましたが、そのときの七条さんは目をつりあげて物凄い形相でした。そこで「合併は止めた、東京へ行く」と言いだしたんです。ひとまず保留して、こんどは私と道庁の合併担当の係長と士別へ出掛けました。

そのころ私も若かつたし、士別の議長と副議長を呼んで「何やつているんだ」と食つてかかりました。佐々木町長もほとほと弱つて、元に戻すのは容易でないが「これから上士別と多寄に行つてくる」と出掛けたの

です。私達も行きました。真剣に説得をしてようやく納得を取り付けて、一町三村の合併にこぎつけたのは三月もとうに過ぎていました。

品沢 士別では、三町村合併の議決はしなかつたと記憶していますが、

國井 本当かい。

品沢 温根別は先に議決した。上士別、多寄は三町村合併を議決した、そこで士別はどうする。体制は最高議決機関が決める。それをひっくり返す訳にはいけない、協議会で議決したんですね。

國井 そこで、三町村で合併協議会をつくつていました。だから、その人達に公会堂に集まつてもらつたのです。もう一度考え直してくれとね。そのときに反対論議をしたのが、多寄の野原浅吉さんです。だが、ここまできたのだから一町三村合併をやろうとなりました。ところが、野原さんは終わつた後「何でいまころこうなるんだ」と私の前の机を叩いて迫るんです。気の強い人でしたね。凄かつたです、剣幕が。

品沢 当然です。中多寄ですもの。

荒木 当時の新聞を見ますと、三町村の合併議決は温根別が遠過ぎるので、市街形成の連担が五十%を割る薄いものになつて合併が法的に難しくなる。そこで止

むなく三町村で合併するのだ。と書いておりましたが。**國井** あのところは初めてのことですし、適応が実情に合わせて変わっていったことも事実です。その後、士別が中心になって三村の議員さん達がぐっとまとまりましてね。上川全体として合併計画案を発表したのは二月ですが、美深の久富議長がいきなり私に「中央から来た若造になに分かるんだ」と言うのです。私は「田舎育ちで最近に稚内から上川に来たばかりだ」と答えてから穏やかになりましたね。第一回目の説明会は波瀾万丈でした。

裏話と言えば、私達は三浦旅館に陣取ってあっちこっちと飛び回っていましたが、多寄では東武さんが論客でしたね。あの方は合併推進論者で積極的に発言していました。

それから、上士別の議決にも私が立ち合ったのです。心配でしたから、合併が議決したとたんに反対派の人はウワーッと、氣勢を挙げて総立ちになったのです。そのときに前川議長と中田村長が裏の階段からダダッと駆け降りました。

合併議決後のもつれ

実はここでほっとしましたが、後が問題だったの

です。中多寄風防林から北側一帯の人が、風連に合併すると言いだしたのです。これはさしざわりある話かも知れませんが、隣接している村から物品等がこの人達に届けられて煽動される訳です。そこで私は、住民を全部地図に落として、小学校の小使い室に一人一人来て貰って、合併の真意を問い質しました。本当に反対しているのは二人ぐらいで、あとは賛成なのです。赤と青鉛筆で印した地図を「これはどうなんだ」と、公開しました。

風連にはそんなことは止めなさい。村全体が合併賛成しているのに、いままら分村でもないだろう。と諫めました。これは五月末から六月はじめのころでした。市制施行するには、その資格があるかどうか、促進法では、三万人以上となっているが、形式的に道議会総務常任委員会が現地視察することになっているのです。ところが、多寄の人達は駅に下りた道議会議員に食い下がって反対陳情するのです。智恵文もそうでしたがこれには参りました。

そのころ多寄と士別間にはあまり家がなく、距離が少しありましたが、将来はこうなるだろうと地図に家が建っているように点を入れた訳です。上士別も同じでしたが、途中に中士別がありましたから問題はあり

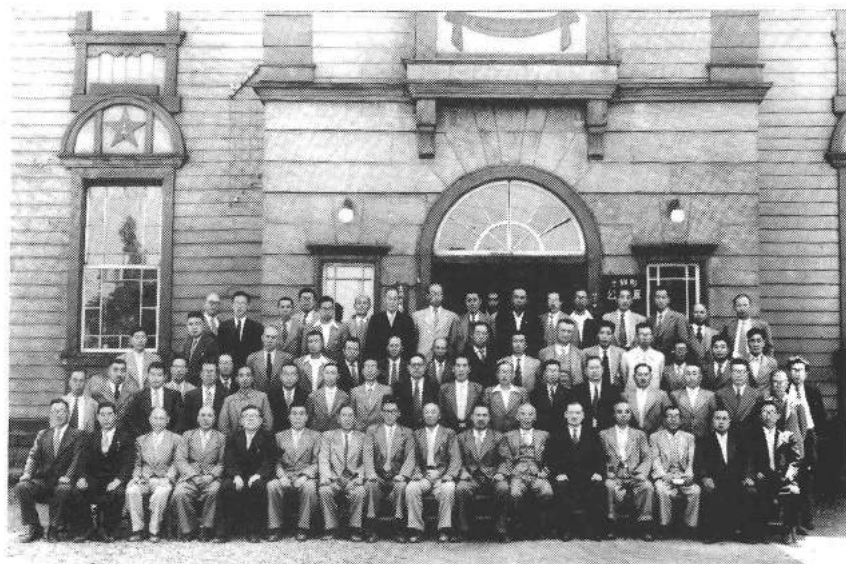
ませんでした。

当時、市制施行しようとする町の形態は、五万分の一の地図に親指の腹の大きさがあれば三万都市として認められました。ところで風連と合併出来ない名寄は、智恵文とは二万九千人にしかならず、特例として市制施行したものですから一年遅れました。

過去の背景を引く

品沢 士別の合併協議会の中で、上士別と多寄が温根別を除いて走り出した。士別はどうすると言う議論になりました。温根別を除くことも止むなしの声が強かったが、渡辺喜美寿議員が「この法律は温根別のよいうな所を合併してこそ趣旨が生かされるのだ」と意見を開陳したんです。それは正論なものですから「じゃあもう一度手分けて説得に歩こうか」となったのです。その各団体の集まりで、農協代表の三浦さん（初代市長）が市制施行の条件を楯にとって合併反対意見を述べたのです。だが、趨勢としてはこの機会に合併すべきだとのことでした。

振り返ってみれば、多寄と風連の関係も昭和十六年に分村している訳ですし、上士別も昭和二十四年に朝日を分村させて、今度は士別に合併すると言うことで



合併委員会委員一同の記念撮影

すから、もめるのは当然です。

多寄と上士別の違いは、上士別は合併議決する前は色々あったが後は協力的だった。多寄の方は、すんなり合併議決をしたが、後々まで反対運動が尾を引いたことです。朝日の方は、もう上士別に戻る意思がない。

多寄の方は、この機会に風連に戻りたいと言う外因的な要素があり、過去の歴史が背景にあった訳です。

この計画にはありませんでしたが、剣淵と朝日に表敬訪問をしました。剣淵には溝淵栄議員が代表で私も参りました。

士別の最終議決はみんなが説得に出払っていて、議決しようにも定数に達しないのです。そこでぎりぎり夜の十二時まで待って定数ぎりぎりで行ったのです。

國井 それは面白い話だ。あのころまだバスが無くて温根別に私達は馬櫓で入ったのです。

温根別の人達は「木村さんのために合併のときにひどい目に遇った」と言いますが、私には何か温根別の人達は取り違えていると思うのです。

温根別は、木村さんが市長になってからも一部の方は木村さんを嫌っていた。私は一宮課長が木村さんと体格の似た人で、木村さんと一宮さんと取り違えているのではないかと思います。木村さんが合併で温根別

の人達に会われたのは、温根別の人達が上川支庁に押しかけたときに一度だけで、挨拶程度の話しかかなかった訳ですから、そのときの印象が七条さんに悪く与えたのではないかと思います。木村さんが温根別から嫌われる理由がほとんど無いんですがね。

荒木 上士別愛村同志会の真意はどこにあったのですか。

國井 当時、上士別は人口もそう少くない。充分に自立出来るという自負が、愛村同志会をつくらせたのでしようね。朝日が合併から除かれてなんで上士別が、そう貧乏じゃあないと言うことでしょう。しかし、温根別はぜんぜん成り立たない状態でした。だから嫌われたのも事実でしょう。多寄は裕福で力がありましたから。

行政の財政事情

当時の町村の財政事情を言いますと、昭和二十年代に平和条約が結ばれて、全国で自治体は一万五千ぐらいありました。戦後の急変した行政改革で六三制が実施され、自治体警察が施行され、中学校を建てなければならぬということで、昭和二十年代というのは一挙に制度の改正で、町村財政はきわめて窮乏した時代

です。しかも財政措置は戦前の税制度で、町村をつくっていかねばならない平衡交付金制度が出来たのはそのためですが、それだけ町村の財政は苦しかったわけですね。

これは余談になりますが、役場で買う石炭の金に困って街の風呂屋さんから粉炭を分けて貰って冬を過ごした所もありました。三ヶ月、四ヶ月の給料の運配、欠配で職員も苦勞しました。

収入役は、走り回って銀行から金を借りる。財務局から金を借りるので、人口三―四千人の村では行政は何も出来なかった。私も士別に來て一番記憶にあるのは、木橋が三六〇ヶ所ぐらいあった。これが全部古い、これが十年ぐらいしか持たない。一ヶ所架け替えるのに四百万円ぐらいかかる。予算に計上したが、金がなくて予算を削ったら、議会で予算を付けたものを何んで削るんだと迫られてね。

合併して最初に架けたのが、兼内から大和に通じるパンケ橋です。二番目が川西の平和橋ですね。

荒木 合併反対の理由の一つに「名誉職がなくなる」と、言うことも。

國井 そんなこともなかったと思いますが、上士別の中田村長、中々うんと言わなかった。だからあそこは

合併が進め難かった。ずーっと後になりますが、汽車の中で岡崎先生と一緒にあって、当時の話をしましたが、岡崎先生も「合併には反対ではなかったが、医者」と住民との信頼関係があつて、周囲の状況では合併反対の立場をとらざるを得なかった」と話していました。

品沢 それが本音ですね。

荒木 このあいだ伺った七条さんの話では「合併問題は、あまり議会にもかけないで私の判断で進めたようなものでしたから」と言っていました。

國井 私も坂一長さん（坂ビスケット）と上士別で若い人達と話合いましたが、合併すれば市街が寂れる。市街が士別に吸収されてしまうとと言う経済的な危機感がありましたね。

それが後日談になります。消防の合併です。歯医者、鈴木さんが消防まで合併したら上士別で行事一つも出来なくなると猛反対したのです。その後は、消防合併には触れないことにしたのです。農協合併もしばらく凍結したのもその辺の事情です。

荒木 そこで、合併していなかったらどうなっていたか、ということですが。

國井 当時の行政財政下での合併ですから、数を減ら

せば財政がゆき届くだろう。活が入るだろう。という狙いでしたから、いまになってみると、町村合併を除外された町村で貧乏で困っている所は何処にもないです。(笑い)

その議論は現在の制度下では難しい。例えば旭川もその後、江丹別や東鷹栖、永山と東旭川を合併したわけですが、財政的に膨らんだかどうか、前野市長時代に九ヶ町村合併を打ち出しましたが、現在はほぼ前野構想通りになりましたね。

荒木 温根別は、貧乏だから困るという認識を何故したのか。行政的に何故マイナスになるのですか。

國井 温根別は本庁から遠く当時は交通の便も悪く、山村の弱小さ、再生も容易でない。そんな所を加えたら合併の意義がないと言う極論もありました。

見立て割りの税制度

品沢 当時は現在のように情報がゆき届かない、ただ勘でね。昔の町村議会の仕事は住民税の見立て割りでしたから、数字的な根拠が全くなって割当する時代でしたからね。温根別や上士別の財政状態は、積み上げられた数字に立っての判断ではなかったのです。

國井 例えば見立て割りは町村ごとで、この人を一〇

〇にすれば、次の人が九〇、その次は五〇と言う見立てです。そうしますと変な話ですが、士別の一〇〇の人と温根別の一〇〇の人とこんなに(手真似)違うんです。だから税の収入も違うと言う仕方でした。そこで分与税制度が出来たのです。それから平衡交付金、地方交付税が出来たのです。

品沢 そこで、基準になる地方税とは何かと分析して、初めて公平な分与税なり交付金なりがね。

荒木 会社のように株の価値が違うから、合併したら株価が下がると違って。

品沢 当時の町村のネックは、土木問題、次に教育、消防でしたね。

國井 中学校一つ建てると後は何も出来ない状態でした。

国有林の払い下げ

品沢 七条さんの話では「合併する前に国有林は貰っていた」と言いますが。

國井 国有林の払い下げは、昭和二十八年、九十年にかけて行ったのです。私が直接担当しましたから、営林局と折衝してね。大きな所は音威子府、下川、士別、南富良野国有林でした。今でも美林として残している

のは下川です。二十一世紀の森のあたりです。一番良い所でしたからね。

下川は財政的にくるしい町でした。国有林を買ったお陰で助かりましたが、全部を伐らないで間伐しながら財政を賄ったのです。だから今も美林が残っている訳です。

南富良野は昭和二十九年の十五号台風にとまめしにやられ、そのお陰で一挙に財政を建て直しました。

士別は台風被害はありませんでしたが、合併後の財政が苦しく伐採して財源としたのです。ですから当時の国有林の姿は市有林の中にごく僅かと思いますが当時伽賀林務課長後の、助役や永井係長さん方の努力で植樹が行われ、現在千六百畝ありますが、これは大きな士別の財産です。

荒木 武徳の第一林班の払い下げが駄目になったのはどうしてですか。

國井 先ず点在する国有林を払い下げて、林班続きの所は第二次に払い下げようとしたんです。武徳は温根別の払い下げ地から遠いし、林班続きですから除外したと思います。その町に適当な所が無い場合と財政的に逼迫している所に大きな林班をやるうとしていたようです。

音威子府と南富良野は針葉樹林で良い所でしたが士別は余り良い所ではありませんでした。

荒木 国有林の払い下げ措置法は合併後ですか。

國井 合併したけれどまだ財政の良くない所が、特別措置法の対象となったのです。二十九年にです。

私はその後根室に行きましてね。根室の合併をしましたがあそこもひどい所でした。ようやく合併が出来て廃村式をしたのですが、旧和田村の西田と言う頑固な村長がいて、廃村式に黒の喪章を腕にかけて出席するのです。取りなさいと言っても喪章をしっかりとさえて取らないのです。それだけ反対運動が激しかったのです。この村長さんは私について歩いて、私が説明した後、反対演説をして歩くのです。面白い人でしたがほとほと参りました。

また歯舞の川島村長にも困りました。私が説明に行くと逃げていないのです。たまたま運動会の日だからといったら、ぐでんぐでんに酔って話にならない、あそこの運動会は筵で小屋を組んで、それは賑やかでした。この村長では仕方がないと、元歯舞の漁業組合長で、根室市街に大きな旅館を持っていた方を無理に口説いて村長選挙に立候補してもらい、よくやく合併にこぎつけました。年長者と言うことで田村さんが根室

の初代市長になりました。

市長選挙のことなど

これはさしさわりありますが、佐々木さんと三浦さんが初代市長選挙を戦って、佐々木さんが負けたというのです。私は佐々木さんが可哀相になりまして、開票のあつた翌日に佐々木さんを慰めに來たのです。

私はね、士別と言う所はおかしな所だと思いました。佐々木さんは合併では苦労されましたからね。三浦さんは有名な人でしたから名前は知っていましたが、合併問題には一度も会った記憶がありません。その人が初代市長になったのですね。

苦労した佐々木さんが気の毒になりましたね。三浦旅館で笹尾助役と三人で飲みました。みんな酒豪でしたが佐々木さんがおいおい泣くんです。そのうちに佐々木さん腰が立たなくなりまして、ハイヤーの無い時代でしたから私が乗って來た車で家まで送りしました。

品沢 これは生臭い裏話ですが、私はその煽りを食って市議選挙で落選したのです。佐々木さんとはあることがきっかけで支持するようになりましてね。私は佐々木さんを応援しましたが、田苅子さん、溝淵さん

をはじめ農業団体の人達が、生産農協の政治的な問題等で三浦さん支持に回ったのです。

振り返ってみると

國井 その後、佐々木さんは保険会社に勤め、助役さんは西南土地改良区の参事になりました。ところが



初代三浦満吉市長

三浦さんがぼつかり亡くなれました。その後を継いで佐々木さんが無競争当選された。

品沢 佐々木さんが、三期目に立候補しようとしたときに勧告に私が行ったのです。「このへんで引退してくださいね」とね。ご不満の様子でしたが「よし良かった」と返事をしてくれましたよ。

当時は、外遊のない時代でしたから助役に相談して、町村を代表して佐々木市長に中近東に行ってもらいました。ヨーロッパも視察して帰りましたが、あれだけ政争の激しい時代に無競争当選でしたから花道です。次をやって木村さんでしょう。負けたらね。

國井 あの方の町長時代は長かったから。

品沢 人間は潮時が大切です。負けて止めたら、止めさせられたことになるでしょう。まだ若かったが「よしわかった」と言われましてね。

國井 三浦さんがぼつかり亡くなられて、あのとき木村さんに立候補の意思がありました。私の支庁長でしたから士別の事情が分からないし、心配になりましたね。木村さんが士別へ有志の久光さん等を訪ねると聞いて、旭川駅に出ましたら断念したとの話でしたが、木村さんはあのころ道庁の議会議務局長をしていました。

その後、旭川市長の話があったのです。田中道政時代で、革新側からの話でしたが、労働組合がバックするわけで、どうした訳か旭鉄が反対しましてね。運の悪い人だと思っていました。

品沢 人間の運というのは分かりませんね。

荒木 合併で一番思い出のある話を。

國井 合併には街の議員の方々が私の知らない底の方で動いていた。それは私が士別に来て分かったことです。活発なその動きが功を奏したと思います。温根別も途中で止めたといいましたが、そのことが一町三村合併の起爆剤になって促進させたと思います。一石投じた意味がありました。

品沢 私の記憶を辿ってみると、昭和二十六年に佐々木さんと中屋さんが激しく戦った。此処は政争の激しい所で、その選挙の後、古い議員は議会の要職を一切やらない。議長、副議長、常任委員長は新人議員でやれ、監査委員と決算委員長だけはやると言うのです。

議会の中身はひどかったです。それから三年目に合併に踏み切ったわけですから、佐々木町長の先見はあったと思います。

國井 上川支庁が主催で合併促進会を開くのですが、地元の議員は対等合併と言っても、吸収合併になる訳

ですから、他地区の議員は発言できないのです。だから反対論が多い訳です。だから陰で動く訳です。あの旧公会堂で何回促進会議をやりましたか。

品沢 これは農協も同じことです。だから吸収される立場からすれば、一人立ちの方が良かったのではないかと今にして考える訳です。土別の合併で持ち寄った赤字が当時の金で一億一千万円、再建団体に転落してその償還に昭和四十一年までかかりました。これも合併の余波で職員給与がバラバラなのです。ある村の職員は二階級ぐらい昇進させて配置したのです。でも土別の職員はやれなかった。入って来るほうは二階級昇進して入ってくるわけで、バランスがみんな崩れていくわけで、調整するときには低い方で調整できないから高い方で調整した訳で、凸凹調整です。それが財政負担を膨れあげさせました。

國井 それが財政再建のネックでした。それと人事構成のバランスです。今まで村長だった方が部長か企画室をやるわけです。多寄村助役の岡田さんが建設課長、温根別の和田助役さんが福祉事務所長とね。

品沢 議会も合併のときは八十一人の議員です。それでは会議にならないから、改選しようと一斉に辞職して、十一月に再選めざして選挙したわけです。

國井 土別は全道で合併は二番目、市制では一番目です。いま全道に三十二市ありますが、土別は真ん中より上で土別、紋別、名寄と続いています。過疎は合併の後に来たのですね。

私が町村知事に退職の辞令を貰いに行ったとき、土別は今年四百戸も離農している。土別に行ったらそのへんの事情を調べなさい。と言われました。考えてみると、緊急開拓で入植した人達が離農した年で特に新学田がそうでした。

品沢 ここに土別の人口の推移がありますが、昭和三十年が三万九千人、三十九年が四万二千人、五年過ぎて三万六千人、昭和四十五年には三万三千人に減っていました。

國井 当時は五百戸減ったら二千人ですから、多い家族は五人いましたから、特に上土別は開拓者の多い所で、多寄と人口の開きがなくなりました。

品沢 大変に長い時間を、國井さんには貴重なお話を聞かせて頂きましてありがとうございます。

(文責 山田 伍市)

回顧 町村合併のころ

元温根別村長 七条 成良

聞き手 元市議会議員 品沢 竹司

品沢 今日は、士別市の町村合併のことで、直接村長として合併に携わった方は、七条さん以外におりませんので、つれづれの思い出で結構ですからお話を頂きたいと思います。

七条 そりゃあの頃は、私も何がなんだか分らないままに、何ほど引つ張り回されたことか、書けば書き切れないほどの話はあるが、さっぱり面白くないですなあ。

私が町村合併で心配したのは、昭和二十八年の八月ころかな「五千人以下の町村が合併したら、国有林払い下げの恩典を与えるが、合併しなければ平衡交付金をやらないぞ」と言う。アメと鞭、守りと敵みみたいなものだ。

村が無くなるとは、それまで考えもしないことだ。それでもこりゃあ温根別も合併しなければならんと

心づもりをしたのは、合併するなら士別だろう。剣測は母村だし屯田の人達も大勢温根別に来ているが「人間関係よりも経済重視で進めなければならん」と考えた。

当時、上士別出身の塩崎助役を、朝日村の織戸村長が「七条さんは自分で関係官庁回りができるから、私の村にくれ」と言ってきた。織戸さんはおとなしい人で、関係官庁に嘘を言って歩くのが苦手だったのでしよう。

私も合併したら職員の身分保障は心配ないが、三役はね。かといって助役の面倒もみきれないし、塩崎助役に「温根別はこんな状態だし、お前行くか」と言ったら「やらせて貰います」と言うので、その後は助役無しでおったのだ。ところが村の人達が「村長がいないと何も用事が出来ないようでは困る。助役を置け」と言うものだから、当時、上川支庁地方係長の國井さんに頼んで、元豊富村助役の和田君に来てもらったのだ。和田君は上司の村長が選挙で負けて、利尻で何か仕事をしていたが、君は酒を飲むかと聞いたら「一升は飲みます」というんだ。私は酒を飲んでぐだぐだ言う男が嫌いだね。和田助役の妻君の兄貴が道庁の地方課にいて助かったね。



七条成良元温根別村長

私はみんなに相談はしていなかったが、腹の中では合併はしなけりやならんと考えていた。合併後に入れた下さいでは発言力がないからね。その後ですよ。私が上川支庁の帰りに駅で佐々木町長と、笹尾助役と深沢さんが待っていて、ちょっと来てくれと言われて合併の話をしたのは。深沢さんは温根別で土建の仕事をしていたし、秋山道議の選挙事務所などもしていたからね。

その後一月末に西村議長、佐々木町長、笹尾助役が温根別に来て案分まで話したんだ。深い話ではなかったが「合併後の名称は士別で結構だ」とね。

だから温根別は一町三村の合併議決をした。ところが、他は温根別を除外して一町二村の議決をしたんだなあ。約束が違うんだ。「何しているんだ」と、上川支庁にも押しかけて行ったが、私はちょうど夏服を新調しようと思っていたから、そいつを着て自治庁へ乗り込もうと思っていたんだ。

合併で持ち寄った赤字が、七千五百万円ぐらいあったが、温根別は貧乏だったが単年度赤字を出していなかった。私は温根別に五百ヘクタールの山林があれば、一年に十ヘクタールずつ伐採して五十年サイクルで何とか息がつけると、二百五十ヘクタール払い下げを受けていた。そりゃあ温根別の橋には地元でもあきれるほど多かったから無理もないが、そういう所だけを指摘して温根別は貧乏だから困るとね。上士別の中田さんは「温根別が合併するとは知らなかった」と私に言ったものだ。

財政的に圧迫を受けているところだけを見て、ああいう所と合併しては後で困ると言い出したんだなあ。

他の村では職員の給料を値上げして合併した。「温根別は貧乏だが、そういう醜い真似はするな」とそのままで合併した。一番正直だった。

合併後、此処（現住所）に来てからだ。何月ごろか

なあ。三浦さん（初代市長）が私の所に來たのは。「私は全く官庁を知らない、手伝つてくれないか」とね。

私は温根別時代から、村には一銭の金も無いわけだから、何か村人のために仕事をするにはお上のお金を使うしかない。地方課に行つて理屈をいつても、彼らは専門家だから数字を並べられたらかなわない。だから私は道庁や支庁の役人と仲良くしたんだ。向こうが心配してくれるようにね。秋山の親父（道議）がそういう人だった。だから仕事が出来たのだ。私も秋山の親父に教えられた通りにやつた。

私は、合併後の予算や財政にはほとんど関係しなかった。私の仕事は土別の税金を使わないで、国や道から金を引つ張り出す仕掛けをすることだった。開発局にも支庁にも仲のいい人達がいて、特に北条五郎治さんや西城静夫さんとは、三条と呼ばれるほど仲が良かったものだ。私は三度そろばんを弾けば、三度違った答えを出す男だったから。

合併後に多寄の風連境の人達が、風連に合併したいと言ひ出して何度か行つたが、地元でも土別でも説得が出来ないので私に何が出来る。私はただふんふんと向こうの話をきくだけで、腹の中の不満を聞いてやつてゐるうちに収まつてきた。そういう誰もが嫌がる仕

事ばかりやらされたなあ。

そりゃあ温根別にも「剣淵と合併をしたい」と言う人達がいた。伊文の人達だ。あそこは土別から二十四キロあるんだなあ、遠過ぎると思うんだ。当時としては当然のことだが、私は「合併してみても都合が悪ければ、それから考えてもよいではないか」と言い聞かせたね。

合併する前に、多寄の古市村長と土別の中田村長と三人で、合併してもそれぞれに部落根性を持ち出すだろう。それでは合併の意義もないから、必ず各地に支所を設ける筈だから、私達は支所長になつて協力しようと言ひ合つた。私の支所構想は「開発建設部と支庁が一緒になつたような支所で、ちよつとした土木工事が出来るようなもの」と考えていたが、いまでは自動車が発達して支所も不要な状態になつた。あの頃は土別には岩本歯科のお医者さんと、土別役場にそれらも役場で自動車を買つたと言へば、町民が反発するだろうと病院の名義で買つたのが一台あつただけだ。

国道二三九号線の昇格は合併後で、どさくさが続いている最中だった。それで私に行つてくれと言うので東京まで行つた。当時の建設省道路局長は旭川出身の富樫技監で後に道路公団総裁になつた方だが、戦後開拓

史でも話したが、道道鷹栖・朱鞠内線もね。伊文から和寒へ抜ける道路が開発道路、北線から朱鞠内に通ず道路を開拓道路、これを道道に昇格させるために何程苦勞したか。私はね、温根別に村営バスを走らせようと思つていたんだ。

色々あつたなあ。今にして思えば人間は何にも分らないで、目先だけを見ているようなものだ。私自身がそのころ今日のように發展するとは予想だにしないもののだ。

余談 王子製紙誘致運動

品沢 王子製紙誘致運動の前に、赤岡さんの煙草の特殊紙製造工場の話がありましたね。

七条 煙草の銀紙みたいな物だね。

品沢 あのバックは、元法務大臣の植木という方だった。

王子製紙の誘致は士別の単独運動だったから、名寄に王子製紙の出張所があつて、そこから火の手が上がったんですね。その辺から情報が流れて、王子で内陸に新聞紙を製造する工場を造りたいと。

七条 まさに挙町一致で、予算も五百万円を別途に組んだほどだった。

品沢 当時の町予算は四億三千万円、膨大な運動資金でしたが、議会も民間もあらゆる人脈を通じて運動したから、成功はしなかったが市政上の問題にはならなかった。昭和三十四年です。竹内千代造さんが議員をしていたころですから。

七条 あのとときも私は一ヶ月東京へ出張していたなあ。私は話すきつかけがないから、王子の会社へ出掛けて遇う人ごとに魚釣りの話をした。相手が好きであらうとなかうとね。そうしたらうちの社長が大の魚釣りが好きだから一度話してくれないかと言われてね。藤原銀次郎の所へ行きました。女中がいなくて奥さんが、お茶を入れたり、お菓子を出してくれたりしてね。私は山女魚のある所を話したり、藤原社長が釣り竿を見せてくれたりしましてね。

道内で、三ヶ所候補地が絞られた中に士別が入っていたんだが、そのうちに函館出身の誰だったかなあ、ブラジルに視察に行つて王子は道内での新聞紙製造を取り止めたんだ。あのころ王子の副社長は「名寄は都合のよいことを言っているんですよ」といましてね。天塩川製紙を誘致しながら、一方で王子にもちよっかい出していたんだなあ。結局、王子は春日井にクラフト工場を持つて行つて。

品沢 運動は不成功に終わったが、北町に製紙工場が出来ていたら、土別の街は臭くて大変だったでしょう。

七条 ああいう大企業は内陸では育成できないですね。港はあるが苦小牧でも倉庫がなくて、その日に製造した物をその日のうちに消費地に運んでいるのが実情なんだ。

自動車に積んで汽車に積んで船に積んでではね。あの様な企業は臨海工業型なんだなあ。澱粉製造のようにこちらから薯を入れてあちらで澱粉が出る仕組みでないかね。その後、千葉県の臨海工業地帯を見学したが、船から鉄鉱石が下ろされる。製造した鉄の薄板が向こうの栈橋から船に積み込まれるという仕掛けでした。

品沢 一つの時代の流れでしたね。

自動車道の除雪一番乗り

荒木 温根別に行く道路は、上川地方での除雪が一番早かった訳ですが、三菱のブルドーザを市で入れて。

七条 冬道を走らせることをやったのは私であったが、あれは、私が考えて入れたのではないんだ。旭川開発建設部の早田さんなんだ。

合併しても温根別はともうこうもならんだ。夏は

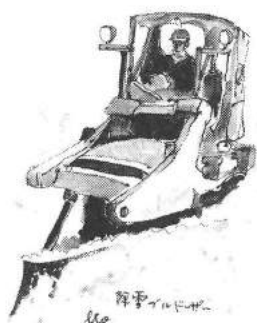
自転車という手もあるけどね。私は雪上車をやろうと思ったんだ。雪上車に櫓を引かせてね。馬代わりに使おうと真剣に考えた時代もあった。

このことを漫談的に早田部長に話したら、そうしたところが早田部長の偉いところでね。そうか、あそこは汽車がないから一番先にやらなければならんとね。開発局で除雪して冬にバスを通してんだ。

品沢 除雪で冬バスを通してから、道路の路盤改良が必要になったのです。

それは、旭川の近郊辺りでも春に凍ばれが解けると、トラックが車輪ごとぬかってしまつてね。温根別に行く道路なんかは車どころでなく、人が歩いてもズブズブぬかる状態でした。これでは路盤改良しなければならんと、その後急速に工事が進んだのです。

(文責 山田 伍市)



座談会 合併の思い出

司会 元士別市議会議員 品沢 竹司
出席者 元多寄村議会議長 溝田 卯一
元士別町議会議副議長 赤岡 正夫

元上士別村議会議員 南田 彦治
元士別市議会議員 菅沼 安喜
元多寄村議会議副議長 松岡 義雄
元多寄村議会議員 丹 盛次郎
元温根別村職員 三宅 裕良

各地の情勢

司会 「新士別よもやま話」は、終戦後の新しい話が多く、話題も存命されている方のお名前などが出て、書くのに大変に難しいわけですが、中でも、士別市は町村合併という歴史的大事業を達成しました。

その苦労話も士別市史に記述されていますが、当時の表に出ない議員のご苦労された裏話を残すことも、将来に役立つと考えますし、合併から三十五年も過ぎ

て生存されている方も限られておりますので、当時の町や村の立場でお話をお願いします。

松岡 多寄の当時の状況ですが、合併促進法が出来て間もなく、四ヶ町村合併が話題にならない以前の話です。上川支庁では、多寄村は合併するなら管内一番のモデル地区だと言っていました。その矢先に四ヶ町村の合併問題が出てきた。

そこで、多寄村議会で最初に考えたことは、母村は風連だから町村合併を、士別にすべきか風連にすべきか「ともかく村を二つに割ることは避けよう」と、村民から抵抗はあっても、どちらにしようが一本で合併しようとする村議会は決めました。

ところが風連からは何も言って来ない。士別からはやあやあ言って来た。合併するなら対等合併をやりたい、何もない所へこちらからどうですかでは好ましくない、それで議会も最終的に四ヶ町村合併に向けて進んだわけです。

いざ合併しようとしたら、上士別から「温根別を外そうじゃないか」と石沢、相山、小西栄吉さんなどがやって来て「お前らオレたちと行動を共にせ」と言うんだなあ。そこで三町村合併の議決をしたら上川支庁から「それでは承知出来ない」と言ってきた、四ヶ町

村合併になったという経過です。

溝田 そのときですね。腹を決めようと私が議長で松岡さんが副議長でしたが、多寄の立場でどうしても合併しなければならぬのか、出来ればこのままでいい。と思つて、当時役場の総務課長の石崎君に上川支庁に行かせて事情を聞かせたのです。石崎君の主観もあつたと思うが、「合併しなければ多寄の将来が不利になるとの報告なのでどちらにしても合併しよう」と、議員は村民に知らせないでいたが、腹構えは出来ていました。

松岡さんに話するのは初めてですが、風連から分村したのが昭和十三年、まだ十八年しか経っていないので、母村の意見を聞いてみようとして私が内緒で出掛けたのです。後に風連の村長になった三輪さんなどに話したら相手にしないのです。

ここまで合併が発展するとは思わなかつたのでしよう。これで風連を相手にしないで、士別と合併しないとならんと考えました。

風連が猛烈に巻き返しに出たのは、合併議決をしてからなのです。多寄を割つても風連を大きくしようと言う経緯があつてね。そこで私達も混迷を受けたわけです。色々と中傷を書いたピラも撤かれました。そ

こで多寄から合併を働きかけるのでなく、村民の意思を進めるよう努力したのです。

丹 合併の経過は先輩のおっしゃる通りですが、私ら一年生議員でね。何がなんだか分からないうちに合併したのが実感です。議長や副議長、常任委員長あたりで仕組まれた合併でした。

風連につきたいと言つたのは、私の地区でしたが村を割らない大義名分がありましたから、随分と地元説得に苦労しました。

松岡 合併当時、風連に行こうとしたのは、風防林のある北側の中多寄と、東陽と真狩地区です。中多寄は溝田議長、東陽は私と檜木君（現市長）とで説得にいきましました。何日も徹夜したものです。東陽にも鈴木議員がいましましたが、村を割らないことを議決しているものだから、立場がどうもならない。その心労が積もつて元氣のよい人でしたが、翌年にぽっくり死亡しました。

南田 上士別市は、昭和二十四年に朝日を分村した直後で、当時、道議現職の乾さんが「朝日と元になつたら簡単に町を昇格するぞ、それを研究してみろ」というのです。

上士別は、一番先に愛村同志会が出来て反対運動の



溝田 卯一氏



赤岡 正夫氏



南田 彦治氏



菅沼 安喜氏



三宅 裕良氏



丹 盛次郎氏



松岡 義雄氏

火の手を挙げたわけですが、合併を村民に伝える前から「朝日と合併して町にしたらどうか」と、色々話が渦巻いていました。愛村同志会には強力な元助役の丹羽さんや岡崎医院の先生、元老の吉野さんが中心になって議員を監督するのです。

議会があるとその晩に押しかけられて寝れない状態でした。朝日と合併して町制をしるか、士別と合併して将来性を考えるか、この二つしかない訳です。いろいろ経済を考えて温根別も好まなかったわけで、温根別も困ったものだ、多寄と風連も警戒する必要があるぞと、廃村して合併する決議は同時になければならんとね。多寄に肩透かしを食わされるのではないかと懸念したものです。

愛村同志会からは、市会議員亡者と名付けられてね。最終議会では傍聴人百五十人が総立ちになって、議場は殺気立っていました。議場がコの字型でしたから、傍聴席の側にいる議員は殺気を直に感じて発言が出来ないのです。

議長が閉会を宣言すると同時に、別の階段から逃げるようにして退場したものです。今にも乱闘が起ころいそうな最終議会でした。

色々ありましたが、私たちもあの当時としては先見

性があつたと考えますし、間違いない選択だつたと思つています。

菅沼 朝日を分村させて四年目の合併です。「元の朝日と一緒になれば世話がない。村を割つてまで士別につくこともないだろう」と、言う意見が多かつた。

朝日の分村は地理的に問題があつてのことだが、茂志利の奥から村長とニツクネームのあるじいさんが、議員でよく上士別に出てきましたが、前日に出て来て上士別に一泊して翌日会議に出る。その日は朝日に泊まつて次の日に家に帰る。遠い人は三日がかりの会議でした。朝日の人たちは遠い上士別の役場に出て来るのに苦労したわけです。上士別の市街は村の一番外れにあつたのですからね。

「朝日と合併するなら役場を朝日に持つてゆけ、コンパスの真ん中を置くのが当然だ」と言つたが、それは困ると言う有力者がいて「仕方がない士別に合併しようか」となつたのですね。

司会 士別の議会から合併に関して、朝日に表敬訪問に行きましたが、朝日は合併する意思はありませんでしたね。

では温根別の三宅さん。

三宅 行政の中で、実際に合併を手掛けた方々のお話

を初めて聞きましたが、私は昭和二十四年に役場を止めましたので、当時、父が温根別の村議会の議長をしていましたか、父の話の中で小耳にはさんだことをお話しします。

上川支庁から強い行政指導がありました、一般会計は赤字財政だつたと思います。上士別や多寄が、温根別の赤字を背負いたくないと言ふことだつたと思います。

議決は温根別が一番先にやつた。「乗り遅れたら大変だ」と言うことだつたのでしようが、このへんの事情は七条さんに聞いてみないと分かりませんが。

父は、温根別は赤字ではないんだ。「含み財産を持っていたんで、表面上の赤字ではない」と「実際には財産を持ち込むので、士別には迷惑をかけない」と話していました。合併後に佐々木町長も「温根別は財産を持ち込んでくれてありがたかつた」と話していました。

温根別は平穏と言ふか、二級町村の弊害と言ふべきか、住民が諦めがよいのですね。お上には弱いし歴代村長を自分で持った事がない所で、自治意識が無く当てがわれたものに従う無気力は指摘されてよいと思います。

今トヨタとダイハツの問題が出てきて、温根別は崩

壊するんじゃないかなあ。もし独立していたらあの施設は全部温根別の物ですよ。温根別の良い物だけを取られてしまって、土地と住民が追い出される。合併しなかったら今までの三十年間でどうなっていたか、問題もあります。

司会 合併当時の士別議会の副議長でありました赤岡さんから、中央の事情をお願いします。

赤岡 合併すれば、人口が多くなり将来の夢が膨らむだろうと運動を進めました。が、上士別の岡崎医者を先頭に反対運動に遇い、風連が中多寄奪還の熱をおびてきて、議員はみんな得手分けして説得に奔走したものです。

当時は公民館に寝泊まりして、一生懸命に運動しましたが中々決まらなくてね。

とうとう三万人を割りましたが、やがて六万七千人になるだろうと頑張りました。富良野は当時士別より少ない二万八千人でしたが、すでに三万人を越えた。今後は、理事者や議会がどう士別の舵を取るか、士別の命運が掛かっているわけです。

司会 歴史と言えばそれ相当の裏づけが必要ですが、よもやま話であれば、市史と違って自分の主観でもよいのではないかと思います。

そこで温根別の除外がでしたが、町村制が改正になり学制改革がありまして、各町村が学校建設などで財政が思うようにいかない。国も金が無いから地方に自治体をつくったが、補助金も出せない八方塞がりの状態で、そのへんが一番苦労したと思います。そこで多寄の状態は如何でした。

松岡 今、温根別の話を聞きましたが、ともかく目の前だけを見て「温根別を外せや」とね。単純な気持ちからだと思いますが、その発言は多寄から出たのではなく上士別から。

溝田 そのときの各町村の赤字比率のデータがあります。士別を一〇〇にすると多寄が一〇六上士別は一三三、温根別が一二八です。これで温根別が入ったら苦労するからね。

だが、温根別が入らんというなら別ですが当然温根別も入れなければとね。どの程度かわかりませんが、剣淵が母村だからその話もありました。

三宅 マッカアサー命令で「学校を建てろ」とね。温根別にはその資産がないから財産を持たなければならぬので、道庁に働きかけて山の払い下げを受けた。私の家内が当時の名寄林務署長と親戚で助かりましたと話していました。

司会 温根別が最初に払い下げを受けた山は、開拓財産なのですね。その隣接地を合併後に払い下げ受けました。

多寄は村長不在で

松岡 多寄はその当時、古市村長が病気で入院していたのです。合併議決も村長不在でした。帰って来たのは合併後です。古市村長の帰村第一声は「オレのいない間に村を売った」と言いました。

丹 古市村長が健在でしたら、また変っていたか分りませんね。

司会 上土別が一番温根別を嫌っていた様ですが。

南田 上土別の中田村長は温厚な方で、国府助役が切れ者でした。彼が支庁や道庁と密接な関係にあって「合併しなければ上土別の将来は無い」と言い切っていた。

当然、実務現場にいる者に引く張っていかれる。そこで合併推進を始めたんです。

司会 戦後ほどの町村も、財政で苦しいところに労働組合が出来たのです。町村長の考え一つで職員給与を決めなければならぬ状態になってきました。

合併後、すぐ再建団体になりましたが、これは認識と内実に大きな食い違いがあったからです。それにイ

ンフレが進行した時代でしたから。

南田 合併の話が出てすぐ、職員「給料を上げれ」と言い出してね。いま上げなければ上がる時期が無くなる。お前ら議員はぼさぼさしているな、士別も多寄も皆引き上げる言いだして困りました。

溝田 多寄の村議会が満場一致で議決したのが村民が不満を持ち始めた原因です。充分に趣旨が浸透しないままでしたからね。

三宅 情報不足の時代でしたからね。

司会 士別の合併は、士別が無くなることではないので皆さんと違っていました。議会と町の有志とで合併協議会をつくって、むきむきにね。私は元上土別村長の坂さんと上土別へ、お前は若いから議員でなく青年として行けといわれてね。

多寄は西村議長と清光さんですね。一町二村議決をしたときはどうなるかと思いました。議論をして温根別を除外するのは合併立法の趣旨に合わない、また皆で手分けしてね。

溝田 私の方にも上川支庁から、温根別を外すなど強力な指導がありました。

風連は発電所があるから経済は豊かでしたが、多寄も中学校は一つ、小学校は三つでしたから、橋の数も

少なかつたし比較的に楽な村でした。

司会 当時の財政は土木、教育でいっぱい、産業経済は後にくっついていようなものでした。

南田 上士別にも橋の数が百四十ヶ所ぐらいありました。村長は橋架け村長と呼ばれて、一期は持つが二期目には架け替えしなければならぬ。

合併後に、二億円で菊水橋を架けるということで、合併の不満もようやく収まりました。また、村民税の見立て割り等級がどうなるんだと質問されて、説明するのに困りました。

溝田 多寄にも佐々木町長と笹尾助役が来てね。「公営住宅を建ててやる」と言うのです。四戸建て二棟建ててくれましたが。

日向橋の功労者

松岡 日向橋の功労者が二人おります。一人は古市季雄さん、もう一人は七条成良さんです。

古市さんは戦後、道の農地委員をしていて、耕作不可能な日向の山を遮二無二、五十ヶ所を農耕適地に指定したのです。橋が無いから入植が出来ない。そこで付近の人達の増地に払い下げをしました。

昭和四十年ころですが、七条さんが「橋がないから

開拓ができないのだ。橋を架けよう」と、言いまして、最初は川幅だけの橋でしたが、洪水になると通れない。開発局も治水上よろしくないといふので、今の橋になったのです。

南田 東京へ陳情に行ったら「あんな所に橋を架けるなら、あそこに住んでいる開拓者に、橋を架ける金をやった方がよいではないか」と言われて。

溝田 古市さんが耕作適地に認定したときに、私と古市村長が日向橋の陳情にいきました。

司会 あの橋を促進させたのは多寄の水道なので、多寄が何処に水源地を求めるかとなって、日向に良い水があるではないかと、ただ川を越すわけにはいかないと、そこで開発局が橋を架けることと合致したので。色々苦労もありましたが、最終的に開発局も合意しましたね。橋桁に水道管を抱かせたのです。

ところが会計検査で「お前ら、開拓の橋をつくることを口実に、水道を引く魂胆だったのか」と叱られました。

南田 なぜ、市議会議員の選挙は十一月かと言うことだが、八十一人の議員では会議にならないこともあったが、農繁期を避けたのです。当時は機械も無くほとんど手作業だったから、ところがあと半年で議

員恩給が貰えない人が出たんです。

赤岡 私がそうです。

菅沼 初めての市長選挙は、ともかく候補者を道路の悪い所を連れて歩けとね。当時の乗り物はトラックでしたが、余りばんばん跳ねるので農家から米俵をかりてトラックの尻につんだりしてね。

だから候補者は、土別の道路がこんなに悪いのかと言ったものです。

司会 当時、直接合併に関わった元老の方々でないと、聞くことの出来ない貴重なお話を頂きまして大変にありがとうございました。



多寄村閉村記念の南部鉄瓶

合併時の在職職員座談会

出席者 石王仙作

安田勝義

渡辺定治

早川富来

中西 一

宮本晴男

山下一夫

山崎東三郎

司会 品沢竹司

司会 今日、は、せっかくのお休みのところ、お集まり頂きましてありがとうございます。土別市が四ヶ町村の合併で市制を施行した当時、各町村の職員として、合併を体験された思い出をお話し頂ければ幸いです。では、中央の石王さんからお願いします。

石王 私は当時、農業委員会にいましたから各村の事務を引き継いだだけですが、合併で困ったことと言えば、昭和三十三年に企画室への辞令を受けました。新しく市制施行する場合、新市計画案を策定しなければならぬ訳ですが、それを九月の議会に提出するということです。かなり書類作成は進んでいました。中々です。その後、懸命に作業を進めました。

他は良いのですが問題は想定人口です。事務局では六万人を想定したのですが、議会はそれでは合併の意味が無い十二万人にせい、とか少なくとも八万人だと言うのです。私たちは、裏付けの補完ができないので何と答弁したらよいか困りました。結局六万人にしました。その後、木村市長によつて「緑あふれる田園都市」としての見直しがありました。

渡辺 私は福祉にいました。財政再建の貧乏な職員でまともに給料が貰えなかった時代です。亡くなられた有馬さんが、リックを背負つて名寄の銀行に金を借りに行く姿を思い出します。

安田 私には、終戦直後の思い出が強く残っています。学校法が改正になり、小学校の中に仮設の中学校を造つて授業を始めました。凶作続きで理事者も大変な苦勞の時代でした。校舎を新築するには金が無い。そこで銀行と農協から金を引き出し、その抵当保証に父兄に預金をして貰う。その懇請に暮れも押し迫つた十二月二十八日に、手分けして私は下士別に行きました。足を棒にして何軒か歩きました。「餅でも食えや」と言うのですが、どれだけ協力して貰えるか心配で餅どころではないのです。やつとの思いで十万円約束して帰りました。

当時は、物資不足で木材も無く釘も無く、下士別中学校は、雪解けに完成するのを待てずに開校しました。西士別では、釘がないから二、三本打ちつけて検定を受けようとしたら、その朝に玄関の天井が落ちて大騒ぎをしたものです。そんな一時しのぎの建築ですからその後の補修が大変でした。

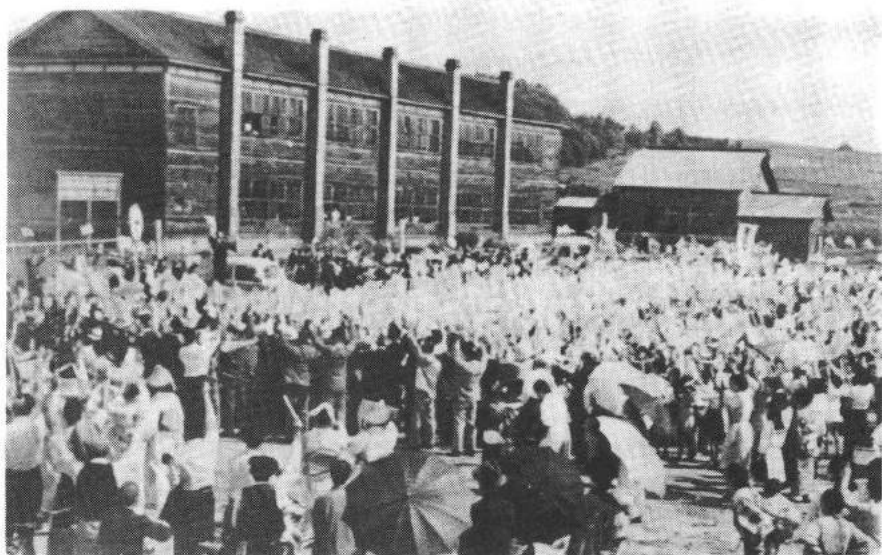
各学校を見回り、校長の要望を聞いて補修材料を買い、P T A の出役で補修し続けました。「これでは市立ではなくP T A 立ではないか」と笑われたものです。

水も大変に苦勞しました。北温などは水源地に牛を放牧して糸ミミズがわいたと、保健所に水を届けられ、保健所から大目玉を食つたものです。

山下 私は市役所に入つて間もなくのころ、市の台所が貧しく、申請した補助金を貰いに、収入役の名前で道庁へ行つたことがあります。道の出納局で「お前は収入役か」と聞くのです。代理の場合は委任状が必要なので「はいそうです」ととっさに嘘をついて金を受け取つて来たことがあります。

笹尾助役の辣腕

早川 私は教育委員会にいましたが、当時の士別には



市制施行祝賀パレードに集った住民 旧士別中学校グラウンド

行政手腕抜群で、町長の懐刀と呼ばれた笹尾助役がいました。頭の閃きの良い方で新聞の小見出しに、「くじら岡へ上がる」とあればすかさず部下を督励して、海産物ならぬ山の幸をと大洋漁業へ陳情に走らせた。それが今のデイジー食品です。

道庁の部局でも信用があつて、ほとんど道の認可を得てから、上川支庁に説明に行く仕組みに士別はなっていたので、支庁からは白眼視されましたが、道庁直轄なら素晴らしい仕事が出来ると思いました。

中西 合併には風連からも強い要請があつて、士別からもあつて、三十四線で村を割つてと言う話もありました。また「俺は〇〇委員長だが、合併すればそれが出来なくなる」と、合併反対する方もいました。

当時、古市村長が入院していて、合併に支障があつたと思いますが、前年に黒字で庁舎新築のために積立しましたが、士別と合併するならその必要も無いと、鉄瓶を買って全戸に配つたりしました。

石王 魅力ある士別の街づくりを本当に考えた人は、笹尾さんであつたと思います。

昭和二十五、六年ころの士別市街は、大通り、南大通り、停車場通りと言う市街形態でした。それを

見て笹尾さんが、区画整理をしようと言いだしたのです。新しい都市計画を建てようというのです。そこで私に、お前に土地計画係長を命ずるというのですね。何度か笹尾さんと道庁へ行きましたが、余り上手に説明するものだから、建設担当主査が「よし分かった。建設大臣の判子を押して指令番号を書いていけ」と言うんですね。金も無いのにどうするかと思ひながら、白紙に認可の判子を押してきたものです。それで広通り東一帯の整備が出来たのです。

司会

笹尾さんの構想は忘れられない存在です。

宮本 私は、合併後の最初の辞令は衛生係長でしたが、一ヶ月で国保係長に代わりました。金が無くて医院への国保の入金も遅れ遅れになっていました。

ある日、K医院の院長から電話がありまして「国保の金がまだ入金になっていない。今後、国保の金を入金しないのなら国保患者を一切診療しない」と大層な剣幕で言い立てたのです。それを聞いた三浦課長がお詫びをするどころか、「はい、分かりました」と、院長の言葉をもう一度自分で言い直しをして「今院長さんは確かにこう言いましたね。今日は市長、在庁しています。すぐに迎えの車を回しますから、只今の言葉を市長に直接、申し上げて下さい」

と言ったものです。結局はK院長に電話の向こうで、ごまかされてしまったが、当時は強者が職員の中にもいた時代でした。

早川

職員の私が言うのもなんですが、合併時の職員給与の格差が大きいので、凸凹調整が長くかかりましたね。一度多寄出身の石崎さんに申し立たることがあります。ところが石崎さんも心得ていて「多寄では二回昇給を差し止めていたもので、その分を合併に伴って昇給したままで。」と言うのですね。

貧困を極めた開拓者

山崎

私は当時、公民館の仕事も兼務でしていました。合併の思い出は文章にしていますので、それを使ってください。

ナトコを背負って伊文へ出掛けたときのことですが、昼ごろでした。生徒が全員学校前の排水溝で、ドジョウを捕まえるのに必死になっているのです。どうしたものかと見ていると、捕まえた小さいドジョウを生きたまま飲み込んでしまうのです。

S校長は偉い方ですね、最初は弁当を持ってこれない生徒に、校長が昼飯を食わせていたのです。そのうちにほとんど全員（八十名）が弁当を持って来な

くなったのです。校長の家庭にも五人の子供がいる。とても毎日が続かないですよ。

そのうちに木を食い尽くしてしまい、開拓者の夜逃げが開始されたのです。その空き家に行つて見ると縁の下からへびのむき殻がどさつと出てきたのです。食料に窮したあの人たちの唯一の蛋白源がへびだったのです。

宮本 私も上士別にいるころ困つた開拓者が一戸ありました。

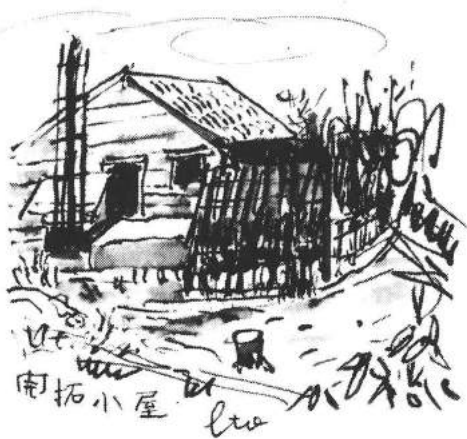
部落の人の連絡を受けて訪ねて見ると、小さな開拓小屋の一目で見渡せる部屋の中に布団がないのです。どうしたものかとたずねると笑うだけなのです。部屋一面にワラが散らかつてゐる。そのうちに分かつたことですが、夜になるとワラを部屋の真ん中に集めて、その中にもぐつて寝るのです。

生活保護の無い時代でしたが、役場で保護を始めました。そして一年過ぎましたが依然として立ち直る気がない。それどころか、金を貰つて家に帰るまでに、半分の金を途中の店で飲んでしまうのです。課長が怒つて保護を止めたのですが、雪解けころにまた部落の人から連絡が入つたので出掛けてみると、今度は家の板壁が半分無いのです。寒いので

板壁を燃やして暖を取つていたのです。また生活保護を再開しました。

司会 ワラの生活は、士別だけでなくあのころあつたのです。

今日は、色々なお話をお伺いました。本当に残しておきたいよもや話もありますので、ぜひ文章に書き残して頂くようお願いしまして、この座談会を閉じたいと思います。



政府貸付米訴訟

昭和三十一年、農家は二十八年以降の風雨災害で苦しんでいた。この年は遅延型冷害で、稲の花は咲いたが食料になる米は収穫できなかった。

政府は冷害対策に、北海道に十七億円の政府米を貸し付けた。士別ではその十%の一億七千万円を借りたのだ。以前政府米を借りたときに援助米に変わり、返さずに済んだ記憶があり、政府が貸すのだから無理な取立はないだろうと、安易な気持ちで手伝ったのだろう。道庁では、返すのが大変だから最小限にしないさとの指導で、貸付希望農家を吟味したが、結局一億七千万円を申請してしまった。

さて、返済の時期が来て督促をだしたが、なかなか農家も経済が苦しく返済が容易ではない。最後まで残った四〇五百万の貸付金が回収できない。議会でも行政が住民を訴訟するの避けるべきだとの意見も多かったが、ついに訴訟を起こし延期払いで解決をした。

(渡辺 定治)

市街地区画整備

昭和三十年代になっても、士別の市街を形成しているのは大通り、駅前通り、南大通りぐらいであった。

当時の笹尾清助役は、士別市の発展のために市街地区画整備の必要性を強調して道庁に要望した。なかなか難しい時代であったが幸いに、士別の養鶏場の息子さんだった高橋さん（新聞記者）が、建設担当の主査と懇意であったことから、笹尾助役の誠実な説明と相まって、「よし分かった。建設認可の判を押して、承認番号を書いていけ」と言われた時ほど、新聞記者の力を痛感したことはなかった。

その後、南大通りから神社通りまで、東五条通りの区域の市街地区画整備を進めたが、幸いに戦後の農地開放で国有地になった所があり、連日連夜の説明説得は続いたが、住民の理解をえて現在のような町並みできた。笹尾助役の構想の素晴らしさに今も敬服している。

(石王 仙作)

吸収合併か、対等合併か

町村合併といえば、温根別が四カ町村の中では一番先に合併促進委員会を設け、検討に入った。温根別は昭和二年に剣淵村から分村したことからして、当然剣淵と士別と両方検討した結果、士別町に対等合併をする事に話がまとまり、意思表示がなされた。上川支庁からも、係長（前士別市長であった）が何度か来村した。

臍（ほぞ）をかむ人間は、なにかにつけてそのタイミングに合致してしまうものである。士別、多寄、上士別で各検討の結果温根別は財政難だから、対等合併はさせないで吸収合併なら同意する、という事になったらしく、私が宿直の夜中に士別町の議員から電話があった。その応答は次のような事であった。

「温根別村役場の当直かね。わしは士別町の議員だがね、合併の件については、温根別には悪いのだが、上士別、多寄の同意が得られないので後にという事になったので、村長よろしく伝えてくれ。ところで君

の名前はなんちゅうのかね」「はあ、私は山崎ですが温根別は合併させないと言うのですか？」「いや合併はするのだが後にという事になったのだ。村長に伝えれば分かるからな。それで良いのだ」ガチャンである。

当時の私には良く理解出来なかったが真夜中の事でもあるし、朝、村長の登庁を待って報告したところ、「あ、そうか、分かった」と言われたが、一瞬目がキラリとしたのが今でもまぶたに焼き付いている。

合併促進委員会が再度開かれ、大騒ぎとなった。村に一台の録音器を持ち出した。録音嫌いな村長であったが、この時ばかりは許可された。会議の模様を全村有線放送で流したので、村中まさに上を下への大騒ぎである。その内容を一口にまとめると次のような事であった。

「温根別は万難を廃して村民の同意を得、一番先に合併を決意した。しかし、貧乏だから吸収合併にするとは言語道断。この上は山の木を切って食いつぶしても数十年は持つ。石にかじりついても合併はしない」という事になった。

五月になり花見のシーズンともなればバスに士別の綺麗（きれい）どころが乗り鳴り物入りで宣伝に来て



温根別村閉村式 村長と他職員

役場の前で下車し、土別音頭を踊り、役場一階の会議室で茶等の接待をするのが例年の習わしであったが、昭和二十九年の春だけは一人も出て行かず、お姉さん方が役場に入っても皆知らぬ顔のままであった。後日、「私たちには罪はないのにさ、あんないやな思いをした事はなかったよ」と言われた。

六月下旬に私は旭川の商工会館で通産省が行うNHKサービスステーションの免許取得講習を受講していたところ、温根別役場から電話があり、「対等合併をする事になったので希望を取りまとめているが、君はどこへ行きたいか」と言うのである。私は二十七年に教育委員会が出来てからは、村の統計係と教委事務局の社会教育係の併任で、辞令なしの公民館担当であったので、「併任や兼務はいやだから、教育委員会関係へ行きたい」「温根別は支所になるので教育委員会は何か残らん」「一にも二にも教育委員会関係にしてほしい」と、講習をやめて帰庁した。

そして、七月一日合併となったのである。今は大同合併と言われているが、当時は対等か吸収かによってその差は大きかった。だが、貧乏と言われた温根別の山林のおかげで土別市財政再建の大きな力となったのである。

(山崎 東三郎)

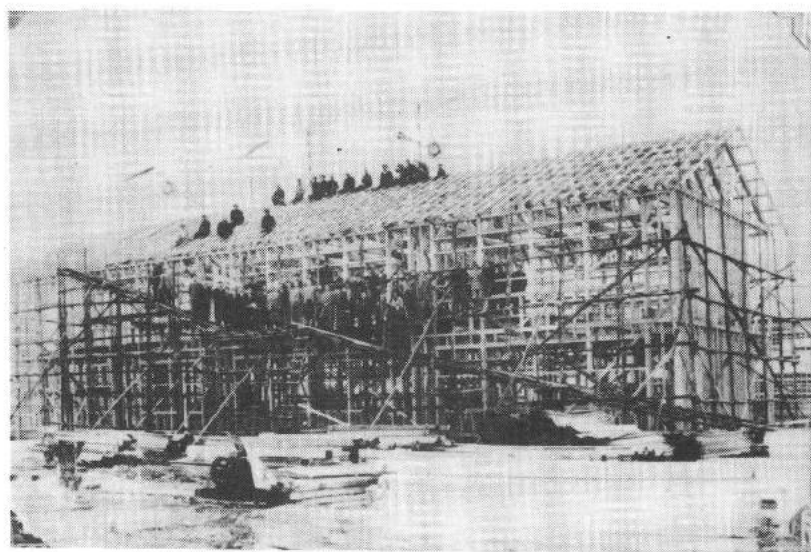
町村合併当時の校舎

土別市が、市制を施行したのが昭和二十九年七月一日である。当時、小学校は二十六校、中学校は十四校、それに東高校と合わせて四十一校であった。

古い危検校舎が多く、改築が急務とされたが、財政事情からみて、一年に一校改築して四十一年はかかるといわれ、合併して一番困ったことは、校舎の補修工事費が増大したことだ。毎日のように、各学校長やPTA役員が市教委に懇請に訪れ、その対応が大変なものだった。市教委では早々に学校巡回計画を立て、くまなく各校を回り補修箇所を調査した。

これを業者に見積もらせると、莫大な工事請負費がかかるので、各学校のPTAの協力を貰い、原材料費でベニヤ板、釘などを補修材料を購入して各学校に配り、校下父兄の協力で補修箇所の急場をしのいだ。

これでは市立どころか、PTA立にしたらよいと言われたものだ。ともかく子供のために市教委と学校が一体となり応急対策作業で相当な成果を挙げた。



南小学校の上棟式 昭和30年

士別市誕生余話

次に、学校の飲料水が悪いので、この対策に苦勞した。伊文校は、山から沢水を管で学校まで引き込み、良い水になったと喜びも束の間、牛の放牧で汚染されそうになり、大騒ぎで対応した。北静川校は問題が無かったが、北温校は一番困った所だ。たった一ヶ所あった井戸に、糸ミミズが発生して使用できなくなり、その上に或る父兄が保健所に届けたので、大騒ぎになった。早速、沢地に井戸を掘り溜水して配管で、学校や教員住宅に配水したが、夕方になると渴水して困ったことがあった。南士別校は、従来の井戸が渴水してグランドの横にボーリングをしたが、水が思うように出ず、道路を横断して向かいのS商店の横に井戸を掘り、そこから動力ポンプで引水して、長い間に大変苦勞したが、ようやく良質の飲料水が確保できた喜びは終生忘れることが出来ない。

現在は、どの学校でも水道が敷設され、水を腹いっぱい飲むことが出来てうれしい限りである。

(安田 勝義)

合併については、事前に各村内の状況を知る必要があろうと、士別町議会総務常任委員による上士別、多寄、温根別の議員との懇談会を個別に開いた。

その中で知りえた情勢では、それぞれに村創設の歴史の意義や、経済、地理的条件など異なった事情があり、必ずしも合併しなければならない状況ではなかった。特に、対等合併と言え士別町への吸収合併が判然としているので、今更でもあるまいと言う雰囲気が強く、機運は一向に進展せず、模様眺めの状況だった。

その後も議会関係者と協議を重ねたが進展せず、合併問題は暗礁に乗り上げた形になった。当時、佐々木町長をはじめ議会関係者は、鳩首会談をひんばんに開いたが、解決の見込みが立たず私のところに相談があった。

私は、一つの成算を持っていた。それは合併への国保事業の拡大適用だった。三村とも過去に、国保事業（組合経営）を行っていたが、赤字経営のため休廃止

の運命にあった。幸い士別の国保事業は道内唯一の厚生大臣賞の表彰を受けるほどの健全経営であり、合併と同時に国保事業を全域に適用する案であった。

私は、三村合併協議会に出席して、このことを強調したところ、異常な関心で私の提案を注目した。当時、医療費は農村では大きな経済負担で、私の調査の中で、下士別の中堅農家が医療費支払いで、三年で小作農に転落したケースがあった。家族分散の悲劇もあり、医療費負担が農家経済に与えた負担を物語っていた。

果たせるかな、合併の機運が急速に高まり、ついに士別市誕生を達したのであった。

(安成 勇二)



上士別役場に密書を届ける



まだ雪のある頃だった。助役の笹尾さんから大きな角封筒にはいった書類を「上士別役場の中田村長に届けてほしい」と頼まれ、バスで上士別へ出かけた。

上士別市街の手前でバスから下り、用事を装い店屋に入って、お土産のキャラメルを二ヶ包んでもらい、何食わぬ顔で役場へ向かうと、後ろから尾行して来る人がいるのに気がついた。

とっさに、遠回りして荒井課長の奥さんに用事をあると見せ掛け荒井さん宅に立ちより、数時間過ぎて外へ出たら、諦めてか尾行の人影がないので、大急ぎで役場に駆けつけて、角封筒を中田村長に手渡し、士別に帰ったが、運悪く途中でバスが故障し、まだ追われているのではないかと冷や冷や、家に辿りついた時は、こんな役目は二度とごめんだと思った。

(池尻 君子)

天皇ご来道で投票日変更

士別市誕生に伴う初の市長選挙は、市の選挙管理委員会によって昭和二十九年七月二十一日告示、八月十日投票と決った。ところが、八月十一日天皇陛下ご来道が決定したことから、急拠市選管が七月十六日再協議を行って、告示を三日間繰り下げて七月二十四日とする。投票日は二日間早め八月八日と変更する旨正式決定が下された。

又、右選挙に係る補充選挙人名簿調整期日は七月十九日現在、調整期限は同月二十七日、縦覧期間は同二十八日から三十一日までとし、市役所及び各支所で行なう。立候補届出では、告示二十四日から二十九日までの六日間、選挙運動期間は立候補届出から投票日前日の八月七日までとする。投票区は、士別中央が九ヶ所、上士別九ヶ所、多寄八ヶ所、温根別六ヶ所の三十二ヶ所と定められた。

次いで、立候補者の法定選挙運動費用は、最高額十一万二千五百円、有権者総数一万八千六百二十三名であった。

(数中 寿治)

腹は満吉、金と中屋で支払いもじもじ

昭和二十九年、士別市は一町三村の合併で、四一、七〇〇人でスタートした。

市長三浦満吉、助役中屋金三郎、収入役太田茂治、総務部長国府光男、総務課長三浦留一、産業部長七条成良と、陣容がいくら立派でも、職員の給料三ヶ月も未払いでは、江戸の経世学者林子平が「親もなく、妻もなく子なく版木なし、金もなければ死にたくもなし」と言ったが、貧乏町村の合併だから銀行も金を出し渋り、ひたすら国の再建債の認可を待っていた。

商店街も市の職員と聞けば積極的に「買って下さい」と言わない、そこで職員たちがまとめた茶飲み話は、『腹は満吉、金は中屋で、支払いもじもじ、こくなことには借金留め置き、それじゃなんにも成功（良）しない』と、こそこそ話が当分続いた。（八 敏 清明）

連日の炎天續きから

稲作に危険信號

い道が開かれたわけである。

士別欽次野球陸選

擔き米庄の一齊取締り
第四は六俵二万六千四百圓

真積損も大分か和し一月初旬の豫定されてきている現情である。土曜食品協野球長勝を以て同商店フアイアーを興じ、夏(二十六才)と名調三日の空で歴々繰出し、結果觀戰の華七月半頃の南陽貯水池四日中学校運動會に人附近で同キャンプで行つて現金四千円、七月份は一打は四十點一日に兩百圓同銀貨、名の青年は十數人、昨今三時同銀店フアイアーを興じ、夏

(三)

味附は手迄も
手柄味そではござんすべ
一番タカシマ綿屋
上手な

通雅

士馬町大馬路二
道北新開樓式館
編 集 部 513
工 務 部 174
印刷部發行 志林

シルクロン工場

誘致運動に強敵

具体策確立は焦眉の急

なんでも時代の寵児と活動家たるべき必要あり。今後彼等は愛國して輝かしく脚光を浴び、その功績を後世に傳へて居るべきものと希望する。其の功績を著し得るに足るに、七、八、九、十の各年、北滿路の建設、上京路の修築とつて一大光明の事業に合せて、工事中使ふべき本町長官、地方官等とて利便に努めしむべきものと希望する。其の功績を著し得るに足るに、七、八、九、十の各年、北滿路の建設、上京路の修築とつて一大光明の事業に合せて、工事中使ふべき本町長官、地方官等とて利便に努めしむべきものと希望する。

特別委員會設置

所が過早にこの問題を
擧げて九月九日のシ
ンタロン工場防衛委員
は其れまで議案とし
て提議に關して特別
委員會を以て町當局
を便達し
て今度の防衛委員會
は二十三日收會し
て議決したが、
町當局の金庫員會を
開き
て一應シタロン工場
防衛委員の事となり
取り敢へず
所の事をもつて暫時
おくれにして九月九
日のシ
ンタロン工場防衛委員
の事案の経緯を式底で大工場の閉鎖の後を受

工場誘致
離はひとり七割町

に似られた現象で
くして、全般的に
も大部分の府縣で

[illegible]

收養政策に反響

意氣揚々たる農民

[illegible]

二日、農民大会に引続打事報告の承認
同もあつた、もとで議案審議に入

一、二八年度
 告ならびに秋
 二、七年度
 正予算
 三、特別会計
 四、規約の修
 五、規約の修

のには対岸の大災禍を
ような日和見主義を
持して、寸時も早く

練習問題を開始せんこと

株式会社 北海道相互
士別薬務

店員募集
男子店員二名
中卒卒一六才より二〇才
往還可能の方
事務員一名
男を問わす 高校卒二五
も身体強健思慮堅固の方

在川茶店
電六一番

魔物は悪性です
 非
 ナンチタミン
 をおめ致します……
 十字堂薬舗
 龍三二三番

何品にても気軽に
御相談に願います

その夜も
のろり囲んで

美吉屋の
電話四

ヒ
香

道北新聞

本報社 大館市二丁目
電話 2111
印刷部 大館市二丁目
電話 1766
編集部 大館市二丁目
電話 1766
印刷部 大館市二丁目
電話 1766

五年振りで解除

拓銀支店で三月五日から拂戻し

一八〇〇日の利息加算

封鎖預金

戦時中の第三回の預金封鎖は、昭和二十三年三月一日から三月三十一日まで、三ヶ月間、預金者の預金に對して、封鎖が行はれた。この封鎖は、戦時中の特殊な状況下で、政府が金融を統制するために実施されたもので、預金者はこの期間中に預金を引き出すことが出来なかった。しかし、戦況の推移に伴い、政府は封鎖の解除を決定し、昭和二十八年三月五日から、封鎖された預金を、一八〇〇日の利息を加算して、預金者に返還する。これは、戦時中の金融政策の大きな転換点であり、預金者にとっては大きな喜ばしい出来事である。

樺太關係は除外

財源はあつても拂戻はされない。戦時中の封鎖預金に對して、政府は、樺太の關係は除外する。これは、樺太が戦時中の特殊な地域であり、通常の金融政策とは異なる取り扱いを受けるためである。預金者は、この点に注意を払う必要がある。

生命を惜しむ

運動。生命を惜しむ。これは、戦時中の重要なメッセージである。戦時中は、生命の尊厳が脅かされる危険な状況に置かれる。したがって、生命を大切にし、安全を確保することが、戦時中の最大の課題である。運動を通じて、健康を維持し、生命を大切にすることが、戦時中の重要な行動である。

三月中に百組合

納税組合設立に本腰

町明年度予算案。三月十日の町議会に提案。町明年度の予算案が、三月十日の町議会に提案された。この予算案には、納税組合の設立が重要な項目として盛り込まれている。納税組合は、町民の納税を円滑に行うための組織であり、町民の負担を軽減し、町政の運営に貢献する役割を果たす。町民は、この納税組合の設立に積極的な協力をする必要がある。

町明年度予算案

三月十日の町議会に提案。町明年度の予算案が、三月十日の町議会に提案された。この予算案には、町民の生活向上のための様々な施策が盛り込まれている。例えば、道路の整備、公園の整備、文化施設の整備など、町民の生活に直接関係する施策が数多く含まれている。町民は、これらの施策が順次実施されることを期待している。

私利私欲

私利私欲。これは、戦時中の重要なメッセージである。戦時中は、私利私欲を超越し、公衆の利益のために行動することが求められる。私利私欲を追求することは、戦時中の道義に反する行為であり、厳しく禁じられる。町民は、私利私欲を捨て、公衆の利益のために行動する必要がある。

梅澤源吾

梅澤源吾。これは、戦時中の重要な人物である。梅澤源吾は、戦時中の町政運営に重要な役割を果たした人物であり、町民の生活向上に貢献した。梅澤源吾の功績は、町民の記憶に残っており、町民は梅澤源吾の功績を高く評価している。

上川總合開發

上川總合開發。これは、戦時中の重要なプロジェクトである。上川總合開發は、上川地域の総合的な開発を目的としたプロジェクトであり、道路の整備、公園の整備、文化施設の整備など、様々な施策が実施されている。町民は、このプロジェクトの進展を期待している。

期成會總會

期成會總會。これは、戦時中の重要な組織である。期成會總會は、町民の生活向上を目的とした組織であり、町民の生活向上に貢献する役割を果たす。町民は、この組織の活動に積極的な協力をする必要がある。

農業組合長會議

農業組合長會議。これは、戦時中の重要な会議である。農業組合長會議は、農業組合の長が参加する会議であり、農業の発展を目的とした会議である。町民は、この会議の成果を期待している。

固定資評價

固定資評價。これは、戦時中の重要な課題である。固定資評價は、固定資産の価値を評価することであり、町民の生活向上に貢献する役割を果たす。町民は、この課題の解決を期待している。

助員會議

助員會議。これは、戦時中の重要な会議である。助員會議は、町民の生活向上を目的とした会議であり、町民の生活向上に貢献する役割を果たす。町民は、この会議の成果を期待している。

道北

道北。これは、戦時中の重要な地域である。道北は、戦時中の町政運営に重要な役割を果たした地域であり、町民の生活向上に貢献した。町民は、道北の発展を期待している。

春秋

春秋。これは、戦時中の重要な文芸作品である。春秋は、戦時中の町民の生活を描いた文芸作品であり、町民の生活向上に貢献する役割を果たす。町民は、この文芸作品の読者を期待している。

飲料水源の試掘

飲料水源の試掘。これは、戦時中の重要なプロジェクトである。飲料水源の試掘は、飲料水の確保を目的としたプロジェクトであり、町民の生活向上に貢献する役割を果たす。町民は、このプロジェクトの進展を期待している。

土壌研究所

土壌研究所。これは、戦時中の重要な研究機関である。土壌研究所は、土壌の研究を目的とした研究機関であり、町民の生活向上に貢献する役割を果たす。町民は、この研究機関の成果を期待している。

成式は七日

成式は七日。これは、戦時中の重要な式典である。成式は七日は、町民の生活向上を目的とした式典であり、町民の生活向上に貢献する役割を果たす。町民は、この式典の開催を期待している。

生活改善

生活改善。これは、戦時中の重要な課題である。生活改善は、町民の生活向上を目的とした課題であり、町民の生活向上に貢献する役割を果たす。町民は、この課題の解決を期待している。

料理講習會

料理講習會。これは、戦時中の重要なイベントである。料理講習會は、料理の技術を習得するための講習會であり、町民の生活向上に貢献する役割を果たす。町民は、この講習會の開催を期待している。

笑顔見りや

笑顔見りや。これは、戦時中の重要な文芸作品である。笑顔見りや、戦時中の町民の生活を描いた文芸作品であり、町民の生活向上に貢献する役割を果たす。町民は、この文芸作品の読者を期待している。

美吉屋のパン

美吉屋のパン。これは、戦時中の重要な文芸作品である。美吉屋のパン、戦時中の町民の生活を描いた文芸作品であり、町民の生活向上に貢献する役割を果たす。町民は、この文芸作品の読者を期待している。

御持参ください

御持参ください。これは、戦時中の重要な文芸作品である。御持参ください、戦時中の町民の生活を描いた文芸作品であり、町民の生活向上に貢献する役割を果たす。町民は、この文芸作品の読者を期待している。

西一ノ五

西一ノ五。これは、戦時中の重要な文芸作品である。西一ノ五、戦時中の町民の生活を描いた文芸作品であり、町民の生活向上に貢献する役割を果たす。町民は、この文芸作品の読者を期待している。

電話三三五

電話三三五。これは、戦時中の重要な文芸作品である。電話三三五、戦時中の町民の生活を描いた文芸作品であり、町民の生活向上に貢献する役割を果たす。町民は、この文芸作品の読者を期待している。

道衛生部へ計調書提出

が二七五、精進二四に収録されている因習、
・農地改良見習二二頁處作價額に異いて堅
じたものは應

宮中の新も昔より

國に三分の三を樂
空國定資本股

五箇十五夫制が發列

認められ、すなわち二七年度、ついでの家賃
を固定費と脱却から、賃料の正

表彰式その他近く發

ついでの家賃
イ、遺物・正價格に
部の専用庫を喫じ
て得たとする

士界局提ひの二月末迄
援護法によつて進取年松下 清
命が支給される讀書者印藤栄次

師の君のあへ

要崎源一
鈴木正雄

師の君のあつた情

石油コンロ出現

馬駒屋築

て
月
試

店

五〇〇
積立貯金目標
二月半以内に
突破し一一
兆が普通貯

馬駒屋築

此に必要にして永久に

驛 驛屋

オキノ式が歴倒的 受胎調節アンケート

連班はしたほうが良い

受胎調節は従来、家庭の経済状況に左右されてきた。オキノ式は、科学的な方法で、夫婦の生活リズムに合わせて、受胎のタイミングを調節できる。アンケートの結果、多くの夫婦が「連班はしたほうが良い」と回答した。これは、夫婦の生活リズムが整い、経済的にも余裕があることが、受胎調節に有利な要因であることが示された。

町立家庭試験場

本年度から三回試験場が設けられ、家庭の経済状況や生活リズムに合わせて、受胎のタイミングを調節できる。試験場では、夫婦の生活リズムに合わせて、受胎のタイミングを調節できる。試験場では、夫婦の生活リズムに合わせて、受胎のタイミングを調節できる。

花嫁とりようが

一日に四組の花嫁が、町立家庭試験場に集まり、受胎調節の方法を学んだ。試験場では、夫婦の生活リズムに合わせて、受胎のタイミングを調節できる。試験場では、夫婦の生活リズムに合わせて、受胎のタイミングを調節できる。

級修式

町立家庭試験場では、夫婦の生活リズムに合わせて、受胎のタイミングを調節できる。試験場では、夫婦の生活リズムに合わせて、受胎のタイミングを調節できる。試験場では、夫婦の生活リズムに合わせて、受胎のタイミングを調節できる。

熱能大会

町立家庭試験場では、夫婦の生活リズムに合わせて、受胎のタイミングを調節できる。試験場では、夫婦の生活リズムに合わせて、受胎のタイミングを調節できる。試験場では、夫婦の生活リズムに合わせて、受胎のタイミングを調節できる。

朝日村の婦人 研修会

朝日村の婦人研修会では、夫婦の生活リズムに合わせて、受胎のタイミングを調節できる。研修会では、夫婦の生活リズムに合わせて、受胎のタイミングを調節できる。研修会では、夫婦の生活リズムに合わせて、受胎のタイミングを調節できる。

家庭計画講座

家庭計画講座では、夫婦の生活リズムに合わせて、受胎のタイミングを調節できる。講座では、夫婦の生活リズムに合わせて、受胎のタイミングを調節できる。講座では、夫婦の生活リズムに合わせて、受胎のタイミングを調節できる。

泥棒

泥棒の被害に遭った夫婦の生活リズムに合わせて、受胎のタイミングを調節できる。泥棒の被害に遭った夫婦の生活リズムに合わせて、受胎のタイミングを調節できる。泥棒の被害に遭った夫婦の生活リズムに合わせて、受胎のタイミングを調節できる。

二十八年 度に乳牛二百 頭を導入

二十八年に、乳牛二百頭を導入した。乳牛の導入は、夫婦の生活リズムに合わせて、受胎のタイミングを調節できる。乳牛の導入は、夫婦の生活リズムに合わせて、受胎のタイミングを調節できる。乳牛の導入は、夫婦の生活リズムに合わせて、受胎のタイミングを調節できる。

公民館連立 議会

公民館連立議会では、夫婦の生活リズムに合わせて、受胎のタイミングを調節できる。議会では、夫婦の生活リズムに合わせて、受胎のタイミングを調節できる。議会では、夫婦の生活リズムに合わせて、受胎のタイミングを調節できる。

基金追放映画

基金追放映画では、夫婦の生活リズムに合わせて、受胎のタイミングを調節できる。基金追放映画では、夫婦の生活リズムに合わせて、受胎のタイミングを調節できる。基金追放映画では、夫婦の生活リズムに合わせて、受胎のタイミングを調節できる。

春のめととも

結婚の準備、結婚の準備、結婚の準備。結婚の準備、結婚の準備、結婚の準備。結婚の準備、結婚の準備、結婚の準備。

解雇廣告

解雇の準備、解雇の準備、解雇の準備。解雇の準備、解雇の準備、解雇の準備。解雇の準備、解雇の準備、解雇の準備。

嫁入道具一式

嫁入道具一式、嫁入道具一式、嫁入道具一式。嫁入道具一式、嫁入道具一式、嫁入道具一式。嫁入道具一式、嫁入道具一式、嫁入道具一式。

奥様へ贈る「家庭の電化」

奥様へ贈る「家庭の電化」、奥様へ贈る「家庭の電化」、奥様へ贈る「家庭の電化」。奥様へ贈る「家庭の電化」、奥様へ贈る「家庭の電化」、奥様へ贈る「家庭の電化」。

迎帳歓迎

迎帳歓迎、迎帳歓迎、迎帳歓迎。迎帳歓迎、迎帳歓迎、迎帳歓迎。迎帳歓迎、迎帳歓迎、迎帳歓迎。

春のめととも

春のめととも、春のめととも、春のめととも。春のめととも、春のめととも、春のめととも。春のめととも、春のめととも、春のめととも。

解雇廣告

解雇の準備、解雇の準備、解雇の準備。解雇の準備、解雇の準備、解雇の準備。解雇の準備、解雇の準備、解雇の準備。

嫁入道具一式

嫁入道具一式、嫁入道具一式、嫁入道具一式。嫁入道具一式、嫁入道具一式、嫁入道具一式。嫁入道具一式、嫁入道具一式、嫁入道具一式。

奥様へ贈る「家庭の電化」

奥様へ贈る「家庭の電化」、奥様へ贈る「家庭の電化」、奥様へ贈る「家庭の電化」。奥様へ贈る「家庭の電化」、奥様へ贈る「家庭の電化」、奥様へ贈る「家庭の電化」。

迎帳歓迎

迎帳歓迎、迎帳歓迎、迎帳歓迎。迎帳歓迎、迎帳歓迎、迎帳歓迎。迎帳歓迎、迎帳歓迎、迎帳歓迎。

春のめととも

春のめととも、春のめととも、春のめととも。春のめととも、春のめととも、春のめととも。春のめととも、春のめととも、春のめととも。

解雇廣告

解雇の準備、解雇の準備、解雇の準備。解雇の準備、解雇の準備、解雇の準備。解雇の準備、解雇の準備、解雇の準備。

嫁入道具一式

嫁入道具一式、嫁入道具一式、嫁入道具一式。嫁入道具一式、嫁入道具一式、嫁入道具一式。嫁入道具一式、嫁入道具一式、嫁入道具一式。

奥様へ贈る「家庭の電化」

奥様へ贈る「家庭の電化」、奥様へ贈る「家庭の電化」、奥様へ贈る「家庭の電化」。奥様へ贈る「家庭の電化」、奥様へ贈る「家庭の電化」、奥様へ贈る「家庭の電化」。

迎帳歓迎

迎帳歓迎、迎帳歓迎、迎帳歓迎。迎帳歓迎、迎帳歓迎、迎帳歓迎。迎帳歓迎、迎帳歓迎、迎帳歓迎。

貫當り五百八十圓

需要の減退から不調

除虫菊

最近除虫菊の相場は、千圓以上と高値を維持しているが、これは、冬場の需要が旺盛なためである。しかし、春先の需要が減少するにつれて、相場は下落する傾向にある。現在、除虫菊の相場は、千圓前後で推移している。これは、冬場の需要が旺盛なためである。しかし、春先の需要が減少するにつれて、相場は下落する傾向にある。現在、除虫菊の相場は、千圓前後で推移している。

性病予防週間を

一日から保健所で実施

土曜日の午後、保健所で「性病予防週間」の一環として、市民の健康増進を図るため、各種の性病予防に関する相談と検診を実施する。この日は、市民の健康増進を図るため、各種の性病予防に関する相談と検診を実施する。この日は、市民の健康増進を図るため、各種の性病予防に関する相談と検診を実施する。

解説

映画

映画「風立ちぬ」は、高橋留平の原作を基にした作品で、戦時下の若者の恋愛と理想を描いている。この映画は、戦時下の若者の恋愛と理想を描いている。この映画は、戦時下の若者の恋愛と理想を描いている。

風立ちぬ

高橋留平の映画化

映画「風立ちぬ」は、高橋留平の原作を基にした作品で、戦時下の若者の恋愛と理想を描いている。この映画は、戦時下の若者の恋愛と理想を描いている。この映画は、戦時下の若者の恋愛と理想を描いている。

オルガンなど寄贈

南小學校に市内三商店が

市内の三商店が、南小學校にオルガンなどを寄贈した。これは、南小學校の音楽教育を支援するためのものである。市内の三商店が、南小學校にオルガンなどを寄贈した。これは、南小學校の音楽教育を支援するためのものである。

激粉

資金受付す

激粉の資金受付は、市民の健康増進を図るためのものである。激粉の資金受付は、市民の健康増進を図るためのものである。激粉の資金受付は、市民の健康増進を図るためのものである。

剣淵村開村記念日

その歴史を振り返る

剣淵村の開村記念日は、その歴史を振り返る機会である。剣淵村の開村記念日は、その歴史を振り返る機会である。剣淵村の開村記念日は、その歴史を振り返る機会である。

九月一日

九月一日は、剣淵村の開村記念日である。九月一日は、剣淵村の開村記念日である。九月一日は、剣淵村の開村記念日である。

石炭は今

燃料に頭

石炭は、現在、燃料として重要な役割を果たしている。石炭は、現在、燃料として重要な役割を果たしている。石炭は、現在、燃料として重要な役割を果たしている。



映画案内

映画「風立ちぬ」は、高橋留平の原作を基にした作品で、戦時下の若者の恋愛と理想を描いている。この映画は、戦時下の若者の恋愛と理想を描いている。この映画は、戦時下の若者の恋愛と理想を描いている。

映画案内

映画「風立ちぬ」は、高橋留平の原作を基にした作品で、戦時下の若者の恋愛と理想を描いている。この映画は、戦時下の若者の恋愛と理想を描いている。この映画は、戦時下の若者の恋愛と理想を描いている。

夏を美しく
最新流行をゆく
お洋服・ドレス
男女・婦人物資
お洋服・ドレス
男女・婦人物資
お洋服・ドレス
男女・婦人物資

お客さまに
お会合に
お会合に
お会合に
お会合に
お会合に

士別で
一
安
安
安
安
安
安

道北新聞社
道北新聞社
道北新聞社
道北新聞社
道北新聞社
道北新聞社

降りに降つた一晝夜(現地)

雪の氷雪に
雪の氷雪に

水煎服。

[illegible]

人間の無力を嘲笑

九十九橋下の如

[illegible]

死と恐怖の五時間

柳の木に二十三人が

分
給
あり

12

銀橋も一夜で流失

10

保健所防疫に萬全

10

100

買客開業補助せ

此邦に事業を興ける列國の経営者諸君へ
出資せられたるとして一日二日あり
 のてして同輩致しました
を少くもわたくしお氣になつて御用下さい
京一條八丁目萬野商會となり

 **小林質店**

ユカタ・豆箱
多量入荷致しました
是非一度御来店下さい
亀屋呉服店
大阪市西成区日

の健康診断など
馬車の酒席、床上、床下
窓及び障子の裏で酒席、ツ
ツ、及び原宿の茶室等々
外、而かも敷居の間に上り
の舞臺時、お茶屋の戸を
行ふことになつた。

森林愛護感

二輪車
あるが座が硬いので、こ
れについて其の伊に話つて
いる。

「今は成人となつたが、昔
子供が如くお台の林を
時分にこのよの林を
し世にも羨らした。今初
何と云ふことか。

門前は七月一日より十日に亘
 高橋 錦
 土間市大橋南第一
 電話 一六九番
 モーターの故障は門二四
 士別電機商

[illegible]


 時期物で
 特別高価値
 カメラ・日傘
 リンカー・バイラ
 山崎
 西一
 (共ヒール通し付)
 日ワ
 ヲ
 日

初飛行に乗客三百余名 空からの美観に感嘆の聲

北見飛行場の初飛行は、昨日(二十二日)午後二時三十分より午後三時三十分まで、約一時間、約二百名の乗客が参加した。飛行機は、北見飛行場の上空を飛行し、空からの美観に感嘆の聲が聞かれた。飛行機は、北見飛行場の上空を飛行し、空からの美観に感嘆の聲が聞かれた。飛行機は、北見飛行場の上空を飛行し、空からの美観に感嘆の聲が聞かれた。

お前の国へ 行ったよう

北見飛行場

北見飛行場

北見飛行場

北見飛行場

北見飛行場

北見飛行場

北見飛行場

北見飛行場

北見飛行場

北見飛行場

北見飛行場

金銭に細い階堂 同情少い関口さん

北見飛行場

北見飛行場

北見飛行場

北見飛行場

北見飛行場

北見飛行場

北見飛行場

住民の歓聲高く 21日菊水橋の落成式

北見飛行場

北見飛行場

北見飛行場

北見飛行場

北見飛行場

北見飛行場

北見飛行場

拜みたいほど の美しさ

北見飛行場

北見飛行場

北見飛行場

北見飛行場

北見飛行場

北見飛行場

北見飛行場

酋長は九十九山に 北風翁の調査でわかる

北見飛行場

北見飛行場

北見飛行場

北見飛行場

北見飛行場

北見飛行場

北見飛行場

燃える肉休 女防波堤

北見飛行場

北見飛行場

北見飛行場

北見飛行場

北見飛行場

北見飛行場

北見飛行場

浅井さんに 厚生大原表彰

北見飛行場

北見飛行場

北見飛行場

北見飛行場

北見飛行場

北見飛行場

北見飛行場

味涼の王将 生ビール 勝よし	寿司とビール 味の一番 力通	季節の味覚 生ビールを 「サツポロビール」 ビールは北海道の味	喫茶バー (日夜営業) コーヒとビール アベック特別献立 太陽 T.76
女防波堤 ふりそて編 主 演 勝よし	燃える肉休 大原表彰 主 演 勝よし	浅井さんに 厚生大原表彰 主 演 勝よし	季節御料理 焼鳥の店 白樺 T.76
静かなお座敷 溢れる情緒 平 井 主 演 勝よし	花の 主 演 勝よし	サツポロビール 上野町区役所前 岡田酒店	若鳥り焼 焼鳥の店 白樺 T.76

忘れていた足跡



大東亜輕音樂団

太平洋戦争が、段々と日本軍に暗雲垂れこめ始めた一九四三（昭和十八）年頃のことである。士別の町の中で、藤井時計店という店があった。現在、そこが菓子舗「うさぎや」に変わっている。場所は大通東七丁目である。

藤井時計店は、その頃既に店主は病没し、残された五人の子女を養育しながら女主人が営業を続けていた。長男は国民学校の高等科であったが、病弱のため不動尊（学田）の境内に町が設けた「修練道場」で、鍛練のため合宿訓練を受けさせられたりしていた。

彼は藤井澄男といった。彼はハーモニカやギターなどの楽器を独習で演奏する天性に恵まれていた。暗い谷間に閉されたような灰色の時代に、何時か彼の家に幾人かの友人が集まって、ハーモニカ、ギター、手風琴などで、軍歌や流行歌の合奏を楽しむようになったのである。

時計店の茶の間に、数人の国民学校生徒が寄って、

楽器演奏を続けているうちに、突然大人達が首をつこんできた。それらは、明治製糖工場の工具や、郵便局員、松谷化学薬品工場の旋盤工や日通職員、警察官、役場吏員と膨らんでいった。楽器もハーモニカ、ギター、マンドリン、アコーディオン、バイオリン、チェロ、ドラムと徐々に増えたのである。

やがて「大東亜輕音樂団」と、時流に乗ったいかめしい名称まで付され、アマチュアの楽団として誕生をしたのである。団長には工藤熊男歯科医師が推挙された。練習場は、時計店の茶の間では狭くなった。一時は、時計店裏隣の寺の本堂を使用させてもらったこともあった。何しろ戦時体制下、国民学校の子供から男女大人に至る大勢の集団で、器楽合奏に加えて、歌の練習、舞踊の練習というのだから、時局をわきまえぬ不行跡、と檀家衆の眉をひそめさせた。寺から本堂使用を拒否されて、忽ち練習場に窮してしまった。

工藤団長は、役場に伊藤仙五郎町長を訪ねた。大東亜輕音樂団が、旭川七師団の慰問を実施するので、郷土の兵士激励のため町長も同行して挨拶していただきたい、併せてそのための練習場に公会堂大広間の使用を許可していただきたい、と申し入れたのである。町長は、挨拶を引き受けた上に公会堂使用の許可を与え



大東亜軽音楽団のメンバー

たのである。

旭川の師団慰問では、大勢の兵士を前にして、伊藤町長は「銃後のことは、ご懸念なく…」と挨拶をされるのだった。殊に兵士達から熱狂的な拍手が沸いたのは、国民学校入学前と、低学年の幼女二人が踊る「別れ船」の新舞踊であった。下の子が赤衣着物、上の子がマドロス姿で、歌に合わせて踊り出すと、家に同じ年頃の子供を置いてきた兵士達は、思わず涙を誘われてしまうのだった。

七師団に続いて、札幌の陸軍病院慰問も実施したのである。町長の同行は、申すまでもない。

大東亜軽音楽団は、段々とその存在が社会的にも認められ、声価が高まるにつれて、町内外の各方面から公演を頼まれるようになった。秋の収穫が終った、西士別、軍馬用地（武徳町）などの部落慰問の会が各々の学校で開かれた。明治製糖工場、土別窯業、奥士別御料局など、職場での産業戦士慰問も盛大に実施された。

部落での学校公演は、夜の開演であり、今のように入車社会ではないので、役場がトラックを出した。楽器や舞台装置と一緒に、団員が満積されて会場を往復した。武徳小学校での公演を終了し、一隊がトラックに

乗り込むと、真つ暗な校庭で誰かが「みんな乗ったかあ」と声を上げる。一齐に「おお」と気合がかかるや「出発」と合図があり、トラックが動き始める。

間髪を入れず、両手を振り上げ大声でわめきつつトラックの後を追いつながら熱烈に送られ、トラックの上の一同感激して思わず「バンザイ」を叫んだ。

さて、役場前に着いて解散する段になつて、団長（その時は二代目清光勝雄団長）から挨拶を受けるのであるが、その団長不在に気付いた。翌日判明したことであるが、団長は、トラック出発前に地元の武山藤吉氏と立ち話をしていたのだつた。動き出したトラックに気付き、慌てて両手を挙げて止めるため後を追ひ駆けると、トラックの上ではバンザイを絶叫しながら遠去かつてしまった、という顛末であつた。

止むなくその夜は、武山氏宅に泊めてもらひ、翌日歩いて帰宅され、薄情な団員だと団長をして嘆かせる一幕もあつた。

奥士別御料局の造林作業現場の切り上げに呼ばれた時は、往復臨時の軽便鉄道が運行された。会場は「鈴木座」という劇場の舞台が使用された。職員、従業員とその家族達で会場は占められ、すし詰め状態であつた。熱が入ると観衆から、チリ紙に金銭を包んだ、い

わゆるオヒネリがしきりに舞台めがけて飛んでくる。最前列中央に座を占めて舞台を見上げていた局長は、オヒネリを解せざるため、無礼な行爲と感違ひをしてしまい、側近の職員をして制止させようとした一駒もあつた。

明治製糖工場での公演において、工場側から清酒が差し入れされた。団員の中で役場吏員のニッケネーム「金べえさん」が、プログラム終了を待ち切れずに飲んでしまつた。出演予定の寸劇は、べろべろに酔つて到底無理と判断して、プログラムからカットした。にもかかわらず、どうしても出ると言い張り、団員の中の小さな子供のオーバーコートに無理矢理腕を通し、奴隷のようになつて「幕を開ける」と息巻く始末で、制止するのに手を焼かせたこともあつた。

士別窯業では、公演終了後責任者の北村順次郎氏が、あの重たい斗甕の焼酎をでんと据えて封を切つて「さあ遠慮せずやつてくれ！」と豪快なもてなしを受けたものである。私は飲めないから、記念に出された湯呑を一個貰つてきて、年月を重ねて愛用したものであつた。楽団はアマチュアのボランティア集団であるから、公演料などはない。舞台が終つてから、主催者側から慰労をされることもあつたのだ。

楽団のバンド・マスター的存在は藤井澄男であることは当然だが、楽団結成後吉田嘉一が参加した。吉田は歌手、司会、漫談、軽演劇、ドラマーと幅広い活躍をして、その器用さは得がたいものであった。彼は元々看板職人であるが、時局柄開業もならず、松谷化学薬品工場の旋盤工として働いていた。大人の団員は戦局が進むにつれて、次々に応召して征った。男子ばかりではなく、従軍看護婦となって戦場に赴いた者もいたのである。八面六臂の活躍をしていた吉田も、遂に昭和十九年十一月三十日入営の召集令状を受けたのである。吉田を送る記念の演奏会を、町の劇場「国勢座」で催すことになり、当日舞台の上で士別町文化連盟から次のような感謝状が、吉田に贈られたのである。

感謝状

音楽団員 吉田 嘉一殿

貴殿ハ大東亜輕音楽

団員トシテ本聯盟結成

以来本日迄斯道ニ盡瘁

サレタ功績顕著ナリ仍テ茲

ニ感謝ノ意ヲ表ス

昭和十九年十一月二十八日

士別町文化聯盟会長 山口

この日の演奏会終了後、団関係者の記念写真を写したが、今見ると、初代の工藤熊男団長、二代目の清光勝雄団長、三代目の久光鷹士団長等の顔が並んでいる。

大東亜輕音楽団は、日本国敗戦と共に解散をしたのであるが、町の片隅で国民学校（現在の小学校）生徒数人で始まった、確たる目的もなかった小さなバンドに、忽ち大人達までが崩れこみ、やがて町の有力者まで捲き込み、四十数名の大集団となり、各地から引つ張り風の公演が行われたという事実、その度に団員の学童は特別に休校が許可されるという、今ではとても考えられないことが行われたのだ。あの暗い、戦時体制の時代に、不思議な夢を見る思いをするのである。（団関係者名の敬称を略す）（伊藤 善彦）

市内の標高



昭和六十三年の夏、知床は宇登呂の奥、岩尾別の羅臼岳登山口の小屋に泊まった朝、関西から来た若い女性、戸を開けるなり威勢のいい声で「羅臼岳は千六百六十メートルと聞いたが、標高ですか、海拔ですか」と山小屋の主に見た。私は、なんと答えるかと山小屋の主を見た。この山小屋は木下小屋と呼び、古くから羅臼岳の起点として知られた所で、さすが山が好きで山小屋の経営を引受けただけに、的確に答えていた。しかし、最近の案内書には、標高と書いてあるが、どちらも同じである。士別地方の地図を見ると、土風

山が六百四十六メートルで東内大部山が七百八十八メートル、温根別の犬牛別山が七百四十六メートルと知っている方には失礼だが、意外に大雪山の旭岳が二千二百九十メートル、天塩岳が千五百五十七メートルと知りながら、士別市内の山の標高を知らない方が多い。

市立図書館前に標柱があり、緯度、経度、標高が記されている。北緯四十四度十分三十二秒、東経百四十二度二十四分〇三秒、標高百二十七・五メートルになっている。せっかく市民のために設置したので、ぜひ見て頂きたい。

地理院が、国道沿いに約二キロ毎に水準点を置き、丸い御影石の突起を出し、その頂点部に数字が記してあるのが標高である。大切な表示石なので鉄蓋で覆っているが、市内では、国道と神社通りが交差するわずかに北寄りの所にある。

標高の基準は、東京湾の平均中潮位をゼロメートルとし、日本中に測定した値で、地球の球面で補正計算がされている。剣淵川は北に向かっていているが、士別市街の地形は反対に、神社通り交差点が標高百二十九・六メートルで南郷通りの交差点が百二十四・六メートルと低くなっている。

(荒木 正一)

水道水の味

去年（平成二年）東京の姉の所で、水が飲みたくなり水道の蛇口をあけると、姉が冷蔵庫から容器に入れた水を出してくれた。見ると六甲の水の販売品だ。デパートではこの他にも各地の水を売っていると言う。

ひどく喉が乾いたので一気に飲むと、土別の水道水と比べ特に美味とは思わなかった。札幌でも各地の水を売っているのを見た。銘水は銘酒を生むというが牛乳より高い値段で売られている。

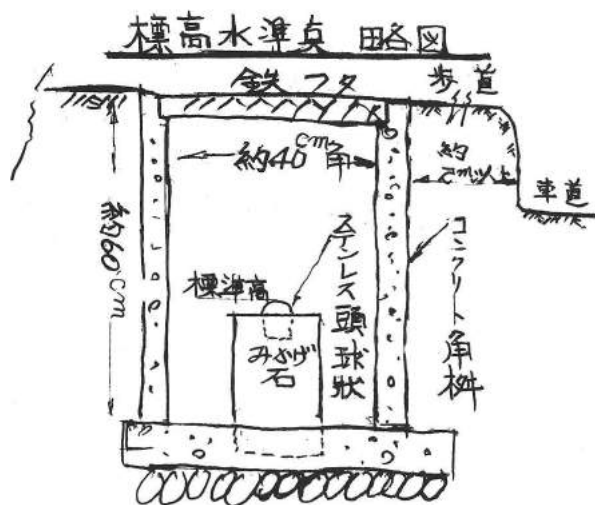
そこで、土別の水道水の味はどうだろう。最果ての稚内の水は正直に言ってまじかった。水源の湖に藻が生えていたからだ。現在は違う所から取り水している。土別市は、三ヶ所とも水源に恵まれて最初から良い味だ。少し味は違うが含有している物質が異なるからで、決して不味い味ではない。

お茶にはお不動さんの水をと、わざわざ汲みに行く人もいるが、水道水は法の基準で滅菌のため塩素（カルキ）を入れる。水道管の末端残分が百分の〇・一と

極めて微量であるが、配水池の近くは数値が高くカルキは人の感覚に敏感である。

このカルキを除けば、土別の水道水は道内で最も美味しい水である。カルキを除く方法は、煮沸して使うこと、前夜から汲み置きする方法がある。

（荒木 正二）



国道40号神社通り交差点よりわずかに北寄の地点

市内の地質と岩石

昭和三十四年、市は北海道地下資源調査所に市内全域の地質と地下資源の調査依頼をした。

かつて銅鉾山、砂金産出で名をはせた土別市の何処かに、有望な鉾山を期待したのは当然だろう。しかしこの調査は未完であつたと思える。

亀甲石について

全国的な石ブームのころ、市内の亀甲石が一躍有名になつた。市内の石愛好者はもとより、他からも石を求めて大がかりな採取が始まつた。

場所は温根別北十七線、溜池のあるオロウエンベツ川の右岸一帯のケツガン層、日高金山の岩石と異なるが、団塊が亀甲状の亀裂で白色の鉾物（石灰質）で、磨きあげると光沢が出て鑑賞石として脚光を浴びた。わが家の庭、床の間を飾る人から、にわか金にする者が多くなり、河川敷地内では飽き足らず、大がかりな採掘道具から果てはウインチまで持ち込んでの採掘

騒ぎになつた。

そこで、国有林を預かる営林署も放置出来ず、北十七線一帯は立ち入り禁止区になつたが、それまでトラック数台分が運び去られていた。地元の人が漬物の重しに使用していた石が、これほど貴重だとは思ひもしなかつたが、そのころから市内のあちこちで石を磨くグラインダーの音が絶えなかつた。

花崗岩と運動施設

土別にある花崗岩質岩は、粗粒な優白色の風化した岩質だが、土別では貴重な役目を果している。

陸上競技場のトラック、水郷公園の運動場、各学校の運動場に敷きつめられ、雨が降っても砂混じりの土とは、比較にならない排水効果を上げている。体育施設には好天候でも土が固くならず、雨が降っても良いコンディションで競技ができる。

しかし現在、露頭している所では、粒度が細かく中々良質の採取場が見つからない様子だ。大和に向かう二十線南五号の市道から採取している土を、地元の人々は火山灰と呼んでいるが、花崗岩質岩の微細なもので土別に火山灰は存在しない。

（荒木 正一）

町時代の防火用水路

旧士別が、水道工事に着工したのは昭和二十八年で、それ以前の防火用水は、大通り車道の両側にU字型の溝があり、北七丁目を通る灌漑用水路から分岐して大通りや他の支線に取り水していた。

夏の灌漑用水の管理は、土地改良区で行っていたが、水量とかゴミ詰まりは日常茶飯事で、その保全是消防署の担当であった。支線の長い線路西の元清光木工場、清光正雄さん宅前を流れて、流末がチュウブス川に落ちる用水は、幅が十センチもない狭い溝で杭を打ち側板が傷み、苦情が絶えなかった。

夏はよいが冬になる前は大仕事だった。灌漑溝に丸太で覆いをするのは消防団の役割だが、丸太の隙間が広がったり、雪の重みで朽ちた丸太が折れて用水路が雪で埋まり、その補修作業を消防団員総出で寒中で行うのは大変な作業であった。

この灌漑溝に難所が二ヶ所あった。当時、天塩川は現在の水郷公園を深く歪曲し（現在道路駐車場になって

いる所）崖に食い込んで流れていた。そのために度々決壊した。

昭和二十七年ごろ、灌漑溝決壊の知らせを受けて現場へ駆けつけて見ると、二十メートルほどの用水路が影も形もない。春耕を間近に控え緊急復旧工事に取り掛かった。当時土木課の私と今岡さんが協議した結果、とても盛り土では駄目で、架橋しか方法はないと判断して、土建業者を選定し杭打ち、木樋制作など突貫工事にはいった。だが川底の岩盤に木杭は無理で枠組で対応した。消防署も乾燥期で火災予防を心死に叫び続けた。

ようやく完成して通水したが、木樋の取付け部分から濾水し、再度断水して木樋部分を延長して、念入りに突き固めた甲斐があって灌漑期を無事にすごした。

（荒木 正二）



旧町時代の用排水路

チューフツ川

チューフツ川は集水面積が広く、大雨時には大きな排水の役割を果たしたが、反面、増水の被害にもしばしば遇った。

大正時代、凶作の救済土木で人と馬による工事が行われたが、昭和三十年ころ、剣淵川の改良工事が進み、放水路の落ち口に築堤も扉門も無いので、市中のゴミ捨て場として埋められていた。

昭和二十八年ころ、この川が長雨のため増水して当時の弥生町と呼ばれた公営住宅が浸水し、市のトラックで寝具や手回り品を公会堂に避難する騒ぎが起きた。町中のほとんどの生活用水が流れ込み、排水支線は悪水路になり、下の人が埋めてしまいたいと申し立てるなど苦情が絶えなかった。

そのうちにチューフス川の南側に人家が建ち、川底がだんだん高くなり汚水の排出もままならず、市も頭を痛めていたが、その後、下水道工事も進み、チュー

フツ川も「函渠」になり、現在はその上が公園になっている。

宮下排水路

宮下排水路は、兵村時代に掘られたものだろう。道路側溝として雨水排水として欠くことの出来ないものであった。その後、水田の排水もこの道路側溝が集めていた。

昭和二十六年、私はこの排水路で洗濯している幾人かの人を見ている。多分以前から、灌漑溝から取り水として長い間、生活水として利用していたのだろう。

この排水路は、国鉄の線路下を潜り、日甜の南側の道路沿いに流れ、チューフス川に落ちていたが、素掘りのために側溝が崩れて改良を急いでいた。昭和三十一年ころ、国庫補助のコンクリート開水路工事が鉄道まで布設した。鉄道線路下でちよつとゴミが詰まるトラブルもあったが、全体に効果が上がり、宮下通里も街路として趣を一変した。

士別駅排水路

この排水路は市民に余り知られていないが、士別駅前の市街地と駅構内の排水と、駅西中央通り以南地区

の排水路である。

前記の給与地配当之図には、チューフツ川の支線と記入されている。駅構内の中央北寄りの西側から、西四条七丁目の堀崎農園、旧松谷工場敷地の一部を通して、通称三田団地と長縄賢治さんの境界の付近で、チューフツ川に合流している。

士別駅構内に何時設置されたか不明だが、コンクリート管がある。管径も確かな記憶は無いが、管の老朽と不等沈下でときどき詰まり、構内にはマンホールも設けられていたが、三十年も前の話で作業も機械が無く苦労が多かった。駅前広場の排水も此処に流れていて、市にも改良と分担の話もあったが、駅の関連面積が多いのと下水道が早く着工したことで、負担はなかったように思う。さて駅西は、河川敷地のことを地主さん方は承知していたか否かは聞いていないが、耕地が分断されて不便であり、排水路の崩壊が多く雑草が繁茂して、土崩れ防止に市はコンクリート管を布設して維持工事をしていた。

終わりに、一部の地区は個人が団地化したのが、河川敷地の地形では区画割りもできないので払い下げをしたのであろう。他の地区も全面的に調査する積もりだが、未だに手をつけていない。

(荒木 正一)



leo
宮下通りの排水路

造林渡舟場のあつた頃

私は次男で、小学校を卒業（昭和十五年）すると、小作農のわが家では働き場が無く、兵村の小野苗圃で日当五十銭の出面取りをした。

その頃、士別では造林事業が盛んで、翌年は、西士別東の沢にある名寄林務署の造林事業所で働くことにした。西士別に事業所の本拠を置き、北公有地と温根別北静川に飯場を設け、常人夫二十人ほどを雇い、さらに、西士別、北公有地、温根別に愛林組合を組織して、春の植え付けや夏の下草刈りには、毎日、十五、二十人を地区毎に出役を命じ、毎年、数十町歩の植林を行い、林道の開設や自然林の間伐、つる切りなど、四月から九月ころまで作業が続き、模範林育成の最盛期で、大崎定義君や菊地実君と夜具を背負い、飯場から飯場へ林道を徒歩で渡り歩いたものだ。

昭和十六年六月、北公有地の人達がトド松の植林に出役するので、私達も急ぎよ北公有地の飯場に移動した。北公有地の人達は河南秀雄さんを中心に、大きな

渡舟を造り、一回に十五人ぐらい乗せて送り迎えをしていた。

幾日か続いた植林作業を終えて、わが家に一泊しようとして剣淵河畔に行くと、舟は北公有地側にあり渡れないのだ。そんな時、野良仕事をしている年藤さんを見つけ「オーイ、オーイ」と呼ぶと、年藤さんが小型の釣り舟ですいすい迎えに来てくれたものだった。

（志田 正光）



市街は荷役馬の賑わい

競馬と種付け場

大正時代から昭和初期にかけて、市街で荷役馬が多かったのは、駅前の犬伏倉庫と丸山製粉工場の付近で、隣接の駅土場では貨車に原木を積む人夫の掛け声で賑わい、狭い道路には、雑穀や肥料運搬の馬追いの声で交差して、一層活気を盛りあげていた。

昼食時になると、大通り六丁目の豊田食堂付近には連綿と馬が、夏は馬車を冬は橇をつけて繋かれ、遠くは幌加内や奥士別（現朝日町）方面の澱粉運びや、木材運搬、肥料などの荷上げ馬で、歩行者が馬の間を縫って歩いていた。

春になると、雪の上に積もった馬糞で下の雪が融けない。乾くと風で馬糞が飛び、馬糞風は士別の名物の一つだった。

そのころ、草競馬が人気を呼んでいた。東一丁目から二丁目（現広通り）の草原に簡単な柵をつくり、よく競馬を催していた。品種はアングロアラブという中

間種が主だったが、ある家畜商が、サラブレッドで出場し、賞品を一人占めたこともあった。お祭りには競馬の後に自転車競走もあった。

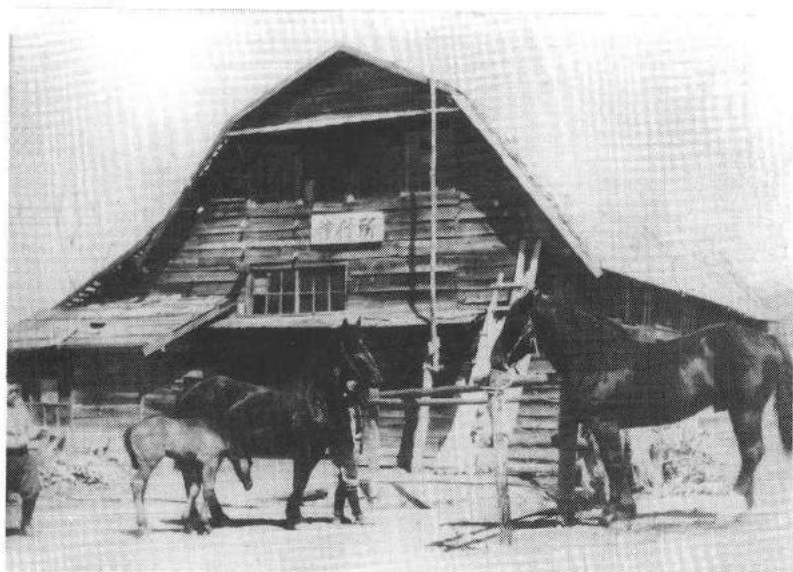
その後、競馬場は桜丘に移り、西大通り七丁目辺りに馬検場が出来て、白衣姿の獣医さんが活躍した時代だった。当時の馬の病気で多かったのは骨軟症で（馬の主食が稲ワラのためにカルシウム不足で起こる病気）続いて伝染性貧血で、法定伝染病のために罹病した馬は、感染を防ぐために焼却するか、土中深く埋めていた。他に人間の風邪のようなナイラとか、足に水がたまるとかという病気があった。

また、東一条三丁目に村瀬松次郎さんの種付け場があつて、付近には家も無く、厩舎の東側に高島製縄工場と綿打ち工場があつた。

その厩舎横で馬の種付けをするものだから、子供たちが面白がつてよく見に出掛け、村瀬さんの若い者に叱られていた。花街のお姐さんも少年たちを連れて、しばしば見に来ていたと伝えている。

相馬神社の由来

相馬神社は古来、相馬妙見大明神と称し、群馬小高の城主、相馬公が小高付近の霊水で、病気に罹った愛



山本寛盛 さんの馬の種付所

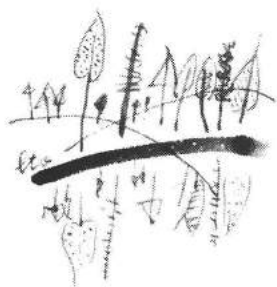
馬を洗って全快したことが由来で、明治五年に相馬小高神社に改称され神霊を祀ったものと伝えられている。

士別では、大正六年に山口重次郎さんが、東一条五丁目に天之御中主大神を祀って相馬神社としたが、昭和二年、旭川から士別に転移した細川富重さんが、現在の東一条三丁目に、山口さんとは別に相馬神社を建立し、社殿は平屋建築で住宅と兼ねており、社殿の前は広く、普段は子供たちの遊び場になっていた。

そのころの市街の朝は、相馬神社の太鼓の音で夜明けを告げ、続いて豆腐屋のラッパが聞こえて、一日が始まったものだ。

昭和十六年、細川さんが上渚滑に移り、その跡を中原義信さんが引受けて今日に至っている。

(槇 徳治郎)



新タヨロマ川放水溝の掘削

タヨロマ川は土風山に源を発して、武徳、多寄、風連の中央を蛇行しながら、東の丘陵地帯の小川を集めて天塩川にそそぐ、二十数^キに及ぶ河川である。

融雪期や大雨のときは落差が無いので、常に洪水の被害を出していた川であった。開拓以来、流域の住民はこの川の改修を悲願にしていたが、大正十五年、念願の水溝掘削の実現に向けて踏み出したのである。

タヨロマ川上流地点の、天塩川と最短距離の所で天塩川につなぎ放水することで、下流地帯の洪水に備えようとしたものだ。この構想は、まことに適切なもので、当時は、畑作から水田に転換する時期であり、灌漑のために川水は最大限に利用されていた。この工事は、治水計画と共にその目的が果たされたのである。

先ず、国道と四十線の分岐点に水門を設け、旧河川上流の水を灌漑水に利用するもので、水溝は四十線から西十二番地の裏境界を約四百^{メートル}流し、さらに西一号三十九線から、四十線の裏境まで斜めに二百^{メートル}、そこ

から西四号まで直線に流した。

当時、天塩川四十線に設けていた幹線頭首工の上流に、斜めに逆流の形をとった。これは治水と灌漑水に利用するためのもので、工事は大正十年六月一日に着工したと記録されている。工法はすべて人力で行われ、使用工具もスコップ、鍬、ソルハシ、金棒等で、土の運搬にはモッコと言う縄で編んだものを棒に通し、二人で肩に担いで運んだ。掘削当時の放水溝は、現在と比較にならない規模であったが、わずか半年間であの土を掘り上げる作業は、大変な苦勞であつたろう。

当時の土工作業はいわゆるタコ部屋（別名監獄）で飯場は三十九線西三号付近に建つていた。多くの人々の犠牲を伴った工事であつたが、工事の完成で全体的な成果を見ることができた。しかし、経過がたつに従つて、多くの問題が生じてきた。それは、本流の治水には大きな成果が現れたが、立場を替えて放水溝流域に、今度は洪水の被害が出始めたのだ。その原因は、下流で二幹線の水が上流に向けて逆流するからだつた。加えて戦時中、国費で排水工事が行われ、下士別の排水溝が新たに上流に接続して短時間に水位が上がるからで、戦時中はいかんともしがたく戦後になり、放水溝関係者の間で改修期成会を結成して運動が行われた。

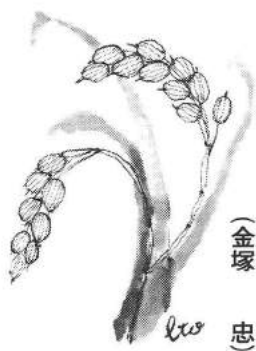


新タヨロマ川放水路の堀削

その後、多寄土工組合の事業で改修工事を行ったのは、昭和二十二年で、これは下流を北に向けて自然に逆らわずに流す構想であり、二幹線の上に架橋して流すと言うものだった。

しかし、これも巨大な洪水の力に抗しきれず、橋桁共に二幹線に流れ込む始末で、これらの事情を考慮して上流の頭首工を下流に移すことになった。場所は四十線の下流三十八線までの間で、当時の古市新太郎理事長と村中佐太郎代理が先頭に立ち、国に対して強力に陳情運動を進め、松浦周太郎代議士には特にご尽力を頂いたと伝えている。

昭和三十七年、新タヨロマ川と改称し改修予算が付き、翌三十八年から部分改修工事が行われ、さらに頭首工の下流移設が決定し、堰堤を可働式工法で現在工事が進められている。この工事完成により剣淵川、天塩川の治水が将来に向けて完成するだろう。



(金塚 忠)

昭和初期の冷害と大臣の視察

父の退職金で土地を買い、我が家が新潟県から親戚を頼って現在地（多寄三十九線西二号）に移住したのは昭和五年であった。

当時の農村は小作制度で、地主に支払う小作料は全収穫の三十〜四十%と高額のため、生活も再生産も非常に苦しい時代であった。多寄も水田経営が主で、すべてが手作業であり、農業技術が幼稚なせいと気象の寒冷期が重なり、昭和五〜六年の冷害の惨状は、筆舌に言い尽くせるものではなかった。父親は、造材山や土木作業に出掛け、小学生の多くは幼い兄弟を連れて登校したが、妹弟が泣きだすと廊下に出て遊ぶ状態で、とても勉強どころではなかった。

ようやく、昭和六年の冷害を脱したが、翌七年は未曾有の最悪気象に見舞われ、政府は北海道の冷害視察に時の農林大臣後藤文丈氏を派遣した。小雨の降る肌寒い九月、国道の三十七線（現在の近藤信重さん宅）に設けられた陳情会場では、公区長の幕田迎八郎さん

が、会場を埋め尽くした農家を代表して陳情した。農家の生死をかけた陳述に、後藤大臣も悲痛な面持ちで耳を傾けていた。私も子供だったが隣家の上川龍雄さんと一緒に大人の間から様子を見守っていた。

雪がちらつく十一月になって、農家救済の土木工事が始まり、政府米と再生産のための種粃が配られた。

（金塚 忠）



昭10 東武農林政務次官に同行一朱鞠内ダム現地調査—前列左より二人目野原浅吉、北村久作、一人おいて山本正助の各氏
後列左より二人目東次官一人おいて富生藤吉氏

仏さまの道案内

(教證寺記録帳より)

時は昭和九年十月二十七日、南九線に小作していた高橋助太郎さんの生国は越中であつた。

同年九月十七日に、実父の十七回忌法要をを営もうと思つてゐた。だが前年まで続いた大凶作にその意を得ずにいたが、弟が砂金を掘り始めたところ二ヶ月間で四百数十円を掘り出したので喜び、父親の法要を営み、ご先祖様から受け継いだ、御本尊阿弥陀如来の表具とご脇掛けの御開山の御影像、蓮如上人の方字の名号と三幅を私に頼んできた。

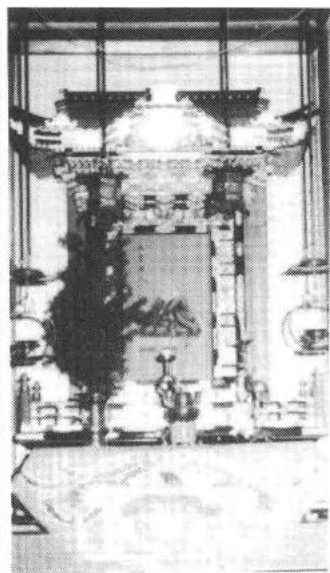
私は早速、京都の河尻尚古堂に依頼したところ、表具店から、御開山の御影像は七百年も経っているので表具は出来かねるが、どうするかと問い合わせがあつたので、それは教證寺に戻した。また蓮如上人の方字の名号も同様であつた。

その後、高橋さんに相談せず私の独断で御開山様や、蓮如上人が、この紙に向かつて与えてやるとの思召し

で、古い紙だけでもよいから表具を頼むと尚古堂にお願いしたところ、同表具師から古仏の修復彩色を施して、拝みやすいように表具して送つてくれた。十月二十六日の事であつた。

一方、高橋さんの実母は十月四日ころ札幌の本願寺に参拝し、その後、娘の嫁ぎ先の函館を回り、二十六日夜行列車に乗り、二十七日釧路駅に到着したので、助太郎さんが馬車で迎えにいった。その帰途、大雨に遇い親子濡れねずみで、本線の郵便局前を通り過ぎようとするころ、時刻は午後七時ころであつたが、表具した御開山さまが馬の背位のところに見え、闇夜降雨の中に光明赤々と現れて、その上満月のように笠が現れ、郵便局から一里半の道中を道案内されたと言ふのだ。高橋さんは、郵便局が寺の門前であるから、寺の御開山さまが道案内して下さつたと思ひ、喜んで帰つたといふのだつた。

一方、寺から二十七日に郵便局に、御影像さまが届いてるのでお迎に来るようにと、高橋さんに通知してあつた。高橋さんがお寺に来たので修復の事情を話したところ、「さては、昨夜の不思議はわが家の御開山さまであつたか」と、疑問も晴れて喜び三幅の仏さまを供に歸られた。



記録帳と阿弥陀如来の御影像

明治初元十月廿七日、在東京丁子
町一丁目、同十月二十三日、
南九條西、五差地小作控し居り、高橋小
太郎氏一生刑場國了あり。
同年九月、日本文藝十七周年紀念會、
中座川、共々七年水田大不作八年度
先手豊作翌年亦大不作、
其意不得以弟某の所見
振知れども二月四月の収支面は

御本尊さまには一如上人の表書きあり、五独悪世にも実に不思議な事を見聞する故に、今の話を記しておきます。ときに私は六十一才、皆違、

注 皆導師は、教證寺開基住職（三宅 裕良）

自転車練習とタコ労働者の逃亡

新タヨロマ川掘削余話

タコ労働者が集団暴動を起こしたり、逃亡が出来ないように、食事を体力がつくほど食べさせなかった。土を入れたモッコもふらふら状態で担ぎ、渡り板の上で転ぶと棒頭がすかさず気合を入れていた。タコ労働者の働きを見て村人は、「あれだけ弱っていたら逃げようにも逃げ出せないわな」と話していた。

ある日の夕方、棒頭が、飯場の前で買ってきたばかりの新しい自転車練習をしていた。その頃は自転車はまだ珍しく誰も乗り方を知らない。たまたまいあわせた人夫が「タコの勇やんが、自転車乗り上手だよ」と話した。棒頭はタコの勇やんを連れ出して自転車を預けた。勇やんは「しばらく乗っていないからなあ」と、初めはいまにも転びそうにヨタヨタと乗っていたが、少し遠くに離れたところを見図らって、命がけでペダルを踏みとうとう逃亡に成功したという話があった。

(金塚 忠)

戦時中の牛乳検査

明治末期から昭和にかけて、牛乳販売やヨーグルト製造の先駆者金井荒次郎氏のことは、父から聞かされていた。

その頃から畜牛が農家に普及しだしていたが、生産した牛乳の受入れ体制が不充分で、昭和十一年七月、西三条九丁目にあった産業組合の倉庫兼精米所に集乳所を造り、南士別、下士別、武徳などの農家の人が牛乳缶を背負ったり、リヤカーや馬車で交代に運んでいた。

私は、当時（昭和十五、十六年）名寄中学校に通学していたが、春休みに、集乳所主任の福塚さんの指導を受けて、牛乳検査の方法を教わり、六十%のエチルアルコールと検査器を持って、南士別小学校前の集荷所や武徳小学校前の集荷所へ自転車で行き、検査をして等級を付けた。集荷した牛乳缶から乳を一CCとアルコール一CCを混合して、変化の無いものは一等乳、凝固浮遊物ができるのを二等乳とした。更に月二回は

濃硫酸で処理し、遠心分離器で脂肪分検査をし、買入れ価格を決めたものだった。

当時、商店は殆んど「掛け売り」だった。とくに農家は、収穫見込みで雑穀商から現金を借りた（青田売り）。だから牛乳代金は、農家の現金収入として大きな魅力があった。

戦時中は、接着材のカゼイン原料として、軍需物資生産のために畜牛の飼育が奨励され、昭和十七年六月には、北海道興農公社が集乳所を引き継ぎ事業を継続した。

昔は今と異なり、雨の日も風の日も、雪の日などは農家の人達（多くは老人、主婦、子供）が黙々として、遠くてぬかる道を一日も休みなく、苦勞しながら牛乳を運んでくる姿を思いだすと、静かに涙が浮かんでくるのである。

（福万 清二）



屯田兵の土地売渡証書

屯田兵二世である浅利忠志さん（故人）が昭和四十九年頃、自宅の屏風を修理に出そうと調べていたところ、一通の土地売買契約書が下張りに使われているのを発見した。

よく見ると屯田兵同士の給与地の土地売渡証書である。

浅利さんは、山梨県から入植し日露戦争で戦死した屯田兵浅利徳三郎の息子であり、入植以来、大通り北三丁目に居住していたが、その土地売渡証書を作成したのは、父と同じ屯田兵仲間の高橋丹十郎と櫻田佐吉であった。高橋丹十郎は、群馬県出身で西二十戸の九三番地、今の日甜士別製糖所の原料置場に入植、櫻田佐吉は九十番地で西斜め向かいであり、現在大通り北四丁目で食料品店を営む櫻田佐吉さんの祖父である。

この証書は、明治四十二年八月十日に作成されたもので高橋丹十郎所有の一八三番地、畑二町五反八畝十歩を一八〇円で櫻田佐吉に売り渡すというものであった。

土地売渡證書

天塩国上川郡士別村

百八拾参番地

畑貳町五反八畝十歩

此売渡代金 百八拾円也

右不動産拙者所有ノ處今般前記ノ金額ヲ以テ貴殿へ売渡シ代金正ニ受領仕候處實正也然ル上ハ他日故障等一切無之候為後日不動産売渡證書仍而如件

明治四拾貳年八月拾日

天塩国上川郡士別村九拾参番地

高橋 丹十郎

全上九拾番地

櫻田 佐吉 殿

一八三番地を、当時の地番図で調べてみると、紛れもなく屯田兵に与えられて第二給与地で現在の北町に所在する。

士別の屯田兵の場合、一戸当たりの給与地五町歩を三回に分けて与えられている。

第一給与地は、兵屋に付随するもので間口一五間、奥行一五〇間の七反五畝（二七m×二七〇m・約七三アール）、第二給与地は、兵村周囲に抽選で二町五反八畝十歩、さらに、これらの成墾順に第三給与地一町六反六畝二十歩が与えられた。

毎日厳しい訓練、道路、灌漑溝の造成など公共事業にあたる屯田兵に対してこれら給与地の開墾は家族の仕事であり、鬱蒼たる樹木の生い茂る原野を鋏、鎌、鋸などわずかな道具で、女・子供まで一体となり毎年少しずつ開拓した土地である。

入植一〇年目の明治四十二年といえは開墾も終り、そろそろ農業経営も安定する時期であるが、この時期にせっかく血と汗の結晶であり、現在でも農地として一等地である、この土地をなぜ手放したのであろうか、いろいろ推測されるところであるが、その原因の一つは日露戦争であつたかも知れない。

士別屯田兵は、入植五年後の明治三十七年三月現役満

期となつた。厳しい訓練と公共事業から解放され、やつと自由になり、いままで家族に任せていた開墾作業に本格的に取り組むことが出来るようになった矢先、不運にも日露戦争が勃発した。

自由であつた期間は、わずか四ヶ月足らず、八月四日全員召集となり第七師団に編入され、満州を転戦、明治三十九年十月の召集解除までの間に九十九人の屯田兵のうち、十二名が戦死または戦病死、二名が負傷という大きな犠牲を払つた。

屯田兵の土地は、規則上では三〇年間、所有権が認められず、売買・譲渡も出来ないとなつていたが、政府は残つた家族の生活の扶助をしない代わりに土地の所有権を出征前に認めた。屯田兵はいわば土地の所有権とひきかえに出征したようなものであつた。

屯田兵で後の士別町長になつた梨沢環は、その手記の中で「二年の星霜を銃火の中に送り、復員帰農したが、移住以来五カ年は家業を捨てて、公益公共事業に奔命し、現役満期三ヶ月半ばにして戦役に服したため、家産傾き負債のため土地を離るるもの続出し……」と記している。

いづれにしろこの戦争の間、主の不在中に経済的にあまり差のなかつた屯田兵相互に、残つた家族の数、

能力により大きな経済格差がついたことが想像される。

なお、この土地の売り渡し代金、一八〇円であるが資料によれば当時、米の価格は一石（約一五〇キログラム）一〇円であり、単に米の価格で換算すると一〇八万円になる（一〇キログラム・四千元として換算）。この証書は、発見後、浅利忠志さんから櫻田佐市さんに贈られ、その後、士別市立博物館に寄贈され保管されている。

何故、浅利さんの屏風の下張りになっていたのかは不明である。

（朝日 保）



木炭火力発電所

士別に最初の電気的光が点灯したのは、大正五年六月二四日のことであつた。

豊富な水資源を有するこの地方であるので水力により発電をしていたと思いがちであるが、最初の電気は、火力発電所から送られた。

北海道における電気事業の第一号は、明治二十四年十月三十一日であるが、その後、開拓が進むにつれて全道の都市に拡がり大正三年には、電灯普及戸数が一五・一％に達していた。

このような中で、第一次世界大戦勃発による空前の好景気に沸く士別においても、電力事業創設の動きが起こり、大正四年一月二五日、資本金四万五千円をもって士別電気株式会社が創設され、士別町を供給区域とする電気事業経営の許可を得て、翌年操業を開始した。取締役は、札幌の松井安吉、大石公平、旭川の小島正長という外部資本の会社である。

発電所は、現在の西二条一一丁目の北電士別変電所

の位置に建てられ、発電所、事務所、物置、社宅の四棟からなっており、発電の方式は、木炭ガスエンジンによるもので、今では想像もできない原始的なものであった。

当時の様子を、この発電所に勤務したことのある片岡英一さんに語ってもらった。

片岡さんは明治三四年生れ、十五の年の大正五年、士別電気株式会社に就職、約一年間勤務したが当時、発電所には、専務の市毛三郎のほか従業員は、なんと片岡さんと鈴木という主任の二人だけであった。

発電方式は、木炭燃焼炉で木炭を燃やし、そこで発生したガスで木炭ガスエンジン（出力六〇馬力）を動かす、その回転運動により発電機を回し電気を発生させるというものであり、出力三一・五キロワットであった。

発生した電気は、幅四尺、高さ六尺というからベニヤ板を少し大きくした程度の配電盤に送られ、ここから送電線をとおり各家庭に流れていく。

当時は、もちろんラジオもテレビも冷蔵庫なども無くて、また、工場の動力源にもまだ使用されていなかったもので、もっぱら家庭、商店などの照明用であったため、発電所の操業時間も季節により変動はあったが、

午後五時から翌朝の午前七時頃までである。

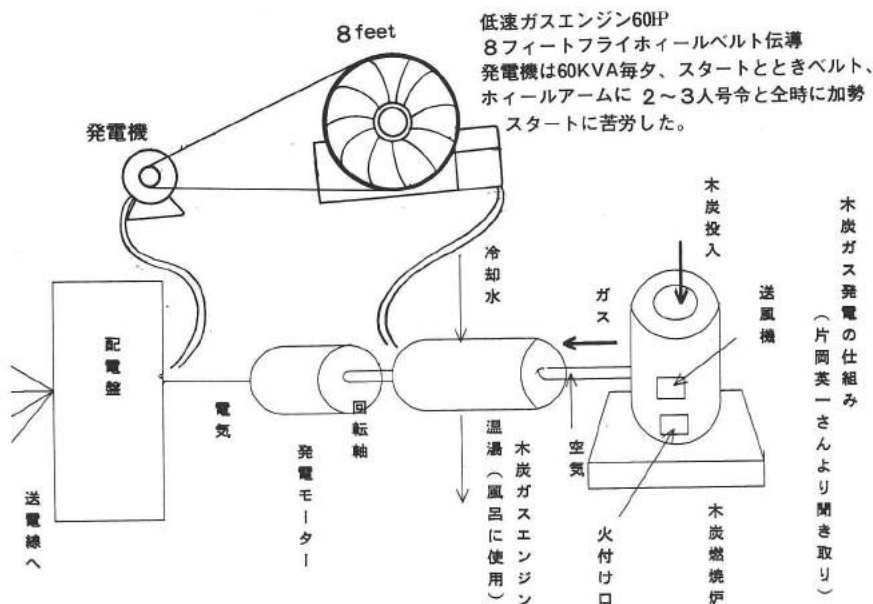
片岡さんの仕事は、木炭燃焼炉の維持・管理、高さ八尺（約二・五メートル）もある焼却炉の上部から木炭を投入、下から火を付け盛んに燃やした。一回に入れる木炭の量は四俵から五俵、一晩で二〇俵から三〇俵にもなる。

配電盤を見ながら火の調節をし、一晩中休みなしの重労働であった。炭火の燃え具合により出力が上下し、また、電圧も低く不安定な送電であったため、急に暗くなったり明るくなったりしたという。

鈴木主任の仕事は、エンジン、発電機、配電盤などの維持、とにかく、たった二人で発電所を操業していたのだから驚きである。しかも、当然、休み無しの夜間勤務。これで日給三五銭であった。

営業は、散宿所（いまの営業所）が行っており、送電線の維持・管理にあたる電工は十名程度いたようである。電気料は現在のような使用電力によるものではなく、一燈あたり一ヶ月いくらという定額払いであり、屋内配線はもとより電球まで会社もちで、球が切れると無料で取り替えてもらえた。

この会社の電気代の記録は残念ながら残っていないが、これより二十年前の電燈が初めてついた頃の札幌



の記録によれば、電燈は八、一〇、一六燭光の三種類であり、料金は、一六燭光(約二〇ワット)で一カ月(一日十時間供給)二円五〇銭。米一升が八銭という時代だったから、電燈一燈つけるのに要する電気代は米一俵にも匹敵する高価なものであった。

また、大正一二年の記録によると三二燭光(約四〇ワット)一灯で、札幌・小樽一円、旭川一円五〇銭、留萌一円八〇銭、稚内二円となっており、いづれにしても高価であった。

この士別電気株式会社火力発電所は、その後大正八年一月火災のため焼失、一カ月後には復旧はしたが増大する電力需要には応えられず、同年二月、旭川の富士電気から送電線を延長、士別変電所を設置、これより受電し三kV、六〇kW供給を開始、発電所は廃止された。

一方、この士別電気株式会社に対し大正七年には、資本金三〇万円をもって多寄電気株式会社(同年、天塩水電と改称)が設立され、翌八年出力一二〇キロワットの水力発電による操業を開始した。

この発電所は、多寄町三三線東三番地、現在のJR宗谷線多寄町三三線踏切を渡って、すぐ右側の小高い丘の上、農興碑の立っている附近から北側に水路を設

け、一九・七メートルの落差を利用し水力発電を行ったものである。五二・五個（一立方尺）の水量で、水車は電業社製のシングルフロンタルタービン、発電機は明治電気製であり出力六〇kw、計画では多寄、風連をはじめ上士別、温根別、和寒、剣淵までも送電するという雄大なものであった。しかし、実際始めてみると灌漑溝の水を利用していたため冬になると凍結したり、土盛りしたばかりの水路のため水洩れがしたりで、不安定な送電であったため、大正一〇年には、こちらも富士電気の士別変電所からの受電に切り替え発電所を廃止した。

町が散在している北海道では、この様な小規模な電力会社が大正時代だけで六八社創立され、地域の電気普及に大きな貢献をしたが、動力需要への対応、電力の安定供給の必要性から中小電力会社の吸収合併が始まり、士別電気株式会社は大正九年、四万五千円をもって電気事業の一切を富士電気株式会社に譲渡し、また、多寄電気株式会社も昭和二年、富士電気の後進である北海道電燈に事業を譲渡し、その使命を終えた。

（朝日 保）

士別スキー倶楽部

大正二年の設立写真発見

士別市内で最も早く、古い歴史をもつスポーツ団体として道北地方の冬期スポーツの花形スキーが大正二年にクラブを組織、会員二人が和寒の塩狩峠を越え旭川に至る「塩狩国境踏破せるスキー滑走壮挙」を成しとげていたことが当時の新聞で紹介され、さらに設立まもない「士別スキー倶楽部」北海道スキー倶楽部士別支部Ⅱのメンバーと支部旗が写った写真が見つかり、冬期スポーツの画期的証拠として高い評価を受けた。

道北地方の冬のスポーツ、スキーが普及されたのは明治末期に新潟県の高田市（現上越市）にオーストリヤのレルヒ中佐といわれ、旭川地方に明治四十五年（一九一二年）当時の旭川師団や旭川市内の中学校にオーストリヤ式の単杖式スキー術の指導をしたのが始まりとされている。このスキー術導入から、僅か一・二年後に早くも士別でスキーが普及しており雪国ならではの



大正2設立のスキー倶楽部士別支部

の受入れ体制、地域住民の意慾がうかがわれる。当時の士別でのスキーはアルパイン式というバネのついた金具をつけたもので単杖を使っていた（一本杖）まもなく、ノルウェー式のスキーが入り、ウインタースポーツとして大いに普及、大正初期には士別小学校の児童生徒が和服姿九十九山付近でスキー遠足をした写真が士別市史（昭和四十四年刊）にも掲載されている。

こうした市内のスキー事情からも公式的な記録らが判らなかつたが、昭和六十一年七月に旭川市在住の元名寄高校教諭スキー部、野球部顧問として、永年に亘り活躍された佐藤徹雄氏が市内の今井忠則氏（士別市体育協会会長）宛に連絡があり、その詳細が判明した。

その資料によると大正初期に北海道スキー倶楽部で発刊された「スキー」三月二十一日付に収録されていたもので、大正二年（一九一三年）二月二十三日に旭川に道内で初めての北海道スキー倶楽部が設立され、その後各地に相次いで支部ができた。士別支部は、その直後会員三十名によって創設され旭川の本部から講師を招いて技術の習得に励んだことが記録されている。この資料の中には士別支部会員が一本杖のスキースタイルで勢揃い、向って左端に「北海道スキー倶楽部士別支部」の支部旗を掲げて写っている。全員スキー

と単杖だが上衣は膝まである外套に防寒帽といういでたちの写真で、土別のスキーの歴史を知る貴重な資料である。また同「スキー」の史料には大正二年三月四日付の北海タイムス（現北海道新聞）に土別通信として「塩狩国境踏破せるスキー滑走壮挙」の見出しで、土別の寺木辰次郎（当時大三金物店Ⅱ故人）と旭川の堀住剛氏の二人が塩狩峠をスキー踏破せんと企て無事目的を達し壮挙：と報じられている。二人は汽車で和寒まで行き、現国道四〇号線の塩狩峠とは別なルートの夫婦岩（塩狩峠から南西へ尾根沿にある）を目がけてスタート、尾根づたいに蘭留に出て、さらに現男山公園の突哨山、石灰山へと縦走し、旭川に出たとある。

このスキー行の快挙は道内の各地に広がりスキー普及に大きく貢献しており、道内では旭川に次ぐ伝統と歴史を誇るものと思われる。こうしたなかで昭和七年（一九三二年）に土別スキークラブが創立され、初代会長に梨沢環町長が就任、第一回スキー技術講習会が開催されたのを機会に、学校の授業でも積極的にスキーを取り入れられ、また競技会も数多く開催されるようになり次第に普及し、戦時下の昭和十八年には第一回の町民スキー大会、戦後まもなくの二十一年には第一回戦域対抗スキー大会が開催され、終戦後の荒廃した町民の心身を癒やしていた。

（藪中 寿治）

道路は “箱舟の道”

明治の温根別村開拓秘話

土別に屯田兵が入植した時期から近郊の村に入植者が相次ぎ、温根別にも数戸が入った。主にオンネベツ原野と云われた地域（現在の本線南線地区）で、原始林を切り拓き農耕が始まった。入植時だけに道路や土地も区面整理などは行なわれておらず、道路は人の跡だけで馬車などは通れず、一雨が降れば泥んこ道と化した。このため春の開墾時期から秋の雪が降るまで、連日馬も人も汗と泥にまみれての畑作業が続いた。

ひどい場所では馬車が泥道にぬかって動こうとせず、開拓者が馬車に肩を当て「行くぞ、それー」と馬に声をかけ手綱で馬の尻に「ムチ」を当てながら満身の力を込めて馬車を押す光景がよく見られた。だが馬車は一段と泥道に食い込むだけで微動だにしない。駄目だこんな道じゃ「もう仕方がないのであきらめて馬車枠ははずす、積荷の馬鈴薯がばらばらと箱の両サイドから落ちて泥の中に散ってしまふ。秋になるとこん

なことの連続だった。

オンネベツ原野南線地区に最初に入植したのは田西由太郎一家で明治三十四年、家族ぐるみでうつそうとした原始林の木を切り倒し開墾の第一歩が始まった。

地味はよく何を作っても作物のときは良かった。当初は自給自足でもよかったが日常生活には現金収入がなければならず、収獲物の販売を試みたが、何しろ人家から人家への道もろくになく、まして士別や剣淵に出るにも馬車道がない。農作物を売りに行くには駄ぐら馬に二・三俵の収獲物を積んで一日がかりで売りに行った。とりわけ「馬鈴薯」は適地適作だったのか毎年作柄もよかったが販売するにも良い運搬方法がなかった。馬の駄ぐらに積んだくらいでは品物が安いだけに手間賃にもならなかった。だが明治三十六年に下士別で藤島慶五郎氏が士別で初めての澱粉工場を始めたと聞き入植者三人で同工場を見に行った。

帰ってくるなり仲間の一人岡本某氏が家にあつた鉄板に穴をあけて太い丸太に巻きつけローラ状に作り、これを枠組みにして「イモ」をすりつぶし、幼稚ながら澱粉造りを始めた。「イモ」を澱粉にしておけば保存食用にもなり商品として売ることできる。時間と手間がかかったがどうか澱粉ができた。この話を聞

いて開拓者が次々と岡本氏宅の見学に訪れた。しかし田西氏は人力によるこの製法には満足せず、藤島澱粉工場を参考にして水車方式の本格的な澱粉工場を作り、大々的に澱粉生産を開始することになった。この時、「馬鈴薯」を運ぶのに初めて馬車を買ひ、畑から直接工場に「イモ」を運んだ。好天に恵まれた秋の収獲期には順調に馬車でイモが運び込まれたが、一旦雨が降ると粘土地のぬかる道は一気に泥沼と化し、イモの搬送どころではなくなった。この頃になると温根別への開拓者も相次ぎ道路らしきものが自然にできてきたが、雨の日など馬車でその粘土道を通ると道は馬車でこねられ「イモ」を積んだ荷台の心棒までぬかってしまい「ニツチもサツチ」も動かなくなってしまう。

近隣農家からの「馬鈴薯」賃ずりを引き受けたものの泥道では運搬するすべがなく「これでは澱粉工場もお手上げた」とさすがの田西氏もすっかり考え込んでしまった。そんな時、「捨てる神あれば救う神あり」の例のように田西氏に耳よりな話がとびこんできた。それは「広田外次郎氏の水稲試験が成功した」という話だ。広田氏は明治三十八年から同じ富山県人で旭川に入植した友人から種籾をもらい水稲の試作を重ねていた。最初の年は駄目だったがようやく実を付け収獲

できたのだ。これを聞いた田西氏は「稲がとれるなら米作りが一番だ」とばかり澱粉工場を入手に渡し、造田費用を銀行から八百円借金し、約三ヘクタールの稲作転換に乗り出した。それは明治四十三年であった。

この水田づくりには多くの開拓者たちが賛同し、協力し、それらの人で相談の結果「白山水利組合」を設置し、水の確保を図ることになると、犬牛別川から水を上げるため銀行から資金を借り入れ、灌漑溝を掘った。新しい水田に稲穂の波がゆれるのを夢見て、開拓者の間には造田熱が広まった。沢水を利用した水田が多かったが年ごとに面積が増えて行った。だが大正二年の大凶作で稲は収穫皆無、秋になると皆なで山に入り笹の実を取ってきて粉にし団子などを作り、やつと命をつないだという。夏に笹の木に花が咲くと凶作になるといわれており、六十年に一度訪れ、花が咲くと木が枯れてしまう。その六十年目に会ったものだからたまらない。馬鈴薯をはじめ水稲、燕麦、豆類など自家用の野菜までも収穫が皆無となった冷害の恐ろしさが身にしみ、水田熱も冷えてきたが、再び農家にチャンスが訪れた。大冷害凶作の翌年、それを待っていたかのように第一次欧州大戦が勃発し、経済ブームが訪れた。



昭和20年代の澱粉薯の運搬

豆類や澱粉の相場が日を追うごとに上昇、豆類では手亡作りが、そして再び澱粉工場が次々と誕生した。

工場を持たない農家は収穫したイモを貸ずりに出し、澱粉を受け取っていたが「沢水などを利用しての工場規模でも自分で加工する方が得だぞ」というイメージが強く、各所に小規模な工場が相次いで開業した。

ついに温根別だけで工場数は五十を越えた。なかでも西森嘉三郎氏は五十ヘクタールもの馬鈴薯を耕作し、自家用だけではなく商品として販売した。だが生産者が最大に悩み泣かされたのは原料のイモを畑から工場に運ぶ方法だった。

例の粘土道では馬どころか人も通れぬほどのぬかる道だけに頭痛の種だった。考えた末に生み出したアイデアは「箱舟」だった。ノアの箱舟ならぬ、この箱舟は箱を舟型にし、これに馬鈴薯を積み込み、それを馬に引かせて道路を往来する方法だ。粘土道なので箱舟の滑りもよく馬車を引くより楽だったという。

秋になるとあちらこちらのイモ畑で箱舟が畑の中で立ち回り活躍した。だが出来上った澱粉を売りに行くにも一苦労だった。土別に行くにも温根別に出るにも馬の腹までのぬかる泥道を馬車に澱粉を積んで急な峠を越えた。何台も連なった馬車があえぎあえぎ峠を登

る。馬が一步足を運ぶ度に木箱に入っている澱粉が馬車の上で右に左にとずれ動く。このため道路の泥水がハネたりかぶったり、箱の中に水が入って売れなくなる事もしばしばあった。ついに道路に割り木を横に敷きつめその上を馬車がどうやら通ったほどだった。

その澱粉景気も大正八年には戦争（第一次欧州大戦）の終結で大暴落、高値を当て込み工場の増産で借金をしたが返済できない工場主も多く、春高を見越して前借りしたが逆に半値に値下りして全部売っても高い倉敷料を払ったら赤字しか残らなかった商人も多く出た。土地を銀行に押えられ、商人に土地を取られて小作人に転落した者が相次いだ。なかには自殺者まで出るほどの深刻さであった。

イモの連作で土地はやせてしまった。米価だけが高値だった事もあって稲作の見直しが急浮上してきた。

だが沢水だけでは本格的な水田はやれない。白山水利組合では新たに灌漑溝を開削する計画をたて、大正十一年に北静川土功組合を設立したが、その稲作も決して楽ではなかった。灌漑溝が完成したことで受益者の農家負担が倍増したのは当然で十アール当りの土功組合負担金二円五十銭が約三倍になった。しかも昭和初期の低米価に続いて昭和六年からの連続的な冷害、

それにつれて馬鈴薯澱粉の相場だけが上昇して再び脚光を浴びた。

執筆者一覽表
(掲載順)

(藪中 寿治)

編集後記

昭和二十九年に、士別町、上士別村、多寄村、温根別村の一町三村が合併して新士別市が誕生した。

だが、過去に出版したよもやま話は、旧士別町の物語が多く、波乱があつた町村合併で反対も多く、それをどう説得したか、裏話をぜひ収録したい意図で市役所の退職者、元町村議会議員や関係役員の座談会、対談を軸に、各地域のよもやま話にウエートをおいた「新士別よもやま話」の発刊計画が、士別市郷土研究会の定期総会で協議された。

発刊予定を平成二年十一月とし、それぞれに寄稿のご依頼をしたが、多忙な方々が想を練り原稿を書き上げるまでに数ヵ月、山田氏を編集の核にして、集まった原稿の考証に当たっていたが、お互い本職が多忙で、山田氏が姉の見舞いに山形に行ったり、原稿は切ってから多く集まるもので発刊予定が、延びに延びてしまった。

事務局は各町村史、市史、農協や土地改良区の資料、既刊のよもやま話などと、ご寄稿を頂いたものを読み合わせしたところ、内容の大筋で似ているものがあり

既刊の確証にはなるが、著作権、写真の肖像権、人権問題など、法治国には思わぬ法の制約があり、割愛を余儀なくさせて頂いたものが多かった。

よもやま話の性格上、読み会にかけてみると、誰かが「新聞で読んだ記憶がある」という数編に会い、結局、図書館収蔵の道北新聞、士別タイムスなどと照合して出典を明らかにし、二百頁以内の予算の制約もあり、詳細長文の玉稿を、止むを得ず大幅なカットをしてしまいお許し頂きたい。

「新士別よもやま話」は表紙、写真、カットなど、編集委員の努力で「絵画も額縁で光る」諺のように、地元新聞や各種資料を引用させて頂き、ここに発刊のはこびになった。陰に陽にご支援下さった方々に深甚なる感謝を申し上げ編集後記とする次第である。

(八 敏 清 明)

お詫びとお礼

「新士別よもやま話」編集の事務局を預かり、編集長の指示に従い編集作業を進めたが、終戦から昭和三十五年迄の時代は、今日から振り返ると、新しくもあり古くもある時代で、事実確認をすればするほど生々しく、ご年配の方々には事実を隠していると指摘なさる

だろうし、若い人々は誇大表現だと感じるだろう。

だが、今の常識では通用しないことが、堂々とまかり通った時代で、それがかえって戦後の復興を盛り上げた様子なのだ。執筆者の方々には大変に恐縮でしたが、この「新士別よもやま話」が、若い人々に読み継がれることを願い、表現を現代文に書き替えた箇所もあり、お許しを願いたい。

また、多くの女性の方々にも執筆を依頼したが、寄稿者が少なく、士別発展の内助の功を果たした女性の逸話がなく残念でならない。これを機に、女性の方々に「士別女性史」の発刊を発起して欲しいものだ。

(山田 伍市)

編集委員

編集長
八品
品沢
清司

委員
伊藤善彦
佐藤公聰
薮中寿治
佐藤四郎
木村重也
野崎忠義
朝日保
石川誠
山田伍市
事務局長
事務局次長
佐藤貞子



新士別よもやま話

平成四年三月二十日発行

発行／士別市郷土研究会

責任者 荒木 正一

士別市郷土研究会

編集／新士別よもやま話編集委員会

責任者 八 鍬 清 明

士別市西一条八丁目

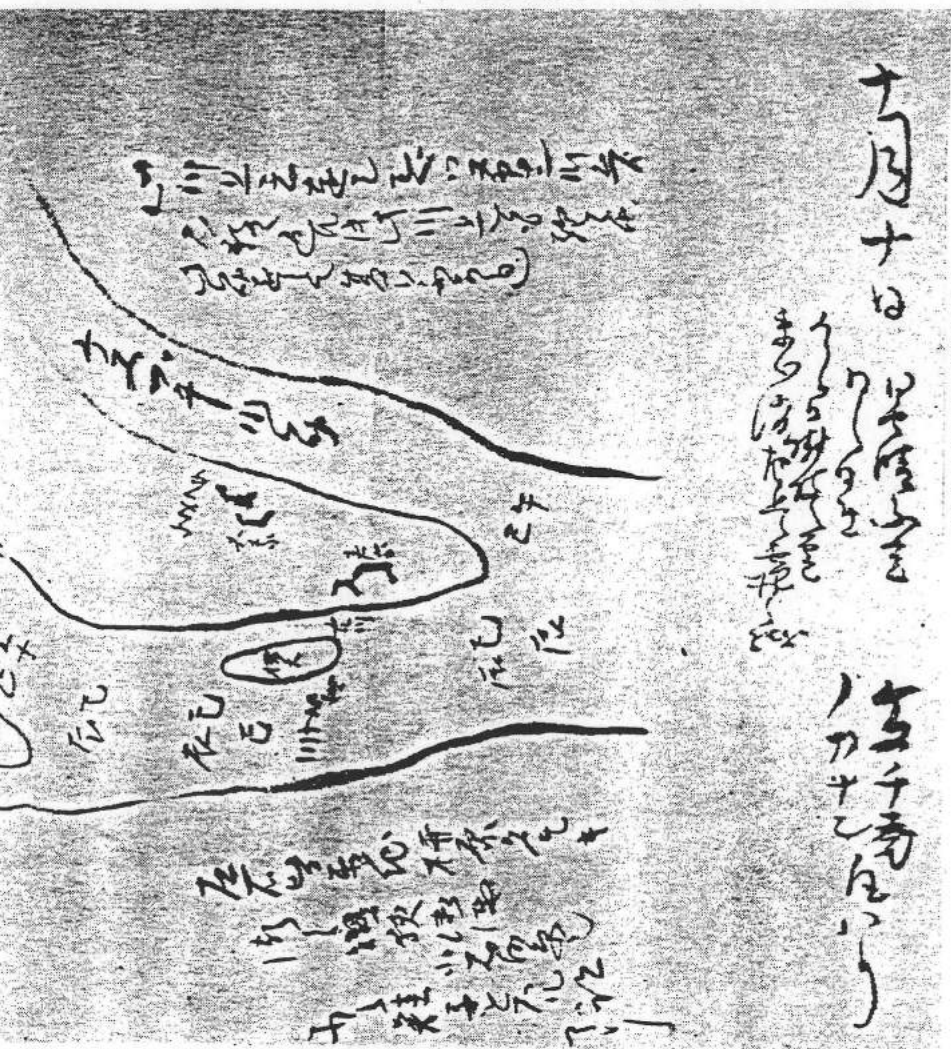
印刷／士別印刷株式会社

社長 上 北 盛 雄

発行所 士別市郷土研究会

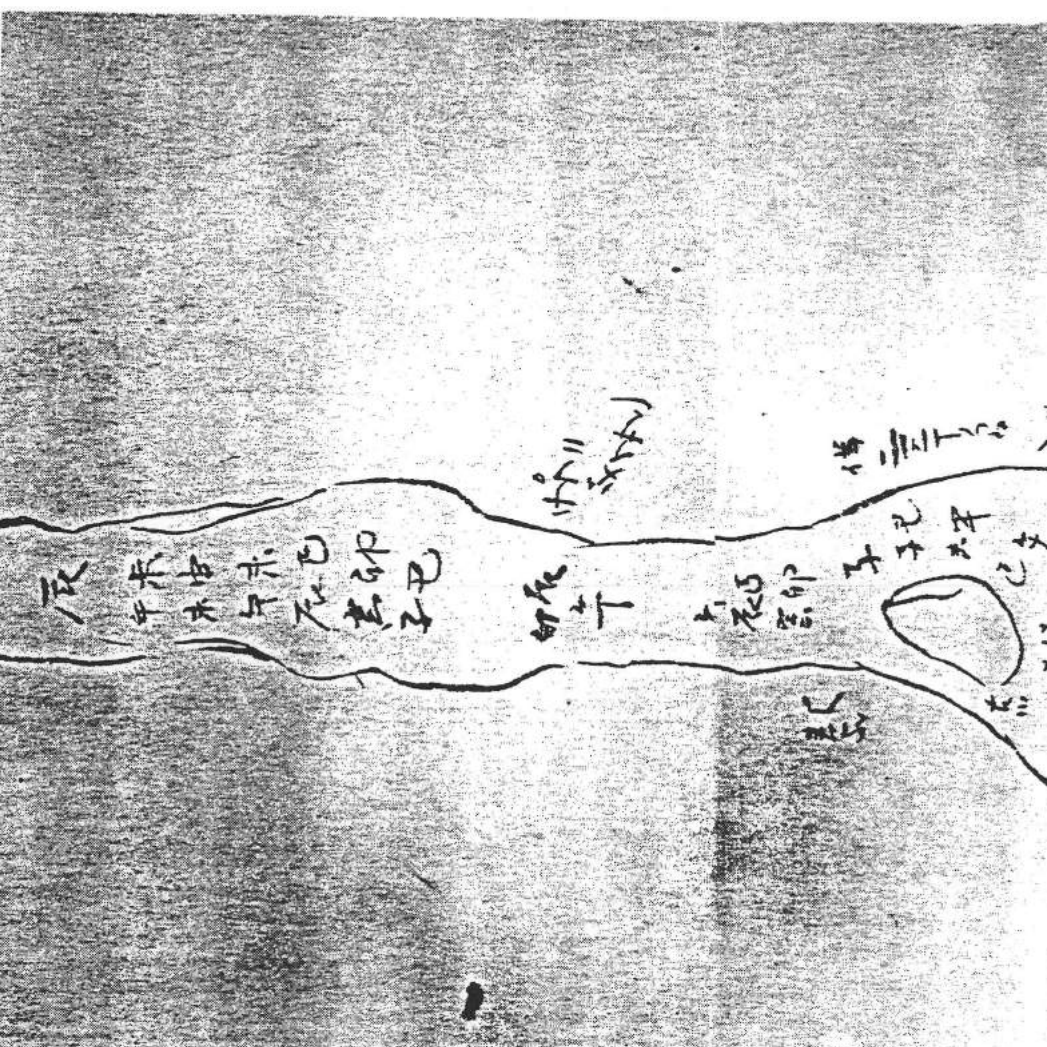
筋図 (ケヌチ付近)

此川上甚遠シ、シベツヌカナン川 石狩へ通ルトキ、
此川上をも経候由 此筋遠して夏ハ不可通



十月十日 曇晴不定 時々日出 今日樹枝之雪悉消、地上雪所々残
ケヌチ発ノカナン凡八リ

右左皆平地、柳原・タモキ 漸々川狭、瀬浅
小石河原也 所々鮭子スル跡アリ



文化4年(1807)幕府の小普請役の近藤重蔵は「西蝦夷地、リイシリ島辺」
申旨」との幕命を受け、6度目のエゾ地探検を行った。

この帰路、天塩川筋を踏査し詳細な図をのこしたが、上図は天塩川と剣淵点付近のもので士別付近を表わした最古の図であり、アイヌの住居なども描る。